

埴輪の生産・流通体制の総合的検証による 王権中枢部巨大古墳群造営過程の解明

課題番号：20H01363

2020～2023年度科学研究費補助金
基盤研究（B）研究成果報告書

2024

研究代表者 廣瀬 覚

奈良文化財研究所



晩秋の佐紀古墳群

埴輪の生産・流通体制の総合的検証による 王権中枢部巨大古墳群造営過程の解明

課題番号：20H01363

2020～2023年度科学研究費補助金
基盤研究（B）研究成果報告書

2024

研究代表者 廣瀬 覚

奈良文化財研究所

例 言

本書は、科学研究費補助金〔基盤研究（B）〕の交付を受けて実施した調査研究の成果報告書である。

1. 研究課題名：埴輪の生産・流通体制の総合的検証による王権中枢部巨大古墳群造営過程の解明
2. 課題番号：20H01363
3. 研究期間：2020～2023年度（2024年度に補助事業の繰り越し）
4. 研究組織：研究代表者 廣瀬 覚（奈良文化財研究所） ※詳細は第1部第2章参照
5. 研究経費：14,040,000円（直接経費：10,800,000円 間接経費：3,240,000円）

2020年度	直接経費：3,900,000円	間接経費：1,170,000円
2021年度	直接経費：1,900,000円	間接経費：570,000円
2022年度	直接経費：1,800,000円	間接経費：540,000円
2023年度	直接経費：3,200,000円	間接経費：960,000円

* 2023年度予算の一部を2024年度に繰り越し
6. 編集：研究代表者の廣瀬を中心に、研究分担者および研究協力者の助言を得ておこなった。なお、校正および挿図の作成等にあっては土井智奈美、西村真紀子、前田真理子の協力を得た。
7. 座標：日本測地系で示している。世界測地系への座標変異量は、X座標で+346.4m、Y座標で-261.3mとなる。

内田和伸・小澤毅・金井健 2005「測量改正法（世界測地系導入）に伴う測量業務の対応」『奈文研紀要2005』pp.22-23
8. 所蔵・掲載写真：本書掲載の埴輪・土器は奈良文化財研究所が所蔵・保管し、中村一郎・粟山雅夫・飯田ゆりあ（奈良文化財研究所）が新規に撮影した。ただし、一部、埴輪・写真原版の所蔵・保管機関が異なるので、明記しておく。

大和3号墳・伝大和3号墳（第53-55図、図版60-63）：宮内庁書陵部
ヒシヤグ古墳（第5図、図版44・45・70-3）：奈良県立橿原考古学研究所〔粟山撮影〕
ウツナベ古墳（図版43-1）：奈良県立橿原考古学研究所
ヤイ2号墳・南新コモ川2号墳（図版66・67）：奈良市教育委員会〔中村撮影〕
川合大塚山古墳（図版68・70・4）：河合町教育委員会〔中村撮影〕
9. 謝辞：本研究をすすめるうえで、下記の諸機関・諸氏にお世話になった。記して謝意を表します。

大谷大学博物館、川西町教育委員会、河合町教育委員会、北名古屋市歴史民俗資料館、宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査室、奈良県立橿原考古学研究所、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、奈良市埋蔵文化財調査センター
伊藤明良、奥本英里、小栗明彦、鐘方正樹、小田裕樹、岸本直文、車崎正彦、神野恵、杉山拓己、高橋克壽、田中詢弥、見須俊介、水野敏典、宮崎健司、横田真吾、吉村公男（敬称略、五十音順）

目次

巻頭図版

例言

第1部 研究の目的と経過	1
第1章 研究目的	3
第2章 研究組織	5
第3章 研究経過	6
第2部 平城宮下層埴輪窯をめぐる基礎研究	9
第1章 平城宮下層埴輪窯の立地環境	11
1 地理的環境 (11) / 2 歴史的環境 (13)	
第2章 平城宮下層埴輪窯の研究	21
1 発掘調査の概要 (22) / 2 出土埴輪・土器の考古学的分析 (31)	
第3章 佐紀古墳群東群の研究	47
1 市庭古墳 (50) / 2 木取山古墳 (56) / 3 神明野古墳 (60) /	
4 平塚1号墳 (64) / 5 平塚2号墳 (67) / 6 方墳 SX7800 (71) /	
7 円墳 SX15663 と小墳群 (74) / 8 八幡神社境内地 (76)	
第4章 平城宮下層埴輪窯にかかわる埴輪の胎土分析	79
1 対象資料と分析方法 (79) / 2 分析結果 (80) /	
3 胎土分析からみた平城宮下層埴輪窯の生産と流通 (80)	
第5章 窯の生産動向と古墳の築造動態	87
1 埴輪のハケメパターンと生産体制 (87) /	
2 埴輪窯の継続性と古墳の階層構造 (99) / 3 佐紀古墳群東群をめぐる諸関係 (101)	
第3部 関連する諸問題	103
第1章 大和3号墳出土埴輪の様相と位置づけ (加藤)	105
第2章 中期大型前方後円墳における周庭帯の埴輪配置 (東影)	113
第3章 円筒埴輪の樹立本数試算と生産画期 (木村)	127
第4章 平城宮下層 SD4992 出土土師器の時空間的位置づけ (山本)	145
第5章 平城宮下層埴輪窯出土の須恵器 (松永)	159
第4部 研究の総括と展望	165

附表

写真図版

奥付

第1部 研究の目的と経過

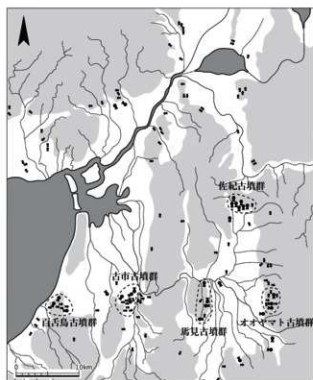
第1章 研究目的

古墳時代は、日本列島の広範囲を覆う政治権力の発生をみた点で、わが国の歴史上、重要な画期となる時代であり、それを雄弁に物語るのが前方後円墳を中心とする古墳の展開である。古墳時代を通じて王陵と目される巨大な前方後円墳は一貫して奈良盆地・大阪平野に築かれており、古墳時代の王権中枢がこの地域にあったことは疑いない。問題は王権内部の権力構造をいかに理解するかであるが、その鍵を握るのが王陵級の巨大前方後円墳を擁する古墳群の分布である。

墳丘長が200 mを超える巨大前方後円墳を複数有する古墳群は、奈良盆地・大阪平野に5箇所存在し、一般的に「畿内五大古墳群」と呼ばれている(第1図)。このうち、奈良盆地東南部に位置するオオヤマト古墳群は、五大古墳群の中では唯一、古墳時代の始まりと同時に造営を開始するが、前期のうちに衰退する。これに対して、奈良盆地北部の佐紀古墳群と同西南部の馬見古墳群は前期後半から、大阪平野の古市古墳群と百舌鳥古墳群が中期に入って造営を開始する。この4つの古墳群は5世紀代を通じて併存するが、王陵(その時々の最大規模の前方後円墳)は古市・百舌鳥古墳群に築かれるという関係にある。

このような巨大古墳群の消長や王陵造営地の移動現象をめぐっては、王統・政權交替の是非を中心に長らく議論がつづいてきたが、決定打のないまま、現在、王権中枢部の権力構造をめぐる議論は膠着状態にあるといえる。こうした状況を打開するには、各古墳群の構造や変遷をより詳細に復元しううえで、古墳群相互の比較を徹底し、差異と共通性を追究する作業が不可欠である。そもそも古墳群は、特定の空間に一定の時間を要して集積された古墳のまとまりを捉えた便宜的な単位に過ぎない。その内実を知るには同時期に有機的な関係をもって築かれた古墳を抽出して造墓原理や階層構造を正確に把握する必要がある。

しかしながら、5世紀の巨大古墳群については、埋葬施設が調査されている事例に限られており、もとより王陵級の巨大前方後円墳が陵墓として管理されている現状では、副葬品の内容にもとづいて個々の古墳を編年することは現実的には不可能である。これに対して、各古墳から普遍的に出土する埴輪は、古墳群を構成するすべての古墳を射程におくことができる唯一の素材である。実際に、これまでの巨大古墳群における調査・研究では、膨大な量の埴輪資料が蓄積されてきており、それを用いた編年研究がおおきな成果をあげてきた。しかしながら、古墳群の造墓原理や階層構造を詳しく検討するには、現行の編年



第1図 「畿内五大古墳群」の分布

研究だけでは不十分である。埴輪の生産・流通体制を詳細に復元する作業を通じて、はじめて同時期に有機的な関係をもって築造された古墳の単位を把握することが可能になる。

埴輪の生産・流通に関する研究は、かつてのマクロな視点から輪郭を描く研究レベルをはるかに超えて、近年では、製作者個人をつくり癖や使用工具、胎土等に対する分析にもとづいて、同一工人の製品同定(以下、同工品識別)や生産組織の復元、製品の流通状況にかんする研究が飛躍的に進化を遂げている。こうしたミクロな視点からの研究は、従来は各古墳単位での個別・単発的な分析にとどまる傾向にあったが、複数の古墳間、また生産地と消費地をつなぐ研究事例が蓄積されてきたことにより、実証度の高い研究成果の点がようやく線へとつながりはじめてきている。この線をより太く、さらに面へと研究を拡大・展開していくことが求められており、それにはより適切なフィールドと良好な出土資料にもとづく実践研究が不可欠といえる。

とりわけ、本研究が課題とする5世紀における王権中核部の埴輪の生産・流通体制については、いまだ体系的な研究がなく、実態が充分把握されていないのが現状といえる。直前の4世紀後半の巨大前方後円墳の周辺では、大規模で組織的な工人編成のもとで製品を一元供給する体制が出現し、また6世紀には広域・遠距離供給のための拠点的生産地が出現するとともに、その拠点と周辺地域とが個別に結びつく複合的な埴輪生産の実態が明確になってきている。これを受けて、5世紀の王権中核部における埴輪の生産・流通体制の実態を解明することで、古墳時代の手工業生産の展開や古墳を通じた政治的階層秩序の形成過程がこれまで以上に鮮明となることが期待される。

以上のように本研究では、5世紀の巨大古墳群の構造や造営過程の実態解明にむけて、埴輪の生産・流通体制をかつてない精度と規模で総合的に検証することを目的とする。具体的には、5世紀の王権中核部を構成する4つの巨大古墳群のうち、奈良市佐紀古墳群東群を検討の中核に据える。理由は以下の通りである。

- ①比較的に狭いエリアに巨大前方後円墳4基と大小各種の古墳が集約的に築かれている。
- ②各古墳に対して一定の調査が実施されており、良好な資料の蓄積がある。
- ③埴輪窯(平城宮下層埴輪窯)が発見されており、供給先を追究できる。
- ④③では、弥生土器以来の伝統的な野焼きともなう遺構も検出されており、同一地点において、野焼きから甕窯焼成への移行とその生産・流通体制への影響を検討できる。
- ⑤土器類(土師器・須恵器)も大量に出土しており、土器の年代観との併行関係についても検討できる。
- ⑥古墳群西方には後期の埴輪生産拠点である菅原東窯があり、後期の生産体制との差異や共通性、断絶性や連続性に関する議論への発展が期待できる。

以上のように、佐紀古墳群東群は5世紀における埴輪の生産・流通体制を検討するうえで絶好のフィールドであり、とりわけ③～⑥は、他にはない佐紀古墳群の特性といえる。対象となる出土資料は膨大かつ未報告のものが多く、すべての資料を悉皆的に扱うことは困難であるが、代表的な資料を図面・写真として提示しつつ、基礎的な型式学的検討、ハケメ工具の異同、胎土の科学分析等を総合的に実践することで、これまででない精度で5世紀の王権中核部巨大古墳群における埴輪の生産・流通体制を解明することを目指した。

第2章 研究組織

本研究が対象とするような王権中枢を構成する古墳群の場合、その巨大さゆえに、複数の機関にまたがって発掘調査が実施され、出土資料もそれぞれの機関で保管されるのが常である。佐紀古墳群の場合、奈良文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所、奈良市教育委員会、宮内庁書陵部が調査を実施し、その際の出土資料をそれぞれで所蔵している。こうした資料の分散状態を克服し、統一的な視野や方法で研究を実施すべく、本研究では各機関から8名の埴輪研究者に参画を要請した。

また、埴輪の生産・流通体制の科学的・多角的な検証を試みるべく、胎土の科学分析、三次元計測、ハケメ工具同定の基礎となる年輪年代学的観点などについて、奈良文化財研究所が擁する考古学分野の専門家にも協力を仰ぎつつ、研究を遂行した。さらに出土埴輪の撮影、および過去の調査写真の現像等に際しては、奈良文化財研究所の写真室の協力を得た。くわえて、関西所在の各大学所属の学生諸氏には、埴輪の基礎的な整理作業において尽力いただいた。

本研究の参加者、分担は下記の通りである。

廣瀬 寛	奈良文化財研究所	代表者：総 括
和田一之輔	奈良文化財研究所	分担者：埴輪・遺構
松永 悦枝	奈良文化財研究所・文化庁	分担者：須恵器（～2022年度）
木村 理	奈良文化財研究所・岡山大学	分担者：埴 輪（2022年度～）
東影 悠	奈良県立橿原考古学研究所	分担者：埴 輪
山本 亮	東京国立博物館	分担者：土師器
加藤 一郎	宮内庁書陵部・愛知学院大学	協力者：埴 輪
村瀬 陸	奈良市教育委員会	協力者：埴 輪
大澤 正吾	奈良文化財研究所・文化庁	協力者：埴 輪
若杉 智宏	奈良文化財研究所	協力者：埴 輪
田村 朋美	奈良文化財研究所	協力者：胎土分析
山口 欧志	奈良文化財研究所	協力者：三次元計測
星野 安治	奈良文化財研究所	協力者：年輪年代学
粟山 雅夫	奈良文化財研究所	協力者：写真撮影
飯田 ゆりあ	奈良文化財研究所	協力者：写真撮影・遺構写真整理

※調査・研究アシスタント

吉永建人（京都府立大学大学院／現加西市教育委員会）、山口等悟（大阪大学大学院／現奈良市教育委員会）、黒田和樹（立命館大学大学院）、岩橋惇也（立命館大学・現総社市教育委員会）、木村日向子（奈良大学／現和歌山県教育委員会）、木村祐照（大阪公立大学）、大倉響稀（京都府立大学）

第3章 研究経過

本研究が採択を受けた2020年4月は、前年末に発生した新型コロナウイルス感染症が日本全域へと蔓延しはじめた時期にあたる。最初の2カ年は当初計画通りに研究を遂行することができず、調査・研究アシスタントの出勤、分担者・協力者の招聘、および対面での検討会の開催等も儘ならない状況がつづいた。研究を本格化できたのは、感染症が収束にむかった2022年後半からで、遅れを取り戻すべく精神的に作業を継続したが、結果的に本研究が達成できたのは当初計画の半分程度であることを予め明記しておく。

前述したように、本研究は平城宮東院下層埴輪窯（以下、平城宮下層埴輪窯と呼称）とその消費地である佐紀古墳群東群の出土埴輪、およびその関連遺構が主たる研究対象である。奈良文化財研究所所蔵の対象資料（埴輪・土器）は、研究分担者の和田一輔と研究協力者の大澤正吾が本研究採択以前から抽出・選別してきた平城宮下層埴輪窯やその周辺の古墳時代遺構出土資料を中心としつつ、各年度を通じて適宜、追加でピックアップしながら、整理・記録・分析をすすめた。また、遺物の出土状況を理解するうえで不可欠となる埴輪窯や付随する関連遺構について、過去の調査資料（図面・写真等）を整理し検討をくわえた。消費地である各古墳の出土資料についても、当初は全面的な再整理作業を計画していた。残念ながら、新型コロナ感染症の影響もあり、予定通り作業をすすめることができなかったものの、新たに神明野古墳の原位出土埴輪や八幡神社境内地出土埴輪などを整理し提示することができた。

対象資料の大半は発掘調査直後の一次的な整理作業で、洗浄・注記まで完了していた。本研究では、必要に応じて接合・石膏入れをおこないつつ、報告書に掲載すべきさらに優先順位の高い資料を選別していった（附表1~4）。選別資料は大部分が未公表であるため高精細デジタルカメラで網羅的に撮影した。既報告や他機関所蔵の資料についてもあらためて集合写真を撮影して、巻末の図版で関連資料を俯瞰できるよう配慮した。図化に際しては、SfM-MVS法（メタシェイプ）で作成した三次元モデルを基本としつつ、一部は通常の手測りでの実測で補足した。三次元モデルは3DソフトのGeomagic Verify Viewerでスケール・陰影等の画像処理をほどこし、挿図として提示したが、作業の遅滞により、モデル化した資料のすべてを図化することは叶わなかった。挿図未掲載の資料については、巻末の図版を参照されたい。

奈良文化財研究所以外の他機関の所蔵資料については、奈良県立橿原考古学研究所ではヒシヤゲ古墳外堀出土埴輪（小栗・東影2022）、宮内庁書陵部では大和3号墳、奈良市教育委員会では杉山古墳を中心に、分担者・協力者の方に整理作業を遂行していただき、重要な所見や成果を得ることができた。

以上のような一次資料の整理・提示とあわせて、形態や製作技法の観察、規格（底部高・突部間隔・口縁部高）の数値化といった基本的な型式学的検討にくわえて、胎土の科学分析やハケメパターンの検討から、生産地—消費地間の製品流通の実像を検討した。胎土分析やハケメパターンの検討も、当初計画よりもボリュームを大幅に削減して実施せざるを得なかったが、後述のように今後の研究に資する方向性を提示することができたと考える。

なお、本研究の遂行にあたり実施した検討会は下記の通りである。

第1回検討会 2020年11月28・29日（土・日）奈良文化財研究所

（参加者）廣瀬、和田、松永、木村_理、東影、山本、加藤、村瀬、大澤、若杉、吉永

※新型コロナウイルスの一時的収束期間での対面開催

（内 容）研究・検討課題、各機関所蔵の対象資料の現状、今後の方向性の確認

奈良文化財研究所所蔵資料の実見・検討

第2回検討会 2022年2月26日（日）オンライン開催

（参加者）廣瀬、和田、松永、木村_理、東影、山本、加藤、村瀬、大澤

（内 容）三次元計測・胎土分析の現状報告、各分担者・協力者の作業進捗状況の共有、

報告書執筆にむけた今後の作業内容の確認

第3回検討会 2023年1月13日（土）奈良県立橿原考古学研究所

14日（日）奈良文化財研究所ほか

（参加者）廣瀬、和田、木村_理、東影、山本、加藤、大澤、若杉、樋口典昭、山口、吉永、木村_理、
木村_理西子、大倉

（内 容）13日：奈良県立橿原考古学研究所所蔵ヒシャゲ古墳外堀出土埴輪の検討、

平城宮下層埴輪窯の換業期間について、現況報告、今後の課題の共有

14日：奈良文化財研究所所蔵の新出資料の実見・検討、

奈良市富雄丸山古墳発掘現場視察ほか

第4回検討会 2024年6月9・10日（日・月）奈良文化財研究所

（参加者）廣瀬、和田、木村_理、東影、山本、加藤、若杉、吉永、木村_理

（内 容）9日：研究総括と残された課題

10日：研究総括と残された課題

（廣瀬寛）

引用・参考文献

小栗明彦・東影 悠 2022 「ヒシャゲ古墳の周庭帯と埴輪」『考古学論叢』第45冊 奈良県立橿原考古学研究所

挿図出典

第1図：白石太一郎 2001 『古墳とその時代』山川出版社 p.47 掲載図（畿内における大型古墳の分布）を一部改変して再トレース。

第2部 平城宮下層埴輪窯をめぐる基礎研究

第1章 平城宮下層埴輪窯の立地環境

1 地理的環境

奈良盆地の北縁、大和国と山城国との国境にはなだらかな丘陵が東西5kmの範囲にひろがる(図版1-2)。丘陵の東半を佐保丘陵と呼び、元明天皇の奈保山東陵、元正天皇の奈保山西陵、聖武天皇の佐保山南陵が築かれた。いっぽうの丘陵の西半は奈良山丘陵(平城山丘陵、佐紀丘陵)と呼び、ここに佐紀古墳群が展開する。ちなみに、この丘陵を北へ越えると、木津川河岸の泉津へといたる。その道程は3つあり、佐保丘陵東の奈良坂(般若坂)越え、ウワナベ古墳の東を通るウワナベ越え、そして奈良山丘陵の中央にあたる下ツ道(平城京朱雀大路)の延長上の歌姫越え、である。

奈良山丘陵は標高90～100mの小山塊からなり、平坦地との比高差が10～20mである。丘陵の南側では、北から南へゆるやかに傾斜し、3つの舌状支丘が北西から南東へと伸びる。これらの支丘のあいだには谷が入り込む複雑な地形となり、支丘の南端には微高地と沖積平野が展開する。

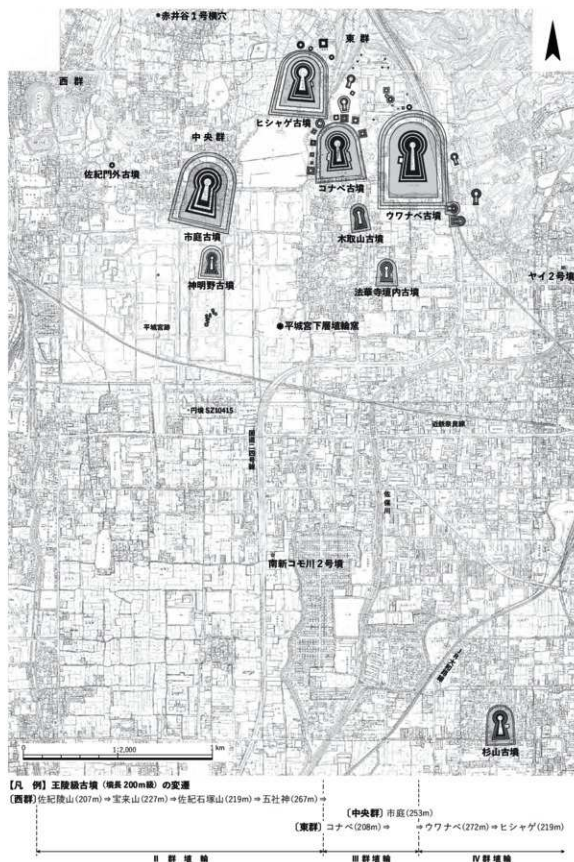
こうした地形のなかで、支丘を利用して佐紀古墳群は築造されたわけである(第2図)。東から見ていくと、東端にウワナベ古墳が位置する。その西隣、東の舌状支丘上にはコナベ古墳と木取山古墳が築造され、法華寺の集落を通して南へと伸び、その先端は平城宮東院地区にある宇奈多理坐高御魂神社となる。そして、この神社の南、つまり舌状に伸びる支丘の南端に平城宮下層埴輪窯が展開するのである。

つぎに、中央の舌状支丘は幅広く、その上には市庭古墳と神明野古墳、10基ほどからなる小墳群を築造する。方墳SX7800はこの支丘の西縁にあたる微高地に築かれたようである。小墳群にまぎって数棟の竪穴建物や掘立柱建物が見つかることも見逃せない[p.74]。時期比定がわずかしいところもあるが、古墳築造あるいは埴輪製作にかかわる遺構かもしれないからだ。なお、この中央支丘と東支丘とのあいだには大きな谷があり、ヒシャゲ古墳の南、コナベ古墳の西にある水上池にいたる。この谷地形に斜行溝SD4992(平城第39・43次調査)が掘削されており、大溝SD6030(平城第48・267次調査)は中央支丘の西縁を通るようである。

西の支丘上には五社神古墳や佐紀陵山古墳のるが、南へはあまりのびない。

このほか、平城宮朱雀門の南でも後期の小円墳SZ10415(平城第515次調査)が見つかる。立地としては、沖積平野と思われる。南の宝来山古墳を佐紀古墳群に含めるならば、これも佐紀古墳群に含めておく必要があるかもしれない。なお、佐紀古墳群西群の南西、宝来山古墳の北東には菅原東埴輪窯があり、後期の拠点的な埴輪生産地のひとつと目されている。小円墳SZ10415の埴輪は、この菅原東埴輪窯から一元的に供給されたものであることがあきらかにされている(廣瀬2021:pp.61・62)。

このように、地理的環境から佐紀古墳群の古墳築造をみれば、王陵級古墳は奈良山丘陵から派生する舌状支丘上に位置することがよくわかる。いっぽうで、小型古墳は支丘上ないしその縁辺の微高地上に築造され、竪穴建物や掘立柱建物の立地もこれと似た状況を示す。谷地形には溝が掘削され、多くの埴輪が投棄された様子がわかる。これらの遺構は特別史跡の下層にひろがるため、発掘調査の制約から全貌があきらかになることはないかもしれないが、断片的ながら、上記のように理解できよう。



第2図 佐紀古墳群における古墳の分布

2 歴史的環境

(1) 佐紀古墳群における古墳の分布

佐紀古墳群の概要 佐紀古墳群は墳長 200m を超える 8 基の王陵級古墳を擁する、階層構成型の大古墳群である(第2図)。西群に佐紀陵山古墳(伝日葉酢城陵)、佐紀石塚山古墳(伝成務陵)、五社神古墳(伝神功皇后陵)が築かれ、東群にコナベ古墳、ウワナベ古墳、ヒシャゲ古墳(伝磐之越陵)がみられ、中央に市庭古墳(伝平城陵)が築造される。さらに、やや南に離れて宝来山古墳(伝垂仁陵)がある。

先に述べた地理的環境を考慮すれば、西群、中央群、東群、そして南群の4つに区分して理解できる(今尾 2014:pp.14・15、広瀬 2007:pp.48・83)。ただし、本書では煩雑さを回避するために、中央群の市庭古墳を東群に含めて記述することがある。

さて、佐紀陵山古墳の築造からはじまる佐紀古墳群西群は、前期後葉から中期初頭にかけて、植輪の編年であるところのⅡ期(廣瀬 2015:p.40)を中心とする時期にあたる¹⁾。3 基の王陵級古墳のほか、猫塚古墳や瓢箪山古墳のような墳長 100m 級の前方後円墳、マエ塚古墳や御門戸丸塚古墳のような円墳などで構成される。

いっぽう、東群はコナベ古墳の築造を端緒とし、中期、植輪編年のⅢ期からⅣ期の時期にあたる。コナベ古墳、市庭古墳、ウワナベ古墳、ヒシャゲ古墳という4 基の王陵級古墳があり、コナベ古墳の周囲には円墳や方墳の陪塚めぐり、ヒシャゲ古墳の北側にも陪塚は築造される(第3図)。ウワナベ古墳の北側に展開するいくつかの小墳を陪塚とみることもできるが、やや距離を隔てるものであり、配置も不規則である。コナベ古墳とウワナベ古墳の北側、ヒシャゲ古墳の東側に展開する前方後円墳と円墳ないし方墳は陪塚というよりは、むしろ小墳群とみるべきなのかもしれない。神明野古墳の南に展開する小墳群もこれに近いものだろう。

王陵級古墳の南側に、木取山古墳、法華寺垣内古墳、神明野古墳といった墳長 100m 級の前方後円墳、平塚 1 号墳と平塚 2 号墳のような墳長 70m 級の前方後円墳が展開する。これらの古墳は散在しており、時期を同じくする王陵級古墳に近い場所に必ずしも築造されるわけでもない。さらに規模の小さな墳長 30m に満たないような円墳や方墳は、王陵級古墳の陪塚のほか、先にみたように小さな群としてのまとまりをもって展開する。

東群で先行築造される古墳 西群での古墳築造が先行し、東群がこれにつづくわけだが、西群と東群が墓域として整然と区分できないところもある。西群の中心時期となるⅡ期の古墳が東群の範囲に築造される場合もあるからだ。たとえば、ウワナベ古墳の東に位置する不退寺裏山古墳、コナベ古墳の北側にある大和 15 号墳(宇和奈辺陵墓参考地飛地ち号)が、Ⅱ期の古墳でありながらも東群の範囲に築造された例である。このほかにも、平城宮下層植輪室にほど近い場所でⅡ期古相の鱗付円筒植輪を利用した植輪棺(平城第 270 次調査)が見ついている。こうした事例は、Ⅱ期における造墓活動が西群の範囲にとどまるものではなかったことを示す。これとは逆に、東群の時期にあたるⅢ期の古墳が西群の範囲に築かれることもある。佐紀陵山古墳の南東にある佐紀門外古墳がそれである。

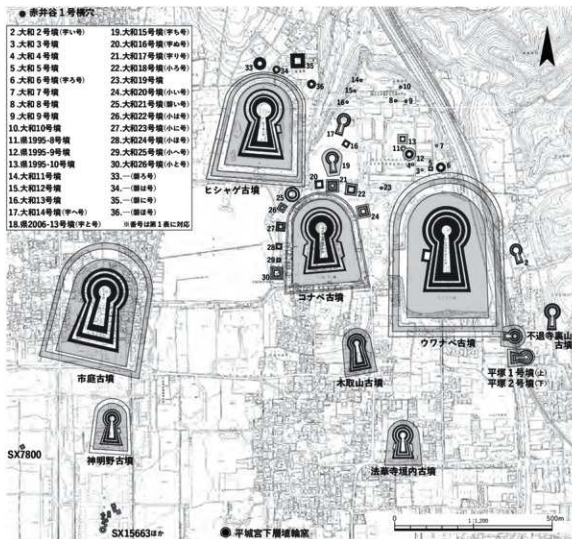
佐紀古墳群では、Ⅱ期からⅢ期にかけて、おおきく西群から東群へと築造が推移するが、なかには例外もある。しかし、王陵級古墳の変遷は西群から東群への墓域移動とうまく連動していることを、まず

は評価しなければならない。築造時期と墓域とが合致しないような古墳は、いずれも100m級の前方後円墳がそれよりも規模の小さな古墳ばかりである。佐紀古墳群におけるⅡ期の造墓活動が西群の範囲を越えて展開することは重要だが、大枠としては従来の理解を変更する必要はない。

平城宮跡における埴輪の出土地点 佐紀古墳群の範囲と一部重なる平城宮跡では、随所で埴輪が出土する。平城宮跡下層には、宮造営時に削平された埋没古墳や埴輪窯が存在するからである。埴輪の出土地点を悉皆的に示すことはできないが²⁾、主要なものを示しておく。

平城宮跡東半で埴輪の出土例が多く、東院地区と東区朝堂院地区に集中する(第6図)。東院地区には平城宮下層埴輪窯があり、東院庭園も含めて包含層から多くの埴輪が出土する。埴輪窯のひろがりや削平された古墳の存在を示唆する。

それ以外では、大溝 SD6030 と斜行溝 SD4992 から出土した埴輪の量が多い。これらの溝は古墳時代中期に掘削されたもので、地形に即して北西から南東へ向かう。SD6030 は幅6mで深さ1m、SD4992 は幅5mと、大規模な溝である [pp.74・75]。このほか、8世紀の斜行溝 SD4951 や包含層から



第3図 佐紀古墳群東群における古墳の分布

も埴輪がよく出土する。

平城宮跡隣接地では、東側の法華寺町界隈（東舌状支丘上）と北側の佐紀町付近（中央舌状支丘上）で埴輪が出土することが多い。Ⅲ期ないしⅣ期の埴輪もみられるが、Ⅴ期の埴輪が目立つ。良好な事例をひとつ示しておけば、平城宮跡北方の埴輪棺（平城第191-2次調査）だろう。

（2）佐紀古墳群東群の古墳構成と階層構造

佐紀古墳群東群はコナベ古墳、市庭古墳、ウワナベ古墳、ヒシャゲ古墳の4基の王陵級古墳を中核とする（第3図）。これらは中期、埴輪編年Ⅲ期からⅣ期にかけて間断なく築造されたもので、一部にこれを前後する時期の古墳も確認されるが、基本的には中期を佐紀古墳群東群の存続時期とみておける。4基の王陵級古墳の周囲には大小各種の古墳が展開する、階層構成型の古墳群（広瀬 2007p.132）である。**古墳の構成** 佐紀古墳群東群には墳長200mを超える4基の超大型前方後円墳をはじめ、100m級の前方後円墳が3基、70m級の前方後円墳ないし帆立貝式前方後円墳が4基、墳長30mに満たない円墳と方墳が40基超知られている³¹（第1表）。現状で把握できるだけでも総数50基をかぞえ、これ以外に記録もなく消滅した古墳や未発見の埋没古墳が存在するはずだ。

東西と南北ともに2km弱の範囲に100年ほどのあいだに50基以上もの古墳が築造されたといえ、古墳の密度は高そうに思えるが、実のところ、そうでもない。その多くが王陵級古墳の周囲に築造された陪塚であり、墳長50mを超す古墳はわずかに11基と少ないからだ。この11基の前方後円墳は南北方向に主軸をとることを基本とするが、平塚1号墳と平塚2号墳だけが東西方向を主軸とする。東西方向に主軸をもつ前方後円墳は、西群を含めても佐紀高塚古墳と鴛塚古墳がくわわる程度であり、特異な様相を示す。

王陵級古墳の変遷と時期区分 佐紀古墳群東群の王陵級古墳は、埴輪の編年をもとに、コナベ古墳、市庭古墳、ウワナベ古墳、ヒシャゲ古墳の順に築造されたと理解できる（鐘方 1997:pp.410-413、廣瀬 2012:p.15）。野焼き焼成で黒斑の埴輪をもつコナベ古墳と市庭古墳が先行し、窯窯焼成で無黒斑の埴輪をもつウワナベ古墳とヒシャゲ古墳がつづく。

こうした王陵級古墳は併行して築造されたとは考えにくく⁴¹、それは埴輪生産でも同じであり、複数の王陵級古墳の埴輪を同時に生産したとは思えない。そうであれば、王陵級古墳の築造数にあわせて埴輪の時期を細分する理解は了とされよう。本書では、コナベ古墳の築造時期をⅢ期古相、市庭古墳のそれをⅢ期新相、ウワナベ古墳をⅣ期古相、ヒシャゲ古墳をⅣ期新相としておきたい。

なお、同時期の古市・百舌鳥古墳群ではⅢ期は一括り、Ⅳ期は3つに細分する理解が有力である。すなわち、仲津山古墳（伝仲姫命陵）と上石津ミサンザイ古墳（伝観中陵）の築造時期をⅢ期、菅田御廟山古墳（伝忠神陵）のそれをⅣ期1段階、大仙陵古墳（伝仁徳陵）をⅣ期2段階、市野山古墳（伝允恭陵）と土師ニサンザイ古墳のそれをⅣ期3段階とするものだ⁵¹（上田 2003:pp.18-27、木村 2022:pp.43-45）。各期の細分数が異なり、必然的にその時間幅の広狭が違うので、厳密に対応させることはむずかしい。本書ではⅢ期を2つに細分し、後述するように、その差は底部高の縮小傾向と黒斑付着状況の違いにあられる。Ⅳ期については、口縁部高が低い形態のほか、底部高や外面調整といった諸属性を手がかりに対照させておけば、本書のⅣ期古相はⅣ期1段階に、Ⅳ期新相はⅣ期3段階にあたる。

さて、円筒埴輪では底部高の数値、あるいは突帯間隔を基準とした底部高の相対的な高さが編年の指

第1表 佐紀古墳群東群の古墳一覧

番 号	古墳名(大和)	古墳名(別称)	墳形/墳丘規模	時期(推定)	参考文 献
1	1号墳	ウワナベ古墳	前方後円墳/272m	IV期古墳	第2表参照[p.48]
2	2号墳	宇飛地い号	前方後円墳/65m	—	—
3	3号墳	—	円墳/9m	IV期古墳	栗1950、宮2003、加藤論考
4	4号墳	—	円墳/10m	—	栗1950、宮2024
5	5号墳	—	方墳/14m	IV期古墳	栗1950、栗博1978、関川1985
6	6号墳	宇飛塚ろ号	円墳/30m	IV期古墳	栗1950、宮2017
7	7号墳	—	円墳か	—	—
8	8号墳	—	円墳か	—	—
9	9号墳	—	円墳か	—	—
10	10号墳	—	円墳か	—	—
11	—	1995-8号墳	円墳/12m	III期新柢か	栗1995(8号墳)
12	—	1995-9号墳	円墳/27m	IV期古墳	栗1995(9号墳)
13	—	1995-10号墳	円墳/18m	IV期古墳か	栗1995(10号墳)
14	11号墳	—	円墳か	—	—
15	12号墳	—	円墳か	—	—
16	13号墳	—	円墳か	—	—
17	14号墳	宇飛地へ号	前方後円墳/70m	—	栗2006(11-12号墳)
18	—	宇飛地と号	方墳か	—	栗2006(13号墳)
19	15号墳	宇飛地ち号	前方後円墳/70m	II期古墳	栗2006(14号墳)
20	16号墳	宇飛地ぬ号	方墳/不明	—	—
21	17号墳	宇飛地り号	方墳/不明	—	—
22	18号墳	小飛地ろ号	方墳/不明	—	—
23	19号墳	—	円墳か	—	—
24	20号墳	小飛地い号	方墳/30m	IV期古墳(築墓時期未定)	栗1998
25	21号墳	磐陀塚い号	方墳か	—	—
26	22号墳	小飛地は号	方墳か	—	—
27	23号墳	小飛地に号	方墳/不明	—	—
28	24号墳	小飛地ほ号	方墳/不明	—	—
29	25号墳	小飛地へ号	方墳/不明	—	—
30	26号墳	小飛地と号	方墳/不明	IV期古墳	栗2011
31	27号墳	コナベ古墳	前方後円墳/208m	III期古墳	第2表参照[p.48]
32	—	ヒシャゲ古墳	前方後円墳/219m	IV期新柢	第2表参照[p.48]
33	—	磐陀塚ろ号	方墳か	—	—
34	—	磐陀塚は号	方墳か	—	—
35	—	磐陀塚に号	方墳か	—	—
36	—	磐陀塚ほ号	円墳か	—	—
37	—	平塚1号墳	前方後円墳/70m	III期古墳	第3表参照[p.49]
38	—	平塚2号墳	前方後円墳/70m	IV期古墳	第3表参照[p.49]
39	—	木取山古墳	前方後円墳/100m	III期新柢	第3表参照[p.49]
40	—	市庭古墳	前方後円墳/253m	III期新柢	第2表参照[p.48]
41	—	神明野古墳	前方後円墳/117m	IV期古墳	第3表参照[p.49]
42	—	SK15663(他10基)	円墳/14m	IV期	第3表参照[p.49]
43	—	SK7800	方墳/9m	IV期古墳	第3表参照[p.49]

【凡 例】

古墳名(大和):栗1950で示された通し番号

小飛地:小飛地調査参考地の飛地(飛塚)

宇飛地:宇和宮辺調査参考地の飛地(飛塚)

磐陀塚:磐之辻命陵の飛塚

【参考文献】

宮2003:宮内庁書陵部調査課2003出土品展示目録-巻編IV,宮2024:加藤一郎・土屋隆史2024「奈良県大和4号墳出土品の再整理報告」『書陵部紀要

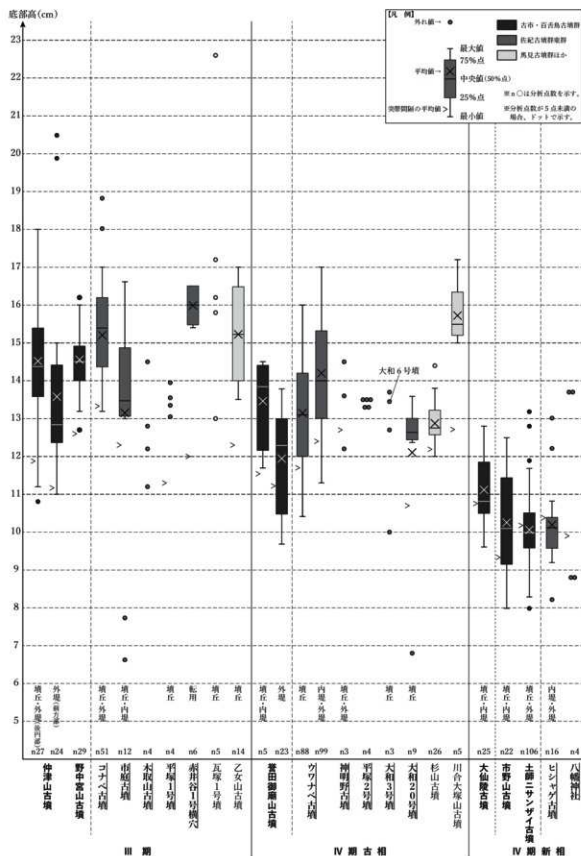
〔調査編〕75号

栗1950:奈良県1950「奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄録」第4編,栗1995:奈良県立歴史考古学研究所1995「ウワナベ古墳群大和8・9・10号墳発掘調査概報」『奈良県史蹟調査概報1997年度(第1分冊)』,栗1998:奈良県立歴史考古学研究所1998「在紀・馬刊古墳群、松林苑」『奈良県史蹟調査概報1997

年度(第1分冊)』,栗2006:奈良県立歴史考古学研究所2006「大和11~14号墳」『奈良県史蹟調査概報2006年度(第1分冊)』,栗2011:奈良県立歴史考古学研究所2011「コナベ古墳外堀・大和26号墳・松林苑第107号(奈良県史蹟調査概報2010年度)」

栗博1978:奈良県立歴史考古学研究所附属博物館1978「大和古考古資料目録」第6集

関川1985:関川尚功1985「大和における大型古墳の変遷」『考古学論攷』第11集,奈良県立歴史考古学研究所



第4図 佐紀古墳群東群の円筒埴輪にみる底高の推移

標として有効であることが説かれており、Ⅲ期からⅣ期にかけて漸次縮小していく方向にあることがうましく示されている〔上田 1996; pp.9-10, 木村 2022; pp.34-38〕。これに照らせば、佐紀古墳群東群の王陵級古墳における円筒埴輪の変遷は、つぎのように理解できる。コナベ古墳では底部高 16cm で突帯間隔よりも高い円筒埴輪が主体となり、つづく市庭古墳では円筒埴輪の底部高は 14cm ほどに縮小する。さらに、ウワナベ古墳では底部高 12～13cm で突帯間隔と均等かわずかに高い円筒埴輪が多くを占め、ヒシャゲ古墳では底部高は 10cm 未満となり、突帯間隔よりも底部高が低くなる円筒埴輪が目立つ。

より詳細に底部高の推移をみると、いくつか興味深い事実気づく。第4図は、分析対象とする数値を大きさの順番に並べて4等分することで数値の分布を表示する、いわゆる箱ひげ図である。箱が数値の分布範囲のうちで中央 50% のまとまりを示し、箱とひげが間延びしているものほど数値にばらつきがあり、それらが短いほど数値にまとまりがあることをあらわす。

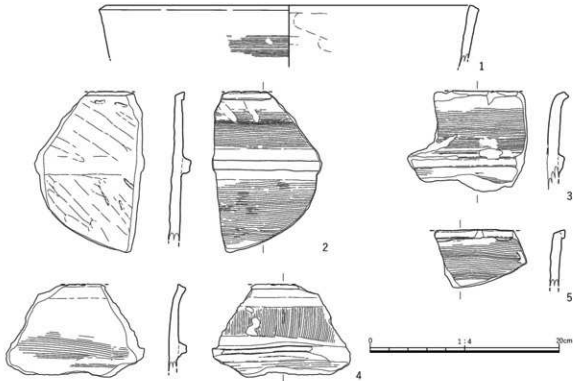
具体的にみていくと、古市・百舌島古墳群の王陵では、Ⅲ期で 10.8～18.0cm、Ⅳ期古相で 9.7～14.5cm、Ⅳ期新相で 8.0～12.8cm という具合に底部高の縮小傾向を把握できる。さらに、この範囲のなかでも中心となる底部高の数値は、Ⅲ期で 12.4～15.4cm、Ⅳ期古相で 10.5～14.4cm、Ⅳ期新相で 9.2～11.8cm となる。佐紀古墳群東群の王陵級古墳でも同様に底部高の縮小傾向を読み取れる。Ⅲ期古相のコナベ古墳で 13.2～17.0cm、Ⅲ期新相の市庭古墳で 13.0～16.6cm、Ⅳ期古相のウワナベ古墳で 11.0～17.0cm、Ⅳ期新相の 9.2～10.8cm である。指摘のとおり〔木村 2022; p.36〕、佐紀古墳群東群の場合のほうが底部高が高い個体が目立つが、古市・百舌島古墳群の分布範囲内におさまるものである。

しかしながら、ウワナベ古墳では誉田御廟山古墳ではみられないような底部高の高い一群が認められる⁶⁾。ウワナベ古墳の円筒埴輪のなかに、同時期の王陵である誉田御廟山古墳にはみられない規格の埴輪が存在するわけだが、この規格が前代のコナベ古墳ないし市庭古墳に存在することを重視したい(第50図)。底部高と突帯間隔の相関関係による規格というわずかな共通性だが、コナベ古墳とウワナベ古墳の埴輪生産が継続して営まれたものであったことを示す一証と理解しておきたい⁷⁾。なお、同じことがウワナベ古墳とヒシャゲ古墳にもあてはまりそうだ。

つづいて、佐紀古墳群東群の中小型古墳をみると、コナベ古墳と同一ハケメパターンの埴輪をもつ平塚1号墳(図版52)と赤井谷1号横穴は、前者が底部高 13.5cm 前後、後者が底部高 16cm 前後となる。いずれもコナベ古墳の範囲におさまる。Ⅲ期古相のコナベ古墳の様相とよく合致する。いっぽう、木取山古墳(図版46)では 11.2～12.8cm と底部高が低い円筒埴輪がみられ、むしろこれはⅣ期古相のウワナベ古墳の分布範囲におさまる。ただし、有黒斑の埴輪を含むのでⅢ期新相と理解しておきたい。

Ⅳ期では神明野古墳と平塚2号墳の底部高がウワナベ古墳の分布範囲におさまる。ヒシャゲ古墳のそれとは重ならないので、神明野古墳(図版50)と平塚2号墳(図版54)はウワナベ古墳と同時期のⅣ期古相に位置づけられる。なお、両墳ではウワナベ古墳と似た形態の埴輪がみられるほか、ウワナベ古墳ではみられない普通口縁の円筒埴輪が存在する。同じ状況はヤイ2号墳(図版66)と南新小モ川2号墳(図版67)でも認められる。中小型古墳の埴輪生産には、王陵級古墳のウワナベ古墳とは異なる生産体制があったのだろう。

ウワナベ古墳併行の陪塚は大和5号墳と大和6号墳がよく知られるが、埴輪の特徴と底部高の数値から大和20号墳と大和26号墳も該当しそうだ⁸⁾。このほか、大和3号墳もウワナベ古墳併行のⅣ期古



第5図 ヒシャゲ古墳の円筒埴輪

相に位置づけられそうだが〔pp.110・111〕、底部高10.0cmの個体が含まれるのが気にかかる。数値だけでいえば、ウワナベ古墳にはみられず、IV期新相のヒシャゲ古墳の分布範囲におさまるからだ。方墳SX7800(図版57)でも底部高12.4cmのほか低めの底部高10.0cmの個体のみられ、円筒埴輪の口縁部は普通口縁となるような様相を確認できる。

さいごにIV期新相では、底部高8.8cmという低い個体がくわわる八幡神社境内地(図版64)の事例が該当しよう。底部高13.7cmという高めの個体も含めて、ヒシャゲ古墳の分布範囲に完全にはおさまらないが、資料数が少なく外れ値も含めるならば、ヒシャゲ古墳に似た傾向と理解しておけよう。なお、ヒシャゲ古墳の円筒埴輪の口縁部形態は、端部を屈曲させ口縁部高が低い個体が多数を占めるが、単純に直立する口縁部も認められる(第5図⁹⁾)。

階層構造 佐紀古墳群東群は、墳長200mを誇る王陵級のコナベ古墳(208m)、市庭古墳(253m)、ウワナベ古墳(272m)、ヒシャゲ古墳(219m)を頂点とする階層構成型の古墳群である。これら4基の古墳は、当該期最大の墳丘規模をもつ王陵の上石津ミサンザイ古墳(365m)、仲津山古墳(290m)、菅田御嶺山古墳(425m)、大仙陵古墳(525m)、市野山古墳(227m)につづく、第2位の位置を堅持する。

時期ごとに階層構成をみると、Ⅲ期古相ではコナベ古墳(208m)－平塚1号墳(70m)－陪塚群(10-30m)、Ⅲ期新相では市庭古墳(253m)－木取山古墳(100m)－陪塚群(10-30m)、IV期古相ではウワナベ古墳(272m)－神明野古墳(117m)－平塚2号墳(70m)－陪塚群(10-30m)－小墳群(10m程度)、ヒシャゲ古墳(219m)－陪塚群(10-30m)となる。3階梯程度の階層構成はつねに維持しており、とりわけIV期古相のウワナベ古墳の段階に墳丘規模が最大になるとともに、5階梯におよぶ階層構成をみせる状況は再評価してよい。つまり、ウワナベ古墳の段階が佐紀古墳群東群の到達点であり、最大の

墳丘規模と複雑な階層構成を備えるのである。これと同調するように、独創的な形態の埴輪が削出され、周辺地域へと影響をおよぼすようになることも見逃せない。

当該期において佐紀古墳群東群は、墳丘規模あるいは階層構成のいずれをみても、「畿内五大古墳群」のなかで王陵を擁する古市・百舌鳥古墳群につぐ、有力な位置にあったといえる。それゆえに、古市・百舌鳥古墳群との有機的な関係性が認められるとともに、馬見古墳群や久津川古墳群をはじめとする周辺地域へ影響をおよぼすことになった。

(和田一之輔)

註

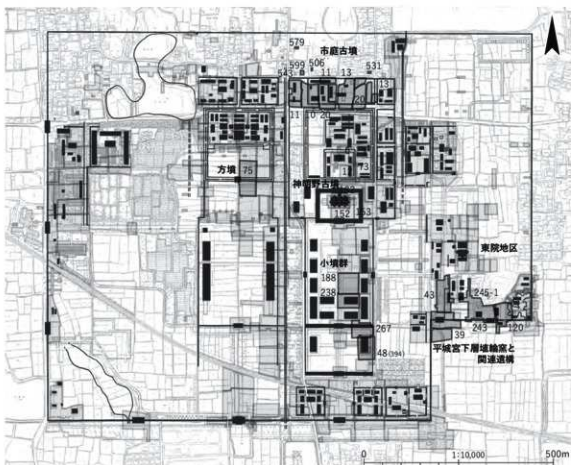
- 1) わずかな埴輪からだけでは宝来山古墳の築造時期は決めたいが、加藤一郎の指摘〔加藤 2012:p.28〕を参考とすれば、佐紀陵山古墳と佐紀石塚山古墳とのあいだに位置づけておけよう。
- 2) 1980年度までの平城宮跡における埴輪出土地点については、『平城宮報告X』(奈文研 1981)の別表2に示されている。
- 3) 古墳の番号が重複して付けられており、古墳名が錯綜している。陵墓名とともに対応関係については、高木清生の整理〔高木 2008:p.147〕が参考となる。
- 4) 200m超の大型前方後円墳の築造について、佐紀古墳群では1世代に1基ずつ築造されたわけではなく、併行して複数の築造があったとみる理解〔今尾 2014〕も示されている。ただし、古墳築造時期の判断根拠として、どれほど緻密に埴輪を編年しているのかは示されておらず、築造が近接するといった表現にとどまる。
- 5) 古市古墳群ではⅢ期に仲津山古墳、Ⅳ期1段階に養田御廟山古墳、Ⅳ期3段階に市野山古墳となり、百舌鳥古墳群ではⅢ期に上石津ミサンザイ古墳、Ⅳ期1段階に百舌鳥御廟山古墳、Ⅳ期2段階に大仙陵古墳、Ⅳ期3段階に土師ニサンザイ古墳となる。
- 6) ウワナベ古墳の底部高にかんする箱ひげ図は、従来示されてきた図〔木村 2022:p.35〕とはおおきく異なる。これは分析資料数が22個体から187個体へと大幅に増加したことに起因する。こうした数値の分析において、統計的に有効な資料数が何個体なのか、あるいは使用した数値などを明示し、有効性と再検証の可能性を担保しておく必要もあろう。
- 7) 突帯間隔と底部高の相関関係で把握できる形態を規格として理解し、そうした規格の多寡の趨勢や新しい規格の出現に時間差をみようとする見解〔村瀬 2022・2023〕も示されている。注目する形態差は先行研究とも共通しており、理解に齟齬はない。コナベ古墳とウワナベ古墳とのあいだに共通する円筒埴輪の規格が存在することをもって、両古墳の生産の連続性をよみとろうとする姿勢は積極的で興味ぶかい。ただし、その共通性が古市・百舌鳥古墳群の王陵とのあいだでも認めるものなのか、コナベ古墳とウワナベ古墳とのあいだでのみ認識できるものなのか、という点を明確にしておく必要がある。
- 8) コナベ古墳の周囲に計画的に配置された陪塚のなかに、ウワナベ古墳併行の陪塚も存在する。コナベ古墳の築造と一体となる計画的な配置をみせる陪塚だが、それらの築造はウワナベ古墳の築造時まで宮々と継続していたようである。
- 9) 第5図は、1992・2001年度の内堤と外堤の発掘調査による未報告資料について、東影悠が実測図を作成して製図した。なお、原品は奈良県立橿原考古学研究所が保管する。

第2章 平城宮下層埴輪窯の研究

平城宮跡の発掘調査と埴輪には奇妙な縁がある。近接あるいは一部重なるように佐紀古墳群が存在しているので、当たり前のことではあるが、それだけではない。1955（昭和30）年8月に実施した平城第1次調査では、後に判明する神明野古墳の外堤に樹立されていたであろう蓋形埴輪が2個体発見されている。さらに、平城宮の東側に張り出し（東院）が存在することがあきらかとなった、1967（昭和42）年の平城第43次調査では多量の埴輪が出土したのだ。節目となるような発掘調査では、不思議なことに、埴輪の存在が見え隠れする（第6図）。

観念めいた話はさておき、奈良文化財研究所の発掘調査では、特別史跡平城宮跡の下層という状況もくわって、埴輪に目がむけられることはあまりない。それでも、古墳時代研究に携わった経験のある者が救いだし、佐紀古墳群の埴輪の基礎研究をすすめてきたこともまた事実だ。1993（平成5）年に見つかった、野焼き焼成土坑である1号窯 SX16285 は、その最たる例である。

ここでは、平城宮下層埴輪窯を中心に周辺の埴輪出土遺構も紹介し、巨大古墳群間の関係性の解明も見据えた、体系的な検討の備えとしたい。



第6図 平城宮跡における既往の発掘調査

1 発掘調査の概要（平城第243・245-1次調査ほか 平城宮東院地区）

（1）発掘調査の経緯と経過

国道24号線（奈良バイパス）の建設を契機とする、1960年代に実施した一連の発掘調査によって、平城宮は東側に張り出しをもつことが判明した。この張り出しの南半を東院と呼ぶ。東院地区の東南隅に池を中心とする庭園施設や宴遊施設を確認し、周辺に官衙区画が存在することもわかってきた。1990年代にはいると、東院庭園と周辺の建物、築地大垣を復元整備する計画が策定され、その一環として宇奈多理座高御魂神社（以下、宇奈多理神社と呼ぶ）周辺の様相解明を目的として発掘調査をすすめることとなった（第6図）。

平城第243・245-1次調査区は宇奈多理神社の南方および西方に位置する。宇奈多理神社は東西方向にのびる奈良山丘陵から南西に派生する細長い丘陵の先端にあたり、この派生丘陵の北端にはコナベ古墳がのる。発掘調査面積は約4,500㎡で、調査期間は1993年6月14日から1994年3月3日までである。

当該地周辺では、かねてより焼け歪んだ埴輪が出土しており、埴輪窯の存在が予想されてきた。発掘調査の結果、1基の埴輪焼成土坑と4基の窯跡を確認した（第7図）。調査区の中央北東に野焼きの1号窯 SX16285（野焼きの埴輪焼成遺構）、中央北で寄窯の2号窯 SX16283、中央南西で3号窯 SX16284と4号窯 SX16286、北西隅で5号窯 SX16280となる。これらの埴輪窯は東北から延びてくる丘陵先端の緩斜面に立地する。

このほか、5号窯 SX16280 付近で埴輪が出土する遺構をいくつか検出している。5号窯 SX16280 の北側では埴輪を投棄した土坑 SK16281 を、西側では平城第43次調査で検出した方形溝 SD5700 の東延長部分を、東側では埴輪を投棄した土坑 SK16275 を確認した。

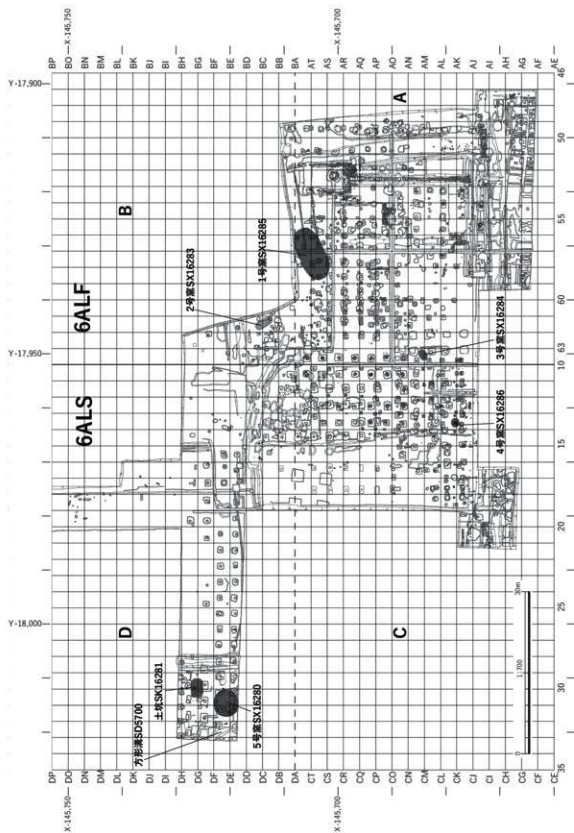
なお、奈良時代の柱穴や溝からも埴輪が出土しており、なかには興味深いものもある。しかし、当該調査で出土した埴輪は木箱200箱にもおよび、状態良好あるいは特徴的な埴輪だけを抽出してもコンテナ90箱と膨大な量である。そのため、ここでは古墳時代の遺構に限って取り扱うこととする。

（2）埴輪窯の概要

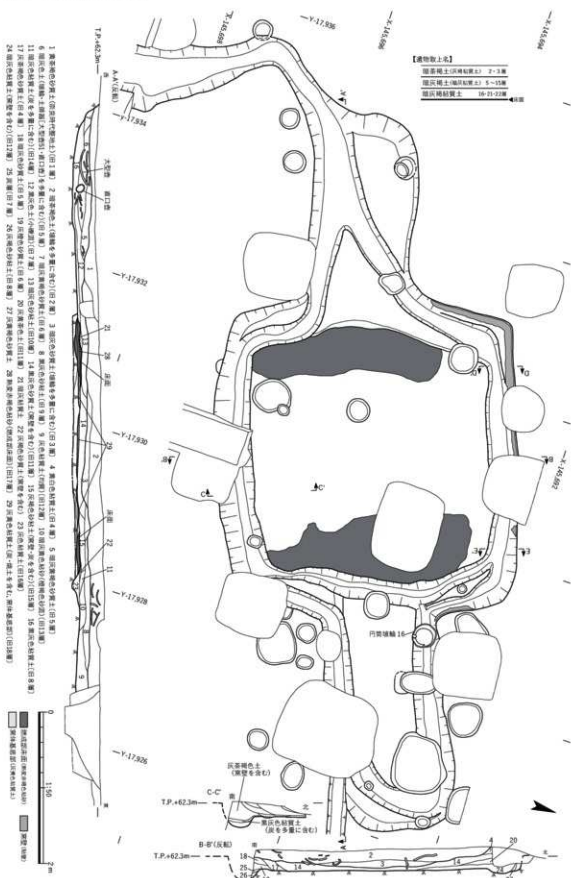
野焼き焼成土坑の1号窯 SX16285 と、寄窯の2号窯 SX16283、3号窯 SX16284、4号窯 SX16286、5号窯 SX16280 の4基の埴輪窯を解説する¹⁾。

1号窯 SX16285（第8-10図、図版2-6） 一辺4mの隅丸正方形の平面形をなす焼成部と、その東西両側にのびる張出部からなる（第8図）。張出部を含めた全長は東西9.4mである。焼成部北半では粘土を貼りつけた窯壁が一部のこっており（図版6-2・3）、熱を受けて焼けている。ほとんどのこっていない南半部を含め、焼成部の周囲の壁に本来は粘土を貼りつけていたことは間違いなく、崩落した窯壁片が内部に落ちこんでいた（15・22・24層）。焼成部東辺では、窯壁が東張出部北壁へとつづいている。しかし、窯の内部に落ちこんだ窯壁片の散布は焼成部内にまとまっており、張出部の中には認められなかった。したがって、貼壁は張出部へ移行するわずかな部分にとどまっていたと考えられる。貼壁の厚きは1cm弱で、ササは入っておらず粘土を貼りつけただけのものである。

周囲には幅30～50cmの溝をめぐらしており、一段高いその内側を床面とする。床面は南北3.1m、東西3.3mの規模（10㎡）となる。検出面から床面までの深さは約30cmだが、本来の深さは不明。床



第7図 平城第243次・245-1次調査遺構図・地区割図



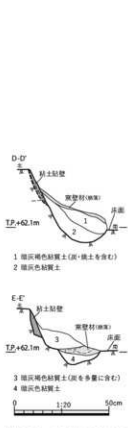
第8图 1号室SX16285 遺構図

面はほぼ平らで、東辺と西辺には熱を受けて焼き締まった床面がのこる(28層)。焼き締まり具合はあまく、表面付近が比較的硬い程度で、下部は焼けてはいるがあまり締まらない。焼成部の中央には炭や焼土がわずかにのこる灰黄色粘質土(29層)があり、東西の床面はこの上にある。灰黄色粘質土は焼けておらず、両側の焼けた床面から漸移的に変化したものではない。したがって、灰黄色粘質土は床面下部の置土(室体基底部)であり、本来の上面に床面があったものが、最終操作後の灰層を掻き出すなどに際して剥落したと思われる。

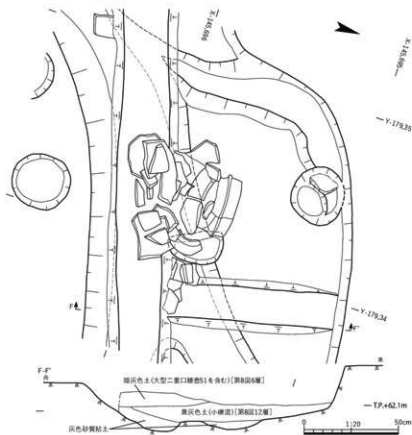
東側の張出部は幅1.5m、長さ3m弱で、やはり周囲を溝がめぐる。西側の張出部は、幅1.4mほどで長さ2.4mである。溝は南辺沿いに西へのびるものと、焼成部北から斜めに横ぎるものが合流して西端へとつづく。さらに、張出部隅からいくぶん西南方へのびた後、屈曲して東南方へとつづく。溝底の標高は東側張出部で62.05m前後、西側では62.00mとわずかながら高低差があり、西側からのびる溝の南端では61.80mとさらに下がっている。

土層断面の観察によると(第9図)、最終操作後に壁面の崩落によって周囲から次第に埋まっていき、中央部が凹状のこっていたところに、最終的に多量の埴輪が投棄された。この埴輪を含む暗茶褐色土と灰褐色粘質土(第8図2・3層)は焼成部からの東の張出部にかけて堆積しており(図版6・4・5)、西側の張出部はそれ以前に埋没したようである。

張出部を含めて床面や溝中に小穴があるが、いくつかは最終操作後に掘られたもので、それ以外のものも規則的な配列を示すわけではない。天井があったとみるのはむしろ難しいと思われる。張出部の機能



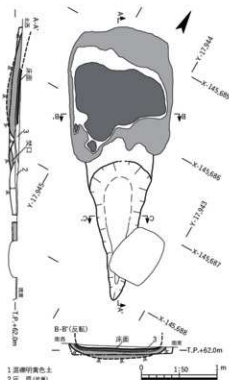
第9図 1号室 SX16285
室壁断面図



第10図 1号室 SX16285 大型二重口録壺(51) 出土状況図

はあきらかでないが、片側あるいは両側を焚口と考えるには、引出部に焼け面は認められず、別の見方をすべきだろう。掘込部を覆う天井施設はなく開放のもので、焼成部と呼んだ中央の方形部分に乾燥した植輪とともに燃料を置いて焼き上げたと考えておきたい。両側の引出部は、あるいは燃焼のための通気的な役割があったのかもしれない。

2号窯 SX16283 (第11図、図版7) 焚口付近の燃焼部床面が長さ1.5mで幅1.2mほど残存し、周囲に焼土層がひろがっている(第11図)。床面は黄色粘土の地山を掘りこんで設けているが、地下式か半地下式かはあきらかでない。厚さ2cmほどの粘土を貼って床面としており、硬く焼き締まり還元されて灰白色を呈する(図版7-1・2)。床面は1枚で、つくり直した痕跡はない。西側では側壁へと立ち上がっていく部分がわずかにのこり、東側も焼土層の状況から考えると側壁に近く、本来の床面幅は現状をおおきく越えるものではなかろう。北にむかってゆるやかに上り勾配をもち、ここから焼成部へむけて徐々に傾斜を増していたのであろう。



第11図 2号窯遺構図・土層断面図

窯体内の埋土はもっとも厚くて5cmほどで(第11図)、植輪小片が数点出土したにとどまる。床面の下部は高温の熱をうけ、地山の黄色粘土が厚さ10cm強にわたって赤変し焼土層ができている(図版7-4)。焚口から下方へ堆積していた灰原がわずかに残存する。焚口付近で幅80cmで長さ2mほどのびるが、厚いところでも4cmほどにすぎない。灰原の下には、焚口からはじまる浅い凹みが細長く認められた。地山の黄色粘土に小さな礫が入った土ですぐに埋めており、灰や焼土は混じらない。のこっていた灰原は、この凹みに堆積した部分だけ削平からまぬがれたものである。

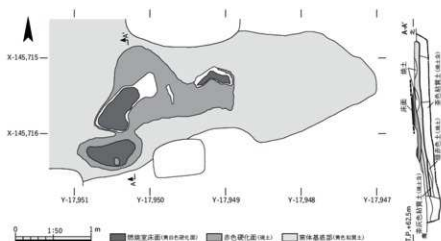
3号窯 SX16284 (第12図、図版11-4) 平城宮造営時の造成で著しく損壊し、焼き締まった床面がわずかに鳥状にのこるのみである。周囲に焼土層がひろがっているが、窯の主軸方向もわからない。

硬く焼き締まり還元された床面が3箇所あり、多少の高低差はあるが、本来は同一の床面を構成したものであろう。つまり、床面は1枚である。もっとも南にある床面には植輪小片が塗り込められていた。下部には厚さ5cm強の焼土層がひろがる。窯体の下層の整地層は基本的に北から南へ堆積しており、旧地形を反映していると思われる。床面直下には黄色粘質土を入れている。

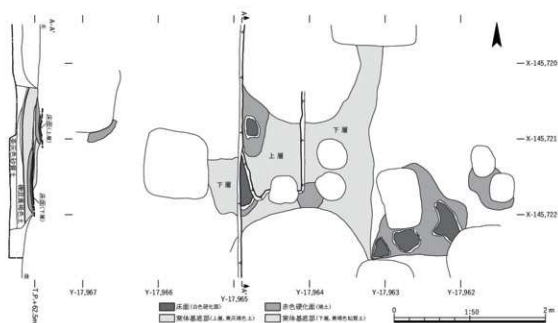
傾斜に直交して南北方向に窯が築かれたとすれば、窯体の幅は2mほどとなるが、残存部分がわずかで主軸不明とせざるをえない。下部の整地土中には焼土や灰原が混じっており、3号窯構築以前にも植輪の焼成がおこなわれていたことを示す。

4号窯 SX16286 (第13図) 3号窯と同じく、削平が著しく、焼き締まった床面がわずかに鳥状にのこるだけである。周囲に焼土層も確認できるが、窯の主軸方向は不明。

3号窯の西方15mほどに位置する。床面残存部と焼土層が点在し、そのひろがり東西5.6m、南北



第12図 3号室 SX16284 遺構図・土層断面図

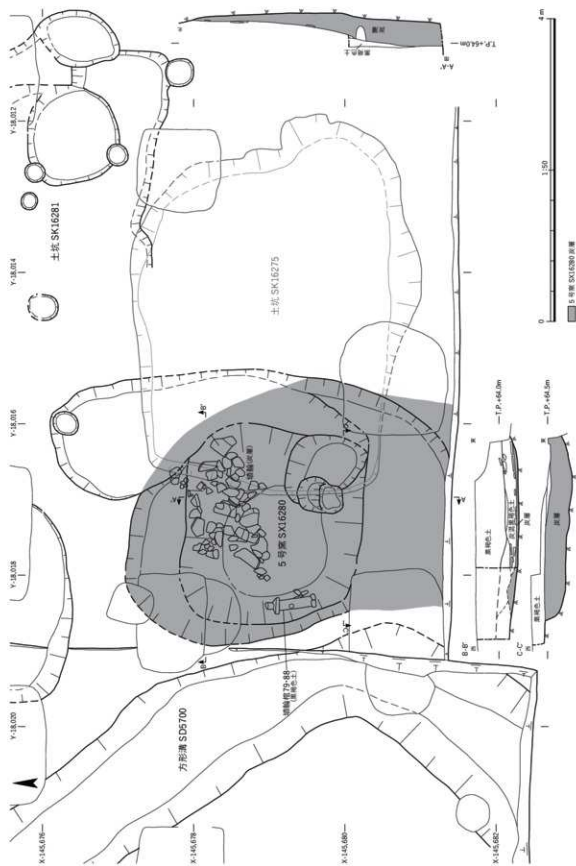


第13図 4号室 SX16286 遺構図・土層断面図

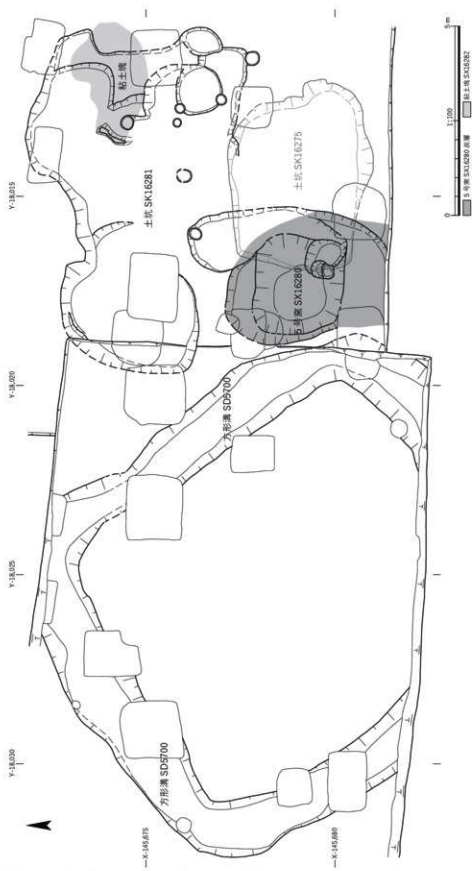
2.2mほどだが(第13図)、これらが同一の竈体を構成するかどうか判断できない。南北方向の土層断面をみると、床面が2枚重なっている。やはり、北から南への整地土層の上に3号室と同じく竈体の基礎となる黄褐色粘質土を入れ、その上に床面をおく。この黄褐色粘質土はとても純粋なもので、一見すると地山とみまがうほどのものである。床面上には灰と焼土を含む暗黄褐色土があり、その上にふたたび黄灰褐色土を置いて、その上に床面を設けている。この2枚の床面はひとつの竈の作業面の違いというよりも、下層の竈を完全に削平した後、その上に別の竈をつくったという状況である。

4号室にともなう遺物はないが、下層の床面下の整地土層中に灰や焼土、埴輪片を含む。

5号室 SX16280 (第14・15図, 図版8-10) 東西4mほどで南北4m以上の範囲に黒灰色土の堆積を検出した。灰原と思われ、調査区外南へとづく。検出面から底までの深さは南側で30cm、北側では



第14図 5号室 SX16280 遺構図・土層断面図



10cm となる。埴輪片とともに焼土や粘土塊を含む。北半では黒灰色土の上面に厚さ 10～20cm の炭泥じり黒褐色土が堆積し、埴輪片が面的にひろがる（図版 10-2・3）。

さらに、この炭泥じり黒褐色土の上を厚さ 30cm ほどの黒褐色土が覆う。埋立土だろうか。この黒褐色土上面で、不明形象埴輪 88（図版 24-1）と蓋形埴輪の立ち飾り受皿 79（第 20 図，図版 23-4）とを組み合わせた状況で検出した（図版 11-1～3）。埴輪棺とも思われるが、墓壇は確認できていない。

灰原の黒灰色灰層は南方のほうが厚いので、窯本体を南方に推定できるかもしれない。しかしながら、旧地形は南に向かって低くなるので、窯の主軸が南北方向であれば、むしろ北側に窯本体があったとみるべきであり、宮造営時に削平されたと理解するほうが適当と思われる²⁾。なお、北側の土坑 SK16281、西側の方形溝 SD5700 との重複関係は不明で、東側の土坑 SK16275 は 5 号窯 SX16285 よりも新しい。

（3）その他の遺構の概要

5 号窯 SX16280 周辺で検出した、土坑 SK16281、土坑 SK16275、方形溝 SD5700 について解説する。
土坑 SK16281（第 15 図，図版 8-10） 5 号窯の北に隣接する不整形土坑。東西 9 m、南北 5.7 m ほどの規模で、検出面から底までの深さが 15cm ほどの浅い窪みである。埴輪や土器が多量に投棄されている。土坑の東北隅には灰色粘土が集積しており（SX16282）、地山の粘土とはあきらかに異なり砂粒をあまり含まない（図版 8-9）。埴輪の原料となる粘土の可能性はある。

土坑 SK16275（第 14 図，図版 11-1） 5 号窯 SX16280 の東で一部重複して検出した、方形の土坑。東西 10 m、南北 7.5 m、深さ 40 cm。埋土に III 群と IV 群の埴輪を多く含む。5 号窯 SX16280 や奈良時代の建物遺構よりも新しい。

方形溝 SD5700（第 15 図，図版 11-1・2） 5 号窯 SX16280 の西に隣接する、方形にめぐる溝。溝の幅 1.5 m ほど。奈良時代の建物遺構よりも古い。方墳とみるのが素直な理解だが、埋土に III 群と IV 群の埴輪を多く含む³⁾、単一の時期を示さないで性格不明の遺構としておく。

（和田）

註

- 1) ここでの記載は、調査担当の岸本直文による『1993 平城概報』の記載を基本的に踏襲したものであり、軽微な範囲で文言の修整と統一をはかり、一部情報を補足した。
- 2) この理解は『1993 平城概報』の記載とは異なる。
- 3) 方形溝 SD5700 から出土した埴輪は本書では報告しないが、斜行溝 SD4992 とコナベ古墳の円筒埴輪と同じハケメパターンが確認されている〔大澤・加藤 2020〕。具体的には、SD5700〔大澤・加藤 2020; 図 16-2〕、SD4992〔大澤・加藤 2020; 図 16-3, 本書図版 32-89〕、コナベ古墳〔第 2 表, 宮 2011; 第 22 図 18〕である（第 42 図）。

2 出土埴輪・土器の考古学的分析

(1) 1号窯 SX16285 の埴輪

野焼き焼成土坑である1号窯 SX16285 から出土した埴輪は、木箱 80 箱を超える。そのなかから抽出した良好な埴輪はコンテナ 20 箱程度であり、そのうち本書に掲載する埴輪は 51 点である（第 16-19 図、図版 12-19）。出土量が意外に少ないうえに、窯資料ということで破片が多い。

1号窯 SX16285 の窯体内埋土は 3 つに大別でき、下層の暗灰褐粘質土、中層の暗灰褐土、上層の暗茶褐土となる。下層が窯床面直上の埋土であり、中層と上層は窯廃絶後の窪地を埋め立てたもの。下層の埴輪に二次的な被熱は認められないので焼き台に利用されたものではなく、1号窯 SX16285 にともなう埴輪、つまりは 1号窯 SX16285 で焼成された埴輪とみなせる。

下層の埴輪は少なくⅢ群の埴輪ばかりで、中層と上層にはⅢ群とⅣ群の埴輪が多量に含まれる。1号窯 SX16285 でⅣ群の埴輪を焼成したとは考えにくい。とはいえ、1号窯 SX16285 周辺に古墳の存在が認められない以上、2～5号窯を含めて周辺にほかにも埴輪窯が存在すると想定し、中層と上層の埴輪もすべて平城宮下層埴輪窯で焼成した埴輪と認識しておきたい。

ここで紹介するⅢ群の埴輪は 1号窯 SX16285 で焼成したものの、Ⅳ群の埴輪は付近の未知の窯で焼成したものであるという理解のもとで、器種ごとに記述をすすめていく。なお、出土層位や各部位の計測値等は附表 1 [p.177] を参照されたい¹⁾。

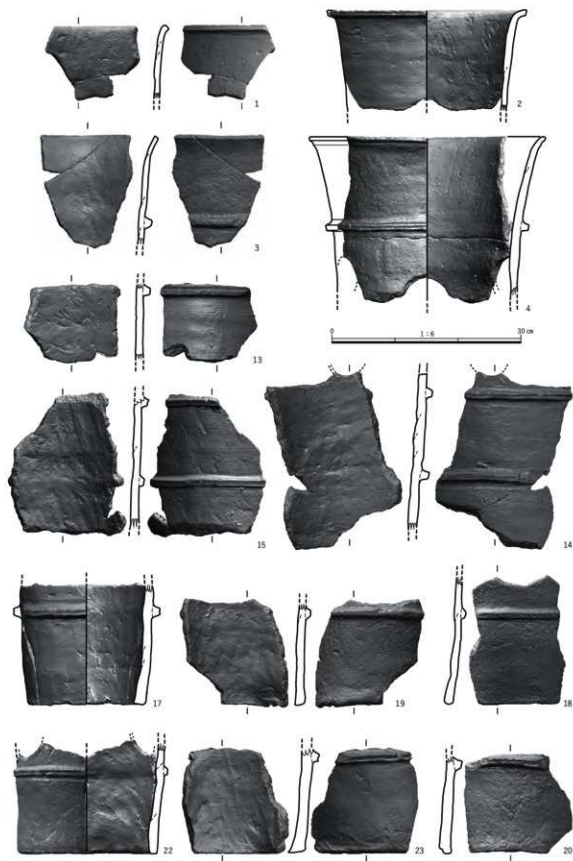
円筒埴輪 破片資料ばかりなので、部位ごとにみていく。記述にあたっては、Ⅲ群とⅣ群とに大別してすすめていく。

まず、有黒斑のⅢ群をみると（第 16-17 図、図版 13-16）、口縁部を屈曲する個体が多く（1・2-4・7）、口縁部高は 13.5～16.0cm と高い。透かし孔は円形と方形（16）がある。外面調整には B 種ヨコハケ調整がみられ、15 は静止痕がやや傾くが Bc 種ヨコハケか。突帯間隔は 13.0cm 程度（14・15）。27 は黒斑を視認できないが、突帯間隔が 13.9cm と幅広いので、Ⅲ群とみておきたい。8 点の底部をみると（16-23）、底部高は 13.5～16.0cm であり、口縁部高とともに、突帯間隔よりも高い形態を想定できそうだ。28～30 は底部高 15.5cm 前後。31 は底部高 14.0cm だが、黒斑を確認できないので、Ⅳ群の可能性もある。底部の外面調整は一次タテハケ調整のみの個体があり（21-23）、底端部外面に正位でヨコナゲ調整をくわえる個体もある。このほか、ヘラ記号をもつ破片が 5 点みられる（7-11）。

このなかで、16 は東張出部の北壁際、溝を埋めた最終作業時の灰層の上に据えられた状態で検出した（第 8 図）、円筒埴輪の底部である。底径 26.4 cm、底部高 15.2 cm、2 段目に方形透かし孔をもつ。底部、透かし孔の直下には面的に黒斑が付着するが、二次的な被熱は認められない。したがって、この埴輪は、作業終了後つまり窯の廃絶後に据えたものと判断できる。

また、朝顔形埴輪もいくつか確認でき（24-26）、肩が張る形態をみてとれる。ヘラ記号をもつ破片もある（12）。

Ⅲ群の円筒埴輪は、有黒斑で、円形ないし方形の透かし孔をもち、口縁部は端部を屈曲させ、底部高（13.5～16cm）と口縁部高（13～14cm）がともに突帯間隔（12.5～13.5cm）よりも高い形態に復元できる。底径 18～23cm、口径 31～38cm で、4 条 5 段であれば器高 70cm 程度となる。こうした特徴はコナ



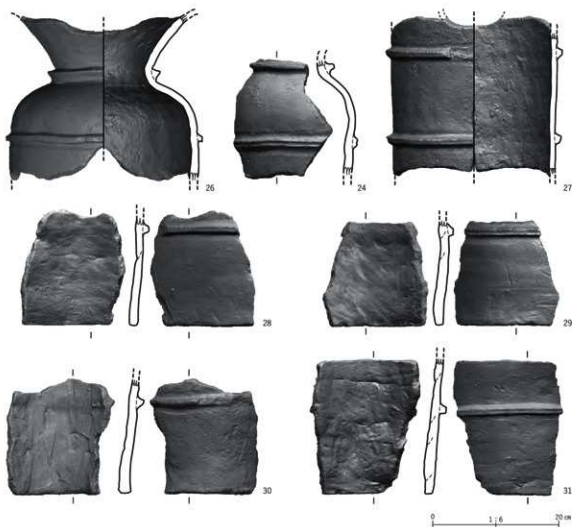
第16図 1号室SX16285出土円筒埴輪・朝顔形埴輪(1) - III群

ベ古墳の円筒埴輪に類似し、実際、13のハケメパターン（第42図）がコナベ古墳のそれ（第2表、宮2011；第23図28）と一致することが示されている（大澤・加藤2020）。

つづいて、無黒斑のIV群をみると（第18図、図版16・17）、口縁端部を屈曲させ（32・34・36）、口縁部高は4.5～7.5cmと低い。透かし孔は円形（32・35）と細長い方形（36）を基調とし、口縁部に三角形の小透かし孔をもつ個体もある（34）。外面調整はB種ヨコハケ調整で、35はBd種ヨコハケを明瞭に観察できる。突帯間隔は11.0～13.0cmで、突帯の剝離面に凹線の突帯設定技法がみられる（32）。底部高は33が15.5cmで、14.0～16.0cmの28～31もIV群の可能性がある。なお、34・35・37は鱗が付き、36はへラ記号をもつ。

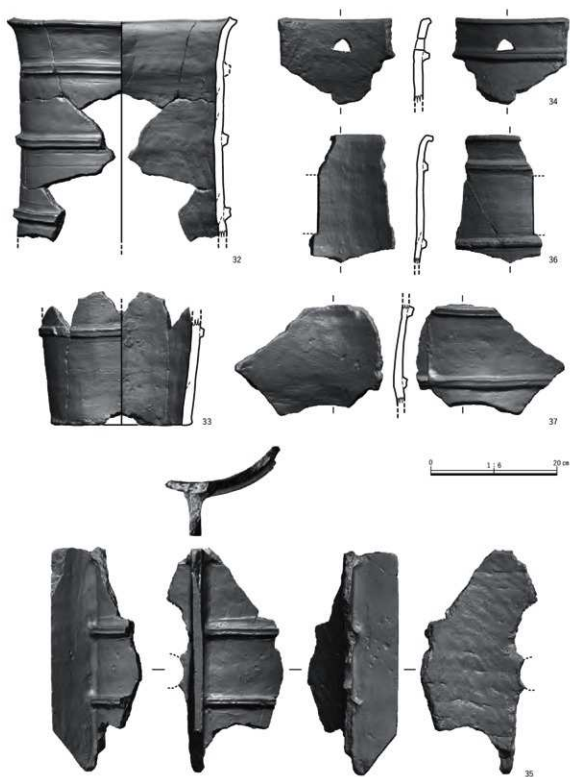
このなかで、32は口縁部から3段分をのこす良好な資料。突帯間隔は11.7cmだが、突帯の上辺と凹線との距離を計測すると10.8cmとなり、これが本来製作時に意図した突帯間隔の計画寸法である。

IV群の円筒埴輪は、無黒斑で、円形および細長い長方形透かし孔と三角形小透かし孔をもち、口縁端部を屈曲させ、口縁部高が4.5～7.5cmと低い形態となる。これには、鱗をもつ個体や白色胎土の個体もみられる。こうした特徴は、ウツナベ古墳の鱗付円筒埴輪ないし円筒埴輪に酷似する。

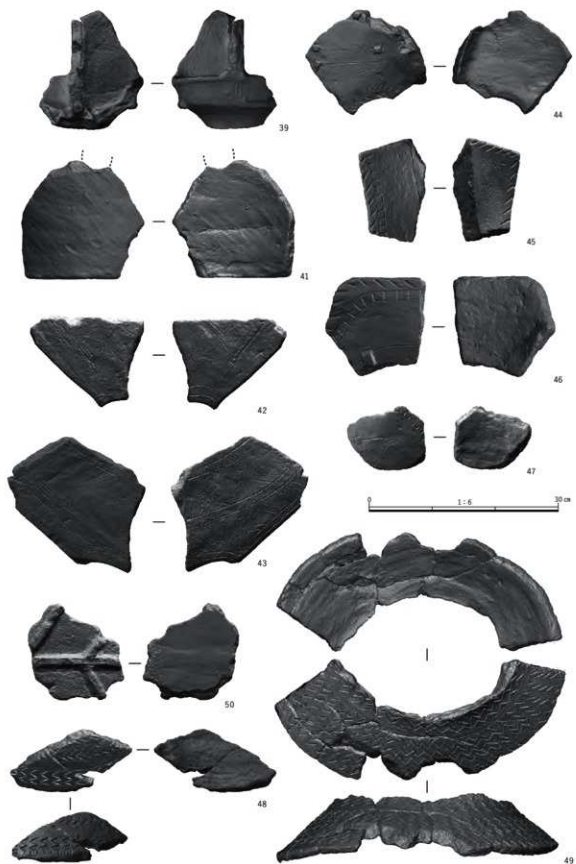


第17図 1号窯 SX16285 出土円筒埴輪・朝顔形埴輪（2）-Ⅲ・Ⅳ群

ここまでⅢ群とⅣ群とに大別して記述してきたが、破片資料にあつてはその区別がむずかしい場合がある。焼成では黒斑の有無という明確に思える基準があるものの、黒斑が認められず軟質の場合、どちらに帰属すべきか判断しづらい。また、規格では底部高の絶対値はひとつの基準だが、むしろ突帯間隔



第18図 1号室 SX16285 出土円筒埴輪・罫付円筒埴輪-Ⅳ群



第19図 1号窯 SX16285 出土形象埴輪

と比較した底部高の相対値のほうが形態をうまく把握できる基準として有効なので、15cm程度という底部高しかわからない破片資料の場合、やはり判断がむずかしい。したがって、いくつかは、とくに底部の破片(28-31)については誤認している可能性もあるので、注意を要する。

埴輪棺 埴輪棺が数点出土している(50)。水平の突帯をめぐらせ、その間に斜行する突帯を付加する、専用棺である。白色胎土で黒斑がみられないことを考慮すれば、IV群に含めて考えてよいだろう。

大型二重口緑壺 51。西張出口で横倒しの状態で出土し(第10図)、ほぼ完形に復元できる(図版13-3)。平底で、器高65.0cm、口径23.5cm[p.46]。こうした大型二重口緑壺は古墳時代前期末以降も点的に出土する事例があり、後述する直下で出土した直口壺の時期と考え合わせればかなり後出的な事例である。白色の胎土や黒斑がみられないことを考慮すればIV群に含めて理解でき、平城宮下層埴輪窯で製作されたと考えてよい。このほか、口縁部の破片がもう1点出土しており、別個体である。

観察する限り穿孔はみられず、古墳に供給されたほか、窯場周辺で使用された可能性も考慮される。陶器TG232号窯では灰原下層から比較的大型の土師器東四国系二重口緑壺が出土しており(大阪府教委・大阪府理文協会1995)、窯場周辺でこうした土師器大型壺を使用する活動があったことを示すものと考えたい。

直口壺 口径11.0cmの直口壺が大型二重口緑壺(51)の付近で出土している(図版4-3)。肩がやや張り、やや扁平となる体部をもつ[p.46]。口縁部は頭部から直上に立ち上がり、口縁端部にむけてやや開く。口縁部の内外をヨコナデ、体部の外面をハケ、同内面を一定の高さまでケズリで調整する。体部の調整からみれば布留系の技術系譜を引くが、口縁部は古墳時代前期以来の形態からは離れている。橙褐色の胎土。

こうした特徴を考え合わせると、平城京左京三条二坊下層SD-881(須惠器TK216型式共伴)までは遡り得ないであろう〔奈文研1975〕。すくなくとも須惠器TK208型式併行以降のものとする。1号窯の廃絶時期の下限を示す²⁾。

形象埴輪 蓋形埴輪、甲冑形埴輪、船形埴輪を確認できるが(第19図、図版18・19)、いずれも全貌をうかがうことはむずかしい。器種ごとにみていこう。

蓋形埴輪は3点あり(39-41)、このうち40の笠部のみが明確に黒斑をもち、III群とみなせる。立飾りの39は受け皿に線刻を刻んで立ち飾りをつくり足す。立ち飾りは粘土紐成形ではなく、粘土板を貼り合わせて製作する。41は笠部の基台部で、上端に円形と思われる透かし孔がみられる。外面調整はナデ調整。

甲冑形埴輪には、III群(図版19-1)とIV群(図版19-2)がある。III群の破片をみると、短甲にあたる部位(44-47)と草摺(48)とがある。短甲と草摺とが一体式なのか組合式かは不明。短甲は地板を縦じ合わせる草紐を方形粘土粒で表現するもので(44-46)、綾杉文で覆輪をあらわす(44-46)。46・47は前胸の堅上板の隅部にあたり、斜行する線刻(47)が地板の表現とみれば三角板草紐短甲を模したものと考えられる。44は首回り、頸甲か。45は襟付短甲の後胸の押上板だろうか。草摺(48)は綾杉文と梯子文(刺突文)を組み合わせた文様帯をめぐらすもので、間に無文帯をはさむ。

IV群の甲冑形埴輪は草摺にあたる(49)。梯子文(刺突文)を間にはさみ鋸歯文を7段で構成する文様帯をめぐらし、さらにこの文様帯の間に無文帯をはさむ。

42・43は船形埴輪の舷側板。同一個体の破片と思われ、表裏で文様が異なる。一面には直弧文を描き、こちらが外面にあたるのだろう。他面はこれよりも複雑な文様となる。舷側板をつなぐ痕跡は認められないが、壱板型ではなく、貫型の舷側板の先端付近にあたろうか。黒斑はみられず、IV群に含めておく。

形象埴輪は破片資料であることもあって、明確にIII群とIV群とを峻別することは容易ではない。

(2) 5号窯 SX16280の埴輪

窯窯の灰原と想定される5号窯 SX16280から出土した埴輪は多量であり、そのなかから抽出した良好な埴輪はコンテナ10箱ほど。そのうち本書で紹介する埴輪は37点で(第20図、図版20-25)、灰原出土資料ということで破片ばかりである。

5号窯 SX16280にかかわる土層は3つに大別でき、下層の炭層、中層の炭混黒褐色土、上層の黒褐色土となる。下層の黒灰色炭層が灰原であり、中層と上層は窯廃絶後に埋め立てたものと理解できよう。厳密には下層とそれ以外の埴輪とは峻別すべきかもしれないが、1号窯での理解と同様に、中層と上層にも平城宮下層埴輪窯で焼成した埴輪が含まれると認識しておきたい。

下層の埴輪はIV群が目につくが(52-59)、V群もたしかに含まれている(62-67-69)。したがって、5号窯 SX16280がいずれの埴輪を焼成した窯なのか判断しにくい。しかし、局所的にみた灰原の堆積がかならずしも窯から掻き出されたままの状態を保持している保証はなく、くわえて平城宮下層埴輪窯から出土した埴輪のなかでV群の埴輪が占める割合がきわめて小さいことを考慮すれば、5号窯 SX16280はIV群の埴輪を焼成した窯と理解しておけよう。

ここでは、器種ごとに記述をすすめたい。なお、出土層位と各部位の計測値等は附表2 [p.178]を参照されたい³⁾。

円筒埴輪 まずは無黒斑のIV群からみると(図版21)、いずれも白色の胎土をもつ一群。52～55は口縁部で、口縁端部を屈曲させ、口縁部高5.0cm前後と低い形態をなす。復元口径は52と54が37.8cmで、53と55は25.0cm程度と小型。この小型の個体(53-55)に合致しそうなものが、56～59の胴部と底部である。胴部の56と57は復元径23.0cm前後、突帯間隔は10.5cm。56の外面には二次的な被熱の痕跡があり、焼き台に用いられていた可能性がある。底部の58は底部高16.2cm、59は底部高13.5cmとなる。このほか、これらとよく似た雰囲気破片に、円形透かし孔をもつものや鱗をもつものがある。

上層の黒褐色土から出土した60は、復元口径40cm強の超大型の鱗付円筒埴輪。突帯は幅4.5cmと通常よりもはるかに幅広く、剥離面には突帯設定技法の凹線を確認できる。鱗を貼りつけるために、突帯を切除して刻み目をほどこすようすがわかる。なお、外面にはへら記号を描く。

ここでみたIV群の円筒埴輪はいずれも鱗付円筒埴輪と思われ、3つの形態にまとめられる。ひとつは、口縁部高が低い大型品(52-54)、そして口縁部高が低い小型品(53-55～59)。もうひとつが、幅広い突帯をもつ超大型品(60)。大型品はウワナベ古墳の埴輪や内堤の埴輪とよく似ており、超大型品はウワナベ古墳外堤の埴輪と酷似する。いっぽうの小型品は、形態はウワナベ古墳の埴輪と同じものだが、その大きさに差がある。ウワナベ古墳の陪塚である大和5号墳や大和6号墳などの埴輪と類似するものだろう。

つづいてV群をみてみよう(図版22-1)。直立する素朴な口縁部で(61-63)、円形透かし孔をもつ(63-65-66)。低平な突帯の下端に凹凸をのこすようすは、断続ナデ技法Aの痕跡とみてよからう(63-66)。



第20図 5号窯 SX16280 出土形象埴輪

外面調整は一次タテハケ調整のみで、一部の底部には板オサエによる底部調整を観察できる(66・69)。65や66は橙褐色をなすが、61・63・64は硬質に焼成されており、須恵質にちかい。

V群の円筒埴輪は少なく、同一個体の可能性も考慮すれば、10個体にも満たない。したがって、全容を把握できないもの、V群の生産量が少なかったというよりも、生産地ではなく、平城宮造営に際して破壊された小型古墳の一端をみているだけに過ぎないように感じる。なお、5号窯のほか、平城宮下層あるいは周辺での出土事例をみても断続ナデ技法Bは確認できず、この付近には断続ナデ技法Bの埴輪系列は展開しなかったと思われる。

埴輪棺 埴輪棺の破片がいくつか出土している(70)。70は専用棺で、棺身の口縁部付近の破片である。突帯をめぐらしたうえに縦方向にも粘土紐を付加し、格子状をなす。復元口径40.0cm、残存高37.5cm。胎土は橙褐色で黒斑はなく、この種の埴輪棺の類例がV群にはないことからすれば、IV群に帰属するとみせよう。

形象埴輪 家形埴輪、圓形埴輪、蓋形埴輪、甲冑形埴輪、動物埴輪(四脚)、人物埴輪が認められる(第20図、図版23-25)。人物埴輪の腕部(87)と動物埴輪の脚部(86)はV群の可能性があるが、形象埴輪の多くはIV群に帰属すると考えてよからう。

76~78は圓形埴輪。上端を鋸歯状に加工し、横方向に3条の突帯を貼りつける。右端は角にあたり、縦位に粘土を貼りつける。左端をみると、上端を半円形に削り込み、縦位に突帯を貼りつける状況がうかがえ、この部分が中央と考えれば、一辺65cm程度の方形の圓形埴輪に復元できる。

なお、蓋形埴輪79と不明形象埴輪88は5号窯を埋め立てた上面で組み合った状態で検出したものである(図版11-1-3)。掘方を検出できなかったものの、埴輪棺と理解するのが自然だろう。

(3) 土坑 SK16281 の埴輪

円筒埴輪はわざわざ、ウナベ古墳外堤の埴輪と同じ太い突帯をもつ超大型品(IV群)と、V群の小型品が認められる程度である(図版26-1)。いっぽう、形象埴輪が多くみられ、なかでも鞍形埴輪が目立つ(図版27)。

鞍形埴輪は、飾り板の文様から複数個体があるようだが、白色胎土で比較的文様を丁寧に描く破片が多くを占め、それらは同一個体だろう。鳥舌鎌を描く鎌部(100)をみると、上端が水平で、1類2式と判断できる。ただし、1類2式は矢筒部を筒状に製作して両側に飾り板を付加する形態だが、99を観察すると、飾り板の裏側に半円筒部を貼りつけていた状況のみとれる。底部付近は、1類2式も1類1式と同じく、矢筒部の前面と飾り板を製作した後、背面に半円筒部を貼りつける場合もあるのだろうか。なお、飾り板や円盤部は大振りで、復元すると器高1mを優り超えよう。

(4) 斜行溝 SD4992 の埴輪

検出総長80mにもおよぶ幅4mの斜行溝SD4992[p.75]から出土した埴輪は膨大な量である。平城第39次調査と平城第43次調査とあわせて木箱120箱を超える埴輪が出土しており、その大半が斜行溝SD4992出土なのである。これらのうち、本書に掲載する埴輪は45点である(第21-23図、図版28-36)。

斜行溝SD4992の埋土は上層と下層の2つにわかれ、下層の砂層からはIII群の埴輪が、上層からはIII群とIV群の埴輪が混在する状況で出土した。SD4992から多量の埴輪が出土する状況を祭祀とする理

解が示されたこともあったが〔立木 1981:p.126〕、そうではなく、すなおに溝に埴輪を廃棄したものとみるのが妥当だろう。そして、SD4992の埋土には奈良時代の土器が含まれないことから、古墳時代のなかで埴輪を廃棄したのであって、東区朝堂院・朝集堂下層の大溝 SD6030 (第35図)も同じような遺構として理解できよう。

ここでは下層の砂層から出土した埴輪を中心に報告する。以下、器種ごとに記述をすすめよう。なお、出土層位や各部位の計測値等は附表3〔p.179〕を参照されたい。

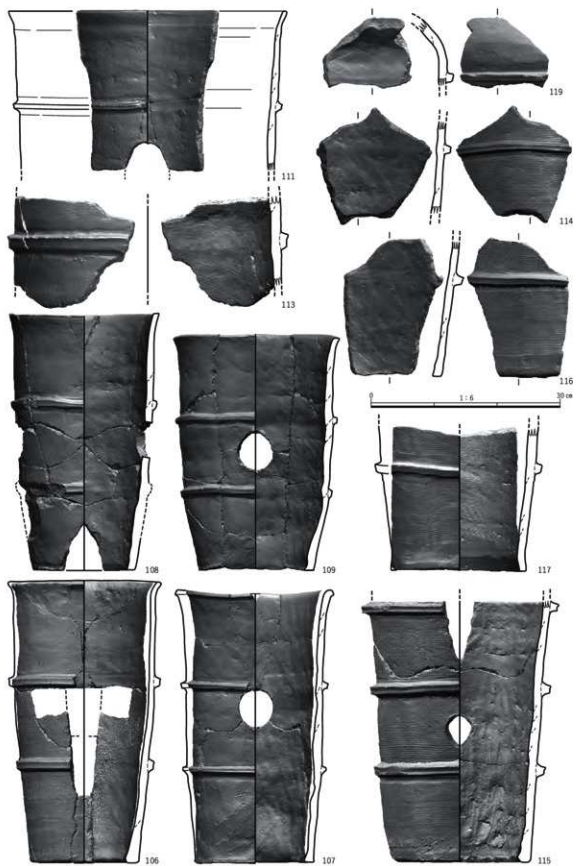
円筒埴輪 まずは、ほぼ完形に復元できた2条3段の円筒埴輪からみていこう(第21図、図版29-1)。106は器高45.0cmで、底部から口縁部にむかってわずかに開く形態。底部高16.2cm、2段目の突帯間隔13.2cm、口縁部高15.6cmとなり、2段目のみ狭い。2段目の対向位置に方形透かし孔をあげ、突帯はやや太く台形状。口縁部は屈曲させ、外傾する端面をもつ。外面調整は一次タテハケ調整の後に二次ヨコハケ調整をおこなう。B種ヨコハケ調整の静止痕は不明瞭だが、突帯間を2周以上で充足するようである。内面調整はナデ調整で、口縁部のみヨコハケ調整が認められる。胎土と焼成は堅緻でしっかりしているが、外面に縦方向帯状の黒斑が付着する。

107は器高43.5cmで、底部から口縁部へむかってわずかに開く形態をなす。口縁部は短く屈曲させ、突帯は細い。2段目に円形透かし孔をもつ。底部高15.3cm、突帯間隔13.2cm、口縁部高14.7cm、復元底径19.0cm。外面調整は一次タテハケ調整の後にBb種ヨコハケ調整を基調とするが、底部は右上がりのナデ調整にとどまる。基部は幅4.0cm。内面調整はナデ調整で、口縁部のみヨコハケ調整がみられる。正位の状態で、底端部の内外面をヨコナデ調整する。外面に、縦方向帯状に黒斑が付着する。

108は器高40.9cmで、上にむかってやや開く形態。復元底径16.2cm、口径24.0cm。底部高と口縁部高がともに13.8cm、2段目の突帯間隔は13.3cmとなり、各段をほぼ均等に割りつける。口縁部は直立し、突帯はやや太く台形状。2段目の対向位置に円形透かし孔をあげる。2条目の突帯上辺に突帯設定工具の擦痕を観察できる。外面調整は一次タテハケ調整の後にBb種ヨコハケ調整をおこなう。内面はナデ調整で、口縁部のみヨコハケ調整がみられる。底端部と底面にわずかに黒斑が付着する。

109は器高38.0cmで、底部から口縁部にむかって開き気味で寸胴な形態をなす。口縁部は外反し、端部を丁寧にナデ調整することで面をもつ。2段目の対向する位置に円形透かし孔をあげる。底部高13.4cm、2段目の突帯間隔11.9cm、口縁部高13.6cmとなり、2段目のみ狭い。復元底径17.5cm、口径25.7cm。外面調整は一次タテハケ調整の後に二次ヨコハケ調整をおこなう。静止痕は不明瞭だが、Bb種ヨコハケ調整だろう。底端部外面をヨコナデ調整する。内面調整はナデ調整で、口縁部のみヨコハケ調整をおこなう。黒斑は認められない。

このほか、4条5段と思われるものに115がある。115は底部を含めて3段分をのこし、2段目の対向位置に円形透かし孔をもつ。底径22.0cmで直立気味。底部高15.4cm、突帯間隔は13.0cmをはかり、突帯間隔よりも底部を高く割り付ける。外面調整は静止痕が不明瞭だが、突帯間を1周で充足しているようなのでBc種ヨコハケ調整とみてよからう。外面に黒斑が付着する。111と112は口縁部。111は口縁部高15.0cmで、口縁部下の段に円形透かし孔をあげ、透かし孔のまわりを線刻で縁取る。これと似た例が市尾今田2号墳(榎考研1983)で出土している。113は胴径42.3cmの大型品で、突帯も幅広につくる。外面調整はタテハケ調整で、外面に黒斑がみられる。



第21図 斜行溝 SD4992 出土円筒埴輪・朝顔形埴輪

116 と 117 は底部の破片。116 は底部高 16.1cm で、外面にうっすらと黒斑が付着する。外面調整は Bc 種ヨコハケ調整で、その工具幅は 10.5cm となり、底部の幅を充足できていない。底端部外面を 1.0cm ほどの幅で横方向にケズリ調整をくわえる。内面はナデ調整。117 は底部高 16.7cm で、外面にうっすら黒斑がみられる。外面調整は Bc 種ヨコハケ調整で、その工具幅は 10.2cm であり、底部の幅を充足できていない。底端部の内外面にケズリ調整をおこなっており、上から見ていずれも時計回りにほどこす。したがって、ケズリ調整は正位の状態を実施したものと判断できる。内面はハケ調整。この 117 は方形溝 SD5700 とコナベ古墳の円筒埴輪と同一のハケメパターンである (第 42 図)。

118 と 119 は朝顔形埴輪の肩部。118 は線刻で文様を描く。

なお、120 は上層から出土した貼付口縁の円筒埴輪。復元口径 42.5cm で、口縁部高 10.5cm、突帯間隔 14.1cm となる。外面調整は一見すると Bd 種ヨコハケ調整だが、工具幅は 7.5cm であり、突帯間を 2 周で充足するので、Bb 種ヨコハケ調整である。口縁部も 2 周で充足する Bb 種ヨコハケ調整で、ヨコハケ調整の後に口縁端部に粘土紐を貼りつける。黒斑は認められず IV 群だが、貼付口縁の円筒埴輪は出土例が少ないのでここで紹介しておいた。

SD4992 の III 群円筒埴輪は、コナベ古墳の円筒埴輪とのあいだで同一のハケメパターンを確認できたように (117)、コナベ古墳へ供給された埴輪を含むことは確実である。また、113 のような大型品はコナベ古墳の西造出の食い違い部分に樹立していた大型円筒埴輪 (第 2 表、宮 2011; 第 26 図 46) に類例をもとめられよう。しかし、4 個体を復元できた 2 条 3 段の円筒埴輪は (106-109)、コナベ古墳では目立たない形態である。コナベ古墳の西側造出上段で底径 20cm 程度の小型品がみられるが、それらとも似ていない。あるいは、コナベ古墳の陪塚に樹立した可能性もあるが、現状、出土事例はない。

もうすこし視野をひろげてみると、瓦塚 1 号墳 (拙考研編 1976) や宝塚 1 号墳 (松本市教委 2005) に 2 条 3 段の III 群円筒埴輪が知られるが、それらとの関係性があるのだろうか。しかし、それらは口径も大きく寸胴で、時には鈿付壺形埴輪を載せるもので、形態的にも似ているところはない。なお、IV 群の事例だが、馬見古墳群の長楽 1 号墳 (拙考研 2023) に類品があり、寸胴な形態は 109 と似る。

形象埴輪 家形埴輪、蓋形埴輪、盾形埴輪、鞆形埴輪、船形埴輪、鶏形埴輪がみられる (第 22-23 図、図版 33-36)。罫種ごとにみていこう。

家形埴輪はいくつかの形態がみられ、121 は円柱造りの家形埴輪。これまでにも何度か紹介されてきた (立木 1981)。円柱の直径 9.2cm で残存高 33.0cm、大型である。このほかにも円柱の破片は数点確認できる。

蓋形埴輪のうち、127 ~ 140 は明瞭な黒斑をもつ一群。立ち飾りは、上辺がやや湾曲し (127-130)、内側と外側の罫はともに上辺を越えないものと思われる (127)。縦方向におおきく 2 分割する文様構成をもち (127-132)、2 条一組ないし 3 条一組の線刻で描く。そして、文様とは無関係に長径 3.8cm 短径 2.8cm の円孔をあける (127-132)。文様と無関係に孔をあける立ち飾りとしては、栗山古墳の無文の立ち飾りに小さな方形の孔をあける事例 (広陵町教委 2005) が思い浮かぶ。

笠部をみると、軸受部下端に低平な突帯をめぐらし、その突帯上に 2 条一組の直線文を等間隔に描く (133-135)。これらは出土地点も近く、雰囲気も似ているので、同一個体だろう。笠部中央に突帯をめぐらし (138-139)、笠部下半を 2 段に区画して 1 条の線刻を少しづつしながら布貼りの重なりを表現す

る(136・140)。

これらのうち、立ち飾りの127・130・131、笠部の133・135・138・140は出土地点が近く雰囲気も似ているので、同一個体の可能性が高い。津堂城山タイプ古相〔松木1990:pp.73-75〕の笠部を復元できるが、立ち飾りは五線帯を縦横に組む文様構成ではなく、縦方向に2分割する文様構成となる点は注目できる。この種の立ち飾りは類例が少なく、主流にはならない。類似の文様構成は、野中宮山古墳〔藤井寺市教委1997:p.166図105〕、乙女山古墳〔河合町教委1988:p.32〕、内田山B1号墳〔京都府埋文セ2006:p.113第106図・18-20ほか〕、西春高塚古墳〔北名古屋市委2010:図版5-21・22ほか〕で確認できる程度である。Ⅲ期に限って認められる文様構成であり、関係性を追究しやすい。ただし、この種の立ち飾りに組み合う笠部の型式は2条一組の線刻を互い違いに刻むものが一般的だが、ここでは違う。笠部の線刻の型式からは、本例がわずかに先行する可能性もあろうか。

蓋形埴輪では、このほかに、明瞭な黒斑をもたず胎土が白色の一群がある(142-145)。142と143は同一個体の蓋形埴輪と思われ、上辺がおおきく湾曲し、内側と外側の緒が上辺を越えて発達する形態。外側の緒は上下に分割する。2条一組の線刻で縁取りし、中央に文様帯を設けてそれに見合うように長



第22図 斜行溝SD4992出土形象埴輪(1)

方形の透かし孔を2つあける。赤色顔料の痕跡が随所にのこり、全面に塗布していたのだろう。144と145は軸受部上端の破片で、上端に粘土紐をめぐらして貼付口縁状にする。

透かし孔をもつ立ち飾り(142・143)は、平塚1号埴輪例(図版52)や方墳SX7800(図版58-1・2・4)に類例があるほか、上石津ミサンザイ古墳(伝履中陵)でも出土している。内側と外側の鰭の形態や線刻をほどこさない点を考慮すれば、方墳SX7800例により近い。

盾形埴輪は146のみで、綾杉文で区画した中を鋸歯文で充填する。盾面に明確な黒斑をもち、III群とみなせるが、わずかに遡る可能性もある。靱形埴輪も147の1点のみで、飾り板にあたる。矢筒部との接合箇所がみられるので、1類2式ないし1類3式だろう。下層から出土したものであるが、明瞭な黒斑はみられず、白色の胎土であることから、IV群と判断できる。

148の船形埴輪はすでによく知られている(標考研附博1984:p.66, 飛鳥資料館2005:p.11)。貫型の準構造船を模し、舷ないし艀にあたる。舷側版は無文で、船底の丸木部との境に粘土紐を貼りつけてフェン



第23図 斜行溝SD4992出土形象埴輪(2)

ダーをあらわす。貫は実際に舷側板を貫通しているわけではなく、表裏に別の粘土を貼りつけることで貫通しているように見せかけている。隔壁は簡素な板状粘土を貼りつけただけで、船の構造をよくとらえているものの、造作は素朴。149は舷側板で、舳ないし舳にあたる。同じく貫型で、表裏に別々の粘土を貼りつけて表現するさまを観察できる。ただし、外面に2条一組の線刻のみられ、円弧を重ねた文様を描く。

鶏形埴輪が2点出土している。150は雌鶏の頭部。各部位の表現が忠実かつ立体的で、頭部と頸部の境に段差を設ける。目は竹管による刺突で表現し、耳朶は円盤状の粘土粒を貼りつける。内肉も粘土を貼りつけてあわらす。小さめの鶏冠は粘土紐を貼りつけて刻み目をほどこし、嘴は中空であり、粘土紐を巻き上げながら形づくる。頸部背側には線刻で羽を表現する。内面を観察すると、頭部の正面側(嘴側)を製作した後、頭頂部ないし後頭部側で閉塞したようすがわかる。頸部の直径7.0cm。外面全面に赤色顔料を塗布する。このほか、頸部の破片もある。正面側に線刻で羽を表現し、2箇所粘土剥離痕跡がみられるので内肉をあらわしていたことがわかる。黒斑がつく。頸部直径7.0cm。

形象埴輪では、縦分割型の立ち飾りをもつⅢ群の蓋形埴輪が目立させよう。特徴的な文様構成で類別が限られるので、古墳間の関係性を把握するのに役立つ。

ここまでみてきたなかで、下層の埴輪にもⅣ群に帰属させるべきものがいくつかある。具体的には、明瞭な黒斑はなくて胎土が白色な一群で、蓋形埴輪の142・143、鞍形埴輪の147、船形埴輪の148・149の5点である。少量であり、発掘調査における掘削時の混ざり込みと理解して、ここでは斜行溝SD4992の下層土はⅢ群埴輪の単純層とみておきたい。ただし、最終的な判断は、将来の本格的な整理作業を踏まえた報告でおこなうことを約したい。

鳥形土器 鳥形土器が2点出土しており、どちらも注ぎ口となる小孔をもつ鳥形甕。151は嘴と尾の先端を欠損するが、ほぼ完形。中空の胴体の背側(上側)に口縁部をつくり、頸部(下側)に直径1.0cmの注ぎ口をあける。胴体の腹側(下側)は丸みをおびており、丸底となる。口径の内寸は直径2.5cm。残存長17.8cm。152も基本形態は似ており、胴体の背側(上側)に口縁部をつくる。おおきく立ち上がる頸部の正面側に直径0.8cmの注ぎ口をもつ。尾尻は丸くおさめ、円形の刺突で肛門を表現する。板状の粘土を貼りつけて羽尾を表現していたようである。平底。口径の内寸は直径2.5cm。残存長16.8cm⁴⁾。

(和田)

註

1) 既往の概要報告書あるいは論文等における挿図番号との対応を示しておく。

6: 第4図1、7: 第4図2、11: 第4図4(以上、大澤2021)、16: 図20-5〔1993平城概報〕・第4図4。

2) 大型二重口縁壺と直口壺の2項目は山本亮が執筆し、図[p.46]も山本が作成した。

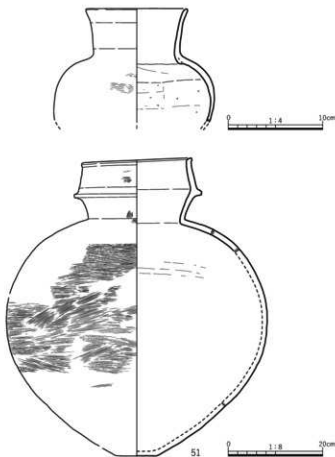
3) 既往の概要報告書あるいは論文等における挿図番号との対応を示しておく。

52: 第10図2、53: 第11図12、54: 第10図1、55: 第11図11、56: 第11図21、57: 第11図20、58: 第11図22、59: 第11図23、67: 第11図26、68: 第11図27、69: 第11図25(以上、大澤2021)

4) 第16～23図は、調査・研究アシスタントがSEM-MVS法で計測し、廣瀬が完成させた。

引用・参考文献

- 今尾文昭 2014『ヤマト政権の一大勢力—佐紀古墳群』新泉社
- 上田 睦 1997「出土埴輪から見た古市古墳群の構成」『堅田直先生古希記念論文集』同論文集刊行会
- 上田 睦 2003「古墳時代中期における円筒埴輪の研究動向と福年」『埴輪論叢』第5号 埴輪検討会
- 大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会 1995『陶邑・大庭寺遺跡IV』
- 大澤正吾 2021「平城宮東院下層埴輪窯跡群の基礎的検討」『古墳文化基礎論集』同論集刊行会
- 大澤正吾・加藤一郎 2020「平城宮東院地区における埴輪生産の契機と供給先」『奈良文化財研究所紀要 2020』
- 橿原考古学研究所 1976『斑鳩町瓦塚1号墳発掘調査概報』
- 橿原考古学研究所 1983「市尾今田古墳群発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報—1981年度』
- 加藤一郎 2012「倭の五王の時代における円筒埴輪の規格—大型古墳とその陪家」『倭王権の考古学—古墳出土品にみる社会変化』早稲田大学出版部
- 鎌方正樹 1997「中期古墳の円筒埴輪」『史跡大安寺田境内1』奈良市教育委員会
- 木村 理 2022「古墳時代中期の円筒埴輪」『埴輪の分類と編年』埴輪検討会
- 広陵町教育委員会 2005『集山古墳調査概報』学生社
- 高木清生 2008「佐紀原列古墳群東群の古墳分布復元試案」『王権と武器と信仰』同成社
- 立木 修 1981「円柱を表現する家形埴輪—平城宮跡下層出土の家形埴輪—」『考古学雑誌』第67巻第2号 日本考古学会
- 広瀬和雄 2007『古墳時代政治構造の研究』塙書房
- 廣瀬 寛 2012「佐紀古墳群の形成と埴輪様式」『考古学ジャーナル』No.624 ニューサイエンス社
- 廣瀬 寛 2015「王権中枢部における埴輪の様式構造」『古代王権の形成と埴輪生産』同成社
- 松木武彦 1990「蓋形埴輪の返遷と画期—畿内を中心に—」『鳥居前古墳—総括編—』大阪大学文学部考古学研究室
- 松阪市教育委員会 2005『史跡塚塚古墳』
- 村瀬 陸 2022「コナベ古墳併行期の埴輪生産とその規格」『埴輪論叢』第11号 埴輪検討会
- 村瀬 陸 2023「ウワナベ古墳併行期の埴輪生産とその規格」『埴輪論叢』第12号 埴輪検討会



1号窯 SX16285 出土の大型二重口縁壺と直口壺

第3章 佐紀古墳群東群の研究

佐紀古墳群東群では早く1950年には大和5号墳の埴輪がひろく知られるところとなり、1960年代後半には奈文研の発掘調査でウナベ古墳や平塚1号墳の埴輪があきらかとなるなど、その発見は古い。さらにコナベ古墳内堤の埴輪も見つかり、ウナベ古墳の埴輪の特異性もあって関心を集めてきた〔赤塚1980〕。同時に、市庭古墳や方墳SX7800の発見のように、平城宮造営時に削平されてあるいは埋め立てられて埋没した古墳の存在も早くから認識していた。その後も、木取山古墳や円墳SX15663など埴輪をもつ古墳の発見はつづき、1990年代に平城宮跡東院地区の下層で埴輪蓋を検出したことで、ふたたび関心が高まりつつあった。しかし、佐紀古墳群東群の埴輪を再検討する機運は醸成されてきたろうが、それが成就することはなかった。

2010年代になると、宮内庁による発掘調査でコナベ古墳の埴輪があきらかになったのを契機として、またび佐紀古墳群東群への注目度が増す。さらに、ウナベ古墳の墳丘や外堤の埴輪、ヒシャゲ古墳内堤の埴輪が公表され、王陵級古墳の埴輪の様相がづぎとづぎと解明されていく。また、古市・百舌鳥古墳群や馬見古墳群の埴輪もあきらかとなり、丹念かつ緻密に情報が整理されたことで、ようやくにして古市・百舌鳥古墳群における様相や変遷を適確に把握できるようになった。そして、墳長200mを超す王陵級古墳を擁する巨大古墳群間にも埴輪の関係性へも論が展開するようになってきた〔木村2020・2023〕。

こうした状況を受けて、佐紀古墳群東群の埴輪にかんする評価はみなおされつつある。いや、みなおす必要がある。しかし、奈文研が保管する関連埴輪については出土時期も報告時期も古いため、提示が充分ではないところもある。そこで、現在の研究水準に照らして、適当なかたちで基礎情報を再提示したい。

ただし、冒頭でも述べたように〔p.6〕、当初計画の変更を余儀なくされたため、既報告資料の再実測を含めた悉皆的な再整理は完遂できなかった。ここでは一部の未報告資料について実測図を提示するとどまるが、その不足を写真図版で補うこととする。詳細な報告がある場合には繰り返さないこととし、市庭古墳、木取山古墳、神明野古墳、平塚1号墳、平塚2号墳などを主対象とした。

なお、第2・3表〔pp.48・49〕に発掘調査一覧と報告書等の情報を記載しておくので、適宜、参照されたい。

(和田)

引用・参考文献

- 赤塚次郎 1980 「コナベ古墳外堤出土埴輪の製作法に関する問題」『奈良市埋蔵文化財調査報告書—昭和54年度』奈良市教育委員会
- 木村 理 2020 「古墳時代中期における王権中枢古墳群の埴輪生産」『考古学研究』第67巻第1号 考古学研究会
- 木村 理 2023 「円筒埴輪編年に基づく大型古墳群造営過程の復元的研究」『日本考古学』第57号 日本考古学会

第2表 佐紀古墳群東群における発掘調査一覧(1)

古墳名	墳形/墳丘規模	時期	調査内容、発掘・奈良文化財研究所、発掘・奈良県立歴史考古学研究所、市・奈良市教育委員会	おもな調査成果
コナベ古墳 前方後円墳/208m Ⅲ期古墳				
宮2011「小奈辺発掘参考地一墳丘墳頂部その他整備工事に伴う事前調査」[書誌部]紀要第62号(発掘集)				墳丘・遺物の発掘調査
県1997「佐紀・馬列古墳群、松林発掘調査概報」[奈良県発掘調査概報1997年度(第1分冊)]				墓外塚外周輪郭(大型)・外周溝の検出
県2009「コナベ古墳外塚・松林発掘9次調査」[奈良県発掘調査概報2008年度(第3分冊)]				西外周溝の検出
市1979「コナベ古墳前方部外塚発掘調査報告」[奈良市歴史文化財調査報告書一昭和54年度]				墓内外周輪郭の検出
市1986「コナベ古墳外塚部の調査」[奈良市歴史文化財調査報告書一昭和60年度]				北外塚の検出
市2002「コナベ古墳の調査—第3次」[奈良市歴史文化財調査報告書一平成11年度]				墓外塚の検出
市2003「コナベ古墳の調査—第4次」[奈良市歴史文化財調査報告書一平成12年度]				北外塚の検出
鎌方正樹1992「中期古墳の円形墳輪」[史跡大寺古境内1]奈良市教育委員会				外塚内周輪郭(市1979の実測図掲載)
加藤一郎2012「赤井谷1号横穴とコナベ古墳の墳輪」[墳輪研究会誌]第16号 墳輪研究会				同一ハケをもつ墳輪の提示
大澤正吾・加藤一郎2020「平城宮東院地区における墳輪生産の契機と供給先」[学文研紀要2020]学文研				コナベ古墳の墳輪製作地の提示
市庭古墳 前方後円墳 253m Ⅲ期新形				
宮2024「平城天皇崩御後コンクリートブロック改修その他工事に伴う立会調査」[書誌部]紀要第75号(発掘集)				古墳にともなう顕著な遺構・遺物なし
県1976「平城宮発掘調査報告Ⅷ」(平城宮10-11-13、203号遺)				南周溝(前方部前部)・外塚の検出
県1981「平城宮北辺地発掘調査報告Ⅴ」(平城宮1263号遺)				北西外塚内周輪郭・外周溝の検出
県1984「平城宮北方地域の調査(1)」第151-10次「昭和58年度 平城宮発掘調査部発掘調査概報」				北外塚(後円部)・外周溝の検出
県1991「平城宮発掘調査報告Ⅹ Ⅱ」(平城宮127号遺)				墓外塚(前方部前部)の検出
県1994「平城宮北方(市庭古墳北辺部)の調査 第242-1次」[1993年度 平城宮発掘調査部発掘調査概報]				北外塚(後円部)・外周溝の検出
岸本直文1996「市庭古墳の復元」[文化財論叢Ⅱ]学文研				既刊調査の整理と墳丘復元図の提示
ウツナベ古墳 前方後円墳/272m Ⅳ期古墳				
宮2007「宇和宗院発掘参考地採集の墳輪について」[書誌部]紀要第57号(発掘集)				墳丘・周溝採集発掘の報告
宮2019「平成29年度墳丘外表面調査の成果報告—宇和宗院発掘参考地」[書誌部]紀要第70号(発掘集)				調査による状況調査・採集発掘の報告
宮2022「宇和宗院発掘参考地整備工事予定区域事前調査」[書誌部]紀要第73号(発掘集)				第1・2段目発掘の検出
宮2024「令和2年度宇和宗院発掘参考地整備工事予定区域事前調査の採集品」[書誌部]紀要第73号(発掘集)				墳丘採集発掘の報告
県1974「平城宮発掘調査報告Ⅴ」(平城宮54-60次調査)				墓内塚外周輪郭の検出
県1976「ウツナベ古墳外塚」[奈良県古墳発掘調査報告Ⅰ] (1976年の発掘調査)(県1993a-2)				墓内塚外周輪郭(後円部)の検出
県1989「ウツナベ古墳発掘調査概報」[奈良県発掘調査概報1986年度(第1分冊)]				西外塚(後円部)の検出
(1988年の発掘調査)(県1993a-3)				西外塚(後円部)の検出
県1989「ウツナベ古墳発掘接地点発掘調査概報」[奈良県発掘調査概報1988年度(第1分冊)]				西外塚・外塚内周輪郭(後円部)の検出
県1993「ウツナベ古墳発掘接地点」[奈良県発掘調査概報1992年度(第1分冊)]				近世土坑から墳輪出土
県2008「佐紀古墳群—教育調査地区・ウツナベ古墳中塚から外塚」[奈良県発掘調査概報2007年度(第1分冊)]				外塚発掘(大型)の検出
県2009「ウツナベ古墳外塚」[奈良県発掘調査概報2008年度(第1分冊)]				墓内塚・外塚(後円部)の検出
県2012「佐紀古墳群」[奈良県発掘調査概報2011年度(第1分冊)]				鎌行円形墳輪(大型)の出土
県2022「ウツナベ古墳」[奈良県発掘調査概報2021年度(第1分冊)]				後円部墳輪の検出
市1992「ウツナベ古墳外塚の調査」[奈良市歴史文化財調査報告書一平成3年度]				墓内塚(前方部前部)の検出
市2023「ウツナベ古墳の調査—UN第2次」[奈良市歴史文化財調査報告書一令和2年度]				後円部墳輪の検出
鎌方正樹1992「中期古墳の円形墳輪」[史跡大寺古境内1]奈良市教育委員会				内塚出土墳輪(市1992の実測図掲載)
大澤正吾2018「ウツナベ古墳遺出土概輪周辺採集の墳輪」[学文研紀要2018]学文研				遺出採集発掘の報告
松永規江2020「ウツナベ古墳遺出土概輪採集の調査書—土製模造品」[学文研紀要2020]学文研				遺出採集資料の報告
大澤正吾2022「ウツナベ古墳遺出土概輪図録」学文研				内塚外周輪郭(市1974)の墳輪報告
ヒシャゲ古墳 前方後円墳/219m Ⅳ期新形				
宮1994「平城坂上陸見場所改築地区の調査」[書誌部]紀要第46号(発掘集)				墓外塚(前方部前部)の検出
宮1995「平城坂上陸整備工事区域の調査」[書誌部]紀要第47号(発掘集)				南周溝一段目・内塚内/外周輪郭の検出
県1993「藤之塚陸見場所」[奈良県発掘調査概報1992年度(第1分冊)]				墓内塚外周輪郭・遺土塚の検出
県1994「藤之塚陸見場所内塚外周輪郭」[奈良県発掘調査概報1993年度(第1分冊)]				北・東内塚(後円部)・外塚の検出
県2002「佐紀ヒシャゲ古墳—第4次発掘調査概報」[奈良県発掘調査概報2001年度(第1分冊)]				墓内塚外周輪郭・外塚の検出
小栗明彦・東野彰2022「ヒシャゲ古墳の高塚帯と墳輪」[考古学論叢]第45号 履考研				墓内塚外周輪郭(県1993)の報告

第3表 佐紀古墳群東群における発掘調査一覧(2)

古墳名	構形/墳丘規模	時期	実:宮内庁, 第1奈良文化財研究所, 第2奈良文化財研究所, 第3奈良文化財研究所(古墳), 奈良博物館, 市:奈良市教育委員会, 和:河合町教育委員会	おもな調査成果
木取山古墳	前方後円墳/110m	旧期新形		
	第1982[左京一条三坊二坪一木取山古墳一の調査(第131-83)]	[昭和56年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報]		南周濠(前方部前部)の検出
	第1983[左京一条二・三坊の調査(第141-28)]	[昭和57年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報]		東周濠(前方部)の検出
	第1983[左京一条二・三坊の調査(第141-133)]	[昭和57年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報]		東周濠(後方部)の検出
	第1984[左京一条二・三坊(木取山古墳)の調査(第151-24-283)]	[昭和58年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報]		西・東周濠(前方部)の検出
	第1986[左京一条二坊(木取山古墳)の調査(第164-43)]	[昭和56年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報]		埴輪・石土(和葬)の少量出土
神明野古墳	前方後円墳/117m	IV期古墳		
	第1961[平城宮跡・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告](平成第1次調査)			南外堤の検出(A跡)
	第1963[平城宮発掘調査報告Ⅲ](平成第3-6-93次調査)			北境土埴輪跡・外堤内/外周埴輪跡の検出
	第1991[平城宮発掘調査報告ⅩⅢ](平成第12-73次調査)			西・東周濠の検出
	第1993[平城宮発掘調査報告ⅩⅣ](平成第11-73-132-153次調査)			周濠・東道出の検出
	岸本嘉文1993[神明野古墳][平城宮発掘調査報告ⅩⅣ]			埴土の復元
平塚1号墳	前方後円墳/70m	旧期古墳		
	第1975[平城宮発掘報告Ⅵ](平成第55次調査)			周濠(前方部)・埴土埴輪跡の検出
	松下正司1970[平塚1・II号古墳][奈良県観光]第163号 奈良県観光新聞社			発掘調査の概要報告
	大澤正善・加藤一郎2020[平城宮東院地区における埴輪生産の契機と供給先][学文研紀要2020]			コナハ古墳の埴輪に同一ハケメの確認
平塚2号墳	前方後円墳/70m	IV期古墳		
	第1975[平城宮発掘報告Ⅵ](平成第55次調査)			周濠(前方部)の検出
	松下正司1970[平塚1・II号古墳][奈良県観光]第163号 奈良県観光新聞社			周濠(後方部)の検出
方塚 SX7800	方塚/9m	IV期新形		
	第1982[平城宮発掘調査報告Ⅹ](平成第75次調査)			溝溝の検出
円塚 SX15663	円塚/14m	IV期		
	第1993[第二次朝倉院第五堂の調査 第238次][1992年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報]			溝溝の検出
	第1996[第二次朝倉院第六堂の調査 第261次][1995年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報]			溝溝の検出
赤井谷1号横穴	—	(旧期古墳)		
	第1949[奈良市歌姫町横穴][奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報]第12編			発掘調査の報告
	須藤1978[大和考古資料目録]第6編			埴輪の報告
	加藤一郎2012[赤井谷1号横穴とコナハ古墳の埴輪][埴輪研究会誌]第16号			コナハ古墳の埴輪に同一ハケメの確認
【参 考】				
杉山古墳	前方後円墳/154m	IV期古墳		
	市1992[史跡大安寺旧境内1]			総括的な報告
ヤイ2号墳	前方後円墳/15m	IV期古墳		
	市2010[平城京跡(左京二条五坊北55-第600次)]	[奈良県地理文化財調査年報—平成19年度]		溝溝の検出
南新コモ川2号墳	方塚/規模不明	IV期古墳		
	市2009[平城京跡(左京四条二坊三坪)の調査—第550次]	[奈良県地理文化財調査年報—平成18年度]		溝溝の検出
川合大塚山古墳	前方後円墳/197m	IV期古墳		
	第1949[北葛城郡河合村大塚山古墳群][奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報]第12編			測量調査の報告
	第1993[川合大塚山古墳発掘調査報告][1992年度地理文化財調査報告]			周濠と外堤の検出
	第2000[川合大塚山古墳第4〜6次調査概要][平成11年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料]			外濠・外堤・外周濠の検出
	第2014[高山3号墳(高山塚3号古墳)の調査][2011-2013年度埋蔵文化財発掘調査報告書]			立券調査出土埴輪の報告
	第2021[円周埴輪に描かれていた船の絵画資料について(大塚山古墳出土)]	[河合町の文化財展22]		埴輪の報告
	村瀬隆2014[川合大塚山古墳表塚埴輪の検出][関西大学博物館紀要]第20号			表塚埴輪の報告
法隆寺下層	—	(IV期古墳)		
	第2002[古墳時代の土器][法隆寺考古資料目録]			埴輪の報告

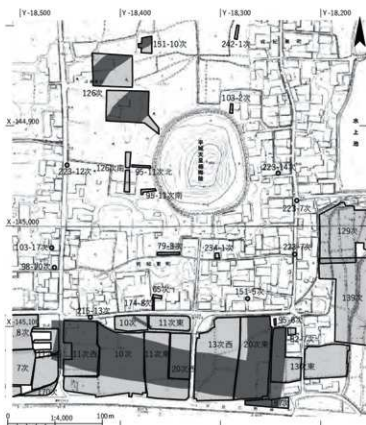
1 市庭古墳（平城第10・11・20・126次調査ほか 平城宮内裏北外郭）

（1）発掘調査の経緯と概要

1962年から1963年にかけて、第二次大極殿の北側、平城宮跡の北端を東西に横切る通称一条通り沿いで発掘調査をすすめていたところ、巨大な前方後円墳の前方部周濠が見つかった。伝平城天皇陵を後円部とする墳長200m超の王陵級古墳が認識され、市庭古墳と命名された。市庭古墳にかかわる発掘調査は多くの回数にわたり、ここではそれらの発掘調査成果を整理して墳丘復元を試みた、岸本直文の見解〔岸本1995〕にしたがって簡単に紹介しておきたい（第24図）。

市庭古墳は奈良山丘陵から派生する中央丘陵上に位置し、軸をほぼ南北方向（北で12°東へ振る）にとる、墳長253mの前方後円墳である。盾形の周濠をもち、外堤と外周溝をそなえる。外堤は地山削り出しでつくられ、部分的に褐色粘質土を盛る。上面幅は24m程度で、内側斜面（周濠外斜面）には葦石がみられ、外側斜面（外周溝内斜面）に葦石はない。外周溝は素掘りで、幅18m。外堤上面から測ると、周濠の深さは4.1m、外周溝の深さは70cmである。市庭古墳がのる中央丘陵はただしくは北西から南東へ伸び、その地形を反映して、周濠底の標高は、後円部北西側と前方部南側との間で約2mの比高差がある。周濠の底には30～50cmの濠内堆積土があり、それより上の厚さ3m以上におよぶ土層は平城宮造営時の埋立土である。断面観察によれば、墳丘を切り崩して埋めたようである。

外堤内側には埴輪列がみられ、5個体の底部を原位置で検出した（第25図）。埴輪の芯々間距離は1.4



第24図 市庭古墳の発掘調査

m間隔で、1個体ずつに据付掘方をもつ。据付掘方は褐色粘質土上から掘りこんでおり、埴輪は一条目突帯付近まで埋めていたようである。内側埴輪列の位置は、周濠の肩から約4mの位置にある。なお、内側埴輪列を検出した付近では外堤はほとんど削平されていないと判断できるものの、外堤外側埴輪列は検出できていない。

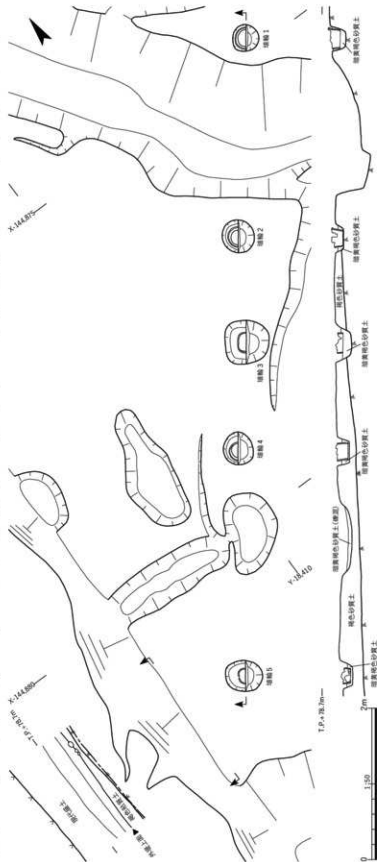
墳丘にかんする情報はほとんどない。しかし、外堤と墳丘一段目平坦面との標高が一致していると仮定すれば、墳丘一段目は地山削り出しで、それより上部の墳丘は盛土によって形成されていると考えられる。

(2) 埴輪の概要

埴輪はコンテナ10箱ほど出土しており(第26図、図版38-41)、円筒埴輪の底部8点(1-6・8-9)、口径を復元できる口縁部1点(15)がもっとも良好な資料である。あとは破片で、底部高がわかる破片5点(7-10-13)、口縁部の破片4点(16-19)、突帯間隔が判明する破片1点のほか(20)、朝顔形埴輪の破片も少量認められる。形象埴輪はごく少量で、家形埴輪、円形埴輪、蓋形埴輪、盾形埴輪、動物埴輪(四脚)など、いずれも小片である。

円筒埴輪 胎土ないし焼成をもとに3つに区分できる。ひとつは褐色ないし橙色を呈し、外面にわずかに黒斑が付着する一群で、多数を占める。黒斑の付着にこわえて器壁の芯が黒色をなし、焼成は不良。外堤内側埴輪列の5個体(1-5)はすべてこれに該当する。2つめは灰褐色で焼きがあまく、外面にわずかに黒斑が付着するもの。7のみで、後門部側の周濠から出土した¹⁾。さいごの3つめは、灰白色を呈する硬質の一群。外面にわずかに黒斑が付着する。8と9、15が該当し、前方部側の周濠から出土した²⁾。これら3つとも、わずかだが黒斑が付着するので、野焼き焼成と判断してよい。

これらの埴輪はそれぞれに異なる雰囲気をもつ。神明野古墳や方墳SX7800の例をあげるまでもな



第25図 外堤内側埴輪列の遺構図・断面図

く、平城宮造営時には複数の中小型古墳が墳丘を削平されて周濠を埋め立てられており、市庭古墳周辺にもそうした古墳が存在したはずであり、混入の可能性は否定できない。そうであれば厳密には、市庭古墳の埴輪といえるのは外堤内側埴輪列の5個体(1-5)と周濠下層の埴輪土から出土した埴輪(7-9)だけだが、あえて混入とみるほどの状況でもないので市庭古墳に樹立していた埴輪とみなしてよからう。

ただし、周濠埋立土出土の埴輪のなかで、従来、混入品と説明されてきた埴輪がある。橙褐色の硬質で密窯焼成品と思われる、20³¹である。「無黒斑からみて密窯焼成であり、市庭古墳にともなうとは考えられない」(『平城宮北辺報告』p.12)との記述がそれだ。しかし、埋立土の状況が墳丘を切り崩して形成されたと観察されるように³¹、埋立土の由来が市庭古墳の埴輪盛土が主体であるならば、埋立土出土の埴輪もまた市庭古墳に樹立していたものと考えるのが自然だろう。市庭古墳の埴輪は野焼き焼成品のなかにながながながも密窯焼成品が混じる構成だったと思われる。なお、焼成良好で硬質な埴輪片はほかにもう2点ある³¹。

具体的に、褐色の一群に含まれる外堤内側埴輪列の底部資料をみてみよう(図版38-41)。1はうすらと黒斑がみえる(第25図・埴輪1)。外面は二次ヨコハケ調整で、内面ナデ調整。突帯の剥離面に突帯間隔設定の凹線状痕跡を確認できる。基部の高さは4.7~5.7cmで、粘土紐2本分の高さをもつ。底径22.4cm、底部高14.4cm。2はわずかに黒斑が付着する(第25図・埴輪2)。外面調整は一次タテハケ調整で、二次ヨコハケ調整をかすかに視認できる。内面はナデ調整。基部の高さは3.9~4.4cm。底径19.6cm、底部高14.5cm。3は黒斑がみられないものの、接合しないが同一個体と思われる黒斑付着の破片がある(第25図・埴輪3)。やや歪んでおり、底径は長径23.0cm、短径20.4cm。残存高10.0cm。4は縦方向の帯状に黒斑が付着する(第25図・埴輪4)。内面はナデ調整で、粘土紐の接合痕が明瞭にのこる。その観察によれば、基部の高さは3.3cm、それより上部の粘土紐の幅が2.5~3.0cmなので、基部は太めの粘土紐でつくったようである。底端部の一部がおおきく内側に歪む。突帯上辺に突帯間隔設定の工具による擦痕がみられる。底径22.2cm、底部高16.4cm。接合しないが、円形透かし孔をもつ破片がある。5は黒斑が認められない(第25図・埴輪5)。器壁が摩滅しており、外面調整は不明。内面はナデ調整。底端部の一部がおおきく内側に歪む。底径20.0cm。底部高13.3cm。6は広範囲に黒斑が認められる(灰黄褐色粘質土から出土)。外面はタテハケ調整、内面はナデ調整。おおきく歪み、底径は長径22.0cm、短径20.0cm。残存高12.5cm。

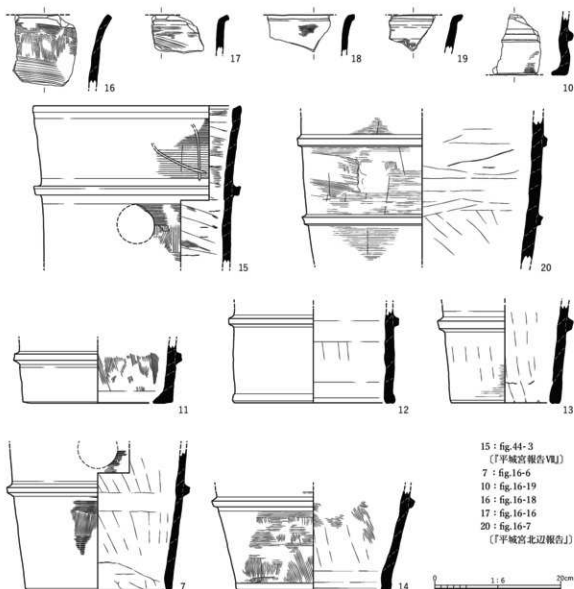
7は外面灰褐色で、黒斑が付着する(第26図7)。内面は褐色。2段目に円形透かし孔をもつ。外面は右上がりの一次タテハケ調整の後に、二次ヨコハケ調整をおこなう。B種ヨコハケ調整の静止痕は不明瞭である。内面はナデ調整。基部の高さは4.2cm。復元底径23.2cm、底部高16.6cm。

灰白色硬質の一群では、8は2段目下半までをのこす資料。2段目に円形透かし孔を対向する位置にあける。透かし孔の下端に段差がみられ、穿孔時の始点(終点)がわかる。突帯の剥離箇所には、突帯設定技法のための凹線を観察できる。底端部は内外に歪み、底面には下に敷いた枝の圧痕が全面に認められる。外面調整は一次タテハケ調整の後に、二次B種ヨコハケ調整をおこなう。静止痕はかすかに垂直に観察できるが、底部のB種ヨコハケは2周して充足する。B種ヨコハケの幅から推測する工具幅は7.1cm程度。内面はナデ調整。黒斑の付着は一箇所のみで、縦方向帯状につく。赤色顔料が部分的にのこり、1段目と2段目の広範囲に認められるので、全面に塗布していたのだろう。底部外面には

細く鋭利な工具による、細かな傷が多数みられる。底径 20.6cm、底部高 13.4cm。9も2段目に円形透かし孔を対向してあける。縦方向帯状の黒斑が対向位置に認められる。外面調整は一次タテハケ調整の後に二次B種ヨコハケ調整をおこなう。B種ヨコハケ調整は底端部までおよんでおり、1周で充足しているようにみえる。静止痕は総じて不明瞭だが、斜めに傾く静止痕を確認できる箇所もあり、Bd種ヨコハケのようでもある。内面調整はタテハケ調整。底面はほとんど歪まず、底面にはわずかに枝の圧痕が認められる。基部成形はR接合。底径 22.8cm、底部高 13.0cm。

このほか、底部高が判明する破片が5点ある。底部高を列記しておけば、6.6cm (10)、7.7cm (11)、13.3cm (13)、13.5cm (12)、15.0cm (14)となる。

つづいて口縁部をみると、もっとも良好なのがへら記号をもつ15であり(第26図15)、8と9に似た灰白色の胎土である。口縁端部付近に横方向に、上から2段目に縦方向に黒斑が付着する。口縁部は



第26図 市庭古墳の円筒埴輪

15 : fig.44-3
 [『平城宮報告VII』]
 7 : fig.16-6
 10 : fig.16-19
 16 : fig.16-18
 17 : fig.16-16
 20 : fig.16-7
 [『平城宮北辺報告』]

直立し、内傾する端をもつ。上から2段目、ヘラ記号の左下に円形透かし孔をあける。透かし孔の右上から鋭利な工具で時計回転に穿孔したことが、透かし孔右上にのこる段差からわかる。外面調整は一次タテハケ調整の後に、二次ヨコハケ調整をおこなう。二次ヨコハケ調整の静止痕は認められないが、突帯間を1回で充足する。内面はハケ調整。復元口径32.5cm、口縁部高12.6cm。このほか、口縁部片は4点確認できる。端部の形態だけを記しておけば、やや外反して単純におさめる形態の1点(有黒斑)をのぞけば(第26図16)、ほかの3点は端部を屈曲させるものである(第26図17-19)。口縁部高がわかる資料はないが、残存高から見ると、口縁部高は前者が12cm以上、後者は6cm以上となる。

橙褐色硬質の20は、復元口径34.0cmで突帯間隔は12.3cm(第26図20)。外面調整はBb種ヨコハケ調整。条線が浅いが静止痕は複数認められ、複数周で突帯間を充足する。内面はヨコナデ調整。

朝顔形埴輪は5点程度の破片しかない。21は朝顔形埴輪の頸部。褐色で、縦方向帯状に黒斑が付着する。22は口縁部。黒斑が付着する⁶⁾。

(3) 円筒埴輪の復元と規格

円筒埴輪の全形を復元する手がかりは少ない。底部と口縁部の情報にほぼ限られ、段構成や透かし孔配置も定かではない。それでもなお、全形の復元を試みておこう。

底径は19.5～23.0cmにおさまり、おおきな差はなく、22cm程度とみておける。底部高にはいくつかの傾向があり(第4図)、7cm前後の低位の一群(10・11)、14cm前後の中位の一群(1・2・5・8・9・12・14)、16.5cmの高位の一群(4・7)である。これらの傾向は胎土と焼成との相関性もみられないが、中位の一群が多数を占めるようであり、なかでも底部高13.5cm程度の個体が多い。そのなかには、灰白色胎土の8と9も含まれる。

口縁部は灰白色胎土の15を参考にするほかに、口径32.5cm、口縁部高12.6cmという数値を得られる。突帯間隔については、20を参考とすることには不安のこるが、12.6cmという数値が妥当であれば、先にみた底部高よりも低く、口縁部高と一致する。なお、判明している透かし孔の形態は、すべて円形である。

以上のように、主体を占めそうな各部位の数値をもとに、あるいは灰白色胎土の8、9、15をもとにして、底径と口径の数値がコナベ古墳のそれと近似する事実を考慮すれば、4条5段構成の円筒埴輪に復元しておくのが穏当だろう。突帯間隔と口縁部高がほぼ一致し、底部高がそれよりも高い形態が主体となり、そのなかでも底部高が14cm程度の中位の一群が多いと推測しておく。底部高が16.5cmと高い一群も一定程度存在する状況は、前代のコナベ古墳との関係を想起させる。いっぽうで、底部高が著しく低い一群も存在する点は、詳細不明ながらも、気になるところではある。

(4) 埴輪の時期

市庭古墳の埴輪は、底部高が突帯間隔よりも高く、口縁部高も伸長化した形態を基本とすることがわかった。ただし、底部高が14cm程度の中位の一群が多いものの、底部高が16.5cmと高い一群も一定程度存在し、底部高が10cm未満となる低い一群も存在するといった具合に、その規格には多様性があることも判明した。底部高が16.5cmと高い一群はコナベ古墳との近似性を思わせるが、その割合が減少している点を時期差として理解する見方も成り立つ。あわせて、底部高が10cm未満の低い一群は、コナベ古墳にはみられない新しい傾向とみたいところだが、つづくウワナベ古墳ではみられず、さらに

時期がくだるヒシヤゲ古墳をまたねばならないので、安易に新しい要素とみることに躊躇をおぼえる。

こうした規格にみる多様な状況は、胎土や焼成でも同じだ。褐色あるいは灰褐色で黒斑をもつ埴輪にくわえて、硬質な埴輪が含まれ、黒斑の付着もわずかな個体がみられる。野焼き焼成と密窯焼成との岐別がむづかしい場合もあるが、密窯焼成品も含む可能性があろう。

こうした様相とともに、ウワナベ古墳の埴輪に特徴的な口縁部高が狭い個体を確認できないので、コナベ古墳とウワナベ古墳の間の時期に位置づける、Ⅲ期新相と判断できる。

(和田)

註

- 1) 取り上げ名は、「第126次6AFV JI23 外堤堀転石間19801008」である。
- 2) 取り上げ名は、「第11次6ABB D地区中央堀内19630422」と「第11次6ABB EQ22 池底19630308」である。
- 3) 取り上げ名は、「第126次6AFV KB30 灰色粘質土19800804」である。
- 4) 周濠の掘り下げ自体が限定的ではあるが、周濠埋立土から出土した埴輪の量が少ない点は気になる。
- 5) 1点は円蹄埴輪の口縁部片(第26図、図版41-19)。取り上げ名は「第126次6AFV JA14 黄褐粘土19800912」で、平城宮造営時の埋立土の出土。もう1点は朝顔形埴輪の口縁部片で(図版41-23)、取り上げ名は「第10次6AAO RN77 濠底19620915」で周濠最下層出土である。
- 6) 既往の報告で示した埴輪の挿図番号〔『平城宮報告VI』p.1106g.44、『平城宮北辺報告』p.126g.16〕との対応関係を示しておく。

- 1 : fig.16-3, 2 : fig.16-4, 4 : fig.16-2, 6 : fig.16-5, 7 : fig.16-6, 10 : fig.16-19, 16 : fig.16-18,
 17 : fig.16-16, 20 : fig.16-7, 21 : fig.16-1, 22 : fig.17-14 (以上、『平城宮北辺報告』)。
 8 : fig.44-4, 9 : fig.44-5, 15 : fig.44-3 (以上、『平城宮報告VI』)。

引用・参考文献

- 岸本直文 1995 「市庭古墳の復元」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所
 奈良国立文化財研究所 1976 「平城宮発掘調査報告Ⅵ」
 奈良国立文化財研究所 1981 「平城宮北辺地域発掘調査報告書」
 奈良国立文化財研究所 1984 「平城宮北方地域の調査(1) 第151-10次」『昭和58年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
 奈良国立文化財研究所 1991 「平城宮跡発掘調査報告XⅢ」
 奈良国立文化財研究所 1994 「平城宮北方(市庭古墳北辺部)の調査-第242-1次」『1993年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

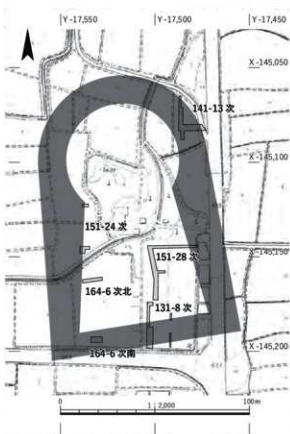
2 木取山古墳（平城第131-8・151-24次調査ほか 平城京左京一条二・三坊）

（1）発掘調査の経緯と概要

木取山古墳はコナベ古墳のすぐ南に位置する前方後円墳。1981年度に実施した平城第131-8次調査ではじめて周濠（前方部前面）を検出し、後円部にあたる場所にある高まりや周辺の遺存地割などを参考とすることで、古墳として認識した。住宅建設や共同墓地拡張等にもなる事前調査として、1980年代に6回にわたって発掘調査を実施しただけで、その後に木取山古墳で発掘をおこなっていないので情報は増えていない（第27図）。しかも、当該地はかなりの程度削平されており、水田耕作土と床土の直下が地山となり、周濠の遺存状況もよくない。古墳の存在を示すものは、周濠から出土するわずかな量の埴輪、転落した葺石程度である。

平城第131-8次調査で検出した前方部前面の周濠が、ほぼ唯一の明確な遺構といってもよい（第28図）。前方部前面の周濠は幅約12mで、深さは1mほど。ほぼ東西にのびるが、東でわずかに北に振る。周濠の内側斜面、つまり墳丘1段目斜面の葺石がわずかにのこっており、周濠からは葺石の転落石や埴輪が出土する。周濠底には暗灰色粘質土が堆積し、その上を平城京造営時にバラス混り赤褐色粘質土と黄褐色粘質土で埋め立てる。

したがって、検出した遺構から古墳の形態はおろか墳長を推測することはできない。共同墓地となっ



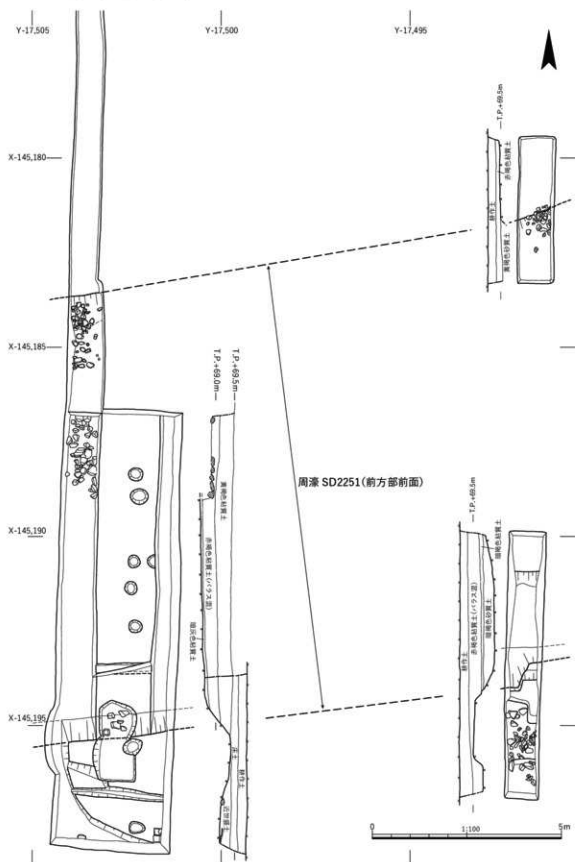
第27図 木取山古墳の発掘調査と墳丘復元図

ている高まりを後円部の墳丘とみなし、その北東の円弧を描くような道路の湾曲を後円部側周濠の遺存地割とみなすことで、墳長100m程度の前方後円墳で、主軸をほぼ南北（北でわずかに西に振る）におくものと想定している。

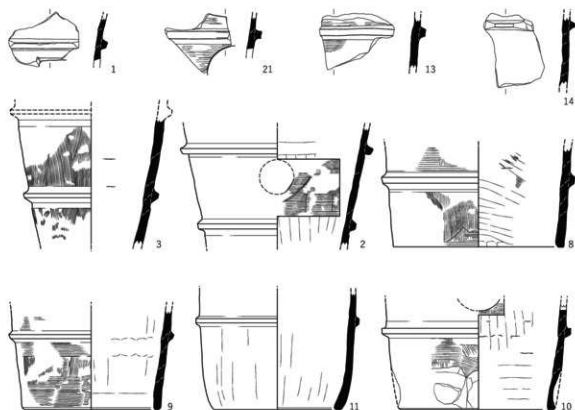
（2）埴輪の概要

コンテナ6箱程度の埴輪が出土しており、円筒埴輪と蓋形埴輪を確認できる。そのほとんどは平城第131-8次調査で出土したもので、「円筒・蓋形埴輪片は埋土上下層間から出土した」（『昭和56平城概報』p.36）との記載があるように、平城京造営時の埋立土から出土したようである。

いずれも小片で全形はうかがえない（第29図、図版46～49）。それでも、いくつかの特徴を把握できる。外面調整はB種ヨコハケ調整を基調とするが、3は突帯をはきんで上下の段ともに一次タテハケ調整のみとなる。透かし孔は円形(2)で、1点のみ方形透かし孔(1)が認められる。底部高が判明する資料は4点だけで、11.2cm(8)、



第28図 平城第131-8次調査の遺構図・断面図



1：第14図5 2：第14図2 3：第14図1 9：第14図3（昭和56平城概観）

第29図 木取山古墳の円筒埴輪

12.2cm (9)、12.8cm (10)、14.5cm (11)である。突帯間隔は11.8cm (2)。復元底径は20.1cm (11)、21.9cm (9)、24.8cm (10)、27.0cm (8)。復元胴径は22cm (3) ないし26cm程度 (2)となる。口縁部の形態は不明。

これらの埴輪は、胎土や焼成の状況から、3つの群にわけることができる。淡黄褐色で明瞭に黒斑をもつ一群 (13-15)、灰白色 (9-11・12) ないし橙褐色 (1-3) で無黒斑の一群、橙褐色で硬質な一群 (4-8・10) である。前二者は野焼き焼成と判断できるが、後二者は密窯焼成の可能性が高い。

蓋形埴輪をみると、軸受部下端突帯は幅広く低平で (18)、立ち飾りの文様構成は中央に細長い文様帯をもつ (16)。平塚1号墳例とよく似る¹⁾。

(3) 埴輪の時期

木取山古墳の埴輪は平城京造営時の周濠埋立土あるいは床土から出土したものを含むので、厳密には一括性を担保できないところもある。実際に埴輪の様相もやや多様なようにうつる。明瞭な黒斑をもつ一群に硬質な一群もくわり、野焼き焼成と密窯焼成の埴輪が共伴するような状況にある。破片資料のため全形をうかがえないのは残念だが、底部高14.5cmの個体と、12cm前後と低めのものがある。

焼成にみる共伴状況や底部高14.5cmという数値をみれば (第4図)、コナベ古墳とウワナベ古墳との間の時期、市庭古墳併行のⅢ期新相に位置づけられよう。ただし、木取山古墳の埴輪では底部高が12cm程度と低めな個体が目立つ点は、市庭古墳の埴輪の様相とは異なり、むしろウワナベ古墳の様相

に近いのかもしれない。とはいえ、ウワナベ古墳に特徴的な口縁部高が狭い埴輪は木取山古墳には認められず、Ⅲ期新相に位置づけておくのが妥当だろう。

(和田)

註

1) 既往の概要報告書『昭和56平城概報』p.37第14図)で示した埴輪の挿図番号との対応を示しておく。

1:第14図5、2:第14図2、3:第14図1、9:第14図3、16:第14図4、18:第14図6。

引用・参考文献

奈良国立文化財研究所 1982「左京一条三坊二坪－木取山古墳－の調査(第131-8次)『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

奈良国立文化財研究所 1983「左京一条二・三坊の調査(第141-2次)『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

奈良国立文化財研究所 1983「左京一条二・三坊の調査(第141-13次)『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

奈良国立文化財研究所 1984「左京一条二・三坊(木取山古墳)の調査(第151-24-28次)『昭和58年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

奈良国立文化財研究所 1986「左京一条二坊(木取山古墳)の調査(第164-6次)『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

3 神明野古墳（平成第1・6・9・73次調査ほか 平城宮第二次大極殿院地区）

(1) 発掘調査の経緯と概要

神明野古墳は、市庭古墳の南300m、奈良山丘陵からつづくなだらかな丘陵上の先端に位置し、平城宮第二次大極殿院回廊とその北側の内裏地区にまたがって所在する。したがって、平城宮の造営にともなって墳丘の全体が削平されていることにくわえて、平城宮期の遺構保存の観点から発掘調査自体も最小限にとどめられているため、全容はつかみがたい。

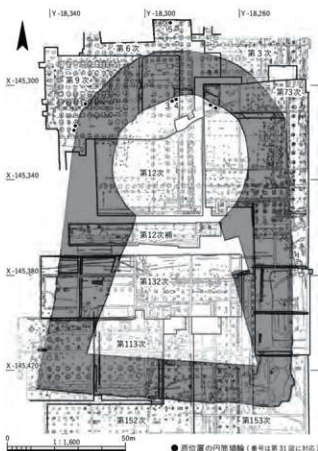
いっぽうで、第3次、第6次、第9次、第12次、第73次調査では後円部と後円部外堤、第113次、第132次、第152次、第153次調査では前方部および前方部外堤を検出している。以下、岸本直文による調査成果の整理（岸本1993）にしたがって、概要を述べる。

神明野古墳は、墳長117mに復元される前方後円墳である（第30図）。盾形周濠をもち、外堤をそなえるが、堤の数や外周濠の存在は不明である。東側のみ造出を有する。墳丘は百舌鳥古墳群の大仙陵古墳の1/4相似形とされるが、後述の通り、両者ではやや時期差があるとみられる。

墳丘1段目斜面は地山削り出しにより成形され、斜面には葺石、平坦面には埴輪が配される。葺石は、人頭大の大振りの石材を基底石とし、拳大の礫を上部に葺く。外堤内斜面も地山削り出しだが、葺石は施行されない。

後円部側で5箇所、計8本の埴輪を原位置で検出した。そのうち、墳丘1段目平坦面ではほぼ主軸上、および主軸からやや東側で計4本の円筒埴輪を確認した。それぞれ、平坦面から1m程度内側で密に配列され、布掘による掘方を有する。他方、外堤では北西部で2箇所計3本、主軸上で1本がみついている。北西部の個体は外堤肩部から60cm内側で検出し、布掘による掘方をもつ。外堤主軸上に位置する個体は、外堤肩部から12.3m離れた位置で検出した。前者は外堤内側の埴輪列、後者は外堤外側の埴輪列を構成する個体であるとみられる。

なお、墳丘と外堤内側の埴輪は標高71.5～71.6mとほぼ同じ高さで検出しており、1段目まで遺存する個体が多い。古墳造営時に底部1段目までが埋設されていたと仮定すれば、墳丘1段目平坦面と外堤



第30図 神明野古墳の発掘調査と墳丘復元図

上面までが遺存し、その上部が平城宮造営時に削平されたものと判断できる。

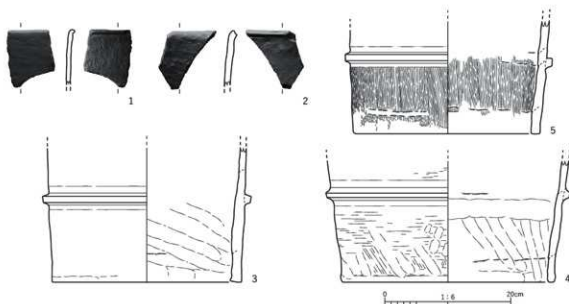
(2) 埴輪の概要

コンテナ40箱程度が出土し〔『平城宮報告XIV』p.87〕、円筒埴輪、家形埴輪、蓋形埴輪、水鳥形埴輪が含まれる(第31図、図版50・51)。ごく一部を除いて総じて焼成は良好で、密着焼成によるとみられる。浅黄色ないし橙色に発色するものが多い。すでに報告されている個体の詳細はここでは割愛し、以下では口縁部高の推定できる個体、および第6・9次調査で検出した原位置を保つ個体について新たに報告する。

1・2は、前部部前端を調査区とした第152次調査で出土した口縁部片(第31図)。1は外面タテハケ、2は外面B種ヨコハケをほどこし、口縁部を外方へややつまみ出す。口縁部から8.5cmの範囲に突帯や突帯貼りつけともなるヨコナデを確認できないことから、口縁部高は突帯間隔とほぼ同じ値であったと推定される。

3～5は、第6・9次調査で出土した原位置を保つとされる底部片(第31図、図版51)。そのうち、3と4は埴丘1段目平坦面の主軸上において2基隣接して出土した個体、5は外堤の外側埴輪列を構成するとみられる個体である(第30図)。

3は、復元底径30.0cm、底部高13.4cmを測る。外面は摩滅しており、調整は確認できない。4は、復元底径33.4cm、底部高14.1cmを測り、底部端部にいたるまで赤色顔料が塗布される。外面にはタテハケ後にヨコハケがほどこされるが、タテハケはまばらで、成形時のナデの痕跡が顕著に認められる。底端部には突帯隔設定工具の痕跡とみられる擦痕がのこされる。5は、底径29.0cm、底部高12.2cmを測る。底部最下段と内面にはタテハケをほどこし、内面のタテハケは1条目突帯の貼りつけ以後におこなわれる。突帯剥離面には突帯間隔設定線とみられる凹線が確認されるほか、突帯上辺にも設定工具下端とみられる圧痕がのこされる。2段目は完周しないため透かし孔の有無は厳密には不明だが、2段目には穿たれていなかった可能性がある。



第31図 神明野古墳の円筒埴輪

(3) 円筒埴輪の復元と規格

神明野古墳から出土した埴輪は細片が多く、全形を復元することは困難だが、わずかな手がかりにもとづいて段数構成や規格を復元してみる。

出土した個体は底径 30～35cm、口径 35～40cm を測り、4条5段のものを主体とするコナベ古墳、あるいは平塚2号墳の埴輪よりも一回り大きい。5条6段ないし6条7段であったとみておおきな誤りはなかろう。透かし孔配置については、確実に2段目に穿つものが現状存在しない点を考慮すれば、3段目以上に穿たれていたと推測され、遺存状態のもっとも良好な『平城宮報告XIV』PL.79-125にもとづけば連段穿孔であった可能性もある。中期の4条5段以上の個体で連段穿孔がなされる円筒埴輪は少ないが、室宮山古墳や川合大塚山古墳などの資料が類例としてあげられる。小孔も含めればウワナベ古墳の埴輪も類例にはくえられるが、やや異なる原則をもつものとしてみるのがよいだろう。なお、神明野古墳では未報告の個体を含めて19個体で透かし孔が確認されるが、形状はすべて円形である。

つづいて規格をみると、底部高は12～14cm、突帯間隔は11～13cmを測る。両者の組み合わせは不明であるものの、全体としては底部高>突帯間隔の規格をなしていたとみてよい。口縁部高は12～13cmを測り、突帯間隔と同値になるものと、5cm程度で突帯間隔よりも極端に短いものが存在するが、後者に分類されるものは1点(『平城宮報告XIV』:PL.79-131)のみである。既報告において口縁部高の短い個体として図上復元されている『平城宮報告XIV』PL.79-126については、破片同士の色調や調整の相違から判断して、口縁部高は突帯間隔と近似した値を示す可能性が高い。

以上、断片的な資料にもとづいて推論したが、当古墳の円筒埴輪は、現状では普通口縁を主体とする5条6段ないし6条7段で、底部高>突帯間隔=口縁部高の形態に復元される。連続する段に円形透かし孔を穿つものが一定数存在していたものとみられる。

(4) 埴輪の時期

上述の特徴にくわえて、外面にBb種ヨコハケ、あるいはBc種ヨコハケに分類しうるヨコハケをほどこす。外面調整や各部の数値、底部高>突帯間隔に復元される規格、密着焼成である点を考慮すれば、ウワナベ古墳併行期に位置づけるのが素直であろう。なお、墳丘平坦面而出土した3と4は底部高13～14cm、外堤で検出した5は底部高12cm程度と現状ではやや高低があるようにも見えるが、優位な差であるかは不明である。

ところで、神明野古墳の時期的位置づけをめぐるのは、ウワナベ古墳の直前に位置づけたいやうで低い口縁部高をもつ資料を介して、「ウワナベ古墳系列」が出現したという理解もある(村瀬2023)。ただし、ウワナベ古墳の直前に位置づけられる市庭古墳や木取山古墳の埴輪では、野焼きと目される個体を確実に含んでおり、神明野古墳を当該期に位置づけることには躊躇を覚える。上記の時期的位置づけは、佐紀古墳群の埴輪をすべて一系統的にみる理解に立脚したものとイえるが、資料の各部属性からすればウワナベ古墳と同時期における系統的な差異として捉えるのが穏当ではなかろうか。

以上から、神明野古墳についてはウワナベ古墳と同時期とみなし、円筒埴輪の差異については共時的に併存する大型古墳と中型古墳の生産体制差と理解しておきたい。なお、当古墳では、断続ナデ技法により突帯を貼りつけ、外面にナナメハケをほどこす個体(『平城宮報告XIV』:PL.79-130)が存在するが、これらはV期に位置づけられるものであって混入品と考えられる。(木村理)

引用・参考文献

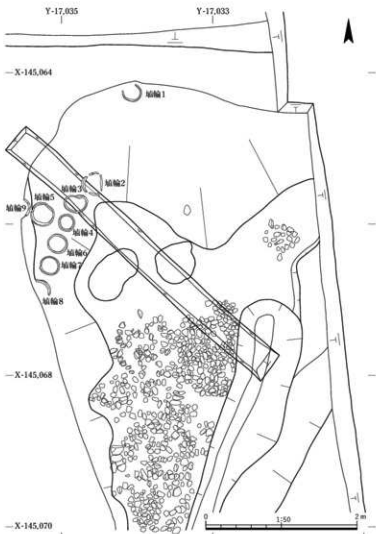
- 岸本直文 1993「神明野古墳」『平城宮発掘調査報告XIV』奈良国立文化財研究所
奈良国立文化財研究所 1961「平城宮跡・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告」
奈良国立文化財研究所 1963「平城宮発掘調査報告III」
奈良国立文化財研究所 1991「平城宮発掘調査報告XIII」
奈良国立文化財研究所 1993「平城宮発掘調査報告XIV」
村瀬 陸 2023「ウワナベ古墳併行期の植輪生産とその規格」『植輪論叢』第12号 植輪検討会

4 平塚1号墳（平城第55次調査 平城京左京一条三坊）

（1）発掘調査の経緯と概要

1967年度の発掘調査によって平城宮が東方に張り出す形状となることが判明したため、国道24号線バイパスがこれを迂回する新路線へと計画が変更された。その結果、新路線はウナベ古墳の東内堤¹⁾を通過することとなり、その事前調査（平城第55次調査）においてウナベ古墳の南東側で発見されたのが平塚1号墳である。平塚1号墳は平塚2号墳とならんで検出され、東西方向に主軸をもつ帆立貝式前方後円墳である。墳長70m。前方部長は約18mで、後円部は直径50m程度に復元でき、前方部が後円部径の2分の1を下回る。

前方部からくびれ部、そして後円部の一部が調査区にかかる。周濠と1段目下半斜面の葺石を検出し、北側くびれ部では1段目平坦面とそこに樹立する埴輪列を確認した。周濠の幅は15～22mで、残存す



第32図 墳丘1段目平坦面埴輪列の選擧図

る深さは50cm程度。周濠底には黒灰色粘土ないし灰褐色砂土が約30cm堆積し、その上を平城京造営時の埋め立て土がおおう。葺石は30度前後の傾斜角で葺き、一辺約25cmの大きめの石を基石に据えて、その上方は小さめの河原石を小口積みにして葺く。1.2～1.5m間隔で仕切り石の列がみられ、その間を埋めるようにして葺いた様子がわかる。墳丘1段目は地山を削り出してつくり、一部に40～50cmほどの盛土がみられ、墳丘2段目はすべて盛土による。1段目平坦面の標高は74.0m付近で、ウナベ古墳の内堤上面のそれに近い。1段目平坦面の埴輪列は、後円部をめぐる7個体と、これにとりつく前方部側の2個体を検出した（第32図）。後円部の埴輪列は円形に閉じ、前方部へと連続するものではない。この埴輪列の東側には一段高く後円部の墳丘が残存しているので、後円部が

2段築成、前方部が1段築成となろう。

(2) 埴輪の概要

比較的良好な資料を抽出すると、円筒埴輪はコンテナ8箱、形象埴輪はコンテナ18箱程度となる。従来、円筒埴輪2点と朝顔形埴輪1点のほか、家形埴輪、蓋形埴輪、水鳥形埴輪、馬形埴輪が知られており〔平城宮報告VI〕;PL.107-108〕、今回の再整理で新たに判明した器種はないが、点数が大幅に増えた(図版52-53)。

とくに、原位置をとどめる円筒埴輪の底部を新たに4点確認し(図版53-1~4)、底部高を把握できるので、円筒埴輪の時期と規格を検討できるようになった。これらは褐色の胎土が多い。1は底径24.8cmとやや大きく、底部高は13.9cm(第32図・埴輪5)。いずれも外面調整はBb種ヨコハケ調整で、外面に黒斑が付着する。2は底径22.0cmで、底部の外面調整は一次タテハケ調整のみ(第32図・埴輪9)。3は底径21.5cm、底部高13.4cm。底部の外面調整はB種ヨコハケ調整だが、静止痕は不明瞭で、突帯間を充足しきれていない。4は底径21.5cm、底部高13.1cm(第32図・埴輪7)。突帯間隔は11.5cmである²⁾。外面調整は一次タテハケ調整の後に、静止痕が不明瞭だが、B種ヨコハケ調整をほどこす。刷毛工具の幅は9.5cm程度で、1周で充足するようである。この工具幅は突帯間隔の幅にはうまく合致するが、底部(底部高)は突帯間隔よりも幅広いので、基部付近にはB種ヨコハケがおよばない。

従来から知られている個体は〔平城宮報告VI〕;PL.107-60〕、4条5段に復元しているが、下半3段と上半2段とは直接接合しない³⁾。下半部は、下から3段目に2孔一對の円形透かし孔を対面方向にあげる。底径22.2cm、底部高13.6cm、突帯間隔11.8cm。これと一緒に出土した3点の口縁部をみると〔平城宮報告VI〕;PL.107-60-61〕、上から2段目に円形透かし孔をもち、口縁部は屈曲する形態ないし外反する形態をなす。口径は32.4cm・33.0cm・35.0cmで、口縁部高は11.7cmないし12.2cmとなる。いずれも外面調整はBb種ヨコハケ調整で、外面に黒斑が付着する。

形象埴輪では、水鳥形埴輪の頭部を7点確認できたことも重要だ。全容は不明ながらも、多くの水鳥形埴輪を配置した状況が判明した。数量だけでいえば、菅田御嶺山古墳や池田古墳につぐ多さとなろう。また、馬形埴輪の脚部が4点みられ、出土地点も近いが、同一個体かは不明。蹄底面の直径は10.5cmとやや大振りで、粘土紐を積み上げて製作する。粘土紐の接合箇所を脚部の後ろ側とし、あるいは軽くつまみだすことで、横断面形が倒卵形となるように形づくる。球節を表現したのだろうか。表現の違いとして、脚部の後ろ側に縦方向に粘土紐を薄く貼りつけるものがある。蹄は強くナデつけることで蹄冠を表現する。このほか、輪鏝を表現する障泥の破片が2点、尻繫の破片が1点認められる。

蓋形埴輪は、従来から知られているように、立ち飾りに透かし孔をもつものともたないものがあり、笠部は肋木を付す個体があるほか、笠部下半の線刻は2条一組で互い違いにほどこす通有の形態である。

(3) 円筒埴輪の復元と規格

平塚1号墳の円筒埴輪は、底径22cm、口径33cm程度の、上にむかってやや開く形態となる。3段目と上から2段目に円形透かし孔をあけるが、4条5段なのか3条4段なのか、判断がむずかしい。底径と口径の数値をみると、コナベ古墳の4条5段の円筒埴輪よりもわずかに小さく〔第2表、宮2011〕、赤井谷1号横穴の3条4段のそれと同規模のようだが〔加藤2012p.5〕、その差はわずかだ。

透かし穴の配置をみると、コナベ古墳の4条5段の円筒埴輪では2段目と4段目に縦列ないし直交し

てあけるのが通有である。いっぽうの赤井谷1号墳の3条4段の円筒埴輪では、3段目のみ、あるいは2段目と3段目に直交するようにあける。平塚1号墳の円筒埴輪は3段目と上から2段目に円形透かし孔をあけるので、3条4段であれば3段目のみに円形透かし孔を配置し、4条5段であれば3段目と4段目に透かし孔を配置する形態となる。4条5段の場合、透かし孔の配置がやや異質であり、コナベ古墳にも3段目に透かし孔を配置する例がわずかにみられるが〔宮2011,p.75第25図36〕、全形を把握できないのが惜しい。

平塚1号墳の円筒埴輪は、4条5段の可能性もあるが、赤井谷1号横穴の事例と同様に、3条4段で3段目に2孔一対の円形透かし孔を配置する形態とみておくのがよいのかもしれない。そうであれば、器高50～55cmになろう。なお、底径が大きめの個体もあるので(1)、3条4段とともに4条5段の円筒埴輪も樹立していた可能性がある。

(4) 埴輪の時期

平塚1号墳の円筒埴輪は、いずれも有黒斑で、突帯間隔よりも底部高が高い形態を基本とする。口縁部は伸長化し、底部高は13～14cmである。こうした形態的な特徴と底部高の数値をみると(第4図)、迷いなくⅢ期と判断できる。くわえて、コナベ古墳とのあいだに同じハケメパターンがみられるので(第42図)、Ⅲ期古相に位置づけられる。

(和田)

註

- 1) 当時は外堤と認識されていた。きわめて困難な状況下における判断を尊重こそすれ、断じて批判などきようはずもないが、周濠や外堤といった古墳の付帯施設にたいする評価が低かった当時の雰囲気を感じとれようか。
- 2) 写真撮影後に、追加で破片が接合した。
- 3) 実測図と写真では組み合わせが異なる。石膏で復元した写真での組み合わせは、ハケメパターンが異なるため、別個体であることが確実である。同じ地点・層位で取り上げた円筒埴輪には、口縁部3点(上半2段分ないし3段分)と底部1点がある。

引用・参考文献

- 加藤一郎 2012「赤井谷1号横穴の埴輪とコナベ古墳の埴輪—古墳時代中期開始の画期および共通するハケメもつ埴輪について—」『埴輪研究会誌』第16号 埴輪研究会
- 奈良国立文化財研究所 1975『平城宮発掘調査報告VI』

5 平塚2号墳 (平城第56次・56次補足・66次調査 平城京左京一条三坊)

(1) 発掘調査の経緯と概要

平塚2号墳は、国道24号線バイパスが平城宮跡を迂回する新路線へと計画が変更されたことを受けて実施した平城第56次調査で、平塚1号墳とならんで検出された。墳長70mの前方後円墳。

前方部の一部が調査区にかかり、周濠と1段目下半斜面の葺石を検出した。ただし、遺存状況はよくなく、前方部の北側と西側で確認できたのみで、南側は完全に削平されており、痕跡をとどめない。周濠の幅は10mほどで、残存する深さは1m程度。周濠底には黒灰色粘土ないし褐色粗砂が約20cm堆積し、その上を平城京造営時の埋め立て土がおおう。葺石は30度弱の傾斜角で葺き、一辺約25cmの大きめの石を基底石に据えて、その上方は小さめの河原石を小口積みにして葺く。1～2m間隔で仕切り石の列がみられ、その間を埋めるようにして葺いており、こうした葺石の構築技術は平塚1号墳とよく似る。墳丘1段目は地山を削り出してつくるようである。

なお、国道24号線バイパスの東側、不退寺の西側で実施した平城第62-10次調査で、後円部北東側の周濠と思われる落ち込みを検出した(第33図)。小規模調査ではあるが、これによって平塚2号墳の墳長を一定の確度で推定できる。

ウワナベ古墳、平塚1号墳、平塚2号墳は、北から南へむけてわずかに低くなる傾斜地に築造されている。ウワナベ古墳の墳丘1段目平坦面の標高は75.0m付近で内堤上面の標高が74.0m付近¹⁾、平塚1号墳の墳丘1段目平坦面のそれは74.0m付近²⁾、平塚1号墳と平塚2号墳間の外堤上面の標高は72.0m付近³⁾となる。墳墓の標高を基底石のそれとみると、ウワナベ古墳では70.0m付近、平塚1号墳では72.2m付近、平塚2号墳で71.0m付近。

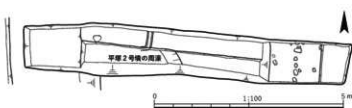
(2) 埴輪の概要

コンテナ8箱分の良好な資料を抽出できる。底部が完存する円筒埴輪2個体をのぞけば、いずれも破片である。焼成具合をみると、無黒斑で、硬質な一群や須恵質とみなせそうな朝顔形埴輪などもある(図版54・55)。

円筒埴輪からみておくと、1は白色の胎土で、底部から3段目下半までのこす。底径19.2cmで、3段目に円形透かし孔を対向位置にあげる。2段目に透かし孔はない。底部高13.5cm、2段目の突帯間隔12.5cmとなり、底部高がわずかに高い。基部は2枚の粘土板を貼りあわせてつくる。外面調整はBc種ヨコハケ調整だが、工具幅は9.0cmで、底部と2段目ともに突帯間隔を1周で充足できていない



1. 平城第62-10次調査の位置図



2. 平城第62-10次調査の遺構図

第33図 平城第62-10次調査の遺構図・断面図

ようである。内面はナデ調整。2も白色の胎土で、口縁部にむかってややひろがる形態となる。2段目に円形透かし孔を対向位置にあげ、3段目の直交位置には透かし孔はみられない。底部は歪み、長径18.5cm、短径16.0cm。底部高13.5cm、2段目の突帯間隔9.8cmで、底部高のほうが高い。外面調整は粗雑なヨコハケ調整で、静止痕は確認できず、底部のそれは器壁から工具を離しながらおこなったもの。内面はナデ調整。底面にごくわずかに黒斑がつく⁴¹。このほかに底部高のわかる破片が3点あり、計測値を列記すると、橙褐色の13.3cm、灰褐色の13.3cmと13.5cm(3)。このうち、灰褐色の個体のひとつは底端部外面をヨコナデ調整する。

4～6は橙褐色で硬質な一群。4と5は円筒埴輪の口縁部で、端部を短く屈曲させる。7は黒斑が付着する破片⁴²。混入品だろう。

このほかに、ウワナベ古墳との関連を想起させる興味深い資料がある。8は貼付口縁の破片で、口縁部高5.8cmと狭いもの。外面に赤色顔料を塗布。9は近接突帯の朝顔形埴輪の破片。近接突帯の間隔は5.2cm。白色の胎土で、外面に赤色顔料を塗布する⁴³。これらは、ウワナベ古墳の埴丘および内堤の埴輪と酷似する。出土地点は、北寄りの前方部前面の周濠ないし周濠上にあたる。

黄白色で、鱗を貼りつけ、幅広の突帯をもつ一群もある。10は直径の大きな胴部の破片で、幅3cmほどの幅広の突帯をもつ。小さな三角形透かし孔をあげ、突帯を切除して鱗を貼りつけた痕跡をとどめる⁴⁴。鱗の破片もあり、剥離面から貼付口縁につくものと判断できる。口縁部高は8cm程度と思われ、口縁部高が狭い形態となる。これらは、ウワナベ古墳の外堤の埴輪と酷似する。周濠の堆積土から出土したわけではなく、床土直下や後世の小さな土坑から出土したもののだが、出土位置は南寄りの前方部前面の周濠上にあたる。

形象埴輪は、家形埴輪、蓋形埴輪、盾形埴輪、甲冑形埴輪、靱形埴輪、水鳥形埴輪、馬形埴輪、猪形埴輪の各種が認められる。新たに接合した破片や未報告資料もあまりないので、全点をあらためて報告することは控える。笠部縁を垂下する形態の蓋形埴輪は、ウワナベ古墳との関連を示す。このほか、水鳥形埴輪では、頸を水平に伸ばしたような姿をとる造形は平塚1号埴例と似ており、連続性を示しているようか。

(3) 円筒埴輪の復元と規格

底径20cm程度という数値からすれば、4条5段ないし3条4段の円筒埴輪と考えられよう。4条5段であれば、2をもとにすれば、突帯間隔よりも底部高がわずかに高く、2段目と4段目に直交するように円形透かし孔をあげ、口縁部を短く屈曲させる形態となる。器高55cm程度だろうか(図版55-2)。1の透かし孔配置では、3段目と4段目に直交するように円形透かし孔をあげ、器高65cm程度となろうか(図版55-1)。ただこれでは、平塚1号埴例と同じように、透かし孔配置がやや異質となる。3条4段を想定すべきなのかもしれない。

段構成を確定できるだけの根拠はないが、いずれにせよ、突帯間隔よりも底部高がわずかに高く、短く屈曲する口縁部をもつ形態を基本とすることは確かだ。透かし孔は円形で直交配置となり、4条5段であれば、2段目と4段目に、あるいは3段目と4段目にあける。外面調整はB種ヨコハケ調整を基調とし、黒斑はみられない。

これとは別に、大型あるいは超大型の鱗付円筒埴輪も存在するが、断片的な破片しかないので、全容

を推定することができない。

(4) 埴輪の時期

上記のような円筒埴輪とすれば、B種ヨコハケ調整を基調とし黒斑がみられないので、IV期とすることに異論はないだろう。そのうえで、底部高が輪小しつつも突帯間隔よりも高い規格となるので、ウワナベ古墳併行のIV期古相とみるのが妥当である(第4図)。口縁端部が短く屈曲し、伸長化した口縁部をなす点を見ると、やや小振りながらも、神明野古墳(図版50)と同じような様相だろう。

この時期比定をさらに裏づけるのが、口縁部高が狭い円筒埴輪(8)、近接突帯をもつ朝顔形埴輪(9)、幅広の突帯をもつ超大型の鱗付円筒埴輪(10)、これらウワナベ古墳の埴輪と同じ特徴をもつ埴輪が出土していることだ。これらが確実に平塚2号墳にともなうのか、断言しづらいところもあるが、つぎのように理解できる。平塚2号墳は平塚1号墳をはさんでウワナベ古墳の南東約70mに位置しており⁸⁾、平塚1号墳の周濠にはウワナベ古墳の埴輪が混入していないので、さらに距離が離れた平塚2号墳にだけウワナベ古墳の埴輪が偶然混入するとは考えにくい。ウワナベ古墳と同じ埴輪をもつ古墳が平塚2号墳の西側に別あって、それが削平されて埴輪が混入した可能性は排除できないが、積極的にそれを認めるような状況証拠もまったくない。その可能性をあえて考えるのではなく、素直にこれらの埴輪が平塚2号墳に樹立していたものと理解しておきたい。

以上、平塚2号墳はウワナベ古墳併行のIV期古相に位置づけるべきである。円筒埴輪の外周調整、突帯間隔や底部高の数値と相対的な関係性、硬質ないし須恵質の焼成具合などの諸特徴は総合的に理解できる。形象埴輪は全貌が不明だが、断片的な状況だけを見ても矛盾するものではない。たとえば、立ち飾りをもとまわず笠部縁を垂下する形態の蓋形埴輪の存在は、ウワナベ古墳との関連性を示唆する。

平塚2号墳をウワナベ古墳に併行する時期に位置づけることは、ひるがえって、ウワナベ古墳の時期にウワナベ古墳に特徴的な円筒埴輪とは異なる形態の円筒埴輪も製作していたことを意味する。佐紀古墳群東群では、Ⅲ期とⅣ期のあいだ、コナベ古墳・市庭古墳とウワナベ古墳とのあいだに横たわる型式学的な差異が目立っていたが、わずかながらも型式学的に連続する形態の埴輪を生産しつづけていたことを示す。神明野古墳(図版50)やヤイ2号墳(図版66)にみる埴輪の状況も平塚2号墳に近いものだろう。

(和田)

註

- 1) ウワナベ古墳の内堤は地山削り出しで、墳丘1段目は地山を削り出した後に盛土をすることでつくられている。地山面の標高は74.6～75.2mであり、一連の工程で地山を削り出して墳丘1段目と内堤を整形したと予想される。
- 2) 『平城宮報告VI』をみると、p.14の次頁にある折り込みのfig.5で読みとる標高(72.3m前後)と、p.119の本文で記載するそれ(73.5-73.6m)とに齟齬がある。ここでは、発掘現場で作成した平面図(原図、野帳)を確認して標高を再算出した結果、p.119の本文記載に拠ることとした。
- 3) 円筒埴輪列を検出できていないので、外堤上面は削平されている可能性がある。なお、『平城宮報告VI』p.14の次頁にある折り込みのfig.5から算出した。

- 4) 既往の概要報告書（『平城宮報告VI』）で示した埴輪の挿図番号との対応を示しておく。
1：PL.109-87（写真）、2：PL.109-87（実測図）。
- 5) 取り上げ名は「56次6AFB HQ25 東ミゾ3砂 690910」。
- 6) 取り上げ名を記しておく。8は「56次6AFB HN28 古墳溜砂 690901」、9は「56次6AFB HQ29 褐色土上面 691015」。
- 7) 取り上げ名は「66次6AFB HI31 小穴 700519」。
- 8) ウワナベ古墳の前方部前面（南側）にも外堤がめぐっているならば、ウワナベ古墳、平塚1号墳、平塚2号墳は互いに接するような位置関係となる。

引用・参考文献

奈良国立文化財研究所 1975『平城宮発掘調査報告VI』

松下正司 1970「平塚Ⅰ・Ⅱ号古墳」『奈良県観光』第163号 奈良県観光新聞社

6 方墳 SX7800 (平城第75次調査 平城宮第一次大極殿院地区)

(1) 発掘調査の経緯と概要

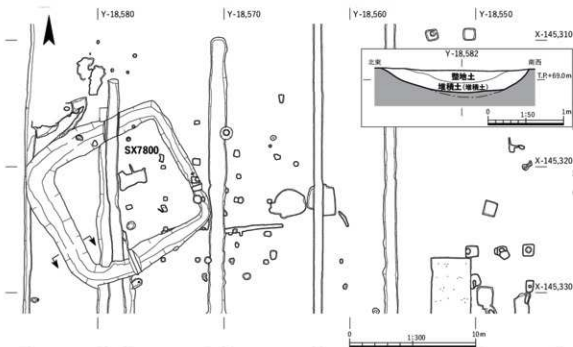
「第一次内裏」の存在を確認する目的で実施した1965年度の平城第27次調査を端緒として、第一次大極殿院では継続的に発掘調査を実施してきた。そうしたなか、平城第75次調査区の西北隅で、調査終盤の1972年5月17日に一辺9mの方墳 SX7800を検出した(第34図)。

方墳 SX7800の墳丘と埋葬施設は完全に削平されており、方形にめぐる周溝だけがのこる。古墳の主軸は北で東へおおきく振れ、これは東北が高く西南に低くなる旧地形に即している。周溝は幅2.5m、深さ30cm程度だが、場所によっては幅1m、深さ10cmしかのこらない。最下層は黒褐色土の堆積土で、植輪片を含む。その凹状に堆積した黒褐色土の上を宮造営時の整地土が覆う(『平城宮報告XI』:p.83)。

(2) 植輪の概要

7個体の植輪を復元できたほか(『平城宮報告XI』:pp.186・187)、コンテナ3箱分の植輪片と須恵器1点が出土した。復元できたのは、円筒植輪1点、朝顔形植輪2点、蓋形植輪3点、盾形植輪1点である(図版56~58)。いずれも黒斑はみられないが、わずかに円筒植輪1点(4)と家形植輪1点(13)に黒斑が認められる。胎土には白色と橙褐色の2種類がある。

1は復元口径20.3cmの小型の円筒植輪。朝顔形植輪(7)の形態も考慮すれば、2条3段と思われる。口縁部高は13.1cmと広く、直立し、口縁部の下の段に円形透かし孔をもつ。外面調整は、一次タテハケ調整の後にB種ヨコハケ調整をほどこす。わずかに確認できる静止痕は垂直で、突帯間を1周で充足しようとする。ただし、推定工具幅が8.7cm程度と狭く、口縁部上半にはB種ヨコハケがおよばない。内面調整はナデ調整を基調とし、口縁部付近のみハケ調整がみられる。2は口縁部。口縁部高



第34図 方墳 SX7800 遺構図・土層図

10.5cmで、直立する。外面調整は一次タテハケ調整後にB種ヨコハケ調整をおこなう。B種ヨコハケ調整の静止痕はほぼ垂直で、3.0～3.5cm間隔で確認できる。工具幅は8.7cm程度。内面調整はナデ調整。いずれも胎土は白色。底部は1点のみで、底部高10.0cm(3)。外面は一次タテハケ調整のみ。内面はナデ調整で、基部成形時のヨコハケ調整がわずかにのこる。胎土は橙褐色。このほか、ヘラ記号をもつ破片(5・6)が2点あるが、全貌は不明。

7は復元底径16.8cmで、肩部も扁平な、小型の朝顔形埴輪。3段目に2孔一對の円形透かし孔をもち、その脇に1条の斜線のヘラ記号を描く。底部高12.4cm、2段目突帯間隔12.8cm、3段目突帯間隔12.4cmで、各段を均等に割り付ける。外面調整は一次タテハケ調整の後にB種ヨコハケ調整をおこなう。B種ヨコハケ調整の静止痕は垂直のようだが、推定工具幅は8.0cmと狭く、突帯間を充足しきれていない。内面はナデ調整。8は朝顔形埴輪の口縁部。復元口径45.5cm。外面はハケ調整で、内面はナデ調整。7と8はいずれも白色胎土で出土地点も近いが、ハケメパターンと内面調整が異なるので、別個体と判断できる。

9は蓋形埴輪。白色胎土の立ち飾り。上辺がおおきく湾曲し、内側と外側の縁飾りがおおきく発達した形態をなす。2条の線刻で縁取り、中央に矮小化した文様帯を描く。そのなかに、長方形の透かし孔を2つあける。部分的に赤色顔料がのこる。軸部の復元径7.4cm、軸部の高さ19.0cm、笠部の直径18.0cm。10は橙褐色胎土の立飾りで、形態と文様ともに8と酷似する。破断面をみると、粘土紐を十字に交互に積み重ねていく様子を観察できる。部分的に赤色顔料がのこる。これと接合しないが、出土地点が近くて胎土の雰囲気がよく似るので、同一個体と思われる笠部の破片がある。頸部に低平な突帯をめぐらし(11)、笠部中央の突帯より下側に3条一組の線刻を2段に交互に描く。笠縁に突帯を貼りつける。

12は革盾模倣の盾形埴輪。盾面は上辺が山形に湾曲し、反りをもつ。外区と内区からなる文様構成で、2条の線刻で盾面を縁取り、外区には鋸歯文を描く。内区の文様は不明だが、盾面と同じ形状を描く。盾面の裏側には下端に横位の粘土補充がみられる。盾面の復元高67.0cm。

このほか、形象埴輪では家形埴輪の破片が2点ある。切妻造の屋根(13)と身舎(14)。

(3) 円筒埴輪の復元と規格

1～3をもとに、2条3段に復元しておくのが妥当だろう。底径17.8cm、口径20cm程度で、底部から口縁部にむかってやや開く形態。朝顔形埴輪(7)の3条目突帯の高さに円筒埴輪の器高をあわせていたとすれば、円筒埴輪は器高38cm程度となろう。3が底部高10cm、1と2によれば口縁部高10～13cmとなるが、朝顔形埴輪(7)を参考とすれば、底部高、突帯間隔、口縁部高を均等に割り付けられる形態となろうか。それぞれの数値は10～13cmである。

(4) 埴輪の時期

黒斑が付着するあるいは焼成不良な破片がわずかにあるが(4・13)、それを除けばすべて密窯焼成によるものなので、IV期の所産と判断できる。底部高が判明する資料は2点のみで、10.0cm(3)と12.4cm(7)である。第4図を参照すれば[p.17]、この底部高の数値はウナナベ古墳あるいはヒシヤゲ古墳の範囲におさまるものの、むしろ大仙陵古墳のそれに近い。10cmに満たない低い底部高の存在を確認できていないので、ウナナベ古墳に併行するIV期古相に位置づけておきたい。

なお、佐紀古墳群東群では、IV期には口縁部が狭い形態が流行するが、方墳 SX7800 の円筒埴輪は口縁部高が広めで外反する普通口縁である。ウワナベ古墳ではこうした普通口縁は認められないが、神明野古墳（図版 50）や平塚 2 号墳（図版 54）では普通口縁の円筒埴輪が共伴する。方墳 SX7800 も含めた中小規模の古墳では、王陵級古墳とは異なる埴輪生産が関与していた状況を読み取れよう。

（和田）

引用・参考文献

奈良国立文化財研究所 1982『平城宮発掘調査報告XI』

7 円墳 SX15663 と小墳群（平城第 188・238・261 次調査 平城宮東区朝堂院地区）

（1）発掘調査の経緯と概要

1984 年度から東区朝堂院の全容解明にむけた発掘調査に着手し、歴代の大嘗宮が見つかるなどおおきな成果があった。そのかわらで、その下層、神明野古墳の南 150m ほどの位置で、円墳 1 基と方墳 10 基からなる小墳群を確認した（第 35 図）。調査区外西側に古墳は展開するようで、古墳の数はおおきく増えるだろう。この小墳群は、最大規模の円墳 SX15663 で直径 20m、そのほかの方墳はすべて一辺 10m に満たない。

このうち、確実に埴輪をもつ古墳は円墳 SX15663 のみだが、付近では、平城宮造営にともなう整地土から埴輪の破片が出土するので、埴輪を樹立する古墳はほかにもあったのだろう。

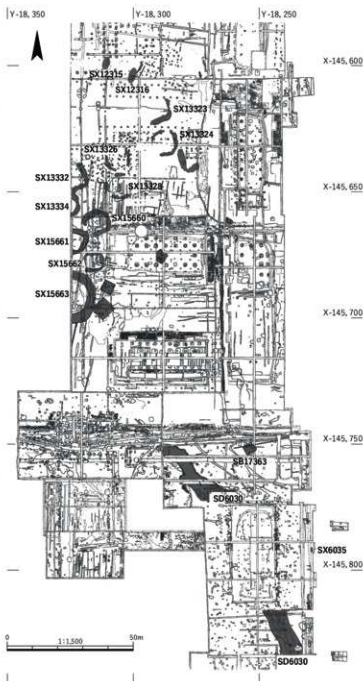
（2）埴輪の概要

小墳群にかかわる埴輪はごく少量で、コンテナ 2 箱だけである。円墳 SX15663 から出土した埴輪は、わずかに 3 点（1~3）の写真を掲載できる程度である（図版 59）。いずれも無黒斑の密窯焼成で、白色胎土。

このほか、周辺の整地土から出土した埴輪も、すべて密窯焼成品（4~12）。B 種ヨコハケをもつ破片（12）、須恵質の個体（8）などがある。

（3）埴輪の時期

円墳 SX15663 から出土した埴輪は、無黒斑の密窯焼成で白色胎土をもつので、IV 期である。整地土から出土した埴輪も、密窯焼成で B 種ヨコハケをもつ破片もあるので、やはり IV 期とみなせよう。なお、V 期の形象埴輪の基台部と思われる個体もあり、倒立技法の可能性もある（6）。



（和田） 第 35 図 平城宮東区朝堂院下層の小墳群

引用・参考文献

奈良国立文化財研究所 1989「第二次朝堂院朝庭域の調査-第188次」『昭和63年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

奈良国立文化財研究所 1993「第二次朝堂院第五堂の調査-第238次」『1992年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

奈良国立文化財研究所 1996「第二次朝堂院第六堂の調査-第261次」『1995年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』



斜行溝 SD4992 と方形溝 SD5700 (平城第 39・43 次調査)

8 八幡神社境内地（平城第234-6次調査 平城宮北方）

(1) 発掘調査の経緯と概要

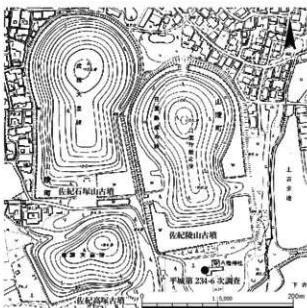
佐紀陵山古墳に南接する八幡神社境内（奈良市山陵町）の建物改築にともない、1992年6月25日から同年6月29日までの3日間、発掘調査を実施した（第36図）。調査区は南北2m、東西6mで、調査面積は12㎡である（第37図）。基本層序は表土から順に厚さ40cmの黄褐色粘質土、厚さ10cmの明黄色粘土とつづき、その下に礫混黄色粘土の地山となる。表土直下の黄褐色粘質土は盛土で、調査区東半では多量の埴輪を包含する。地山上面で遺構検出をおこなったが、調査区南端で浅い皿状土坑を1基検出したのみであった（『1992平城概報』:pp.71・72）。

盛土内から出土した多量の埴輪について、発掘担当者は「神社建造時の（佐紀陵山古墳の…筆者補記）外堤破壊の際に出土した埴輪片を盛土中に混入し、埋めたものであろう」（『1992平城概報』:p.71）と理解する。しかし、後述するように、佐紀陵山古墳の時期や埴輪と、当該埴輪との間には型式学および時間的な相違が顕著であり、上記の推測は誤りであった。事実、近年になって、当該埴輪を「ウワナベ古墳系列」と位置づけ、「佐紀古墳群西群に5世紀代の古墳が存在していた可能性」（田中2008p.220）が示されている。

(2) 埴輪の概要

木箱10箱余りの埴輪が出土したこともあって、なごらく整理作業を完遂できなかった。整理途上に朝顔形埴輪1点の実測図を概報で提示できただけで（『1992平城概報』:p.72図85）、今日まで展覧会等でも当該埴輪を紹介する機会は得られていない。今回、埴輪の接合・復元をすすめたと、円筒埴輪ないし朝顔形埴輪5点、盾形埴輪1点を復元できた（図版64・65）。

1は近接突帯の朝顔形埴輪。5条の突帯を確認でき、突帯間隔は9.7cm程度で均等に割り付けており、最上段は6.8cmと狭い。近接突帯直下に細長い長方形透かし孔をあけ、さらにその下の段に直交する



第36図 平城第234-6次調査区位置図

かたちで円形透かし孔がみられる。長方形透かし孔の上には斜線と未貫通の小孔を組み合わせたヘラ記号をもつ。突帯はやや上縁が突出する台形で、突帯設定技法には1条の凹線を確認できる。外面一次調整はタテハケ調整で各段に始点を観察でき、そのストロークは短い。外面二次調整はBd種ヨコハケを基調とするが、最上段の狭い箇所は一次タテハケ調整のみである。静止痕は3~5cm間隔で、ハケ工具の幅は7.5cmである。内面調整はナデ調整で、口縁部の内面だけハケ調整がみられる。残存高67.5cm。

2は底部から肩部までのころ、近接突帯の朝顔形埴輪。底部高8.8cmと低く、突帯間

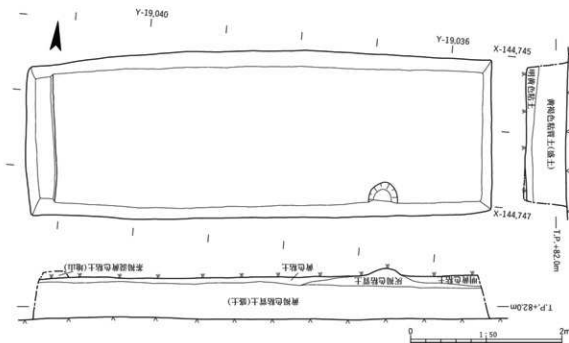
隔は9.7cm程度で均等に割り付ける。近接突帯の最上段は7.4cmと狭い。3段目と5段目に円形透かし孔を直交にあける。突帯は扁平な台形で、ナデ調整はあまく、押圧技法による突帯成形の形状をとどめる。外面調整は底部と狭い最上段のみ一次タテハケ調整のみで、他の段はBd種ヨコハケ調整である。静止痕は5cm間隔で、工具幅は7.5cmである。内面調整はナデ調整。残存高70.0cm。

3は底部から6段分をのこす個体。底部高13.7cmと高く、突帯間隔は10.5cm程度で均等に割り付ける。下から3段目と5段目に直交して円形透かし孔をあける。突帯は「M」字状で、突帯設定技法に凹線がみられる。外面調整は底部のみ右上がりの一次タテハケ調整で、ほかはBd種ヨコハケ調整だが、下半部では静止痕が不明瞭である。静止痕は6.5cm間隔。一次タテハケ調整が右上がりであるとともに、Bd種ヨコハケの静止痕の高低段差もほかの個体とは逆になるので、左利きの製作工人と判断できる。内面調整はナデ調整。残存高59.6cm。

4は、底部の破片。2段分をのこし、底部高13.7cm、2段目の突帯間隔10.5cmである。下から3段目に円形透かし孔の下端がかろうじて確認できる。突帯は扁平な台形で、押圧技法による成形の形状をとどめる。外面調整は底部が一次タテハケ調整のみで、2段目はBd種ヨコハケ調整となる。静止痕の間隔は不規則だが、4.5cm程度で、工具幅は7.5cm。残存高18.7cm。5も2段分をのこす底部の破片。底部高8.8cm、2段目の突帯間隔8.5cm。3段目に円形透かし孔の下端をわずかにのこす。突帯は上縁が突出する台形で、突帯設定技法は1条の凹線である。内面調整はナデ調整。残存高18.8cm。

このほか、朝顔形埴輪の口縁部をいくつか確認できるが、円筒埴輪の口縁部は認められない。3～5も朝顔形埴輪の可能性のほうが高いように思える。理由はわからないが、意識的に朝顔形埴輪ばかりが抽出された可能性もあろうか。なお、上述の個体はすべて無黒斑の密窯焼成で、淡橙褐色をなす。

形象埴輪は1点だけである。6は「目」字形の文様構成をもつ、盾形埴輪。線刻は2条一組で別々に



第37図 平城第234-6次調査遺構図・土層図

描く。盾面下端と基台部との境には段差を有する。基台部の外面調整はタテハケ調整で、小さめの円形透かし孔をもつ。赤褐色を呈し、胎土がほかの個体と異なる印象をもつ。残存高 47.5cm。

(3) 円筒埴輪の復元と規格

突帯間隔が一致する1と2を参考とすれば、近接突帯をもつ6条7段構成の朝顔形埴輪に復元できる。底部高がわずかに低く、突帯間隔は均等で、推定の高さは90cmとなる。透かし孔は1段に2孔で、下から3段目と5段目に円形透かし孔を、6段目に細長い長方形透かし孔を、それぞれ直交するかたちで配置する。また、3と4を考慮すれば、透かし孔配置は同じで、均等に割り付けた突帯間隔よりも底部高のほうが高い形態となり、推定100cmの朝顔形埴輪も復元できる。さらに、5をもとに、底部高と突帯間隔とを均等に割り付ける形態も復元できようか。

このように、底部高と突帯間隔との相対的な広狭関係を基準とすれば、3つの形態を復元できる。突帯間隔よりも底部高のほうが高い形態、底部高のほうが低い形態、そして突帯間隔と底部高が一致する形態である。

(4) 埴輪の時期

近接突帯となる最上段に小三角形の副次穿孔孔もまたないが、細長い長方形透かし孔とBd種ヨコハゲ、上述のような透かし孔配置をもつ形態は、ウワナベ古墳の埴丘および内堤の埴輪との関連が強い。ただし、押圧技法による成形の形状をのこす扁平形状の突帯形状は、ウワナベ古墳にはみられず、より後出的な要素であろう。また、底部高と突帯間隔の数値をみると(第4図)、より縮小化がすすんだヒシャゲ古墳の埴輪と近い。具体的には、底部高は10cm未満で突帯間隔が10cm程度となるような、突帯間隔よりも底部高が低い形態を含む。したがって、ヒシャゲ古墳併行のIV期新相とみなせる。

なお、当該埴輪がヒシャゲ古墳に由来するあるいは同一のものかと判断できるかといえば、慎重にならなければいけない側面もある。ヒシャゲ古墳の内堤の円筒埴輪は7条8段構成であり、当該朝顔形埴輪が6条7段構成なので、互いに段構成が異なるからだ。ヒシャゲ古墳に複数の異なる段構成の埴輪を樹立していたのか、未知の埋没古墳が眠っているのだろうか。

(和田)

引用・参考文献

- 田中智子 2008 「ウワナベ古墳系列の埴輪をめぐる諸問題—上人ヶ平5号墳出土埴輪の検討から—」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会
- 奈良国立文化財研究所 1993 「平城宮北方の調査—第234-6次」『平城宮跡発掘調査部発掘調査概報1992年度』

第4章 平城宮下層埴輪窯にかかわる埴輪の胎土分析

1 対象資料と分析方法

平城宮下層埴輪窯で生産された埴輪の供給状況を検討するため、関連資料の埴輪胎土の科学分析を実施した。埴輪窯では、野焼きの遺構である1号窯 SX16285、密窯である5号窯 SX16280、消費地ではウナベ古墳、杉山古墳、ヒシヤグ古墳の出土埴輪を対象とした。なお、1号窯 SX16285からは、コナベ古墳併行期と目されるⅢ群埴輪とウナベ古墳と同型式のⅣ群埴輪の両者が出土していることから、同一遺構出土遺物ではあるが、あらかじめ両者を区分して分析を実施した。

分析は一定の精度を確保するために通常の蛍光X線分析に加えて、一部の資料に対して化学分析(ICP発光分光分析および原子吸光分析、詳細後述)を併用して実施した。ICP発光分光分析は、プラズマによってイオン化された試料中の元素を分光・検出する手法である。一般に、蛍光X線分析よりも高感度で、微量の元素を同時に定性・定量分析できることが特徴である。近年、考古資料の分析にも積極的に導入されるようになってきた。

ただし、実施にはそれ相応の費用を要するため、対象の全50試料のうちSX16285、SX16280、杉山古墳、ヒシヤグ古墳からそれぞれ2〜4点の試料を抽出して化学分析を実施し、それにもとづいて蛍光X線分析の成果をクロスチェックし、全体のデータを解析することにした。埴輪の形状を大きく損なわないよう、破片の断面からグラインダー(超硬カッター)で採取した粉末状のサンプルを瑪瑙乳鉢で均一に細かく粉砕したものを試料とした。

化学分析は、日鉄テクノロジーに実施を依頼した。測定は、ICP発光分光分析(Inductively coupled plasma atomic emission spectroscopy, 以下ICP)法およびフレイム原子吸光分析(Flame Atomic Absorption Spectrometry, 以下AAS)法によりおこなった。使用した装置は、ICPはiCAP7400(サーモフィッシャーサイエンティフィック製)、AASはZA3300(日立製作所製)である。具体的な測定方法は以下の通り。試料約0.2gを白金るつばへ秤取り、硼砂有罪を加えて混ぜたのち、バーナーで溶融した。溶融生成物を塩酸と温水中で溶解して100mlメスフラスコに移し、内部標準溶液(イットリウム)を加えたのち、標線まで純水で定容した。定量方法は、SPEX製標準溶液を用いて、検量線を作成することにより定量値を算出した。

蛍光X線分析は、奈良文化財研究所所有のエネルギー分散型蛍光X線分析装置(EDAX社製EAGLE III)を使用して実施した。励起用X線源はRd管球、管電圧は30kV、管電流は100μA、X線照射径は50μm、計数時間は300秒とした。測定は真空中で実施した。測定結果は、測定資料と近似する濃度既知のガラス標準試料を用いて補正した理論補正法(Fundamental Parameter method, 以下FP法)により、検出した元素の酸化物の合計が100%になるように規格化した。試料のパラッキと測定値の誤差を勘案し、1試料につき場所を変えて5回分析し、平均値を算出した。

2 分析結果

まず、蛍光X線分析によって算出された定量値の信頼性について化学分析の結果との比較から検討した(第38図、別表1)。その結果、 Na_2O 、 MgO 、 P_2O_5 は両者の定量値に差異が大きく、蛍光X線分析の定量値の信頼性が低いため、これらの元素については蛍光X線分析の定量値を積極的に考察に利用することはできないと判断した。いっぽう、 K_2O 、 CaO 、 TiO_2 、 Fe_2O_3 などは定量値の差異が比較的小さく、蛍光X線分析結果についても一定の信頼性が認められると判断した。以下、これらの元素を中心に、試料数が担保できている蛍光X線分析結果を中心に、胎土の異同を検討する。

まず一見して、今回の対象試料は、窯や古墳単位で明確に領域を区分できるような状況にないことが見て取れる(第39図)。化学分析(ICP、AAS)の結果も矛盾しない。いっぽうで、それぞれの生産地、消費地ごとのプロットは重なり合いをもちながらも少くも領域にズレが認められることも事実である。とりわけ、ヒシャゲ古墳は Fe_2O_3 と TiO_2 が多い点に着目すると他とは区分が可能である(第39図③)。また杉山古墳も、ヒシャゲ古墳ほど明確に分離することは難しいものの、 K_2O の値が相対的に高く、化学分析では MgO と Al_2O_3 の値も他より高いことが指摘できる(第39図⑤-⑦)。

いっぽう、平城宮下層埴輪窯の1号窯SX16285は前述のように型式学的にはⅢ・Ⅳ群に区分されるが、分析値でも $\text{CaO} \cdot \text{K}_2\text{O}$ の量に着目すると両者は領域を違えるようにみえる。Ⅳ群に対応するウワナベ古墳の埴輪は、両者の領域にまたがるようにプロットが落ちるものの、ややⅣ群のほうに偏る傾向も見出せなくはない。Ⅳ群のみが出土する竈窯の5号窯SX16280もⅣ群と重なりをもつつ、値にばらつきも見られる。さらに分析数を増やして傾向を見定める必要はあるが、Ⅳ群のなかでの胎土の変化を反映している可能性もあろう。

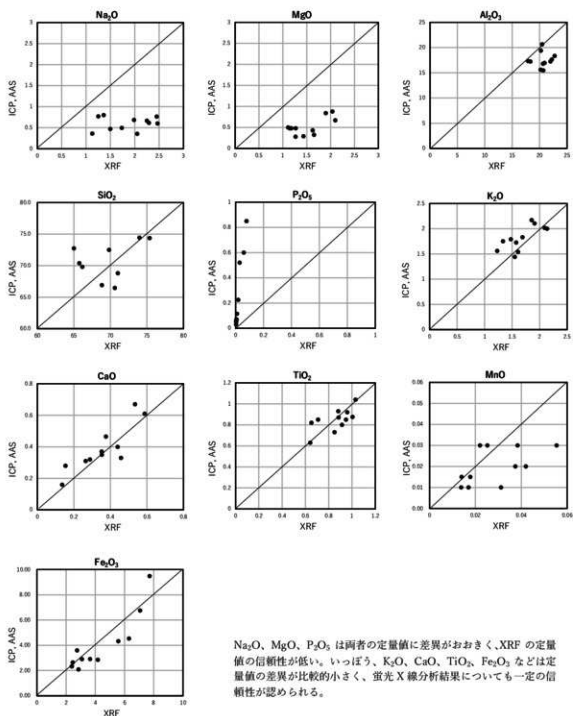
3 胎土分析からみた平城宮下層埴輪窯の生産と流通

以上のように今回の分析では、分析試料が限定的であったこともあり、各窯や古墳の試料を整理と分類・区分するには至らなかったものの、元素組成の細部に着目することで胎土の異同に関して一定の傾向を見出すことができ、平城宮下層埴輪窯における埴輪の生産・流通状況を検討するための重要な手がかりを得た。そもそも今回の分析は、地質環境を同じくする奈良盆地北縁部に位置する窯や古墳から出土した埴輪を対象としたが、それでも上記のような一定の傾向が見出せる背景には、似通った場所から粘土を採取する環境にあっても、おそらく佐紀古墳群を構成する各巨大古墳の築造を契機に、元素組成に影響をおよぼすほどの規模で粘土採取地点が変化する場合があったことが推測される。

平城宮下層埴輪窯は、同一地点において野焼き(Ⅲ群)から竈窯(Ⅳ群)に移行したことが確実視される稀有な事例であるが、その変化に対応して胎土組成に変化が見出せる点は、まさにそうした推測を傍証する。それはちょうどコナベ古墳の築造からウワナベ古墳への築造への転換に対応するが、重要なのは胎土組成の差は両者で完全に排他的に分離されるようなものでもない点である。とりわけウワナベ古墳の消費地資料は、1号窯SX16285のⅣ群の領域と重なりをもちつつ、一部はⅢ群の領域にも重複する兆候が見出せる(第39図①-③)。同一地点で野焼きから竈窯へ移行していることが何よりの証拠

であるが、あらためて平城宮下層室におけるIII群からIV群の移行が画期をともないつつも、現象としては連続的に推移していった様子をうかがうことができる。

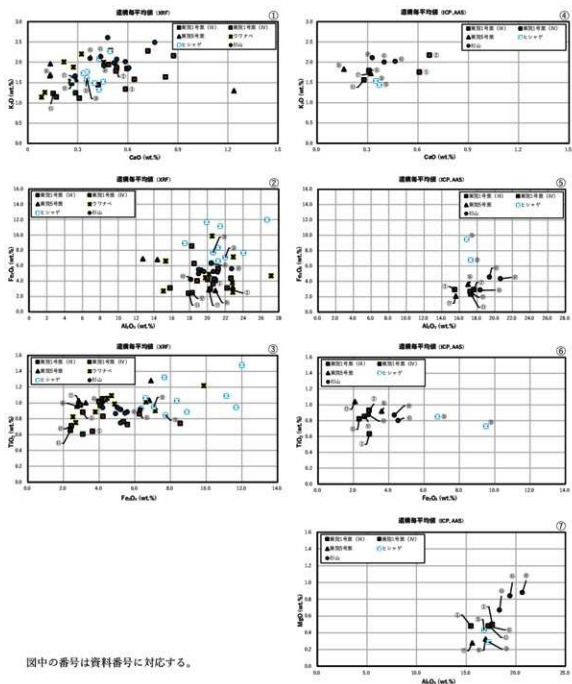
今回、コナベ古墳の植輪については、胎土分析を実施できていないが、1号室 SX16285、斜行溝 SD4992、コナベ古墳、平塚1号墳の間ではハケメパターンが一致する植輪が確認できており、その主たる供給地がコナベ古墳とその関連古墳であったことが確認される。したがってIII群（野焼き）段階



第38図 化学分析 (ICP, AAS) と蛍光 X 線分析 (XRF) の定量値の比較

の平城宮下層埴輪窯では、IV群よりも高CaO・低K₂Oの胎土を主体的に用いて、コナベ古墳とその関連古墳にむけて生産と供給を繰り返していたと理解できる。

これに対して、1号窯 SX16285 (IV群)、5号窯 SX16280、ウワナベ古墳は、領域的にはやや広がりをもちつつも、元素組成は総じてプロット範囲を共有する。平城宮下層の窯室群は当初の想定通り、ウワナベ古墳を主たる供給地として設置されたことが裏づけられる。いっぽうで、Fe₂O₃、TiO₂の値が高く、ウワナベ古墳の主領域から外れるヒシャゲ古墳の埴輪は、平城宮下層窯周辺でその型式学的特徴を



第39図 化学組成による分類検討 (左: XRF, 右: ICP-AAS)

も埴輪が確認できないことから、東院地区とは別の地点で生産されたものと推測される。おそらく供給距離を考慮してヒシャゲ古墳より近い場所に窯を構えている蓋然性が高い。

さらに、佐紀古墳群東群からはやや離れて立地する杉山古墳では、ヒシャゲ古墳ほど明瞭な元素組成の差は見いだせないものの、前述のように K_2O や MgO 、 Al_2O_3 の値がやや高いことにくわえて、肉眼観察からは混和剤としての金雲母の含有が目立つことを指摘できる。金雲母は SX16285 (IV群)、SX16280、ウワナベ古墳の埴輪では顕在化しないことから、杉山古墳の埴輪も平城宮下層埴輪窯の製品ではなく、古墳の近隣に所在した別の埴輪窯から供給を受けたものと推測される。今回、杉山古墳のサンプルの採取に際して、通常の円筒埴輪 (㊸・㊹・㊺・㊻) と幅広突帯の大型円筒埴輪 (㊼・㊽・㊾)、および形象埴輪片 (㊿・㊻) の三者を識別した上で分析を実施したが、形象埴輪ではIV群やウワナベ古墳の分析値に近いものが認められたものの、円筒埴輪と大型円筒埴輪はウワナベ古墳の領域から一定の距離を置くものが認められた (㊼・㊽)。幅広突帯の大型円筒埴輪は、ウワナベ古墳の超大型品との関連が考慮される資料であるが、胎土分析による限り、平城宮下層埴輪窯からの製品供給ではなく、製作者の移動によって型式的内容が共有されたのがその実態と考えられる。

なお、コナベ古墳、ウワナベ古墳、杉山古墳については、以前に奈良市所蔵資料を用いて三辻利一が蛍光 X 線分析を実施しており、概ね同様の結論が得られている。すなわち、三辻による K-Ca、Rb-Sr の4元素による分布において、ウワナベ古墳と杉山古墳は領域が重ならず、またコナベ古墳とウワナベ古墳も科学特性は類似しているものの、領域にはややズレがありまったく同一の胎土ではないことが指摘されている〔三辻・高場1997〕。使用装置や解析手法が異なるため、今回の分析結果を完全に対応させて理解することはむずかしいが、三辻が指摘する杉山古墳の方がウワナベ古墳よりも K_2O が若干多く、ウワナベ古墳に対してコナベ古墳 (SX16285 III群) の方が高 K_2O に偏るという傾向は今回の分析でも追認することができており、両者で整合的な理解が得られる点は重要である。ただし、CaO に関しては、ウワナベ古墳に対してコナベ古墳 (SX16285 III群) のほうが多い傾向にあるなど、三辻の分類とは異なる点もある。

このように、佐紀古墳群やその周辺の埴輪生産が少しずつ時空間を違えながら展開していった様子が胎土の科学分析によってもおぼろげながら跡付けることが可能になってきたといえる。ただし、今回分析できた資料は当時、生産・消費された膨大な埴輪からすれば、その氷山の一角に過ぎない。今後もさらに分析の質と量を深めていくことが不可欠である。

(廣瀬・田村明美・柳成徳)

引用・参考文献

- 三辻利一・高場慎太郎 1997 「杉山古墳出土埴輪の蛍光 X 線分析」『史跡大安寺田境内 I』奈良市教育委員会
 三辻利一・秋森秀己 1992 「菅原東遺跡出土埴輪の蛍光 X 線分析」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 - 平成3年度』奈良市教育委員会

別表1 同一個体の化学分析(ICP, AAS)と蛍光X線分析(XRF)の定量値

試料番号	測定名	分析手法	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	Fe ₂ O ₃	CaO	K ₂ O	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	MnO	F ₂ O ₃	Rb ₂ O	SO ₃	ZnO	BaO	SeO ₂	V ₂ O ₅	WO ₃	ZnO
(01)	東洋1号	XRF	1.3	1.2	20.7	70.6	0.1	0.6	1.3	0.64		0.02	3.64	tr	tr	0.00					
(02)	東洋1号	XRF	1.4	1.1	22.2	68.8	0.1	0.9	1.9	0.88		0.03	3.09	tr	tr	0.00					
(03)	東洋1号	XRF	1.1	1.1	17.9	75.4	0.0	0.8	1.2	0.72		0.02	2.40	tr	tr	0.00					
(04)	東洋1号	XRF	1.5	1.3	18.3	74.0	0.0	0.9	1.5	0.71		0.01	2.43	tr	tr	0.00					
(05)	東洋5号	XRF	2.1	1.7	20.5	69.8	0.0	0.9	1.7	0.96		0.02	2.75	tr	tr	0.00					
(06)	東洋5号	XRF	1.7	1.3	20.2	71.0	0.0	0.9	1.6	0.93		0.01	2.83	tr	tr	0.00					
(07)	七ツヤ(樹2埋輪中位)	XRF	2.3	1.6	20.6	64.5	0.0	0.9	1.5	0.85		0.03	7.73	tr	tr	0.00					
(08)	七ツヤ(樹2埋輪中位)	XRF	2.0	1.4	22.0	64.5	0.0	0.9	1.6	0.84		0.04	7.60	tr	tr	0.00					
(09)	杉山古墳	XRF	2.3	1.9	20.2	65.7	0.0	0.9	2.1	0.4	0.91	0.06	6.38	tr	tr	0.00					
(10)	杉山古墳	XRF	2.5	2.0	20.5	66.2	0.0	0.9	1.9	0.93		0.04	5.58	tr	tr	0.00					
(11)	杉山古墳	XRF	2.5	2.1	22.8	65.0	0.0	0.9	2.1	0.4	1.06	0.04	4.18	tr	tr	0.00					
(12)	東洋1号	ICP	0.77	0.48	15.48	66.46	0.60	1.75	0.63	0.63	0.01	0.03	2.91	tr	<0.02	0.03	0.06	<0.02	<0.02	<0.2	<0.2
(13)	東洋1号	ICP	0.89	0.50	17.64	66.92	0.85	2.17	0.67	0.93	<0.02	0.03	2.96	tr	0.01	0.04	0.06	<0.02	<0.02	<0.2	0.01
(14)	東洋1号	ICP	0.36	0.48	17.32	74.36	0.07	1.56	0.26	0.82	<0.01	0.01	2.33	tr	<0.02	0.04	0.05	<0.02	<0.02	<0.2	0.01
(15)	東洋1号	ICP	0.47	0.48	17.25	74.43	0.05	1.79	0.31	0.85	<0.02	0.01	2.64	tr	<0.02	0.04	0.04	<0.02	<0.02	<0.2	0.01
(16)	東洋5号	ICP	0.36	0.33	16.96	72.56	0.23	1.83	0.36	0.92	<0.02	0.02	3.68	tr	<0.01	0.04	0.06	<0.02	<0.02	<0.05	<0.05
(17)	東洋5号	ICP	0.50	0.28	15.68	68.80	0.52	1.73	0.32	1.04	<0.02	0.02	2.69	tr	<0.01	0.04	0.07	<0.02	<0.02	<0.05	<0.05
(18)	七ツヤ(樹2埋輪中位)	ICP	0.62	0.43	16.86	99.20	0.03	1.44	0.37	0.73	<0.02	0.01	9.49	tr	<0.01	0.03	0.05	<0.02	<0.02	<0.05	<0.05
(19)	七ツヤ(樹2埋輪中位)	ICP	0.69	0.29	17.25	59.60	0.06	1.54	0.36	0.85	<0.02	0.02	6.78	tr	<0.01	0.03	0.05	<0.02	<0.02	<0.05	<0.05
(20)	杉山古墳	ICP	0.67	0.84	19.48	70.48	0.12	2.00	0.46	0.86	<0.02	0.03	4.54	tr	<0.01	0.03	0.06	<0.02	<0.02	<0.05	<0.05
(21)	杉山古墳	ICP	0.69	0.86	20.65	69.80	0.06	2.11	0.33	0.87	<0.02	0.03	4.33	tr	<0.01	0.03	0.06	<0.02	<0.02	<0.05	<0.05
(22)	杉山古墳	ICP	0.77	0.87	18.36	72.75	0.07	1.47	0.88	<0.02	0.02	0.02	2.86	tr	<0.02	0.04	0.05	<0.02	<0.02	<0.05	<0.05

tr: 定量限界以下

別表2 全資料の蛍光X線分析(XRF)結果

資料番号	品名	年代	種別	分析部位	元素組成 (%)														
					Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	FeO	MnO	B ₂ O ₃	ZnO		
①	甕	2	木	榧	平均 (n=3)	1.3	1.7	20.7	59.6	0.1	0.0	1.9	0.9	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
					標準偏差	0.1	0.1	1.6	1.5	0.0	0.1	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
②	甕	3	木	榧	平均 (n=3)	1.4	1.7	22.2	58.8	0.1	0.0	1.9	0.9	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	1.6	1.4	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
③	甕	4	木	榧	平均 (n=2)	1.9	2.7	20.3	60.0	0.2	0.0	2.2	1.0	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.3	0.3	1.2	1.0	0.0	0.2	0.2	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
④	甕	5	木	榧	平均 (n=6)	2.0	1.5	24.3	60.1	0.1	0.0	1.9	0.9	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.4	0.1	2.1	1.2	0.0	0.0	0.3	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
⑤	甕	6	木	榧	平均 (n=5)	1.5	1.9	21.8	60.8	0.0	0.0	1.9	0.9	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.4	1.5	0.0	0.0	0.3	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
⑥	甕	7	木	榧	平均 (n=2)	2.1	1.4	20.9	59.0	0.0	0.0	1.9	0.9	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.5	1.1	0.0	0.0	0.2	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
⑦	甕	8	木	榧	平均 (n=2)	2.2	1.7	20.8	60.0	0.0	0.0	1.8	0.8	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.8	1.1	0.0	0.0	0.2	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
⑧	甕	9	木	榧	平均 (n=4)	2.3	1.6	20.9	60.0	0.0	0.0	2.0	0.7	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.5	0.1	1.1	1.6	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
⑨	甕	10	木	榧	平均 (n=5)	1.5	1.5	20.1	60.2	0.0	0.0	1.8	0.8	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.0	1.1	1.3	0.0	0.0	0.2	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	
⑩	甕	11	木	榧	平均 (n=5)	1.8	1.8	20.8	60.5	0.0	0.0	1.8	0.8	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	1.1	1.4	0.0	0.0	0.2	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
⑪	甕	12	木	榧	平均 (n=5)	1.8	1.8	20.8	60.5	0.0	0.0	1.8	0.8	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	1.7	1.0	0.0	0.0	0.4	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
⑫	甕	13	木	榧	平均 (n=6)	1.5	1.3	20.3	59.0	0.0	0.0	1.8	0.3	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.0	1.1	1.3	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
⑬	甕	14	木	榧	平均 (n=5)	1.4	1.4	20.6	60.4	0.0	0.0	1.5	0.3	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.7	1.3	0.0	0.0	0.1	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
⑭	甕	15	木	榧	平均 (n=2)	2.1	1.8	20.7	60.6	0.0	0.0	1.7	0.2	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.5	0.1	0.7	1.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	
⑮	甕	16	木	榧	平均 (n=2)	2.3	1.8	20.8	61.1	0.0	0.0	1.7	0.3	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.6	0.1	1.4	1.1	0.0	0.0	0.2	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
⑯	甕	17	木	榧	平均 (n=2)	2.2	1.7	20.8	60.8	0.0	0.0	1.9	0.2	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.4	0.9	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
⑰	甕	18	木	榧	平均 (n=2)	2.2	1.7	20.8	60.8	0.0	0.0	1.9	0.2	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.4	0.9	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
⑱	甕	19	木	榧	平均 (n=2)	1.7	1.3	20.2	59.0	0.0	0.0	1.8	0.3	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.3	0.1	0.3	0.3	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	
⑲	甕	20	木	榧	平均 (n=2)	1.8	1.8	20.8	60.2	0.0	0.0	1.7	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	1.4	1.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
⑳	甕	21	木	榧	平均 (n=2)	1.5	1.2	20.4	60.0	0.0	0.0	2.0	0.1	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.4	0.1	0.7	1.4	0.0	0.0	0.2	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	
㉑	甕	22	木	榧	平均 (n=2)	1.5	1.2	21.8	59.5	0.0	0.0	1.7	0.1	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.5	0.9	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
㉒	甕	23	木	榧	平均 (n=2)	1.8	1.8	20.8	60.2	0.0	0.0	1.8	0.3	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.4	0.9	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
㉓	甕	24	木	榧	平均 (n=2)	1.8	1.8	20.8	60.2	0.0	0.0	1.8	0.3	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.4	0.9	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
㉔	甕	25	木	榧	平均 (n=2)	1.8	1.8	20.8	60.2	0.0	0.0	1.8	0.3	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.4	0.9	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
㉕	甕	26	木	榧	平均 (n=2)	1.8	1.8	20.8	60.2	0.0	0.0	1.8	0.3	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.4	0.9	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
㉖	甕	27	木	榧	平均 (n=2)	1.8	1.8	20.8	60.2	0.0	0.0	1.8	0.3	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.4	0.9	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
㉗	甕	28	木	榧	平均 (n=2)	1.7	1.3	20.2	59.0	0.0	0.0	1.8	0.3	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.3	0.1	0.3	0.3	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	
㉘	甕	29	木	榧	平均 (n=2)	1.8	1.8	20.8	60.2	0.0	0.0	1.7	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	1.4	1.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
㉙	甕	30	木	榧	平均 (n=2)	1.5	1.2	20.4	60.0	0.0	0.0	2.0	0.1	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.4	0.1	0.7	1.4	0.0	0.0	0.2	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	
㉚	甕	31	木	榧	平均 (n=2)	1.5	1.2	21.8	59.5	0.0	0.0	1.7	0.1	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.5	0.9	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
㉛	甕	32	木	榧	平均 (n=2)	1.5	1.2	21.8	59.5	0.0	0.0	1.7	0.1	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.5	0.9	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
㉜	甕	33	木	榧	平均 (n=2)	1.8	1.8	20.8	60.2	0.0	0.0	1.8	0.3	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.4	0.9	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
㉝	甕	34	木	榧	平均 (n=2)	1.8	1.8	20.8	60.2	0.0	0.0	1.8	0.3	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.4	0.9	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
㉞	甕	35	木	榧	平均 (n=2)	1.8	1.8	20.8	60.2	0.0	0.0	1.8	0.3	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.4	0.9	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
㉟	甕	36	木	榧	平均 (n=2)	1.8	1.8	20.8	60.2	0.0	0.0	1.8	0.3	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.4	0.9	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
㊱	甕	37	木	榧	平均 (n=2)	1.8	1.8	20.8	60.2	0.0	0.0	1.8	0.3	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.4	0.9	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
㊲	甕	38	木	榧	平均 (n=2)	1.8	1.8	20.8	60.2	0.0	0.0	1.8	0.3	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.4	0.9	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
㊳	甕	39	木	榧	平均 (n=2)	1.8	1.8	20.8	60.2	0.0	0.0	1.8	0.3	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.4	0.9	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
㊴	甕	40	木	榧	平均 (n=2)	1.8	1.8	20.8	60.2	0.0	0.0	1.8	0.3	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.4	0.9	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
㊵	甕	41	木	榧	平均 (n=2)	1.8	1.8	20.8	60.2	0.0	0.0	1.8	0.3	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.4	0.9	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
㊶	甕	42	木	榧	平均 (n=2)	1.8	1.8	20.8	60.2	0.0	0.0	1.8	0.3	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	
					標準偏差	0.2	0.1	0.4	0.9	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
㊷	甕	43	木	榧	平均 (n=2)														

第5章 窯の生産動向と古墳の築造動態

1 埴輪のハケメパターンと生産体制

出土埴輪の生産流通動向を探る方法の一つに、ハケメパターンの同定分析があげられる。本课题研究に際しては、平城宮下層埴輪窯や付近の下層遺構から出土した資料117点、および佐紀古墳群東群に所在する古墳出土資料119点のハケメ同定を実施した¹⁾。対象としたのは、平城宮下層、コナベ古墳、平塚1号墳、佐紀門外古墳、六条野々宮古墳、市庭古墳、ウツナベ古墳、大和5号墳、平塚2号墳、法隆寺下層、神明野古墳、朝堂院下層、方墳SX7800、ヒシャグ古墳の出土埴輪である。以下、時期ごとにハケメ同定の結果と、そこから復元される佐紀古墳群東群の埴輪生産体制について予察を述べる。

各個体の番号はそれぞれの報告書番号に対応するが、未報告の個体については任意で番号を付した。

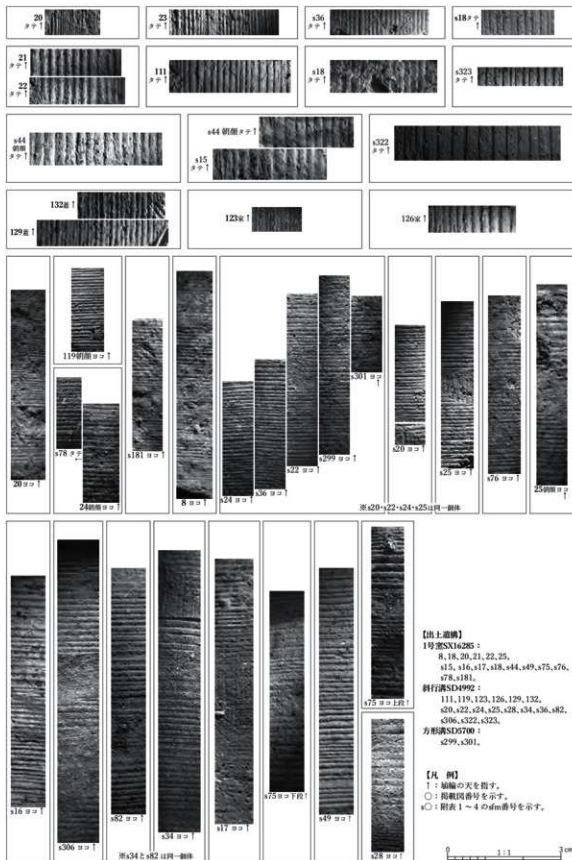
(1) III期

平城宮下層埴輪窯ほか 生産地資料として捉えられる可能性の高い平城宮下層の埴輪について、IV群埴輪との識別が困難な個体も含むが、現状73個体の同定を実施した。その中で特筆されるのは、遺跡内でのハケメパターンの一致率の低さである。すなわち、III期における平城宮下層では73個体に対して61パターンものハケメが見出され、個体間で一致したのはわずか6例に過ぎない。こうしたあり方は、後述するV期の状況とは対照的で、III期においてより大規模な埴輪生産が実施されたことを示唆するものといえる。

転じて、個体間でハケメが一致する個体について、1号窯SX16285の21と22(第16図、図版15)はともに中央が強くくぼむ突帯形状を呈しており、同工品とみて差し支えない。また、3個体以上にまたがって同じハケメパターンがみられる例として、斜行溝のsfm22²⁾、sfm24、sfm36、方形溝のsfm299とsfm301があげられる。これらのうち、同一個体のsfm22とsfm24は突帯が細身で最下段をタテハケで仕上げるのたいして、sfm299やsfm301は突帯が台形で最下段をB種ヨコハケで仕上げるなど、差異が認められる。断片的な資料ではあるが、別工人によるものであった可能性が高い。赤井谷1号横穴やコナベ古墳といった消費地資料でも同様の事象が看取される点は重要で〔加藤2012〕、III期の平城宮下層でも複数人からなる製作グループを基礎単位とした集団編成がとられていた可能性が高い。こうしたあり方は、中期におけるほかの地域の生産体制とおおきく変わるものではなかったとみられるが、製作グループ内での製作数や製作器種などの偏差、各工人の役割についてはあきらかでない。

そのほか、平城宮下層資料について、タテハケで仕上げる個体とB種ヨコハケで仕上げる個体ではハケメパターンが一致しない、円筒埴輪と形象埴輪ではハケメパターンが一致しないという点も認めうる。そもそも資料全体で一致率が低いため、明確な傾向として捉えられるわけではないが、製作技法や器種の異なる個体同士が無作為に近い距離で製作されていたわけではなかったようである。

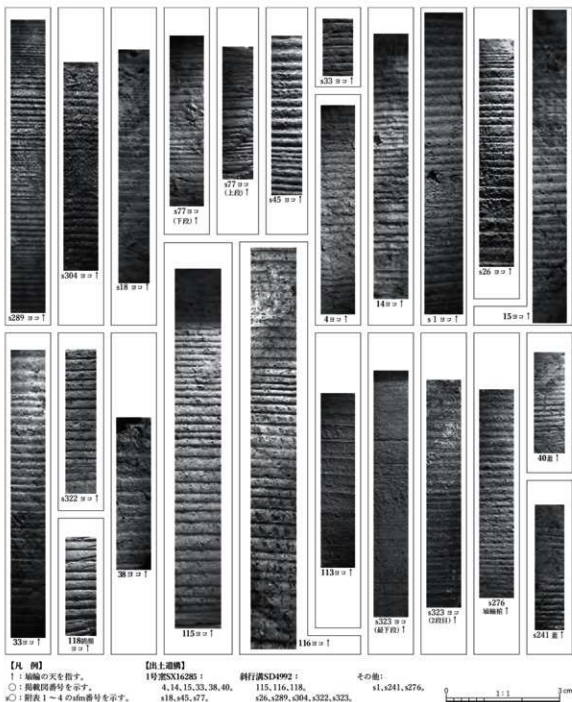
遺跡・古墳間 平城宮下層埴輪窯等とハケメパターンが一致したのは、コナベ古墳、平塚1号墳、佐紀門外古墳、赤井谷1号横穴の資料である。これらは、①平城宮下層資料とコナベ古墳の間で一致する



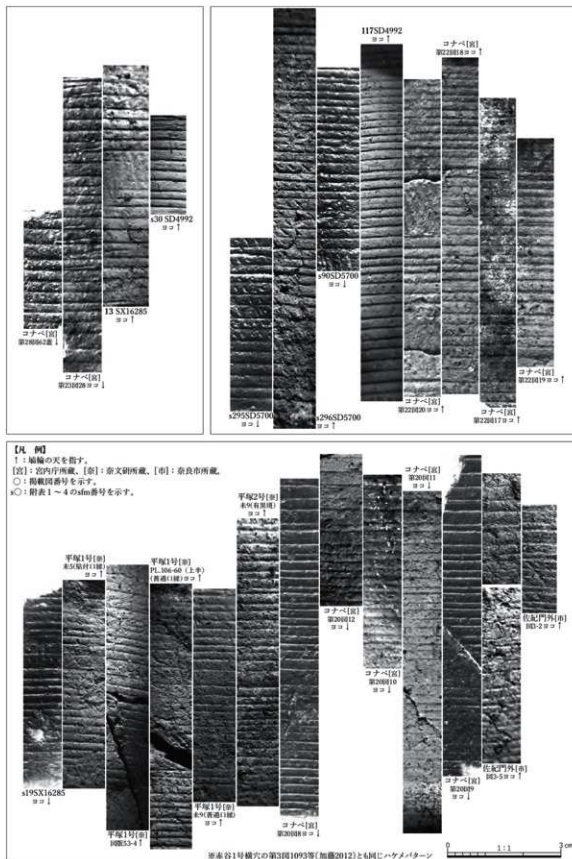
第40図 III期の埴輪のハケメパターン(1) - 1号窯SX16285・斜行溝SD4992・方形溝SD5700

もの、②平城宮下層資料と平塚1号墳の間で一致するもの、③平城宮下層資料とコナベ古墳、平塚1号墳、佐紀門外古墳、赤井谷1号横穴の間で一致するもの、にわけられる。

①について、1号窯 SX16285 の13 (第16図、図版14) および斜行溝 SD4992 の sfm30 はコナベ古墳の墳丘から出土した第23図28〔宮2011〕および蓋形埴輪の第28図62〔宮2011〕とハケメパターンが一致する。このうち、sfm30を除く3個体についてはすでに指摘されているものである(加藤・大澤2020)。同様に、コナベ古墳の第22図17～20〔宮2011〕についても平城宮下層資料と合致することが



第41図 III期の埴輪のハケメパターン(2) - 1号窯 SX16285・斜行溝 SD4992ほか



第42図 Ⅲ期のハケメパターンの一致(1) - 1号室SX16285・斜行溝SD4992とコナベ古墳・平塚1号墳ほか

あきらかにされている〔大澤・加藤 2020〕。今回の同定作業の結果、方形溝 SD5700 の sfm295 と sfm296 もこれらと同じハケメパターンであることが判明した。いずれも内面にヨコハケをほどこし、突帯形状も類似するなど、ほぼ同一工人によるものとみられるが、斜行溝 SD4992 の 117 (第 21 図、図版 32) のみ底部内外面にケズリをほどこす。なお、方形溝の sfm90 と sfm295 にはともに口縁部に「ひ」字状のヘラ記号を付す。

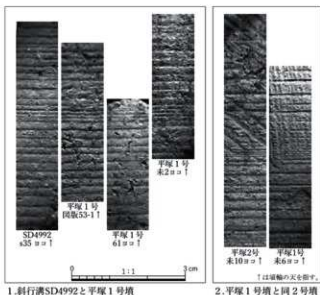
このように、平城宮下層資料とコナベ古墳の間では現時点で 2 パターンのハケメが共通して見出され、これらは基本的には同工品である。

つづいて②について、斜行溝 SD4992 の sfm35 は、平塚 1 号墳の『平城宮報告 VI』 PL.107-61 (図版 52)、1 (図版 53-1)、未報告 2 と同一ハケメパターンとなる。sfm35 が体部細片であるため、同工品分析は困難である。平塚 1 号墳の『平城宮報告 VI』 PL.107-61 と 1 (図版 53-1) では、突帯形状がやや異なるようにも見受けられるが、判断は保留しておく。

なお、平塚 1 号墳の未報告 6 は、平塚 2 号墳から出土した資料 (未報告 2) とハケメパターンが一致する。しかしながら、後者の資料は平塚 2 号墳の周溝北側、平塚 1 号墳と接する箇所でも出土したものである。時期差の見込まれる両古墳の間での継続的生産を示唆する資料のようにも思われるが、混入品である可能性が高い。

さいごに③について、1 号窯 SX16285 の sfm19 はコナベ古墳、平塚 1 号墳、佐紀門外古墳の埴輪とハケメパターンが一致する。平城宮下層埴輪窯において、コナベ古墳をはじめ複数の古墳を供給先とした拠点の生産が実施されていたことを確実視させる重要な資料といえよう。いっぽう、興味深いことに、これらハケメパターンの一致する個体相互では、細部形状がわずかに異なる。

たとえば、平塚 1 号墳の『平城宮報告 VI』 PL.107-60 (図版 52) は口縁端部を「L」字形に折り曲げるのに対し、同墳の未報告 9 の口縁端部はわずかに折り曲げられる程度である。また、コナベ古墳の第 20 図 8 (宮 2012) などでは直立する口縁部を有するなど、個体ごとにわずかに様相を違える。突帯形状にかんしても、中央が強くくぼむ平塚 1 号墳の未報告 3、細身を呈する同墳の未報告 5、通有の台形を呈する 1 号窯 SX16285 の sfm19 といったように、やはり差異が認められる。これらと同じハケメパターンをみせるコナベ古墳の第 20 図 8～12 (宮 2011) も「それぞれの要素が一定しておらず」、「同一製作者であるかはすべて保留しておく」と述べられるように (宮 2011:p.67-70)、そもそも古墳内でも変異が存在する。平城宮下層や平塚 1 号墳の資料でみられた変容も考慮すれば、複数人が製作に携わっていたとみるのが穏当であろう。上で述べたように、複数人を単位とした製作グループが編成され、そ



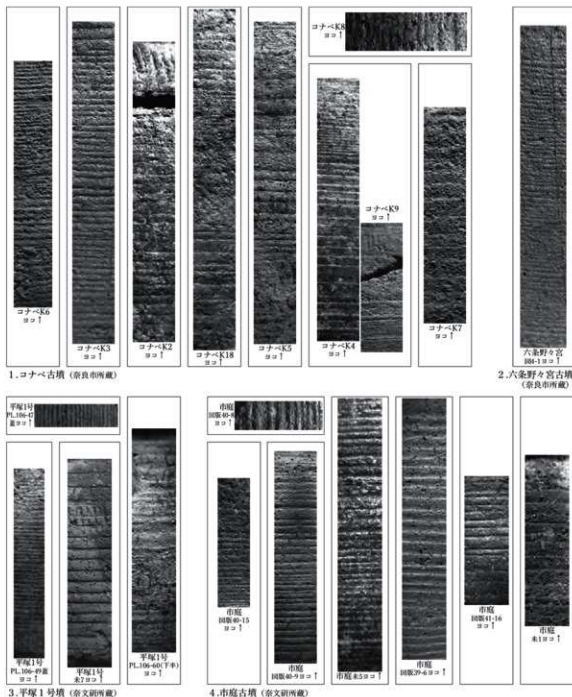
1.斜行溝SD4992と平塚1号墳

2.平塚1号墳と同2号墳

第 43 図 III期のハケメパターンの一致 (2)

のなかで工具の共有がなされた状況を想定できる。

こうしたなか、いま一つ注意されるのは、これらの資料が規格も違えるということである。Ⅲ期の佐紀古墳群では、底部高・突帯間隔がそれぞれ16.5cm・13.5cm前後のA規格、14.5cm・12.5cm前後のB規格、13cm・11cm前後のC規格に分類され、A・B規格からB・C規格へ漸移的に推移するという



1.コナベ古墳 (奈良市所蔵)

2.六条野々宮古墳 (奈良市所蔵)

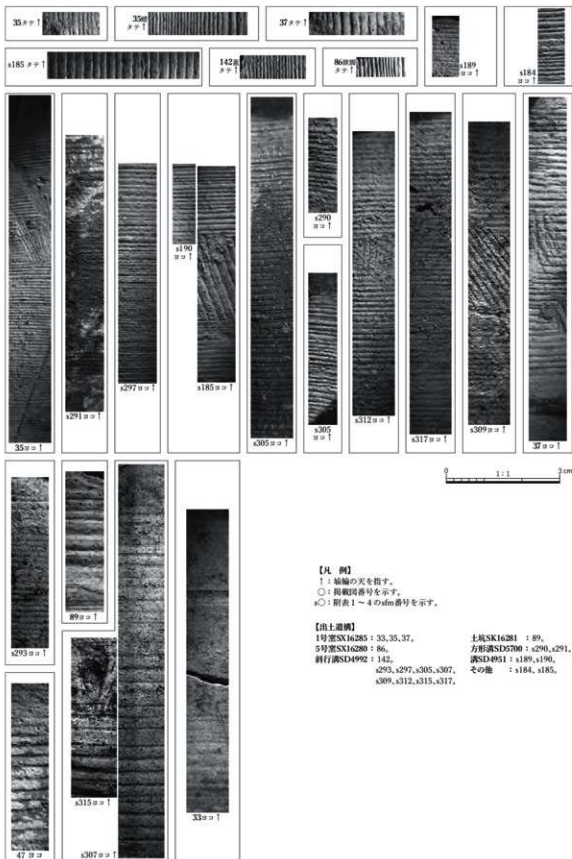
3.平塚1号墳 (奈良市所蔵)

4.市庭古墳 (奈良市所蔵)

【凡例】

↑：施輪の天を示す。 未：未報告資料を示す。
 コナベ古墳：1980『奈良市埋蔵文化財調査報告書（昭和54年度）』、六条野々宮古墳：村瀬2022、
 平塚1号墳：『平塚宮報告VI』、市庭古墳：本書、の掲載回番号に対応する。

第44図 Ⅲ期の埴輪のハケメパターン（3）－コナベ古墳・平塚1号墳・市庭古墳ほか

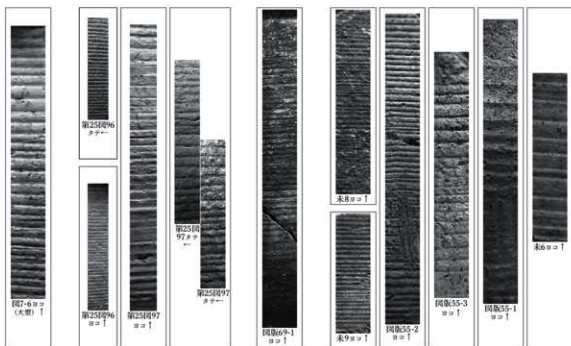


第45図 IV期の胎輪のハケメパターン(1) - 1号室 SX16285・5号室 SX16280・斜行溝 SD4992ほか

(村瀬 2022)。これを踏まえてハケメパターンの一致する上記の各個体を概観すると、コナベ古墳では第20 図8・11 (宮 2011) が底部高 16cm・突帯間隔 13～14cm のA規格であるいっぽう、第20 図12 (宮 2011) は底部高 14cm・突帯間隔 12cm 程度を測るB規格に相当する。たいてい、平塚1号墳では未報告3が底部高 13cm 程度、平塚1号墳の混入品とみられる平塚2号墳の未報告13が底部高 13cm 程度を測り、C規格に分類できる可能性が高い。口縁部高 11cm 前後を図る平塚1号墳の『平城宮報告VI』PL.107-60 や未報告5も同じくC規格に該当するとみられる。佐紀門外古墳の資料は底部高 16cm 程度を測り、A規格に相当する。なお、これらは同一規格の資料相互でも属性は安定しておらず、異なる規格の個体同士で確実に同工品と認識しうるものは存在しない。製作に際したハケメ工具と間隔設定工具、各工人の出現のあり方は錯綜していたようである。

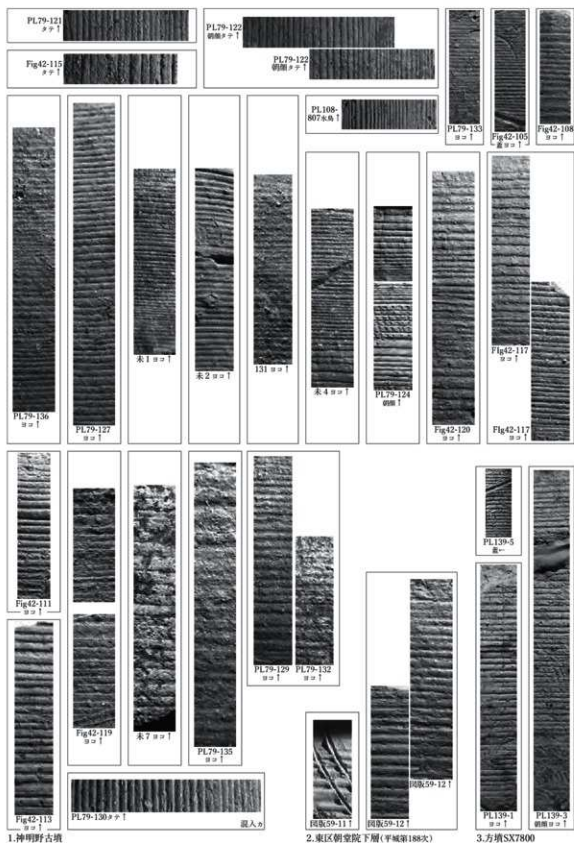
このように、同じハケメパターンをみせる一連の資料群には、村瀬の設定するA～Cのすべての規格が含まれているのである。これが、複数の規格やグループにまたがった製作体制の存在を示すものであるのか、ハケメ工具を共有する製作グループの時間的推移を示すものであるのかは、定かでない³⁾。しかしながら、いずれにしてもハケメ同定の結果から、各規格は工具が共有されるほどの近い時間的・空間的距離にあったと判断して差し支えない。

まぎこに、製作器種にかんじて、同一ハケメパターンをみせるこれら資料では、普通口縁を中心としつつも、平塚1号墳の未報告5など貼付口縁の個体も含まれる。Ⅲ期の佐紀古墳群では、両者が同一製作グループにおいて作り分けられていたことがうかがえるとともに、複数タイプの埴輪を製作する当グループが生産組織内で一定の役割を帯びていたことも推測される。ハケメパターンが見出しやすいとは

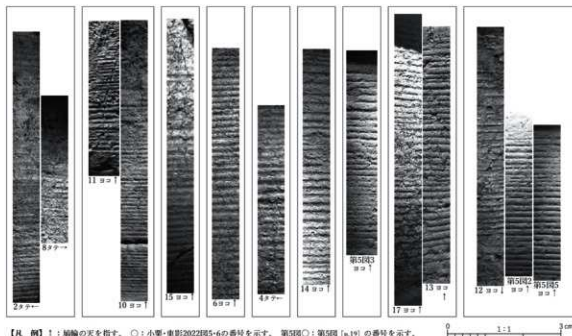


1.ウワナベ古墳 2.大和5号墳 3.法隆寺下層 4.平塚2号墳
 【凡 例】は埴輪の天を指す。 番号は、ウワナベ古墳：『遺構報告2015年度』、大和5号墳：関田1985、
 法隆寺下層・平塚2号墳：本書、の掲載図番号に対応する。 0 1:1 3cm

第46 図 Ⅳ期の埴輪のハケメパターン(2) -ウワナベ古墳・大和5号墳・平塚2号墳ほか



第47図 IV期の輪軸のハケメパターン (3) - 神明野古墳・方墳 SX7800 ほか



【凡 例】 ①：編輪の天を指す。○：小栗・東影2022R5-6の番号を示す。第5段○：第5段 [p.19] の番号を示す。

第48図 IV期の埴輪のハケメパターン（4）－ヒシヤク古墳

いえ、複数個体、とりわけ複数の古墳にわたって同一パターンの個体が存在することもこの点を傍証する。あえて推測するならば、製作数や供給古墳の数、製作器種において中心的な役割をもつ製作グループが生産組織内にくっつき配置されていた可能性が想定されようか。

ところで、コナベ古墳の資料にかんして、埴丘内ではハケメパターンの一致する個体が散在することがあきらかにされているが〔宮2011ほか〕、外堤の資料とハケメパターンの一致するものは現時点では見出せなかったことを付言しておく。

（2）IV 期

平城宮下層埴輪窯ほか 現状で26点のハケメ同定を実施した。26点にたいして24パターンが認められ、個体間で一致したものは2例にとどまる。ハケメパターンの不一致率の高さからは、Ⅲ期の場合と同様、その背景に大規模な生産体制の存在を想定できる。

ハケメパターンが一致した個体のうち、その他の遺構のsfm185と溝SD4951のsfm190とともに幅広突帯を有する資料で、同工品とみられる。ハケメパターンの一致率が低いなかで、パターンの一致した事例の一つが特殊品の幅広突帯であることは、当該タイプの生産規模や生産の集約性を考えるうえで重要だが、全容はあきらかではない。いま一つの斜行溝SD4992のsfm307とsfm313は、いずれも上縁が突出し、中央が強くくぼむ突帯を呈することから同工品とみられる。sfm313は朝顔形埴輪である。両資料とも突帯間隔15cm程度を測るなど、間隔がやや広い。前述のsfm185とsfm190の場合と同様、IV期の佐紀古墳群の中ではややイレギュラーな特徴をもつ個体において現状ではハケメパターンの一致する個体が見出せる傾向にある。

ところで、Ⅲ群埴輪に位置づけられる資料群に対して、IV群埴輪とりわけIV期の後半に位置づけられる資料は見出すことができていない。各時期の生産量については不分明であるものの、現時点の平城宮

下層植輪窯においてはⅢ期～Ⅳ期前半の資料が主体をなすように思われる。

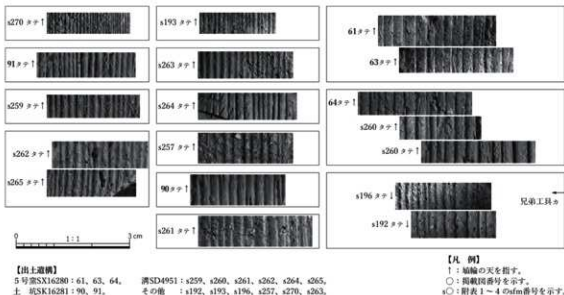
遺跡・古墳間 平城宮下層にくわえて、ウナナベ古墳、大和5号墳、平塚2号墳、神明野古墳、円墳SX15663、方墳SX7800、ヒシヤゲ古墳の植輪のハケメ同定を実施したが、古墳を越えて同じパターンを有するものは見出せていない。ウナナベ古墳と大和5号墳のように、型式学的に近い植輪を有する古墳と、ウナナベ古墳と神明野古墳、あるいは平塚2号墳のようにやや異なるタイプのものが採用される古墳が併存するなど、生産時の距離は古墳ごとに異なっていたと見込まれるが、ハケメ同定からはあきらかにしえなかった。今後の課題としたい。

(3) V 期

平城宮下層資料のうち17点を抽出し、同定をおこなった。ハケメは13パターンが見出され、個体間で一致するのは4例である(第49図)。互いに一致しない個体も多いが、Ⅲ期やⅣ期の事例に比べればハケメパターンの一致率は高く、比較的まとまった生産単位による製品であったとみられる。その他の遺構のsfm192・sfm196と5号窯SX16280の64・溝SD4951のsfm260のハケメパターンは互いに類似し、兄弟工具とみられる点もこの想定を支持する。

個体間で一致するもののうち、sfm262とsfm265は整形時のナデが甘く、断続ナデの痕跡が顕著である。ただし、突帯形状は前者が台形、後者が三角形を呈しており同工品であるかの判断は保留しておく。265はU字形の二重弧線を付すが、同様の資料は菅原東植輪窯SK13でも存在する。sfm197・sfm201、sfm200・sfm260、sfm192・sfm196はそれぞれ同工品とみられる。そのほか、兄弟工具とみられるsfm192・sfm196とsfm200・sfm260の製作時の距離は不明である。

V期の平城宮下層資料は総じて破片資料であり、個体識別も十分にできないため、その評価については慎重を期す必要があるものの、Ⅲ・Ⅳ期に比べればまとまった生産単位による製品とみられる。いっぽうで、複数のハケメパターンが確認できることから、植輪棺などごく少量の搬入品であったともいいたい。近隣における小規模な植輪生産、あるいは小型墳にともなう資料群であったと理解しておく。



第49図 V期の植輪のハケメパターン—5号窯SX16280・土坑SK16281ほか

遺跡間でのハケメ同定は実施できていない。佐紀古墳群の南西では、拠点的生产窯である菅原東植輪窯が操業しており、大和盆地における広域供給の実態からみても平城宮下層資料と関係性を有していたことも十分に考慮されるが、今後の課題としたい。

以上、平城宮下層資料をはじめとして佐紀古墳群東群出土植輪のハケメ同定を実施した。本来的に存在する膨大な資料のごく一部を対象としたに過ぎないため、全容は依然として不明瞭だが、いくつか興味深い事実もあきらかになりつつある。

その一つに、規格の別を越えてハケメパターンの一致する事例があげられる。既往の研究で指摘されてきたそれぞれの規格は、時間的・空間的に近い関係にあったとみなしておくのがよいだろう。また、いくつかの規格が見出せる製作グループでは、佐紀古墳群を構成する複数の古墳に製品の供給をおこなっていたことが確実視されるほか、製作数も相対的に多く、普通口縁のみならず貼付口縁の製作にも関与するなど、中心的なグループであった可能性もある。大型古墳群の植輪生産組織におけるグループ内、グループ間での役割の偏差を抽出していくうえでの重要なデータを提示しうるものといえる。

また、現時点では時期を越えてハケメパターンの一致する事例が見出せないことにも留意しておく必要がある。同時期の資料相互でも一致例が寡少であるため、不一致に過大な意味を見出すことはできないが、明確に時期差をもつ個体同士でパターンが一致する事例は、「同一集団」による生産が想定される地域でもこれまで存在してこなかった。こうした傾向は、佐紀古墳群でも確認できるようである。ハケメ工具の保有形態や耐用期間など含めて今後検討すべき点といえよう。

(木村理)

註

- 1) 宮内庁所蔵のコナベ古墳出土植輪のハケメパターンの画像については、宮内庁書陵部より掲載許可を得た。また、橿原考古学研究所所蔵のウワナベ古墳、大和5号墳、ヒシャゲ古墳出土植輪のハケメパターンの画像については東影悠氏に提供を受けた。記して御礼申し上げる。
- 2) sfm 番号は、附表1～4を参照されたい [pp.177~180]。
- 3) これらは、コナベ古墳ではA・B規格、平塚1号墳ではC規格であるなど、古墳ごとに偏在する。古墳単位である程度のみをみせることからすれば、時間差をもつものとして理解するの一案ではある。

引用・参考文献

- 大澤正吾・加藤一郎 2020 「平城宮東院地区における植輪生産の契機と供給先」『奈良文化財研究所紀要 2020』
- 加藤一郎 2012 「赤井谷1号横穴の植輪とコナベ古墳の植輪—古墳時代中期開始の画期および共通するハケメをもつ植輪について—」『植輪研究会誌』第16号 植輪研究会
- 村瀬 隆 2022 「コナベ古墳併行期の植輪生産とその規格」『植輪論叢』第11号 植輪検討会

挿図出典

第40～49図：筆者作成

コナベ古墳：(宮) 宮内庁書陵部所蔵・(K) 奈良市埋蔵文化財調査センター所蔵、**ウワナベ古墳・大和5号墳**：奈良県立橿原考古学研究所附属博物館所蔵、**六条野々宮古墳・佐紀門外古墳**：奈良市埋蔵文化財調査センター所蔵、**ヒシャゲ古墳**：奈良県立橿原考古学研究所所蔵。上記以外はすべて奈良文化財研究所所蔵。

2 埴輪窯の継続性と古墳の階層構造

Ⅲ～Ⅳ期を操業期間あるいは築造時期とする、平城宮下層埴輪窯と佐紀古墳群東群。ここでは、埴輪生産の継続性、埴輪にみる地域間関係、この2点について簡単にふれておきたい。

(1) 平城宮下層埴輪窯における生産の継続性

かねてより、同一地点で野焼き焼成から窯焼成へと変遷する好例として、平城宮下層埴輪窯は注視されてきた。ウワナベ古墳の特徴的な鱗付円筒埴輪の存在も相俟って、焼成技術の変化と生産集団あるいは製作技術の変化を一体的にとらえ、そこに断絶を読み取ろうとする理解があったように思う。

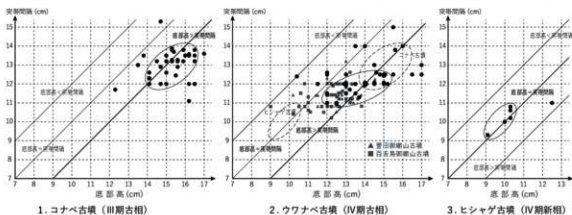
しかし、ウワナベ古墳の鱗付円筒埴輪をめぐるのは、古市・百舌鳥古墳群の埴輪の様相があきらかになってきたなかで、基本的な理解を修正する必要が生じてきた。鱗付円筒埴輪の生産は小規模ながらも継続すること、口縁部高が低い形態は一般的に存在すること、この2点を受けて、形態的な特徴は古市・百舌鳥古墳群に端を発するものであることが判明した。くわえて、副次的な小三角形透孔が存在することもありかとなり、いよいよウワナベ古墳を孤立的に理解できなくなってきた。

そうしたなか、底部高と突帯間隔の数値あるいは相関関係を指標とする規格に注目し、コナベ古墳とウワナベ古墳との連続性を認めようとする立場を村瀬隆が示す(村瀬 2022,p.36)。有効な視点だが、数値を基準とする点、古市・百舌鳥古墳群の様相を考慮に入れていない点、この2つが気にかかる。

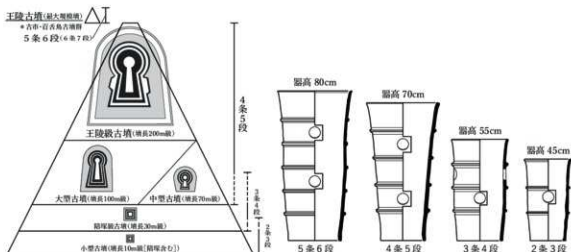
木村理が正しく指摘するように(木村 2022,p.37)、底部高と突帯間隔の相関関係にあらわれる規格を基準に、古市・百舌鳥古墳群の状況も視野に入れて比較したのが第50図である。第50図2をみると、突帯間隔よりも2cmほど底部高が高い一群のなかで、底部高13cm付近の埴輪は古市・百舌鳥古墳群にも認められるが、底部高15cmを超えて、底部高16～17cmで突帯間隔よりも2～4cm高い規格となると、古市・百舌鳥古墳群にはみられない。コナベ古墳には存在するので、コナベ古墳とウワナベ古墳¹⁾、ひいては平城宮下層埴輪窯におけるⅢ期からⅣ期への埴輪生産の継続性を傍証しよう。

(2) 佐紀古墳群東群にみるⅢ期の階層構造

従来、加藤一郎が明快に整理したように(加藤 2021,pp.32~35)、Ⅲ期の円筒埴輪の階層性は4条5段と3条4段だけの素朴なものと理解してきた。しかし、斜行溝 SD4992でⅢ期の2条3段の円筒埴輪



第50図 佐紀古墳群東群における埴輪規格の推移



第51図 佐紀古墳群東群における埴輪の階層構造

を確認できたことはおおきな成果だ（第21図，図版29・30）。小型古墳や陪塚ないし中型古墳が3条4段であれば、墳長10mほどの小型古墳に2条3段の円筒埴輪を樹立したのだろう（第51図）。

Ⅱ期からⅢ期にかけて、6条7段以上的大型円筒埴輪が姿を消し、墳長200mを超す王陵級古墳でも4条5段の円筒埴輪を基調とするように、大幅に小型化がすすむ。にもかかわらず、王陵をのぞけば、4条5段を最大として、3条4段と2条3段を製作することで、3階梯の階層表示機能を円筒埴輪に付与するようになる。とはいえ、段構成を基準とすれば最大でも3ないし4階梯しか設定できない状況では、この2条3段の円筒埴輪の創出による階層表示は当初から限界がみえていた²⁾。そう考えれば、つづくⅣ期古墳には再び円筒埴輪が大型化する現象も理解しやすいかもしれない。

(和田)

註

- 1) Ⅲ期新相の市庭古墳における円筒埴輪の規格は不明なところが多い。なお、平城宮下層埴輪窯あるいは関連遺構では市庭古墳とヒシャゲ古墳の埴輪を視認できない。平城宮造営前は南北に複数の谷筋がはいる地形であり、中央の舌状支丘の平坦面や斜面などを利用して築窯したのだろう。
- 2) Ⅲ期にみる2条3段の創出は、階層性以外に、罫付壺形埴輪などを載せる器台としてつくられた場合もある。

引用・参考文献

- 加藤一郎 2021 「倭の五王の時代における円筒埴輪の規格」『倭王権の考古学』早稲田大学出版部
 木村 理 2022 「古墳時代中期の円筒埴輪」『埴輪の分類と編年』埴輪検討会
 村瀬 隆 2022 「コナベ古墳併行期の埴輪生産とその規格」『埴輪論叢』第11号 埴輪検討会

挿図出典

第50・51図：筆者作成

3 佐紀古墳群東群をめぐる諸関係

佐紀古墳群東群は、Ⅲ期とⅣ期をとおして、古市・百舌鳥古墳群の王陵に次ぐ規模を誇る墳長200m超の王陵級古墳を築造しつづける。古墳築造は多大な労働力を要し、王権中枢による技術の寡占は、中央と地方との関係性を固定化させ、権力の増大を果たす。植輪生産でみるならば、工人の上番ないし派遣をとおして技術が拡散し、他地域へ影響をあたえたとみなせよう。

具体的には、Ⅲ期では立ち飾りに縦分割の文様構成をもつ蓋形植輪が(第22図、図版29)、つづくⅣ期ではウワナベ古墳にみる特殊な形態の踏付円筒植輪¹⁾がひとつの指標となる(図版42)。Ⅲ期では奈良山丘陵を挟んで北側に位置する内田山B1号墳、馬見古墳群の乙女山古墳、さらに遠方では東海地方の西春高塚古墳で認められる。Ⅳ期では、佐紀古墳群の周辺に展開するヤイ2号墳(図版66)や南新コモ川2号墳(図版67)、杉山古墳をはじめ、奈良山丘陵北方の上人ヶ平8号墳、斑鳩の法隆寺下層(図版69-1)、馬見古墳群の川合大塚山古墳(図版68)に認められ、久津川古墳群の芭蕉塚古墳も含めてよいかもしれない。

このようにみると、佐紀古墳群の周縁では奈良山丘陵北方と馬見古墳群の2つの地域が、継続的に佐紀古墳群東群との関係を構築していた様子がわかる。とくに、馬見古墳群は佐紀古墳群とならび「畿内五大古墳群」の一角を占めるとともに(第1図)、川合大塚山古墳の前方が長い墳丘形態はウワナベ古墳と似ている。墳丘規格と植輪生産がともに両古墳群をつなぐものとなるわけだ。

こうした植輪の拡がりは、Ⅲ～Ⅳ期に王権中枢部の巨大古墳群のあいだで強固な連関があったことを意味する。しかも、佐紀古墳群を中心に展開する分布状況、ウワナベ古墳に特徴的な植輪の形態などを考慮すれば、この動向の中心は佐紀古墳群東群にあるとみなせよう。

ただし、注意しておくべきことがひとつある。古市・百舌鳥古墳群の存在だ。Ⅲ期で指標とした縦分割型の立ち飾りをもつ蓋形植輪は、野中宮山古墳にも認められる。冑付盾形植輪が共伴する西春高塚古墳の様相は、むしろ野中宮山古墳との関係性を想起させる。また、Ⅳ期のウワナベ古墳に特徴的な形態の植輪も、口縁部が低い形態は古市・百舌鳥古墳群で通有のものであり、なおかつ副次的な小三角形透かし孔をあける事例が百舌鳥御嶺山古墳に認められる。上記で示した佐紀古墳群東群の特色とみなしたものは、実のところ、古市・百舌鳥古墳群にもあるわけだ。つまり、一連の動向の淵源は古市・百舌鳥古墳群にあるとみるべきだろう。

とはいえ、佐紀古墳群東群を過小評価する必要もまたない。たとえ成立こそ古市・百舌鳥古墳群にもとめられようとも、その完成された姿は佐紀古墳群東群にあるからだ。ウワナベ古墳の状況はそれをつよく感じさせる。古市・百舌鳥古墳群からの影響を受けつつも、佐紀古墳群東群が新たな拠点として周縁地域との結節点となったと理解して差し支えない。

このようにみれば、ウワナベ古墳の築造時期であるⅣ期古相に、佐紀古墳群東群で墳丘規模と階層構造がもっとも卓越する様相は、ウワナベ古墳の位置づけを従来よりも高く評価するのを感じさせる。佐紀古墳群東群ひいてはその築造母体となる集団が内的にはより複雑な階層構造の構築に成功し、外的にも強い影響力を行使した状況を描けよう。ウワナベ古墳が築造されたⅣ期古相こそが、佐紀古墳

群東群の機構がもっとも整備された時期だったのだ。

(和田)

註

- 1) 田中智子による「ウワナベ古墳系列」の定義〔田中2008〕をより厳密にすれば、口縁部高が低い形態を基調とし、細長い方形透孔と副次的な小三角形透孔を配置する形態の鰭付円筒埴輪で、鰭を付加しない場合もある、となろうか。

引用・参考文献

田中智子 2008 「ウワナベ古墳系列の埴輪をめぐる諸問題—上人ヶ平5号埴出土埴輪の検討から—」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会

第3部 関連する諸問題

第1章 大和3号墳出土埴輪の様相と位置づけ

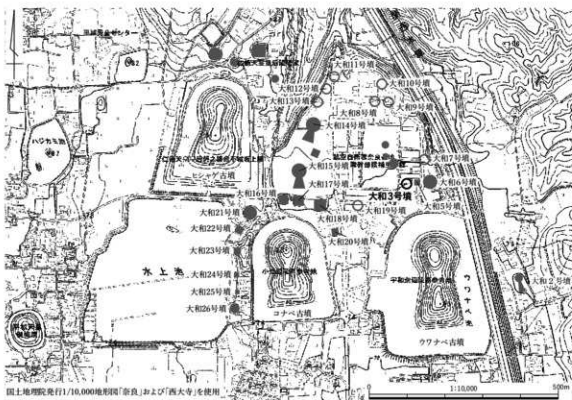
加藤 一郎

はじめに

大和3号墳は佐紀古墳群東群の中核をなす大型前方円墳であるウワナベ古墳（墳長約270 m）に隣接する円墳であり（第52図）、現在は消滅している。ウワナベ古墳を主墳としたばあい、大和3号墳はそれに従属する陪家としてあつかわれることもある。その墳丘規模は、直径31尺（≒9.4 m）とされることが多いが〔末永1950〕、12.6 mとする公文書の情報もある¹⁾。

当墳の埴輪については、末永雅雄による略報に若干の記載があるほか〔末永1950〕、所蔵機関である宮内庁書陵部によって写真が公表されているもの〔宮内庁書陵部陵墓課編2003〕、管見のかぎりでは実測図が公表されたことはないようである。したがって、ここでその詳細を紹介することは佐紀古墳群東群における埴輪の様相を把握するうえで多少なりとも益するところがあると思われる。

なお、『出土品展示目録 埴輪Ⅳ』を含め、本報告においても出土地を「大和3号墳」と「伝・大和3号墳」にわけている。これは、1941（昭和16）年の調査後に宮内省へ出土品が送付されて以降、ながらく未整理の状態で放置されており、それが1979（昭和54）年頃に注記などの作業がなされたものの、



第52図 大和3号墳 位置図

同時に送付されていた大和4号墳と取り違えて注記がなされてしまったものがあるため²¹⁾、確実に大和3号墳出土といえる埴輪が末永による略報に写真が掲載されているものに限定せざるをえないことによる。したがって、「大和3号墳出土」とした資料は末永の略報に写真が掲載されているものであり、「伝・大和3号墳出土」とした資料はそれ以外のものをさす。このような注記の錯誤が判明しており、大和4号墳に埴輪がともなっていたのかどうかについては、末永の略報にも記載がみあたらないため不明であるが、末永の略報に記載がないことと、「大和4号墳」と注記された破片が大和3号墳からの出土が確実な埴輪に接合したことを重視すれば、大和4号墳に埴輪は存在せず、ここで「伝・大和3号墳出土」とした資料が大和3号墳出土品である可能性は高いと思われる。本稿では、その前提で論をすすめる。

ただし、注意されるのは1979(昭和54)年頃に注記された際に作成された遺物台帳の出土年が「昭和20年」と記載されていることである。「昭和20年」は宇和奈辺陵墓参考地旧陪冢ろ号(大和6号墳)から遺物が出土した年次であり、大和3号墳から遺物が出土した形跡はいまのところ確認できない。大和6号墳出土品の注記なども同時期になされたようなので、単なる錯誤である可能性もある。しかし、「3号」と「ろ号」は書きぶりによっては誤読しがたくなることもあるので、悪い想像をすると「大和3号墳」、「大和4号墳」、「大和6号墳(旧陪冢ろ号)」で混交している可能性も排除できない点を指摘しておきたい。

1 大和3号墳出土埴輪(第53図、図版60・61)

ここでふれる大和3号墳や伝・大和3号墳出土とされる埴輪は、その色調が黄白色系となるものと橙色系となるものの二者に大別できる。これはウワナベ古墳と同様の様相といえる。ただし、ウワナベ古墳の埴輪を詳細に観察すると、2020年の調査で出土した個体(第1トレンチ№8)では(清喜ほか2022)、両者が同一個体内でともに使用されている様子が確認できることから、色調の違いが製作集団の違いを反映するようなものではないと考えられる。こうした色調の違いは、粘土の採掘場所の違い(おそらく同一地点における垂直方向での違い)に起因しているものと推測される。そういう意味では、色調の違いは製作集団の違いとは結びつかないが、「製造ロット」とは一定の関係があるかもしれない。

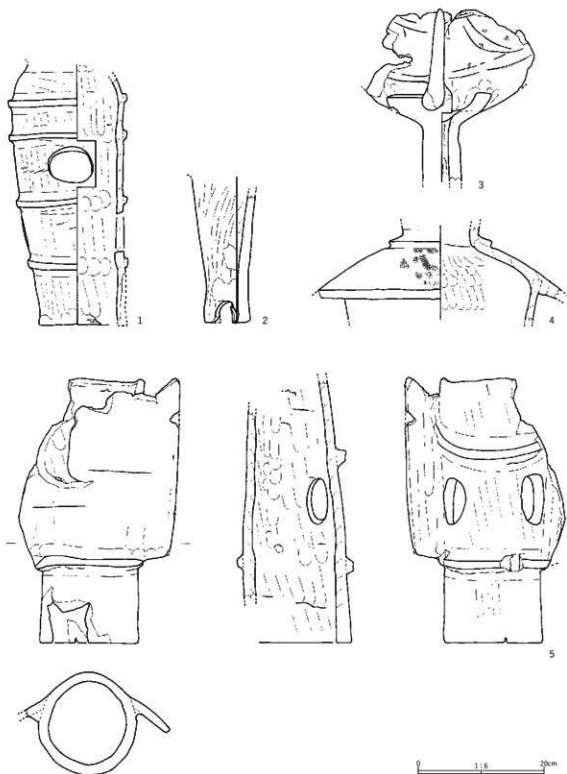
なお、いずれの埴輪にも黒斑はみられず、焼成は密窯によるものと判断される。

以下では、各資料について個別に解説する。

1 『埴輪Ⅳ』(71)は朝顔形埴輪の肩部から底部にかけての破片である。底径は最大で14.5cm、第1段高と第2・3段の突帯間隔は10.0～10.5cm、現存高は41.7cmであり、ウワナベ古墳でみられる通常の円筒埴輪よりも直径が小さいサイズとなっているのが特徴といえる。第2・3段にはそれぞれ2つの円形の透孔があり、第2段と第3段とで直交する方向に穿たれている。内外面ともに調整はナデで、第2・3段の外面上は上方の突帯を板押しした痕跡がみられる。第4段は突帯間隔が狭くなっているが、これがウワナベ古墳でみられる通常の円筒埴輪からの影響であるのか、たまたまそうなったのか²²⁾は不明である。

2 『埴輪Ⅳ』(70)は底部に接してえぐりがあることから、有蹄類に属する四足動物の脚部の破片と考えられる。ウマ、ウシ、シカなどの可能性があろう。器壁外面に黒斑はみられないものの、破面は黒色となっており、これは密窯焼成導入期にしばしばみられる特徴といえる。本資料の成形方法は粘土紐

の積み上げであったのか、あるいは粘土板をまるめたのか不明である。なお、再切開技法は使用されていないようである。現存高は23.1cm、底径は7.0cmであり、四足動物の埴輪としては小型な部類になると思われる。



第53図 大和3号墳出土埴輪実測図

3・4〔埴輪Ⅳ〕(68)は同一個体と考えられる蓋形埴輪の破片である。3は立飾部の破片であるが、軸部分は粘土紐の積み上げによる成形ではなく、粘土板を筒状にまるめただけのようである。内面には絞り目がみられる。この軸部分のうえにU字状の飾板をのせ、さらにそれに直交する方向に2枚のJ字状の飾板を接合することで成形されている。4は笠部の破片である。この蓋形埴輪は単体で配置されたのではなく、円筒埴輪に載せて使用されたと考えられる。基部の径は最大で31.4cmであり、当埴周辺でみられる直径の小さいタイプの円筒埴輪と組み合わせることができたかどうかは微妙である。

5〔埴輪Ⅳ〕(69)は盾形埴輪とされてきたが盾持人埴輪である可能性もあると考える。本資料の盾面には現状で横方向に2本、縦方向に1本の線刻が部分的にみられるのみであり、盾形埴輪とするには盾の表現が簡略化されすぎている感がある。現存高は42.6cmである。

2 伝・大和3号埴出土埴輪 (第54・55図, 図版62・63)

6〔埴輪Ⅳ〕(78)右は円筒埴輪の第1～2段の破片である。第1段高は13.7cm、底径は36.0cmである。第1段には内外面ともにタテハケがほどこされている。第2段外面にはわずかにヨコハケを確認できる。7〔埴輪Ⅳ〕(78)左は円筒埴輪の第1～2段の破片である。第1段高は12.7cm、底径は31.4cmである。外面調整はタテハケののちに静止痕をもつヨコハケがほどこされている。内面にはハケがみられるほか、板ナデのようにみえる調整もある。6・7については、ウツナベ古墳でみられる通常の円筒埴輪と同様の特徴をもつものといえる。

8〔埴輪Ⅳ〕(77)は円筒埴輪の口縁部を含む破片である。口縁部高は10.4cm、口径は30.0cmである。口縁部の間隔は狭くなっておらず、突帯はあまり突出していない。外面調整は板ナデもしくはナデと思われる。1と同様にウツナベ古墳でみられる通常の円筒埴輪よりも直径が小さくなるものであろう。

9・10〔埴輪Ⅳ〕(75・76)は接合しないものの、同一個体に帰属すると思われる朝顔形埴輪の破片である。9は口縁部を含み、口径は38.8cmである。調整は内外面ともにハケがみられる。10は頸部から円筒部にかけての破片で、頸部には突帯がある。外面調整は板ナデあるいは指ナデと思われる。

11〔埴輪Ⅳ〕(72)右は比較的大型となりそうな盾形埴輪の破片である。内区の菱形状と外区の鋸歯状がみられ、通常の施紋方法といえる。

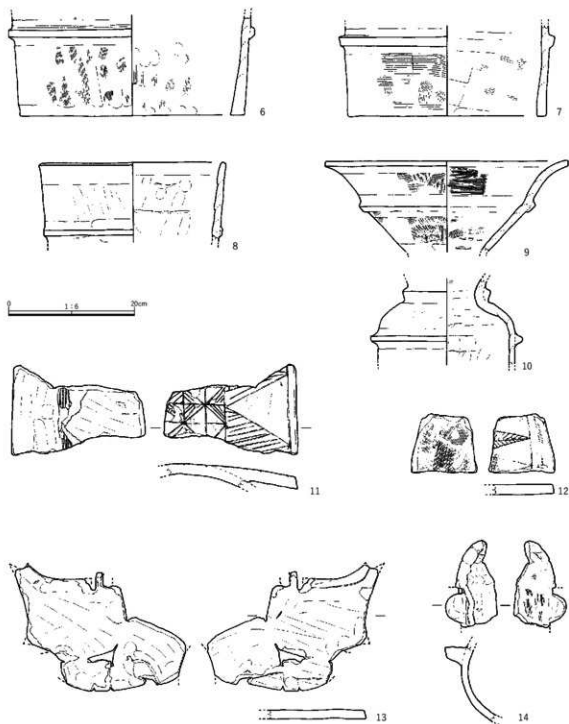
12〔埴輪Ⅳ〕(72)左は盾形埴輪の破片である。外区の鋸歯状がみられるが、図の上方の鋸歯状は頂点から線が引かれて内部が二分されており、そこに斜めに配置された平行線が充填されている。また、下方の鋸歯状の内部は無紋である。こうした施紋方法の盾形埴輪は倭王権中継域ではやや異例であるが、周辺地域ではしばしばみられる。

13〔埴輪Ⅳ〕(73)と14〔埴輪Ⅳ〕(74)はこれまで不明形象埴輪とされてきたが、靱形埴輪の可能性があると考える¹⁾。13は背負板の上部の破片で、片面には線刻が若干みられる。14は紐通し孔の部分を含む破片であると思われる。

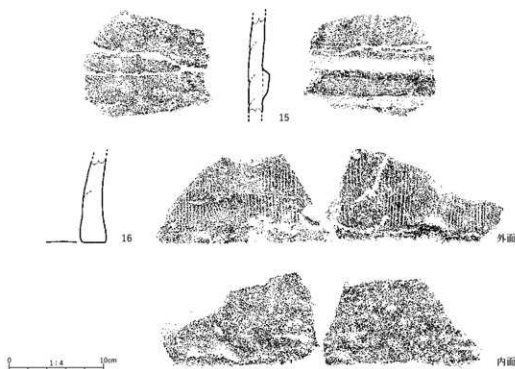
15・16〔埴輪Ⅳ〕に掲載なし)は接合しないものの、同一個体に帰属すると思われる円筒埴輪の破片である。どちらも色調は黄白色である。15は突帯を含む破片で、通常のものよりも幅広い突帯となっていることが特徴である。外面調整は上段がヨコハケで、下段がタテハケとなっていることからこの突帯が第1条突帯であると判断される。内面調整は左上方向のナメハケもしくはナデである。16は底

部を含む第1段の破片で、外面調整はタテハケである。内面調整は左上方向のナナメハケもしくはナデである。底径は最低でも60cmはあると推測される。したがって、この15・16の個体はウワナベ古墳でみられる通常の円筒埴輪よりも直径が大きいサイズになるものといえる。

なお、実測図は掲載しなかったが、図版63-3の左側の破片は形象埴輪である。平行する2本の線刻がみられ、盾形埴輪（あるいは盾持人埴輪）の盾面側縁部、あるいは家形埴輪となる可能性があらう。



第54図 伝・大和3号墳出土埴輪実測図(1)



第55図 伝・大和3号墳出土埴輪実測図(2)

3 大和3号墳出土埴輪の様相と位置づけ

ここまで大和3号墳出土埴輪と伝・大和3号墳出土埴輪を紹介してきたが、以下ではこれらの埴輪がすべて大和3号墳に帰属するものとして話をすすめたい。

まず、大和3号墳出土埴輪の特徴は以下のようにまとめることができる。

- ・ウワナベ古墳で通常みられるものと同様の円筒埴輪がみられる
- ・ウワナベ古墳よりも小型な円筒埴輪(朝顔形埴輪)が存在する
- ・ウワナベ古墳外堤で確認されている大型円筒埴輪が存在する
- ・形象埴輪としては、蓋形埴輪、盾形埴輪、鞍形埴輪、動物埴輪、盾持人埴輪が確認できる
- ・形象埴輪にも比較的小型のものが存在する

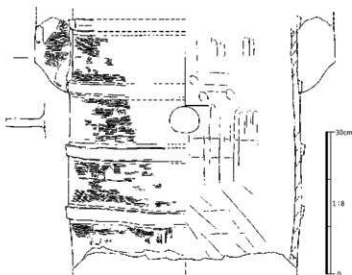
これらのことを踏まえると、大和3号墳の埴輪はウワナベ古墳で通常みられるものを含みつつ(6・7)、ウワナベ古墳では確認されていない小型の埴輪も共存しているといえる(1・8)。また、四足動物をあらわした埴輪も存在しており(2)、これは野中宮山古墳や粟塚古墳などとともに出現期のものといえる。

これらのことを主墳であるウワナベ古墳と比較して単純に時期差とみる(後出する要素と考える)ことも可能ではあるが、同じ特徴をもつ埴輪が存在することも考慮すれば、わずかに後出する可能性は十分にあるものの、大局的にはウワナベ古墳と同時代に帰属すると判断したい。

筆者は以前、蒼田御廟山古墳と同時期の主墳(ウワナベ古墳を含む)と陪家では同種の円筒埴輪が使用され、次の段階の大山古墳の時期になると陪家の円筒埴輪が径も段構成も小さくなることを指摘した

ことがある(加藤2017)。大和3号墳では筆者が旧稿で指摘した次の段階、大山古墳の段階の様相が出現しつつあり、それが共存している状況といえるかもしれない。

この大和3号墳でみられる小型の円筒埴輪(朝顔形埴輪)は、底部調整がなされていないものの、いわゆるV群円筒埴輪とみなせる要素を多く満たしており、V群円筒埴輪につながっていく様相をとらえられる点で重要な資料といえる。旧稿では王墓の築造ごとに主墳と陪家における円筒



第56図 ウワナベ古墳外堤出土の大型円筒埴輪

埴輪の規範が刷新されていたことも指摘したが(加藤2017)、規範が刷新されていくなかでV群円筒埴輪につながっていく小型の円筒埴輪が側出されたと理解できる可能性がある。

あるいは、大和3号墳の様相から考えると四足動物の出現期から小ぶりなものが存在しており、そうした小型な形象埴輪と調和をとるために小型な円筒埴輪も必要とされたのかもしれない。

また、今回の整理作業によって大型円筒埴輪の存在を確認できたことも成果といえる(第55図)。同様の円筒埴輪は周辺ではウワナベ古墳外堤のほか(第56図)、杉山古墳でも確認されており、こうした埴輪が限定的ではあったと推測されるが古墳で使用されていたことがわかる。

なお、今回紹介した大型円筒埴輪については、ウワナベ古墳外堤の埴輪が混入している可能性もあるかもしれないが、公文書のみをかぎり当時の発掘位置は墳丘本体部分のみであり、その可能性は低いと判断する。ただし、ウワナベ古墳の陪家としての外堤と関連をもっていた可能性は十分にある。

おわりに

大和3号墳では、主墳であるウワナベ古墳における通常の円筒埴輪が存在しつつ、小型の円筒埴輪も存在することが確認できた。この小型の円筒埴輪は、V群円筒埴輪につらなる特徴をそなえており、その位置づけは非常に重要といえる。本稿では、主墳と陪家の円筒埴輪の規格の推移のなかで菅田御嶽山古墳から大山古墳へと変遷する過渡的状況とみる評価と、小型な形象埴輪と調和をとる必要性が作用した、という二つの可能性を指摘した。

このうち前者については、大山古墳周辺における陪家の円筒埴輪の様相がV群円筒埴輪を想起させるほど小型化しているわけではない点を考えると、その蓋然性は低そうである。そうであれば後者の可能性が高くなるが、ここであげた以外にも小型化の理由は存在しうるので確定させることはむずかしい。しかし、蓋然性の高い理由の一つにはなろう。あえていえば大和3号墳における埴輪の様相は、ウワナベ古墳を中心とする古墳複合体の造営という一連のプロジェクトに含まれつつも、ウワナベ古墳と比較するとやや新しい要素も発現していると評価できるだろう。

ウワナベ古墳における通常の円筒埴輪はその後周辺地域に定着し、変遷をとらえられることから、「ウワナベ古墳系列」といった名称も設定されている〔田中2008〕。そうした系列が存在する一方でV群円筒埴輪につながる要素も出現していることは注意されてよい。

追求すべき課題は多く残っているが、大和3号墳出土埴輪の様相を提示したことで最低限の責務は果たしたと思いたい。

註

- 1) 宮内庁宮内公文書館所蔵の『考証録昭和16年』（識別番号8565）による。
- 2) 大和4号墳と注記された破片が、未永の略報に掲載された大和3号墳のものに接合することが判明した。
- 3) 朝顔形埴輪ではしばしばみられる。
- 4) 両者は同一個体の可能性がある。

引用・参考文献

- 加藤一郎 2017「大型古墳とその陪塚の円筒埴輪」『埴輪研究会誌』第21号 埴輪研究会
- 宮内庁書陵部陵墓課編 2003『出土品展示目録 埴輪Ⅳ』宮内庁書陵部
- 宮内庁書陵部陵墓課編 2017『宇和奈辺陵墓参考地田陪塚ろ号（大和6号墳一出土物の整理報告一）』宮内庁書陵部
- 未永雅雄 1950「宇和奈辺古墳群 大和第三、第四号古墳（円形墳）」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第四輯 奈良県史蹟名勝天然記念物調査委員会
- 清高裕二・有馬伸・横田真吾 2022「宇和奈辺陵墓参考地整備工事予定区域事前調査」『書陵部紀要』第73号（陵墓編） 宮内庁書陵部
- 田中智子 2008「ウワナベ古墳系列の埴輪をめぐる諸問題—上人ヶ平5号墳出土埴輪の検討から—」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会
- 吉村和昭・井上主税 2008「佐紀古墳群（教育講堂地区・ウワナベ古墳中堤～外堤）」『奈良県遺跡調査概報 2007年』（第1分冊）奈良県立橿原考古学研究所

挿図出典

- 第52図：宮内庁書陵部陵墓課編 2017 第6図を一部改変
- 第53～55図：筆者作成
- 第56図：吉村・井上 2008 図6を一部改変

付記

本稿は科研費にともなう研究協力依頼にもとづく業務著作であり、本稿の写真図版などの使用に際して執筆者への申請は不要です。ただし、使用方法に応じて発行者や原品（写真原版）所蔵者への申請はおこなってください。

第2章 中期大型前方後円墳における周庭帯の埴輪配置

東 影 悠

はじめに

古墳時代中期の大型前方後円墳は、その周囲に一重あるいは二重の周濠と堤を構築し、堤上には円筒埴輪を中心とした埴輪の配置が行われることが基本となる。特に、中期前半から後半にかけてコナベ古墳、ウツナベ古墳、ヒシヤゲ古墳（いずれも奈良県奈良市）という3基の大型前方後円墳が断続的に築造された佐紀古墳群東群では、それぞれにおける周庭帯〔末永1962〕の円筒埴輪配置の様相が断片的ではあるものの明らかになっており、その変遷と意義については前稿で検討した〔東影2023〕。そこで本稿では、佐紀古墳群で確認した様相が畿内地域の中でどのように位置づけられるのかを比較することによって、周庭帯の埴輪配置の特徴を明らかにする。周庭帯の円筒埴輪配置については、密に並べられることを基本とする埴輪本体の円筒埴輪配置と比較して古墳それぞれの個性が発現しやすいと想定され、その系譜関係を検討することは、各古墳の築造背景を明らかにするうえでも有効な視点と考える。

1 佐紀古墳群東群における大型前方後円墳周庭帯の埴輪配置

前稿にて確認した佐紀古墳群東群における周庭帯の埴輪配置の特徴を簡潔にまとめ、その成果を振り返ることとする（第57-58図）。

（1）周庭帯の埴輪配置の特徴

コナベ古墳 墳丘長約210mの前方後円墳であり、墳丘の周囲に周濠と外堤、外堤の外側に外周溝がめぐり、中期前半の築造とみられ、円筒埴輪編年〔埴輪検討会事務局2022〕Ⅲ期に位置付けられる。墳丘では、第1段テラス面と西側造り出して円筒埴輪列が確認されている。第1段テラス面では、後円部および前方部の主軸上でそれぞれ円筒埴輪列が検出され、後円部では底部の直径22～25cm、前方部では底部の直径約30cmの円筒埴輪がともに芯々間距離35～40cmで密に並べられていた。いずれも4条突帯5段構成の円筒埴輪を主体とするようである。

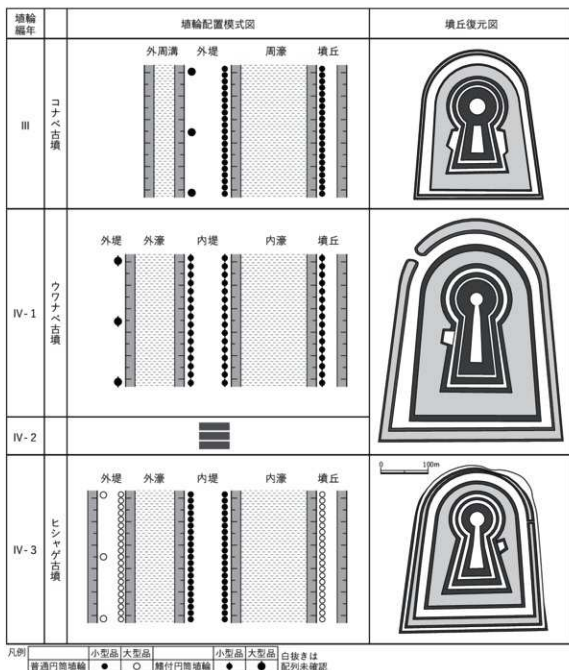
周庭帯では、外堤上内側および外側の円筒埴輪列が検出されている。外堤上内側の円筒埴輪列では、底部の直径20～23cmの円筒埴輪が芯々間距離45～50cmで並べられていた。全体の構成は不明なもの、底部の直径が墳丘の円筒埴輪と近似することから、外堤上内側の円筒埴輪も4条突帯5段構成であった可能性が高い。一方、外堤上外側の円筒埴輪列では、底部の直径約40cmの円筒埴輪が芯々間距離約8.7mで並べられていた。よって、外堤上には小型品をもちいた密な配置となる内側埴輪列と大型品をもちいた8.7m間隔の点的な配置の外側埴輪列があり、外堤上内側と外側で円筒埴輪配置の様相が異なることが特徴となる。前稿では外堤上外側に罎付円筒埴輪が配置された可能性を指摘したが、罎の破片と外堤上外側の底部の特徴はやや異なっており、この点についてはなお検討を要する。

ウツナベ古墳 墳丘長270～280mの前方後円墳であり、墳丘の周囲に二重の周濠と堤がめぐり、外濠の外側には外堤があると想定されるものの、現状ではその外斜面は確認されていない。中期後半の築

造とみられ、円筒埴輪編年Ⅳ期1段階に位置付けられる。墳丘および内堤上、外堤上でそれぞれ円筒埴輪列が確認され、いずれも特徴的な透孔形状と配置をとる鰭付円筒埴輪が出土している。

墳丘では、後円部および前方部の第1段テラス面で円筒埴輪列が確認された。ともに、底部の直径約32～35cmの鰭付円筒埴輪が芯々間距離45～50cmで検出されており、円筒埴輪が密に並べられていた。これらは基本的に6条突帯7段構成となる。

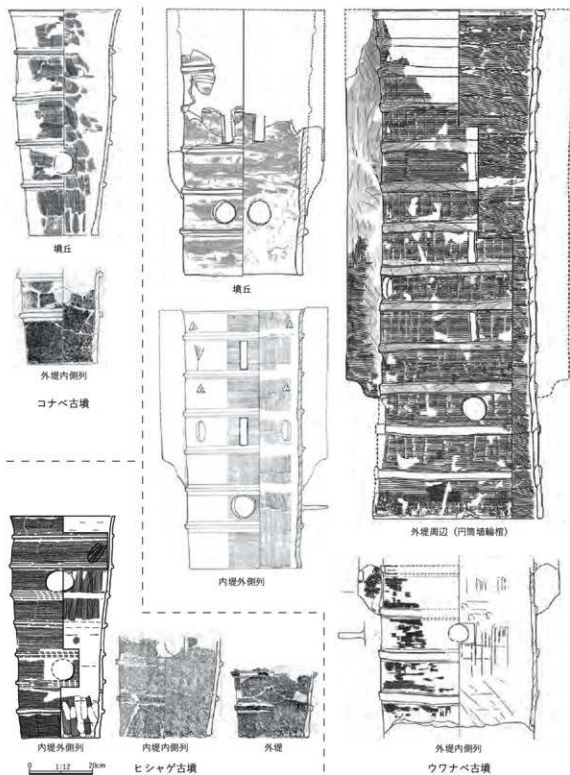
周庭帯では、内堤上内側および外側と外堤上内側の円筒埴輪列が確認されている。内堤上内側および外側の円筒埴輪列では、ともに底部の直径約30cmの円筒埴輪が芯々間距離約45cmで並べられていた。



第57図 佐紀古墳群東群における周庭帯の埴輪配置の変遷

内堤上外側の円筒埴輪は6条突帯7段構成の鱗付円筒埴輪であり、内堤上の円筒埴輪列は内側・外側ともに同規格のものが同様な間隔で密に並べられていたとみられる。

外堤上では、底部の直径約50cmの鱗付円筒埴輪の大型品が芯々間距離約7.5mで並ぶことが外濠沿



第58図 佐紀古墳群東群の円筒埴輪

いで確認されている。その周辺より底部の直径約50cm、高さ約1.6m、12条突帯13段構成となる大型の鯉付円筒埴輪が出土したことから、外堤上に点的に配置された円筒埴輪はいずれもこうした大型品であったと想定される。外堤の発掘調査はこれまで十分に行われておらず、外堤上の外側部分の円筒埴輪は未確認である。外堤上外側に円筒埴輪があった場合、外堤上内側と同様に大型品をもちいた点的な配置であった可能性が考えられる。いずれにしてもウワナベ古墳では、内堤上の円筒埴輪は小型品が密に並べられ、外堤上の円筒埴輪は大型品をもちいた点的なものとなり、内堤と外堤で円筒埴輪配置の様相が異なることが特徴となる。

ヒシャゲ古墳 墳丘長219mの前方後円墳であり、墳丘の周囲に二重の周濠と内堤および外堤がめぐる。中期後半の築造とみられ、円筒埴輪編年Ⅳ期3段階に位置付けられる。墳丘の円筒埴輪は検出されておらず、円筒埴輪も全体形状が不明なものの、底部の直径約27cmとなる資料がある。

周庭帯では内堤上内側および外側の円筒埴輪が確認されており、ともに底部の直径25～27cmの円筒埴輪が芯々間距離35～40cmで密に並べられていた。7条突帯8段構成に復元された個体があることから、いずれもこの規格の円筒埴輪であったと想定される。なお、内堤上内側の円筒埴輪中には底部の直径約31cmと大型で突帯間隔もやや広い個体があり、内堤上内側には外側に比べて若干規格の大きい円筒埴輪が並べられていた可能性もある。外堤上の円筒埴輪は検出されていないものの、円筒埴輪片の出土から、本来は円筒埴輪が存在したとみられる。底部の直径22～25cmと、直径約32cmの大小2種類の規格が認められる。

ヒシャゲ古墳では、内堤上の円筒埴輪には小型品が密に並べられていた。外堤上の様相は不明なもの、大小2種類の規格の円筒埴輪があることから、内側は小型品が密に、外側は大型品が点的に配置された可能性が考えられる。この想定が妥当ならば、内堤と外堤で円筒埴輪配置の様相が異なるとともに、外堤上の内側と外側でも様相が異なることになる。

(2) 佐紀古墳群東群の埴輪配置の変遷と系譜

佐紀古墳群東群においては、従来からウワナベ古墳の特徴的な鯉付円筒埴輪の特異性が注目されてきた。これらはウワナベ系列と呼称され、共通性を有する一群が各地に展開することも大きな特徴として指摘されている〔田中2008〕。ウワナベ古墳に先行して築造されたコナベ古墳では、鯉を有さない円筒埴輪が主体を占める。コナベ古墳での鯉付円筒埴輪の有無はなお検討を要するが、コナベ古墳と同じハケメパターンを有する赤井谷1号横穴の円筒埴輪には横幅の狭い長方形透孔を有する個体もあることから、コナベ古墳からウワナベ古墳へと継続する緩やかな系譜関係を想定することも可能となる。コナベ古墳とウワナベ古墳の円筒埴輪には、底部高と突帯間隔の規格の共通性が認められるとの指摘〔村瀬2022〕もこれを傍証する。一方、ウワナベ古墳に後続して築造されたヒシャゲ古墳では鯉付円筒埴輪は認められず、底部高や突帯間隔といった規格もウワナベ古墳とは異なる。同時期の百舌鳥古墳群（大阪府堺市）からの影響関係が強いとみられるが、口縁部高が突帯間隔に比べて狭くなる点はウワナベ古墳からの系譜を引くと想定される〔小栗・東影2022〕。

つまり、コナベ古墳、ウワナベ古墳、ヒシャゲ古墳では、それぞれ異なる特徴の円筒埴輪が配置されたようにみられるものの、その規格に注目すると3基をつなぐ埴輪生産の系譜的連続性を緩やかながらも認めることができる。コナベ古墳とウワナベ古墳の埴輪はともに平城宮下層埴輪室（奈良県奈良市）

で生産されたとみられ〔大澤2021〕、生産組織の緩やかな改編があったと想定されるものの、基本的には同一製作者集団によって生産が継続していたとみられる。ヒシャゲ古墳に供給された埴輪の生産地は不明であり、胎土の特徴も平城宮下層埴輪窯の埴輪とはやや異なるものの、古墳の立地を考えるとそれほど離れた場所で生産されたとも考えにくい。ウナベ古墳とヒシャゲ古墳は、円筒埴輪編年における1段階の空白期間があることから、ここで埴輪生産組織の改編などがあった可能性も想定される。ただし、上述したように緩やかながらも系譜的連続性を有するとみられることは、以下で述べる周庭帯の埴輪配置の変遷ともかかわって重要である。

佐紀古墳群東群の周庭帯における埴輪配置の変遷をまとめる。コナベ古墳では、外堤上内側の円筒埴輪列で小型品を密に、外堤上外側の円筒埴輪列で大型品を点的に配置していた。ウナベ古墳では、内堤上内側・外側の円筒埴輪列で小型品を密に、外堤上内側の円筒埴輪列で大型品を点的に配置していた。コナベ古墳、ウナベ古墳ともに最も外側の円筒埴輪列が大型品をもちいた点的な配置になるという点が共通する。コナベ古墳とウナベ古墳は至近距離にあること、同一製作者集団による埴輪生産が想定されることから、ウナベ古墳の築造時に隣接するコナベ古墳の埴輪配置を踏まえた可能性が高い。コナベ古墳は周濠が一重であり、大型品の点的な配置が外堤上外側の埴輪列であったが、ウナベ古墳では二重周濠となったことから二重目の堤（外堤）の内側で行われるように変化したのである。

なお、コナベ古墳の周庭帯には、およそ2,100本の円筒埴輪が配置されたと想定されるが、ウナベ古墳では約5,600本の配置と想定され、その数は倍増する〔東影2023〕。ウナベ古墳の円筒埴輪がコナベ古墳に比べ総じて大型であることと墳丘規模の拡大、二重周濠をそなえることなど、古墳築造に関わる労働力の観点からは、ウナベ古墳の築造に関わる労働力はコナベ古墳とは圧倒的な格差があったと読み取ることが可能である。

ヒシャゲ古墳では外堤の埴輪列が未検出でありその様相が不明なもの、底部径の大きな大型品が外堤で出土していることから、ウナベ古墳と同様に最も外側の円筒埴輪列は大型品をもちいた点的な円筒埴輪配置であった可能性がある。一方、内堤に配置された円筒埴輪と同様の底部径の小さな小型品もあることから、外堤上の円筒埴輪配置は内側と外側の二重となり、内側が小型品をもちいた密な配置、外側が大型品をもちいた点的な配置であったと考えることもできる。

以上のように佐紀古墳群東群における周庭帯の埴輪配置は、3基を通じて系譜を有する段階的な変遷を追うことができる。このことは、前述したように円筒埴輪に認められた緩やかな系譜関係とも矛盾するものではなく、埴輪生産と埴輪配置が有機的に関連するものであったことを具体的に示す。

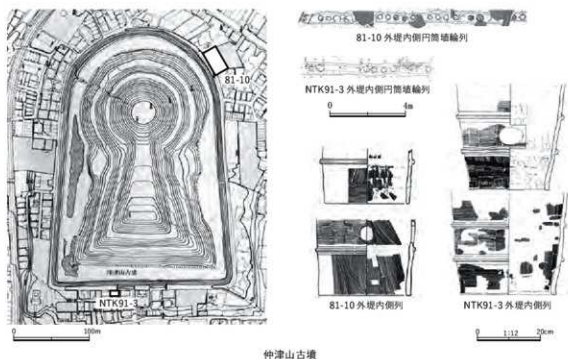
2 中期の大型前方後円墳周庭帯の埴輪配置

前節において、佐紀古墳群東群の大型前方後円墳における周庭帯の埴輪配置の変遷を明らかにした。佐紀古墳群東群で認められた様相は、中期の畿内地域の大規模前方後円墳に特有の現象として位置づけられるのだろうか。ここでは、中期の古市古墳群（大阪府藤井寺市・羽曳野市）、百舌鳥古墳群（大阪府堺市）、久津川古墳群（京都府城陽市）の様相を検討し、それらとの比較を通じてその実態を明らかにしていく。

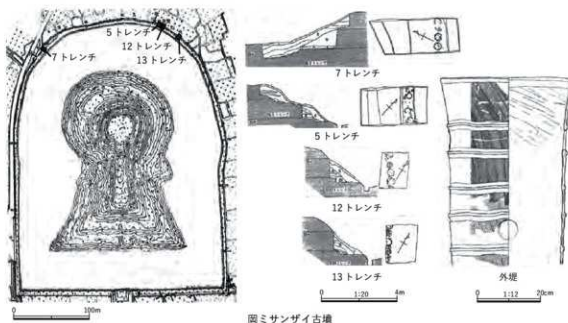
(1) 古市古墳群

中期の古市古墳群では、円筒埴輪編年Ⅲ期に仲津山古墳（藤井寺市）、Ⅳ期1段階に菅田御嶽山古墳（羽曳野市）、Ⅳ期3段階に前の山古墳（同市）、市野山古墳（藤井寺市）、Ⅴ期1段階に岡ミサンザイ古墳（同市）と相次いで大型前方後円墳が築造された。このうち、周庭帯の円筒埴輪配置が明らかになっているのは、仲津山古墳と岡ミサンザイ古墳である（第59図）。

仲津山古墳は、墳丘長290mの前方後円墳であり、墳丘の周囲に周濠と外堤がめぐる。中期前半の



仲津山古墳



岡ミサンザイ古墳

第59図 古市古墳群における周庭帯の埴輪配置

築造とみられ、円筒埴輪編年Ⅲ期に位置付けられる。外堤上内側の円筒埴輪列は確認されているものの、外側の円筒埴輪列の存否は明らかでない。外堤上内側の円筒埴輪列は、底部の直径約25cmの円筒埴輪が芯々間距離40～50cmで並んでいた。円筒埴輪は全体形状が不明なものの底部径は小型であり、器高・突帯数ともに比較的小型の円筒埴輪とみられる。なお、外堤上の発掘調査は実施されているが、外側の円筒埴輪列そのものは検出されていない。外堤上外側の埴輪列があると想定される付近で円筒埴輪片がまとめて検出されており、それらが外側の円筒埴輪列を構成するものであった可能性がある。ここでは、底部の直径約28cmの円筒埴輪が検出されており、外堤上内側で検出された円筒埴輪よりも若干大きなものとなるが、器高や突帯数は判明しておらず、外堤上の内側・外側での円筒埴輪の規格の差異は不明である。

菅田御廟山古墳は、墳丘長425mの前方後円墳であり、墳丘の周囲に二重の周濠と堤がめぐる。中期中頃の築造とみられ、円筒埴輪編年Ⅳ期1段階に位置付けられる。周濠帯の円筒埴輪列は未検出であり、その配置は不明なものの、外堤付近の発掘調査では、底部あるいは胴部の直径40～50cmの円筒埴輪が多く出土しており、外堤上には大型の円筒埴輪が配置されていたと想定される。

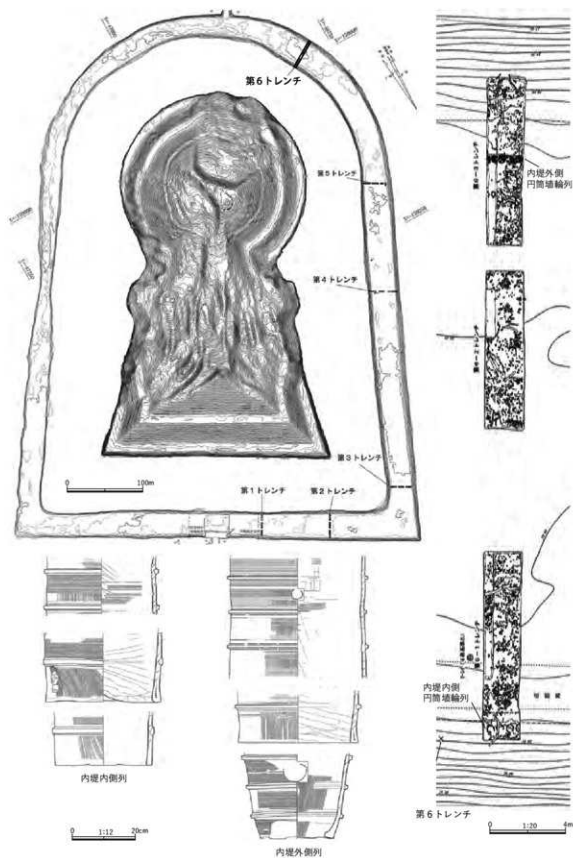
岡ミサンザイ古墳は、墳丘長245mの前方後円墳であり、墳丘の周囲に周濠と外堤がめぐる。中期末の築造とみられ、円筒埴輪編年Ⅴ期1段階に位置付けられる。外堤上外側の円筒埴輪列が確認されているものの、内側の円筒埴輪列の存否は明らかでない。外堤上外側の円筒埴輪列は、底部の直径30～40cmの円筒埴輪が芯々間距離40～50cmで並んでいた。5条突帯6段構成以上となる円筒埴輪が付近から出土しており、外堤上外側の円筒埴輪列には比較的大型のものが相接するように密に配置されていたとみられる。

(2) 百舌鳥古墳群

百舌鳥古墳群では、円筒埴輪編年Ⅲ期に上石津ミサンザイ古墳と百舌鳥大塚山古墳、Ⅳ期1段階にイタスケ古墳と百舌鳥御廟山古墳、Ⅳ期2段階に大仙陵古墳と田出井山古墳、Ⅳ期3段階に土師ニサンザイ古墳（いずれも大阪府堺市）と相次いで大型前方後円墳が築造されたものの、周濠帯の円筒埴輪配置が明らかになっているのは大仙陵古墳の内堤¹⁾のみである（第60図）。

大仙陵古墳は、墳丘長525mの前方後円墳であり、墳丘の周囲に三重の濠と二重の堤がめぐる。内堤の発掘調査によって、内堤上の内側および外側の円筒埴輪列が確認された。内堤上内側の円筒埴輪列は底部の直径30～35cmの円筒埴輪が芯々間距離約50cmで、外側の円筒埴輪列は底部の直径30～35cmの円筒埴輪が芯々間距離40～45cmでそれぞれ並べられていた。内側と外側の両円筒埴輪列にもちいられた円筒埴輪の規格には差異が認められない。内側の配置間隔が外側に比べて若干広いものの、発掘調査範囲が限定的なため、誤差の範囲ともいえる。内堤上では内側・外側の両円筒埴輪列ともに同規格の円筒埴輪がほぼ同じような間隔で密に並べられていたという点を大仙陵古墳の特徴として指摘しておく。

なお、墳丘の周囲に二重の濠と堤がめぐる墳丘長365mの前方後円墳である上石津ミサンザイ古墳では、部分的な調査であるものの内堤および外堤の発掘調査において埴輪片が出土しないことから、内堤・外堤ともに円筒埴輪列は配置されなかった可能性が指摘されている（白石2008）。このように、百舌鳥古墳群の周濠帯の埴輪配置には未だ不明な点が多く、今後の発掘調査による実態説明が期待される



第60図 大仙陵古墳における周庭帯の植輪配置

状況といえる。

(3) 久津川古墳群

山城地域に所在する久津川古墳群では、中期前半に築造された墳丘長180mの前方後円墳である久津川車塚古墳(京都府城陽市)を中心に墳丘および周濠帯における円筒埴輪配置の様相〔小泉1996〕が明らかになっている。外堤上外側に円筒埴輪を点的に配置するという在り方が佐紀古墳群東群と共通するとの見通しは指摘されていたものの(廣瀬2002)、その詳細な検討は未だ行われていないため、ここでは配置のあり方を検討していく(第61・62図)。

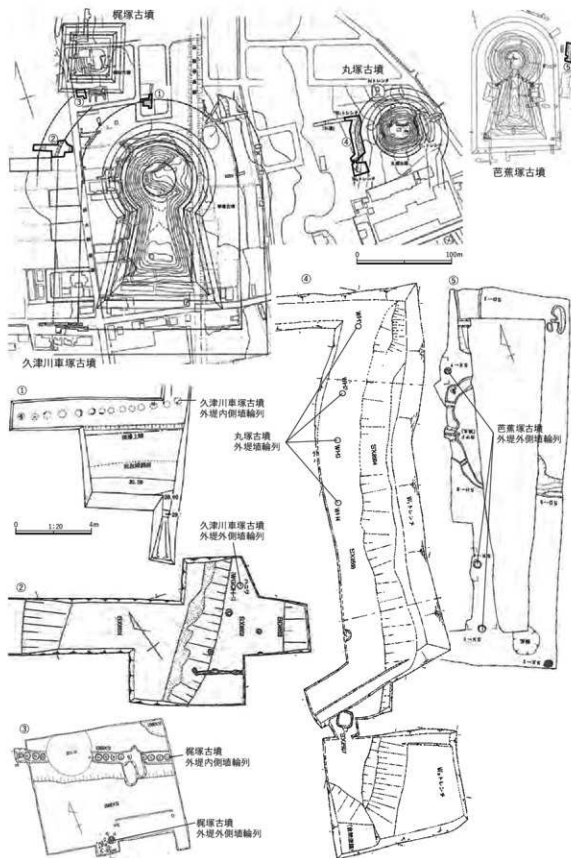
久津川車塚古墳は、墳丘長約180mの前方後円墳であり、墳丘の周囲に周濠と外堤、外周溝がめぐる。円筒埴輪編年Ⅲ期に位置づけられる。墳丘頂と墳丘テラス面および外堤上において円筒埴輪が確認されている。墳丘では、第一段テラス面および西造り出しにおいて円筒埴輪が検出されている。第一段テラス面では、底部の直径約30cmの円筒埴輪が、芯々間距離35～45cmで密に並べられていた。西造り出し上面の外縁に沿って検出された円筒埴輪列は、底部の直径20～27cmの円筒埴輪が密に並べられていた。この円筒埴輪列には墳丘側の面に食い違い部分があり、コナベ古墳の造り出しの埴輪配置との共通性が指摘できる。

外堤上では、内側および外側の円筒埴輪列が確認されている。外堤上内側の円筒埴輪列には、底部の直径25～30cmの円筒埴輪が芯々間距離50～60cmで配置されていた。一方、外堤上外側の円筒埴輪列には底部の直径30～35cmの円筒埴輪が芯々間距離10m以上の間隔で配置されており、外堤上内側の様相とは大きく異なる。このように久津川車塚古墳では、外堤上の内側と外側で円筒埴輪配置の様相が異なり、内側は小型品を密に、外側は大型品を点的に配置するという様相が認められた。

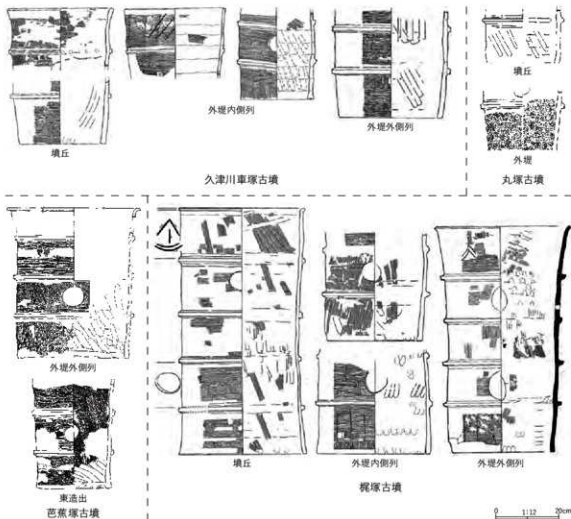
丸塚古墳(城陽市)は、墳丘長約80mの帆立貝形前方後円墳であり、墳丘の周囲に周濠および外堤がめぐる。円筒埴輪編年Ⅲ期に位置づけられる。外堤上では、一重の円筒埴輪列が確認されており、底部の直径30～35cmの円筒埴輪が芯々間距離約6.6mで配置されていた。

梶塚古墳(城陽市)は、久津川車塚古墳に隣接して築造された一辺46～51mの不整形な方墳であり、墳丘の周囲に周濠および外堤がめぐる。円筒埴輪編年Ⅳ期1段階に位置付けられる。墳丘の第一段テラス面および外堤上において円筒埴輪が確認された。墳丘では、底部の直径30～35cmの円筒埴輪が芯々間距離40～45cmで密に並べられている。外堤上では、内側および外側の円筒埴輪列が確認された。内側の円筒埴輪列には、底部の直径30～35cmの円筒埴輪が芯々間距離40～50cmで密接して配置されていた。一方、外堤上外側の円筒埴輪列では底部の直径約35cmで4条突帯5段構成となる円筒埴輪が、5m以上の間隔をもって配置されたとみられる。

芭蕉塚古墳(城陽市)は、久津川車塚古墳の北西約100mに所在する墳丘長115mの前方後円墳であり、墳丘の周囲に周濠と外堤がめぐる。円筒埴輪編年Ⅳ期1段階に位置付けられる。墳丘では第一段テラス面で円筒埴輪が検出されており、底部の直径20～28cmの円筒埴輪が芯々間距離30～40cmで並べられていた。外堤上においては、内側の円筒埴輪とみられる痕跡と外側の円筒埴輪列が検出されている。外堤上内側では、円筒埴輪の据え付け痕跡とみられるピットが約50～80cmの間隔で検出されている。一方、外堤上外側の円筒埴輪列では底部の直径30～40cmの円筒埴輪が約3.5～4m間隔で配置されていた。このように、芭蕉塚古墳も久津川車塚古墳と同様に外堤上外側の円筒埴輪列が大型品をも



第61図 久津川古墳群における周庭帯の植輪配置



第62図 久津川古墳群の円筒埴輪

ちいた点的配置となる。外堤上内側の円筒埴輪列そのものは検出されていないものの、据え付け痕跡とみられるピットの間隔から、外側の円筒埴輪列に比べて密な配置であったことがわかる。久津川車塚古墳と同様に外堤上の内側と外側で円筒埴輪配置の様相が異なることが指摘できる。

3 王権中枢における大型前方後円墳の周庭帯の埴輪配置

佐紀古墳群東群における大型前方後円墳の周庭帯の埴輪配置は、コナベ古墳、ウワナベ古墳、ヒシヤグ古墳という断続的に築造された3基を通じて系譜を有する段階的な変遷を追うことができることを明らかにした。このことは、円筒埴輪に認められた緩やかな系譜関係とも相関し、埴輪生産と埴輪配置が有機的に関連するものであったことを具体的に示す。

同様に、久津川古墳群でも、久津川車塚古墳、梶塚古墳、芭蕉塚古墳という継続して築造された3基における周庭帯の埴輪配置に系譜を有する段階的な変遷が認められた。いずれも外堤上の内側では小型の円筒埴輪が密に立て並べられていたのに対し、外側では大型の円筒埴輪が距離をおいて点的に配置されていた。外堤上で内側の円筒埴輪を密に、外側の円筒埴輪を大型で点的に配置する現象は、佐紀古墳

第4表 畿内地域大型前方後円墳における周庭帯の埴輪配置

古墳群	古 墳 名	埴輪編年	墳 丘	内 堤		外 堤	
				内側	外側	内側	外側
佐 紀	コナベ古墳	Ⅲ	小型品	—	—	密/小型品	粗/大型品
	ウツナベ古墳	Ⅳ-1	小型品	密/小型品	密/小型品	粗/大型品	?
	ヒシヤグ古墳	Ⅳ-3	小型品?	密/小型品	密/小型品	?	?
古 市	仲津山古墳	Ⅲ	小型品?	—	—	密/小型品	?
	岡ミサンザイ古墳	Ⅴ-1	小型品	—	—	?	密/大型品
	野中ボケ山古墳	Ⅴ-2	小型品	—	—	?	密/小型品
百舌島	上石津ミサンザイ古墳	Ⅲ	小型品	埴輪配列無しか?			
	大仙陵古墳	Ⅳ-2	小型品	密/小型品	密/小型品	?	?
久津川	久津川車塚古墳	Ⅲ	小型品	—	—	密/小型品	粗/大型品
	梶塚古墳	Ⅳ-1	小型品	—	—	密/小型品	粗/大型品
	芭蕉塚古墳	Ⅳ-1	小型品	—	—	密/小型品	粗/大型品
三 島	今城塚古墳	Ⅴ-3	小型品	密/小型品	密/大型品 (小型品)	?	?

群東群の様相と類似し、中期の周庭帯の埴輪配置が規則性に則ったものであったと考えることができる。

現状では、古市古墳群、百舌島古墳群の様相が不明瞭なため、佐紀古墳群東群および久津川古墳群の様相が、王権中核でのあり方をどこまで反映したものは不明である。ただし、古市古墳群の事例からは、佐紀古墳群あるいは久津川古墳群と共通する要素も少ないながら指摘できる(第4表)。コナベ古墳あるいは久津川車塚古墳と同時期に築造された仲津山古墳では、密に配置された外堤上内側の円筒埴輪列が検出されているものの、外堤上外側の円筒埴輪列が本来あるべきと想定される部分では列が検出されていない。コナベ古墳や久津川車塚古墳の配置と同じであると仮定するならば、点的な配置のために発掘調査区内で検出されなかったという可能性も考えられる。佐紀古墳群東群および久津川古墳群で同じ傾向が認められることを重視するならば、王権中核でも同様のあり方を示していたと考えることもできるであろう。

後期の事例では、野中ボケ山古墳(大阪府藤井寺市)および今城塚古墳(同府高槻市)における周庭帯の埴輪配置の様相が判明している。野中ボケ山古墳は、墳丘長122mの前方後円墳であり、墳丘の周囲に内濠と外堤がめぐる。後期前半の築造とみられ、円筒埴輪編年Ⅴ期2段階に位置付けられる。外堤上外側の円筒埴輪列のみが確認されており、内側の円筒埴輪列の存否は明らかでない。外堤上外側の円筒埴輪列は、底部の直径25～30cmの円筒埴輪が芯々間距離約40cmで並んでいた。

今城塚古墳は墳丘長約190mの前方後円墳であり、墳丘の周囲には内濠・外濠の二重の内堤・外堤の二重の堤がめぐる。後期中頃の築造とみられ、円筒埴輪編年Ⅴ期3段階に位置付けられる。円筒埴輪列が確認されているのは墳丘テラス面と内堤上である。内堤上では、その内側と外側に円筒埴輪列を密に配置する。円筒埴輪は8条突帯9段構成から6条突帯7段構成で器高約80～95cmの小型品、12条突帯13段構成もしくは10条突帯11段構成で器高約130cmの大型品で構成される。内堤上内側の円筒埴輪列には小型品、外側の円筒埴輪列には小型品とともに大型品が配置されていた。このように墳丘あるいは外堤上内側にもちいられた円筒埴輪に比べ、内堤上外側の円筒埴輪は格段に大きなものである。外堤上の円筒埴輪列の様相は不明なもの、内堤の外側に大型品が配置された状況から、外堤にも大型品が配置された可能性が推測できる。

今城塚古墳で認められた周庭帯の外側に大型品を配置するという特徴は、佐紀古墳群東群と久津川古墳群や古市古墳群の様相と類似し、中期の周庭帯の埴輪配置の特徴が後期にも継続したとみることができている。中期の王権中核における大型前方後円墳の周庭帯の埴輪配置の様相が今後の発掘調査等によってさらに明らかになれば本稿での推論の当否とともに、王権中核からの埴輪配置に関する情報波及の実態もより鮮明となるであろう。

おわりに

本稿では、古墳時代中期の大型前方後円墳の周庭帯における埴輪配置を検討してきた。その結果、佐紀古墳群東群と久津川古墳群において埴輪配置に関する共通性をあらためて確認することができた。周庭帯における最も外側の円筒埴輪を大型品によって点的に配置するというその共通性は、古市古墳群および百舌鳥古墳群の様相が明確ではないものの、畿内地域を代表する両古墳群において共通することから、王権中核の規範に則った配置と考えることもできる。

周庭帯の外側へ大型の円筒埴輪を配置することは、王権中核の菅田御廟山古墳あるいは今城塚古墳との共通性が指摘できる。王権中核から埴輪配置に関する規範が両古墳群に共有され、それに基づいた古墳築造が行われたものと想定される。

中期中頃には、初現期の人物埴輪などの形象埴輪が大仙陵古墳を代表的事例とするように外縁に配置されるようになる。本稿で示した円筒埴輪の配置に加え形象埴輪の配置の特徴を加味することで、王権中核からの埴輪配置の各地への波及の実態がより明らかになると考える。今後の課題としたい。

注

- 1) 宮内庁による調査報告では三重の堤を内側から順に第一堤、第二堤、第三堤と示されており、ここでいう内堤は第一堤に当たるが、本稿では他古墳との名称の整合を図るため内堤と呼称する。

引用・参考文献

- 大澤正吾 2021 「平城宮東院下層埴輪室跡群の基礎的検討」『古墳文化基礎論集』同論集刊行会
 小栗明彦・東影 悠 2022 「ヒシヤグ古墳の周庭帯と埴輪」『考古学論叢』第45冊 奈良県立橿原考古学研究所
 小泉裕司 1996 「久津川古墳群に関する一考察—久津川車塚古墳・観塚古墳・芭蕉塚古墳の外周施設の共通性について—」『城陽市歴史民俗資料館館報』創刊号、城陽市歴史民俗資料館
 白石太一郎 2008 「近畿地方における大型古墳群の基礎的研究」平成17年度～平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書 奈良大学文学部文化財学科
 末永雅雄 1962 「古墳の周庭帯と陪家」『書陵部紀要』第13号 宮内庁書陵部
 田中智子 2008 「ウワナベ古墳系列の埴輪をめぐる諸問題—上人ヶ平5号墳出土埴輪の検討から—」『吾々の考古学』和田晴吾先生選葬記念論集刊行会
 埴輪検討会事務局 2022 「埴輪検討会福年2022」『埴輪の分類と福年』
 東影 悠 2023 「佐紀古墳群東群における円筒埴輪配列—大型前方後円墳周庭帯の配列変遷—」『橿原考古学研

『究所論集』第18 八木書店

廣瀬 寛 2002「前・中期古墳の植輪配列一畿内を中心に」『季刊考古学』第79号 雄山閣

村瀬 陸 2022「コナベ古墳併行期の植輪生産とその規格」『植輪叢書』第11号 植輪検討会

挿図出典

第57図：東影 2023 を元に筆者作成

第58図：**コナベ古墳** 陸墓調査室 2011「小奈辺陵墓参考地一墳坐落護岸その他整備工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第62号〔陸墓篇〕宮内庁書陵部／中井公ほか編 1980「コナベ古墳前方部南外堤発掘調査報告」『奈良市埋蔵文化財調査報告書—昭和54年度—』奈良市教育委員会

ウワナベ古墳 陸墓調査室 2022「宇和奈辺陵墓参考地整備工事予定区域事前調査」『書陵部紀要』第73号〔陸墓篇〕宮内庁書陵部／吉村和昭・井上主授 2008「佐紀古墳群（教育講堂地区・ウワナベ古墳中堤～外堤）」『奈良県遺跡調査概報 2007年度（第一分冊）』奈良県立橿原考古学研究所／北山峰生 2017「佐紀古墳群」『奈良県遺跡調査概報 2015年度（第二分冊）』奈良県立橿原考古学研究所／町田章編 1975「ウワナベ古墳東外堤」『平城宮発掘調査報告VI』奈良国立文化財研究所

ヒシャゲ古墳 小栗・東影 2022／陸墓調査室 1996「平城坂上陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第47号宮内庁書陵部

第59図：**仲津山古墳** 中西康裕 1990「仲津山古墳の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告V』藤井寺市教育委員会／三木弘 1999「遺跡内所在古墳の調査仲津山古墳」『土師の里遺跡—土師氏の墓域と集落の調査—』大阪府教育委員会／上田睦 1993「仲津山古墳の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅵ』藤井寺市教育委員会／山田幸弘 1994「仲津山古墳の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告IX』藤井寺市教育委員会

岡ミサンザイ古墳 笠野毅 1977「仲哀天皇陵外溝壘設置区域の事前調査」『書陵部紀要 28』宮内庁書陵部／佐々木理編 2014「仲哀天皇陵古墳」藤井寺市教育委員会

第60図：陸墓調査室 2020「仁徳天皇百舌鳥耳原中陵第1墳における遺構・遺物確認のための事前調査」『書陵部紀要』第71号〔陸墓篇〕宮内庁書陵部

第61・62図：**久津川車塚古墳・丸塚古墳** 伊賀高弘・近藤義行 1986「久津川車塚古墳・丸塚古墳発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書 15』城陽市教育委員会／小泉裕司編 2017「城陽市埋蔵文化財調査報告書 73』城陽市教育委員会

梶塚古墳 近藤義行・伊賀高弘 1986「久津川遺跡群発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書 15』城陽市教育委員会

芭蕉塚古墳 小泉裕司ほか編 2006「芭蕉塚古墳発掘調査報告書」城陽市教育委員会

第4表 筆者作成

第3章 円筒埴輪の樹立本数試算と生産画期

木村理

はじめに

本科研の研究で扱った平城宮下層埴輪窯の資料について、筆者がその全体像を見たのは2020年夏ごろのことであった。蒸し暑い収蔵庫から資料を「発掘」し、ピックアップした胴体を整理室へ運搬した労力は、その生産量の多さを体感するのに十分であった。佐紀古墳群への埴輪の供給の一端を担った当窯ではどれほどの量の埴輪が生産されたのであろうか、さらには佐紀古墳群全体ではどれほどの生産量が必要とされたのであろうか。本稿は、平城宮下層埴輪窯の資料整理の際に生じた素朴な疑問を出発点とし、埴輪の生産量の復元を試みるものである。

古墳の各所に樹立された埴輪の生産は、その膨大な量ゆえに古墳築造における一大事業であったとみて差し支えない。特に、副葬品の製作や埋葬施設の構築のように労働力の質的投下ではなく、量的投下がまず求められたと見込まれる埴輪生産では、生産量が製作技法や生産体制を規定していた可能性も高い。したがって、埴輪の製作技法や生産体制の推移を跡づけるうえでも生産量の分析は不可欠といえる。

さらに、樹立本数の多寡をめぐる古墳間での比較は、労働量を切り口として古墳相互の格差や埴輪と政治権力との関係性について重要な論点を提示する。本稿では、古墳築造が質・量ともピークに達した中期、とりわけ佐紀古墳群を対象としながら埴輪の樹立本数を試算し、生産量という観点から埴輪生産の変遷を読み解く。

1 研究略史と円筒埴輪の基本配列

(1) 研究略史と本稿の射程

埴輪の樹立本数を試算する試みは、巨大前方後円墳の築造労働量を検討した濱田耕作や梅原未治の分析にはじまる〔濱田1931、梅原1955〕。中でも、梅原は大仙陵古墳と菅田御嶺山古墳の埴輪樹立本数にかんして、前者では総量20,480～23,510本、後者では12,800本を試算した。王権中枢部における王陵級古墳の「巨大さ」を数的に示した点は、以後、古墳築造労働力の分析にも大きく影響を与えることとなる〔石川1989〕。

梅原の試算以降、埴輪の樹立本数については特に最大規模の古墳である大仙陵古墳を対象としたものが多く、大林組の労働力試算では15,000本が計上されたほか〔大林組1985〕、近年では一瀬和夫による再検討を通じて、総計30,860本が試算されている〔一瀬2019〕。このように、古墳にかかる膨大な労働力の一端をうかがう手段としての埴輪の樹立本数試算は、ひとえに列島最大規模の大仙陵古墳の事例に代表させられているといえよう。

そのほか、前期の事例では、古墳築造労働力の復元の一環として、横地敷が兵庫県・長尾山古墳を分析し、172本の樹立数を試算している〔横地2018〕。発掘調査成果に基づいた詳細な試算には一定の説得力があり、埴輪の樹立本数に加えて使用粘土量の復元を試みている点には学ぶべき点も多い。

以上、いくつかの検討事例を紹介してきた。いずれの検討も、生産量や労働量という観点から有力者の権力装置としての古墳造営を捉えようとする点で問題意識を共有し、現在に至る。また、各古墳の発掘調査報告書では樹立本数が試算されているケースも多く、それらを統合した基礎データを提示する段階にある。こうした現況を踏まえ、本稿ではこれまで点的におこなわれてきた個別検討を統合しつつ、通時的あるいは同時期の樹立本数比較を可能にする基礎データを提示することを目的とする。また、時期や墳丘規模に応じて用いられる植輪のサイズは異なるため、本数だけの比較では植輪のサイズ差によって生じる生産格差を見落としてしまうことが懸念される。本数の単純な比較にとどまらず、サイズも考慮した粘土量という比較軸を設けて、多角的な分析への備えとしたい。

(2) 円筒植輪の基本配列

分析に先立って、円筒植輪の配列方法について確認しておく。出現当初、間隔をあけて配列することを基本としていた植輪だが、植輪編年Ⅱ期を経てⅢ期には隣同士が接するほど密に配列されるようになる(寺村 2003, 廣瀬 2002, 原田 2020 など)。鯨付円筒植輪の出現に示されるように、遮蔽性への意識の高まりとともに、密な配列を可能にする大量生産の実現が前期後葉以降の植輪配列を大きく決定づけていたとみて大過ない。ただ、大規模な生産体制の存在が見込まれない周辺地域の小規模古墳の場合、中期以降でもまばらに配列される例も散見する。配列の疎密が時期に応じて一定程度規範化していたとともに、それが実際的には生産体制にも左右されていたことを物語るように。

さて、Ⅲ期以降には堤が整備され、後期の今城塚古墳に至るまで堤への植輪配列が継続する。特にⅢ～Ⅳ期にかけては、堤の数の変化に応じて配列方法もやや異なっていたようである(東影 2023)。例えば、Ⅲ期に位置づけられるコナベ古墳では外堤に内外二重の円筒植輪列を有し、内側では底部径 20～25cm、4 条 5 段に復元される個体を密に配列するいっぽうで、外側には底部径 40cm 前後の大型品を平均 8.7 m 間隔でまばらに配列する。

Ⅳ期 1 段階になると堤が二重になり、大型前方後円墳では内堤・外堤への植輪配列が本格化する。その中で、コナベ古墳に後続するウワナベ古墳では、内堤には内外二重の植輪列が存在し、双方とも標準的な資料が密に配列されていたことが判明している。また、最外周をめぐる外堤には、特大の鯨付円筒植輪がまばらに配されていたようである(東影 2023)。同時期の誉田御嶺山古墳では、少なくとも内堤には内外二重の植輪列がめぐり、ともに密に配列されていた可能性が高い(梅原 1955)。外堤の様相は不明瞭ながら、出土資料の量やサイズに鑑みるとウワナベ古墳とはやや異なり、内堤の植輪配列とほぼ同様であったと推定される。これ以後、Ⅳ期 2 段階の大仙陵古墳、Ⅳ期 3 段階の市野山古墳やヒシヤゲ古墳でも堤への密な植輪配列が踏襲される。

大型前方後円墳においては堤の内外に植輪を配することを基本としつつ、最外周に限ってはまばらに配列する事例がみられると整理できよう。こうした、堤内外における植輪の配列が生産数に大きく影響を与えたことは想像に難くない。

後期の今城塚古墳では、内堤において密に配列された内外二重の植輪列が検出されている。ただし、今城塚古墳の場合、最外周に位置する外堤では植輪列が検出されていない。中期後葉のヒシヤゲ古墳では、二重の堤のうち最外周に相当する外堤でも植輪が検出されている。中期末～後期初頭の間に二重の堤を備える古墳における最外周への植輪配列は停止したものとみられる。

最後に、樹立位置と円筒埴輪のサイズ・器種にかんして、前期においてはメスリ山古墳や櫛山古墳の事例が示すように、埴頂部の方形埴輪列では特大品や楕円筒埴輪など、特殊品が用いられていたとみられる。中期に入っても、上石津ミサンザイ古墳や壘山古墳、七観古墳などでは埴頂部から小型の鱗付円筒埴輪が出土しており、埴丘平坦面の標準的な資料とは異なる器種が引き続き用いられていたと推定される。

埴では、今城塚古墳の例が示すように埴丘平坦面の標準的な資料に比べて大型の埴輪が用いられる場合もあり、中期でもはぎみ山古墳では、埴丘で底部径25～30cm、5条6段に復元される埴輪が、外堤で底部径35cm前後、多条突帯の貼付口縁の個体が主体をなす。原田昌浩が指摘するように、「埴丘に樹立される埴輪ほど小さく、外堤ほど大きな埴輪が使われる傾向」は、「中期大型前方後円墳においては一般化できそう」(原田2015:p.81)にも思える¹⁾。

しかしながら、その実態は複雑であったと考えられる。例えばウツナベ古墳では、埴の中でも内堤では埴丘と同様、6条7段の個体が主体をなし、特大の製品は外堤にのみ配列される。また、同時期の菅田御嶺山古墳の内堤では「径1尺1、2寸の間のもを主として、別に所々に径1尺8寸内外の大きいものを配してある」(梅原1955:p.29)という所見から、埴丘資料と同程度のサイズの埴輪を主体的に用いて、要所にのみ10条を越すような特大なものを配列していたものとみられる。外堤でも底部径35～40cm、口縁部径40～45cmの資料を主体としながら、一部に口縁部径50～60cmの個体を含む点に鑑みて、内堤と同様、基本的には埴丘などと同程度のサイズを用いていた可能性が高い。さらに、先行する仲津山古墳や後続する大仙陵古墳においても、段数構成は不明ながら主体をなす個体の底部径は埴丘と埴で相違ない。

このように、「外堤ほど大きな埴輪が使われる傾向」はおおむね正鵠を射たものといえるが、それは最外周の埴輪列に限る、あるいは客体的な資料を指した事象であるといったように、埴全体に一律に適用できるわけでないことには注意が必要である。

以上、樹立本数試算に先立つ検討として、埴輪配列の大局的な変遷に言及した。これらを踏まえて、埴輪の樹立本数を試算しよう。

2 円筒埴輪の樹立本数試算と使用粘土量

(1) 樹立本数と使用粘土量の試算

改めて述べるまでもなく、以下の検討はあくまで試算であり、厳密な正確性を求めるものではない。むしろ、おおよその傾向を把握して、これまで復元されてきた生産体制の推移や古墳間格差の実態を、異なる視点から検討することが本稿の目的である。したがって、試算にあたっては下記の条件を設けた。

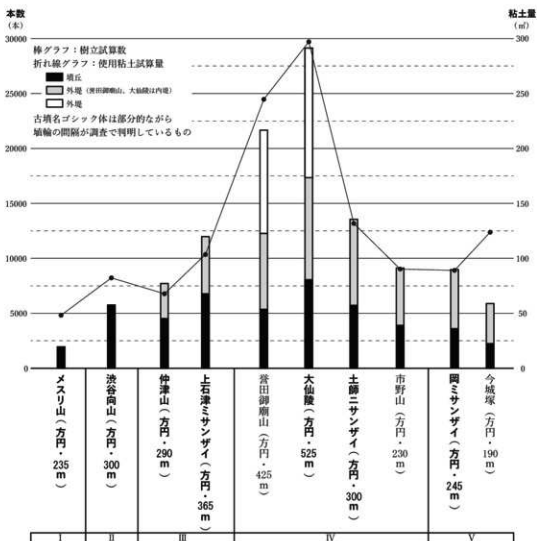
まず、樹立本数については、①配列パターンが判明している事例を除き、埴輪列中で客体的に配される朝顔形埴輪や特大品などは扱わず、標準的な資料をもとに算出する、②方形埴輪列や堤上の祭祀場などのイレギュラーな配列は考慮しない、③形象埴輪は扱わない、といった点を試算条件とした。古墳全体の埴輪配列が判明している例は存在せず、それゆえに客体的な資料の量比や形象埴輪の配列・数量、各種施設の規模については不明である。したがって、配列パターンが判然としている例を除いて、埴丘平坦面で検出された標準的な円筒埴輪を用いて、それらが各段のテラス、埴頂平坦面、造出、外堤各

部に一樣に並んでいたと想定する。なお、配列の疎密は発掘調査のデータを参照し、埴輪列が不明瞭なものについては、密に配列される場合でも互いに10cm離れていたものとして計算する²⁾。

続いて、使用された粘土量については、①器壁は体部中位の平均値を用い、ケズリによる粘土量の減少など製作当初の粘土量については考慮しない、②標準的な個体の底部径をもとにした円柱状の器形として計算し、外傾や突帯、スカシ孔などによって生じる斜距離や粘土の増減は考慮しない、③器高は底部高・突帯間隔・口縁部高の平均値から算出した「理想形」にもとづく、④焼成時の収縮は考慮しない、といった点を試算条件とした。

(2) 各事例の分析

埴輪列の検出、あるいは埴丘形態の復元がある程度進んでいる古墳を中心に、41例の埴輪樹立本数と使用粘土量を試算した(別表3-7)。多彩な埴輪が使分けられるI期や径・器高が揃いになるV期については不確かさを包摂するものの、III群・IV群埴輪を起点として大局的な傾向を把握できよう。以下では、大型古墳を対象とした通時的な生産数量の比較、一古墳群における生産総量に論点を絞って、



第63図 大型前方後円墳の埴輪樹立本数と使用粘土量の推移

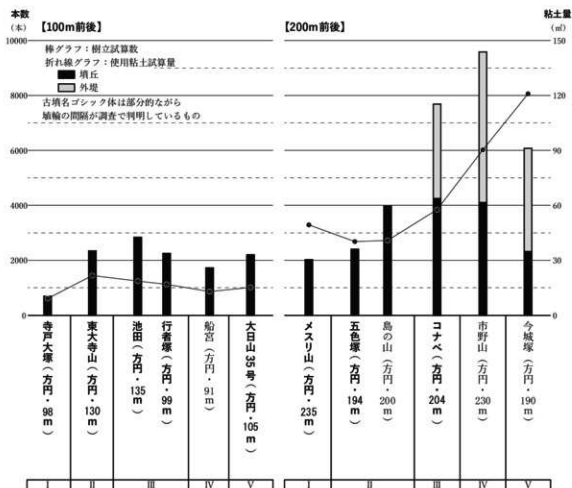
議論を試みたい。

i. 各古墳の生産数量

各古墳の生産量 まずあきらかなのは、墳丘規模の大小に応じて埴輪の樹立本数、使用粘土量も増減する点であり、菅田御廟山古墳や大仙陵古墳が築かれるIV期前半において双方がピークを迎えることは述べるまでもない。こうした前提を踏まえながら、II期以降の大型古墳の事例を対象に、樹立本数と使用粘土量の推移を通時的にたどってみよう。

II群からIII群へ 密な埴輪配列の一般化に伴って埴輪の本数が増加するII期だが、III期における外堤への配列によって、樹立本数はさらに1.5～2倍程度にまで増加する(第63図)。いっぽう、当該期の使用粘土量は樹立本数の増加に比べ減少傾向にある。例えば、II期の渋谷向山古墳とIII期の仲津山古墳ではほぼ同じ墳丘規模を有し、樹立本数は堤への配列に伴って2,000本程度増加しているにもかかわらず、使用粘土量は減少している。また、東大寺山古墳(II期・130m)と行者塚古墳(III期・99m)、池田古墳(III期・135m)でも樹立本数は同程度あるいは微増する中で、使用粘土量は減少する(第64図)。このように、II期からIII期の間では樹立本数の増加率に対して、使用粘土量は抑制される傾向にある。

この要因がIII群埴輪の相対的な小型化に求められることは明白である。5条6段以上のものを主体と



第64図 同規模の古墳相互における埴輪樹立数と使用粘土量の推移

するⅡ群植輪に対し、Ⅲ群植輪は200 m程度古墳でも4条5段のものを主とすることに加えて、底部高や突帯間隔の縮小に伴って器高も減少する。そういった意味で、Ⅲ群植輪の相対的な小型化を「大王墳クラス古墳の巨大化と周堤の定型化にともなう生産量の飛躍的増加」〔廣瀬2015：p.36〕に重ねる廣瀬の理解は重要といえる。

ただし、実際的にはサイズの小型化や、多少の間隔をあけて配される諸付円筒植輪の不採用³¹)に伴って、同規模古墳同士の場合、同一部位における植輪の樹立本数自体はⅡ期からⅢ期にかけて増加している(第64図)。したがって、当該期における植輪の小型化の要因を生産の効率化に求める場合、それは本数の削減ではなく1個体あたりの粘土量の節減、さらにいえばそれにとまう1本あたりの製作時間の短縮を図ったものとして捉えておく必要がある。円筒植輪では高さ25～30cm程度で乾燥工程をはさむ場合が多いことを踏まえると、器高90cm前後を測る通常のⅡ群植輪から器高60～70cmを測るⅢ群植輪への推移は、1単位分の乾燥工程の省略を可能にしたと見込まれる。Ⅲ群植輪の相対的な小型化の要因として、一つには樹立本数の増加を容れてまでも1本あたりの製作時間、使用粘土量の節減を企図したことが挙げられるのではなかろうか。

段構成の多寡が古墳相互の格差づけをおこなう手段とされた当該期に、生産量といった製作集団側の論理が第一義的に適用されるのか、なお疑問は残るが、古墳の大型化や古墳群内での拠点的生産の確立に際して、植輪の小型化が結果的に有意に働いたことは想像に難くない。

Ⅲ群からⅣ群へ 墳丘規模の飛躍的な大型化に伴って樹立本数、使用粘土量とも大きく増加する。特に、当該期における樹立本数の増加に決定的に作用したのが、外堤(内堤)への本格的な植輪の配列である。樹立総数に占める堤の本数の割合は、Ⅲ期の仲津山古墳や上石津ミサンザイ古墳、コナベ古墳では40～45%程度であったのに対して、Ⅳ期3段階の土師ニサンザイ古墳や市野山古墳では60%、堤が二重にめぐる菅田御嶺山古墳や大仙陵古墳では実に75%に及ぶといったように、Ⅳ期には堤への配列こそが植輪生産における最大の事業として位置づけられていた可能性が高い。堤の中で植輪製作の時間差を想定しうる事例が存在することもこうした理解と整合しよう。少なくとも植輪生産においては、墳丘自体の規模差よりも堤の有無や規模による労力格差が古墳相互の格差として歴然と作用していたものと思われる。

ところで、Ⅳ期の大型古墳では樹立本数が増加するのみならず、円筒植輪の多条化が実現されることにより使用粘土量も大きく増加する。こうしたあり方は、樹立本数の増加に伴って使用粘土量の抑制が生じたⅢ群植輪の製作段階とは明らかに原理を違える。中でも、樹立本数、使用粘土量とも2倍程度にまで増加する菅田御嶺山古墳や大仙陵古墳といったⅣ期前半の巨大前方後円墳の植輪生産には、上石津ミサンザイ古墳などⅢ期の大型前方後円墳に比べて、単純計算で2倍の期間、あるいは人員が費やされたということになる。生産の合理性を大きく度外視したこの生産規模は、当該期における植輪生産が前時期にも増して政治権力の強い意志の下で実施された状況を示していよう。一度の動作で突帯間を充足するヨコハケ(Bc種/Bd種)や均等規格の出現がⅣ期の最初期に既に求められることも〔木村2022〕、こうした生産量の急増に整合的といえる。

Ⅳ群からⅤ群へ Ⅴ期初頭の岡ミサンザイ古墳で市野山古墳とほぼ同様の樹立本数、使用粘土量が試算されたのち、後期初頭の今城塚古墳では墳丘規模の漸次的な縮小に伴って植輪の樹立本数は減少した

とみられる。ただし、今城塚古墳に限れば使用された粘土量はむしろ増加している。

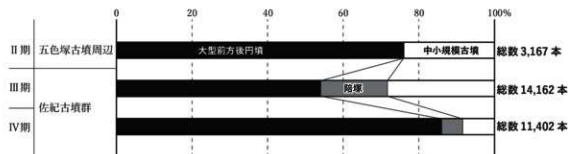
これについては、当古墳における多条突帯の円筒埴輪の多用が挙げられる。今城塚古墳の場合、墳丘では6条7段や7条8段の資料を主体としながら、内堤（外側）では10条を越える円筒埴輪が密に配列されていたようである〔今城塚古代歴史館2013〕。このように、堤において10条を越える円筒埴輪が密に配列される状況は、少なくともIV期前半のウツナベ古墳や菅田御嶽山古墳とは異なっていた可能性が高い。また、IV期3段階に位置づけられる市野山古墳でも、外堤の外側で検出された円筒埴輪は6条7段と7条8段のものであった。こうした多条突帯の円筒埴輪を密に配列するという「新たな」方式が採用されたことで粘土量は増加したものとみられる¹⁾。

いっぽう、今城塚古墳を除く有力古墳のそれぞれでは外堤の埴輪を含めても樹立本数は2,000～3,000本程度であるとみられるなど、減少傾向にある。当該期はV群埴輪の本格的な製作開始期にあたり、その出現背景に群集墳などを含めた大量生産を読み取る立場も少なくない〔坂2007など〕。また、生産組織論の立場からも、当該期における編成方法の拡充の要因として、より大規模な生産需要を想定する理解が一般的といえる〔廣瀬2015〕。ただ、上で述べた通り、有力古墳の規模が減衰する中で、一古墳あたりの樹立本数は急減していくのが実際である。V群埴輪の出現要因に、IV期にも増す大量生産を想定することが可能であろうか。これについては当該期に確立される広域供給とも大きく関連している。ここでは、一古墳あたりの埴輪生産においてはむしろ相対的に少量生産へと舵が切られたという指摘にとどめ、V群埴輪の出現と大量生産の因果関係については次項で改めてとりあげることにしたい。

ii. 拠点的生産にもなる生産総量

上では大型古墳を対象に樹立本数、使用粘土量を比較し、各時期の埴輪生産が置かれた状況について概観してきた。いっぽうで、II期以降、拠点的生産や広域供給が実施される中において、上記はあくまで中心的な古墳の動向を述べたに過ぎない。したがって、各時期の生産体制が置かれていた状況をより詳細に精査する際には、拠点的生産の末端に組み込まれた中小規模古墳も含めて、一集団によって生産された本数の総量についても推定を試みる必要がある。以下では、II期においては五色塚古墳周辺、III～IV期においては佐紀古墳群、V期においては菅原東窯産の資料を対象とし、一集団の生産した円筒埴輪の総量についても比較を試みる（第65図）。

五色塚古墳周辺 播磨地域の東端では、五色塚古墳（方円・194 m）を核として小壺古墳（円・67 m）や幣塚古墳（円・35 m）、歌敷山東古墳（円・30 m）、同西古墳（円・20 m）に同一集団による製品がもたらされ〔廣瀬2006など〕、近年の胎土分析を経てそれが製品の流通にもとづくことが明確になった（中



第65図 拠点的生産と樹立試算数

関ほか 2022)。

これら中小の古墳については埴輪の配列方法や段築成が判明していないものも含むが、良好な事例を援用しておよその試算をおこなうことが可能である。これにもとづけば、小壘古墳では338本(埴輪列総長198.86m)、幣塚古墳では177本(埴輪列総長103.93m)、歌敷山東古墳では151本(埴輪列総長89.09m)、歌敷山西古墳では101本(埴輪列総長59.4m)の埴輪を要したと推測される⁵¹⁾。五色塚古墳では2,400本の樹立本数が試算されるため、当地での拠点的生産に際しては総計3,167本の円筒埴輪が必要数として見込まれる。そのうち、五色塚古墳での必要数が全体の76%を占める。

なお、同様に拠点的生産が展開し、その供給域がある程度判明している例として和泉地域が挙げられる(三木ほか 2015)。当地域では摩湯山古墳(方円・200m)、馬子塚古墳(方・35m)、菩提池西遺跡(不明)へ同一集団による埴輪生産が展開したとみられ、供給古墳の規模や数において五色塚古墳周辺と大きくは変わらない。上記の生産数は、II期の拠点的生産における生産規模としてある程度一般化できよう。

佐紀古墳群 III・IV群埴輪の生産総数を検討する事例として、佐紀古墳群を扱う。当古墳群は、同時期に存在する古市・百舌鳥古墳群に比べれば古墳の規模・数ともやや劣るものの、近年の整理を経て供給先の古墳がある程度絞りこめるようになってきた点で、埋没古墳を多く含む古市・百舌鳥古墳群に比べ確度の高い議論が期待される。平城宮・京の下層に未知の古墳を残す可能性を考慮しつつも、当該期の事例として佐紀古墳群を取り上げよう。

まず、III期ではコナベ古墳(方円・204m)を筆頭に、平塚1号墳(帆立?・70m)、10基からなるコナベ古墳の陪塚(方・30m±)、佐紀門外古墳(方円・不明)、六条野々宮古墳(不明)が同一集団による製品供給を受けたとみられ、西群に所在する塩塚古墳(方円・105m)にも同様の製品が供給された可能性がある(加藤 2012)。以下、これらの古墳を対象とする。なお、ほぼ同時期には市庭古墳(方円・253m)や木取山古墳(方円・110m)も築かれるが、コナベ古墳にわずかに後出するとみられるため、ひとまずは対象外としておく。

7,650本が試算されるコナベ古墳に対して、平塚1号墳は同規模の久米田風吹山古墳を参考にすれば647本(埴輪列総長223.06m)の樹立が試算される。陪塚は寺山南山古墳などを参考にそれぞれ250本(埴輪列総長118.92m)の合計2,500本、塩塚古墳では2,655本(埴輪列総長902.76m)が試算される。佐紀門外古墳、六条野々宮古墳については墳丘規模が不明であるものの、前者を40m、後者を25mと仮定してそれぞれ433本(埴輪列総長206.21m)、277本(埴輪列総長99.1m)を見込んでおく。以上を合計すると、14,162本の埴輪が総計として試算される。そのうち、コナベ古墳での必要数は全体の54%を占める。

続くIV期では、ワナベ古墳(方円・270m)と同一集団による埴輪が供給されたとみられる古墳に平塚2号墳(方円・不明)、大和5号墳(方・14m)、大和6号墳(円・30m)、大和9号墳(円・27m)、ヤイ2号墳(方円・15m)、南新こも川2号墳(方・不明)が挙げられる。同時期には全長117mを測る前方後円墳である神明野古墳も築かれるが、当古墳の埴輪は鱗や多角形スカシ孔をもたず、普通口縁のものが一定数を占めるなど、ワナベ古墳の埴輪とは異なる特徴を有する。色調も神明野古墳例では橙色から黄色系であるいっぽう、ワナベ古墳例では橙～白色系を呈する。部分的にワナベ古墳を中心とした埴輪生産と接点を有していたとはみられるが、ひとまずは考慮しない。そのほか、平城宮下層では

小規模な方墳が多数検出されており、中にはⅢ～Ⅳ期の埴輪を有する古墳も存在していたようだが、まとまって埴輪が出土しているわけではなく、規模も10 m程度であるため考慮には入れない。

さて、9,534本の樹立が見込まれるウナベ古墳に対して、陪塚である大和5号墳では193本（埴輪列総長76.8m）、同6号墳では221本（埴輪列総長100.48m）、大和9号墳では199本（埴輪列総長90.43m）が試算される。平塚2号墳は墳丘長50 mであったと仮定すると583本（埴輪列総長208.06m）、ヤイ2号墳では81本（埴輪列総長27.08m）、南新コモ川2号墳は一辺20 mと仮定すると231本（埴輪列総長82.55m）が算出される。以上を合計すると、総計11,042本が試算され、ウナベ古墳での必要数が全体の86%を占める。現状、Ⅲ期のコナベ古墳併行期に比べ古墳の数が少なく、実際的にはさらに多くの中小規模古墳が存在していたとみられるが、ウナベ古墳での必要数が70%を下回る可能性は低い。

なお、神明野古墳では、中小規模古墳の樹立本数の総計を大幅に上回る4,853本（埴輪列総長1844.06m）の樹立が見込まれ、ウナベ古墳の樹立本数の約50%に及ぶ。拠点的生産が展開するⅣ期前半の古市古墳群や佐紀古墳群であっても、中型前方後円墳は大型前方後円墳の埴輪生産に全面的には組み込まれなかった可能性を筆者は想定しているが（木村2020a・b）、当該期における樹立本数の増加、埴輪自体の極端な大型化、そして中型前方後円墳の埴輪の総量が占める割合を考慮するならば、こうした見方は一定の妥当性を帯びるようにも思われる。

以上、Ⅲ期・Ⅳ期の事例として佐紀古墳群の状況を検討してきた。まず指摘しうるのは拠点的な埴輪生産の中で、大型前方後円墳の必要数の占める割合がⅣ期にかけて飛躍的に増加することである。Ⅱ期に比して拠点的生産の傘下に組み込まれる中小規模古墳の規模や数が増加するⅢ期には、一時的に大型前方後円墳の占める割合は低下するものの、Ⅳ期における大型前方後円墳の墳丘規模の拡大はこの状況を再び一変させ、質・量ともに大型前方後円墳を中心とした拠点的生産が実現する。こうしたあり方は飛躍的に墳丘規模が拡大する古市・百舌鳥古墳群ではより顕著であっただろう。

また、Ⅱ期からⅢ期にかけての生産総量の飛躍的増加も看過できない。上では大型前方後円墳における外堤への埴輪配列に伴って、古墳単体で本数が増加することについて指摘したが、中期の特質でもある階層構成型古墳群の形成は、当該期における樹立本数の増加の一因になる事象であったといえる。換言すれば、Ⅲ期以降、古墳築造数と埴輪生産本数が増加することを考慮したとき、古墳群という形で特定地域に古墳が集約されるのは、拠点的生産を実現するうえでの必要条件であったととらえられるのである。

菅原東窯 近畿地方におけるⅤ期の拠点的な生産地として著名な当窯にかんして、和田一之輔による精力的な検討によって供給先の候補となる古墳の特定が進んでいる（和田2021・2022など）。他方で、当該期の大和盆地では、一古墳に対して複数の生産地から製品がもたらされた可能性も高く（廣瀬2021）、実際に菅原東窯系の埴輪が供給される古墳でも別系統の埴輪が共存する例も少なくない（和田2022）。したがって、古墳出土資料を扱うだけでは自ずと限界がある。以下では供給地の資料のみならず、菅原東窯で出土した生産地資料も用いながら検討を試みたい。

まず、菅原東窯から製品の供給を受けたことがほぼ確認できる水晶塚古墳（田中2013）を例にとって検討したい。全長50 mを測る軌立貝形古墳である当古墳は、段築成は不明ながらも外堤が存在し、

当該箇所にも埴輪が配列されていたと想定できる。後円部2段、前方部1段で、外堤に1周の埴輪列が存在していたとみると、計1,688本の樹立数が試算される。水晶塚古墳には、菅原東窯に類例のある「S字」と直線を組み合わせたへら記号を共有する一群(田中A類)と、指頭圧痕を残す貼付口縁を特徴とし、波形のへら記号を共有する一群(田中B類)の2種が約半数ずつ存在し、双方は別系統に位置づけられる(廣瀬2021)。本来的にはさらにいくつかの類型が存在する可能性も見込まれるが、現時点での資料状況を勘案してそれぞれの類型が844本ずつ供給されていたと仮定しておく。

さて、水晶塚古墳の埴輪のうち田中A類に相当する資料は須川1号墳(方円・38m)でも出土している(和田2022)。837本の樹立数が試算される当古墳では、現時点では「S」字と直線を組み合わせたへら記号のみが認められており、供給された埴輪の大多数が当類型で占められていたと推測される。このように、菅原東窯で製作されたと判断しうる、「S」字と直線を組み合わせたへら記号をもつ埴輪は少なくとも2古墳に対して、1,700本程度が製作・供給されていたとみなせる⁶⁾。

続いて、生産地である菅原東窯に目を転じてみよう。当窯のうち、最も良好に埴輪が出土したSK13では、「S」字と直線を組み合わせた記号を含め、計8種類のへら記号が確認されている。また、それぞれのへら記号を共有するグループの規模や生産量の具体は不明ながら、SK13における出現頻度をみる限り著しい偏りはなかったものと思われる。このように考えたうえで、上記試算により各へら記号を共有するグループで約1,700本の生産・供給がなされていたと理解するならば、一つのへら記号あたり1,700本×8種類のへら記号で総計13,600本の生産数が試算されることとなる。各グループの規模が等質的であったか、慎重に考える必要はあるものの、当窯での生産の一部を示すにすぎないSK13の資料のみで、その背景に13,000～14,000本程度の生産数が試算される点は重要であろう。多少の誤差は含むにしても実際的には15,000～20,000本程度の生産数が見込まれる。

木製品の樹立本数との関係性など、前時期にも増して樹立本数の試算には誤差が生じやすい状況とはいえ、これらをIV期と比べると増加傾向にある。上では一古墳単位の埴輪必要数は大きく減少傾向にあると述べたが、当該期におけるエリアを越えた広域供給の確立にともなって、一集団あたりの生産数は全体としてやや増加したものと思われる。

3 円筒埴輪の樹立本数試算と生産画期

中期を中心としながらより多くの古墳を議論の俎上に載せ、樹立本数および使用粘土量について試算してきた。円筒埴輪の型式学的な変化、あるいは製作技法の変遷について大別5段階が設定されて久しいが(川西1978)、それぞれの画期は王権中枢部における生産本数の多寡の画期と合致する。むしろ、円筒埴輪の型式、製作技法は生産規模や生産体制に規定される形で、その結果として変容を遂げていった可能性が高い。

その中で、Ⅲ期以降の生産数、使用粘土量の増減と円筒埴輪の型式、製作技法の関係性について改めて述べる。まず、生産量が増加するⅢ期において、その最大の要因となるのが外堤への本格的な埴輪配列と、階層構成型古墳群への拠点的生産体制の確立であることは疑いない。とりわけ、外堤への二重にもおよぶ埴輪の配列は、墳丘規模の拡大傾向以上に埴輪の樹立本数の増加に影響を与え、続くⅣ期とあわせて拠点的生産の中でも最大の事業となった公算が高い。大型前方後円墳の埴輪生産における最大事

業の墳丘から外堤への推移は、古墳造営ひいては古墳に対する価値づけや重みづけをも変容させる力を有していたことも十分に見込まれよう。

ただし、Ⅲ期の段階ではこうした大量生産を念頭に置いてか、円筒埴輪単体では小型化が志向され、結果的に一個体あたりの製作時間や使用粘土量の節減に寄与することになる。そのため、当該期の段数構成は5条6段程度を最大に、2条3段や3条4段といった低い段数を積極的に活用することで段数構成を通じた格差づけが志向される。このように、当該期には古墳相互の段数構成の差がさほど顕著でなく、埴輪を通じた階層秩序表示はのちの時期に比べれば未発達な側面を残すが、上記の通り生産本数には明確な多寡が内包されている。古墳相互の格差づけを現出する手段として、器高といった垂直方向の墳丘の荘厳化よりも、外堤への埴輪の配列といった水平方向への荘厳化がまずは積極的に志向された可能性を指摘しておきたい。

これに対して、Ⅳ期には最大規模の前方後円墳が飛躍的に大型化することにもなって、Ⅲ期に比べて生産数が2倍程度に上昇するのみならず、埴輪の大型化により使用粘土量も2.5倍程度に及ぶなど、大量生産の傾向がさらに強まる。上の理解と照らせば、ここにおいて垂直方向、水平方向双方の拡張を通じた格差づけが現出されるに至ったといえるが、生産の効率性を度外視したこうしたあり方は、当該期の埴輪生産が強い政治権力の下で差配されていたことを物語る。加えて、大型前方後円墳の埴輪の必要数が占める割合は、一集団における総生産量の80%程度に達するなど、拠点的生産は質・量ともに大型前方後円墳を中心としたものとして実現される。墳丘規模の飛躍的な大型化とそれともなう埴輪の生産数の増大化は、隔絶した大型前方後円墳の存在をさらに強化する結果となったであろう。

他方、Ⅳ期後半以降、前方後円墳の縮小化に応じて一古墳あたりの生産本数は漸減していく。埴輪の粗略化と対応する形で進む生産本数の減少は、拠点的生産を担った埴輪工人集団の規模縮小へつながるものであったとみせるが、いっぽうで一集団あたりの生産本数においては右肩上がりで増加を見せる地域も存在する。その一つに相当する大和盆地では、エリアを越えた広域供給が達成され、結果的にⅣ期前半にも比肩される大量生産が実施されたと想定される。Ⅴ期における円筒埴輪の粗略化や生産体制の再編を、こうした大量生産とも関連づけて理解することも一案ではあろう。

しかしながら、大和盆地を除けばこうした大量生産が見込まれる地域は少なく、王権中枢部であっても例外ではない。例えば、王権中枢部の中でも新池堂や古市古墳群、岩橋千塚古墳群などでは拠点的生産が想定されるが、Ⅳ期前半の生産量を上回る場合はごく限られていたとみられ、そのほかの地域でも乙訓地域では隣接移動型の生産体制を想定しても（原田2017）、生産数は10,000本に満たないであろう。中期と同様、古墳群内を対象とした拠点的生産、エリアを越えて製品の供給がおこなわれる広域生産、隣接移動型生産など、当該期の生産流通体制は多様であったと目され、生産される本数も多寡があったことと思われる。それぞれの生産体制と生産本数の別に応じて集団編成の実態を解明していくことが今後望まれよう。

註

- 1) 原田は中期をⅣ期3段階、後期をⅤ期1段階から捉える。

- 2) 一般に密な配列として認識される埴輪列を検討してみると、個体間の距離は平均して10cm程度は離れている。
- 3) Ⅲ期以降も墳頂など部分的には鱗付円筒埴輪が用いられるが、樹立本数に影響を与えるほどではない。
- 4) 岡ミサンザイ古墳の周辺では、本来外堤に樹立されていたと思われる埴輪が埴輪棺として使用されている。段構成の判明する資料は存在しないものの、10条前後に復元できる個体も一定数存在する。
- 5) そのほか、同一集団による埴輪が供給された古墳として、念仏山古墳が挙げられる。当古墳については200m程度の前方後円墳であった可能性も指摘されるが〔喜谷1989〕、推測の域をでない。
- 6) 布留遺跡守日堂(籬子山)地区でも同様のヘラ記号がみついている〔和田2022〕。未発見の資料も含めれば、実際は試算値よりも生産本数は多かったとみられる。

引用・参考文献

- 石川 昇 1989『前方後円墳築造の研究』六興出版
- 今城塚古代歴史館 2013『今城塚古墳の大円筒埴輪展』
- 一瀬和夫 2019「仁徳陵古墳(大仙陵古墳)内堤(第1堤)の宮内庁書陵部陵墓保全整備工事事前調査の見学」『考古学研究』第65巻第4号 考古学研究会
- 梅原末治 1955「応神・仁徳・履中三天皇陵の規模と造宮」『書陵部紀要』第5号 宮内庁書陵部
- 大林組 1985「現代技術と古代技術の比較による「仁徳天皇陵の建設」『王陵』20
- 加藤一郎 2012「赤井谷1号横穴の埴輪とコナベ古墳の埴輪—古墳時代中期開始の画期および共通するハケメをもつ埴輪について—」『埴輪研究会誌』第16号 埴輪研究会
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64巻第2号 日本考古学会
- 喜谷美宣 1989「市街地に消えた古墳Ⅰ—念仏山古墳—」『神戸市立博物館研究紀要』第6号 神戸市立博物館
- 木村 理 2020a「古市古墳群における中壘前方後円墳の埴輪生産」『埴輪論叢』第10号 埴輪検討会
- 木村 理 2020b「古墳時代中期における王権中核古墳群の埴輪生産」『考古学研究』第67巻第1号 考古学研究会
- 木村 理 2022「古墳時代中期の円筒埴輪」『埴輪の分類と福年』埴輪検討会
- 田中智子 2013「古墳時代後期の埴輪生産・供給体制の実像をめぐって」『立命館大学考古学論集』VI 立命館大学考古学論集刊行会
- 寺村裕史 2004「円筒埴輪列の変遷とその意義」『考古学研究』第51巻第2号 考古学研究会
- 中園聡・平川ひろみ・太郎良真紀 2022「明石地域の埴輪の産地」『明石の墓と祭祀』発掘された明石の歴史展実行委員会
- 濱田耕作 1931「埴輪に関する二三の考察」『東京帝室博物館講演集』第11冊 帝室博物館
- 原田早季子 2020「円筒埴輪列の検討」『埴輪論叢』第10号 埴輪検討会
- 原田昌浩 2015「古墳時代中期の埴輪生産」『考古学研究』第61巻第4号 考古学研究会
- 原田昌浩 2017「京都盆地北部における古墳時代後期の埴輪生産」『埴輪論叢』第7号 埴輪検討会
- 坂 靖 2007「大和の円筒埴輪」『古代学研究』第178号 古代学研究会
- 東影 悠 2023「佐紀古墳群東群における円筒埴輪配列—大型前方後円墳周底部の配列変遷—」『豊原考古学研

究所論集』第十八 八木書店

廣瀬 寛 2002「前・中期古墳の埴輪配列－畿内を中心に－」『季刊考古学』第79号 雄山閣

廣瀬 寛 2006「五色塚古墳と前期後葉の埴輪生産」『史跡 五色塚古墳 小窓古墳発掘調査・復元整備報告書』
神戸市教育委員会

廣瀬 寛 2015『古代王権の形成と埴輪生産』同成社

廣瀬 寛 2021『6世紀の埴輪生産からみた『部民制』の実証的研究』奈良文化財研究所

三木 弘ほか 2015「和泉地域における古墳時代前期の埴輪生産」『大阪府立近つ飛鳥博物館報』18 大阪府
立近つ飛鳥博物館

横地 勲 2018「兵庫県長尾山古墳築造労働量の考古学的検討」『待兼山考古学論集Ⅲ』大阪大学考古学研究室

和田一之輔 2021「菅原東と新池」『古墳文化基礎論集』古墳文化基礎論集刊行会

和田一之輔 2022「古墳からみた布留遺跡の集団間関係－須川1号墳出土埴輪の紹介－」『ここまで判った布留
遺跡－発表資料集』天理市観光協会

挿図出典

第63～65図・別表3～7：筆者作成

別表3 I・II期における樹立試算数と粘土量

古墳名	縦横 (m)	縦影 時間	挿輪 配置	曜日	1段目		2段目		挿丘		外堤		内堤		集計	集出条件	
					1段目	2段目	1段目	2段目	挿丘	挿丘	内堤	外堤	内堤	外堤			
淡谷向山	300	方円 II	密	挿輪河長(m)	813.54	679.39	121.2	564.83	—	—	—	—	—	—	2178.96	(1)・3段目2.5本/1m、(2段目・廣間)2.5本/1m (1) 586/ 挿輪径25cm、樹高94cm、樹厚1.5cm ※その他の数は3段目	
				柁土量(m ³)	32.12	23.94	4.27	22.31	—	—	—	—	—	—	—	82.64	
				挿輪河長(m)	515.14	423.48	272.17	75.91	—	—	—	—	—	—	—	—	1286.7
鳥の山	200	方円 II	密	挿輪河長(m)	1227	1008	648	181	—	—	—	—	—	—	3964	※部径32cm、樹高77cm、樹厚1.2cm	
				柁土量(m ³)	12.27	10.08	6.48	1.81	—	—	—	—	—	—	—	39.64	
				挿輪河長(m)	486.92	410.22	245.72	—	—	—	—	—	—	—	—	1142.86	2.1本/1m
五色塚	194	方円 II	密	挿輪河長(m)	1023	861	516	—	—	—	—	—	—	—	2600	※部径35cm、樹高100cm、樹厚1.5cm	
				柁土量(m ³)	16.16	13.6	8.15	—	—	—	—	—	—	—	—	37.91	
				挿輪河長(m)	373.54	296.02	85.42	—	—	—	—	—	—	—	—	754.98	3.1本/1m
東大寺山	130	方円 II	密	挿輪河長(m)	1158	918	265	—	—	—	—	—	—	—	2341	※部径26cm、樹高75cm、樹厚1.2cm	
				柁土量(m ³)	10.42	8.26	2.39	—	—	—	—	—	—	—	—	21.07	
				挿輪河長(m)	558.09	220.5	342.2	—	—	—	—	—	—	—	—	1121.39	1.8本/1m
メスリ山	235	方円 I中	密	挿輪河長(m)	1006	997	616	—	—	—	—	—	—	—	2019	※部径48cm、樹高120cm、樹厚2cm	
				柁土量(m ³)	24.14	9.53	14.78	—	—	—	—	—	—	—	—	48.65	
				挿輪河長(m)	316.37	212.56	79.33	—	—	—	—	—	—	—	—	608.26	2.8本/1m、(2段目) 2本/1m
濃雄丸山	109	方円 II	密	挿輪河長(m)	886	425	222	—	—	—	—	—	—	—	1333	※部径35cm、樹高94cm、樹厚1.5cm	
				柁土量(m ³)	11.52	5.53	2.89	—	—	—	—	—	—	—	—	19.94	※その他の数は遺出
				挿輪河長(m)	536.36	—	366.4	—	—	—	—	—	—	—	—	902.76	1.6本/1m
赤土山	106	方円 II	密	挿輪河長(m)	858	—	586	—	—	—	—	—	—	—	1444	※部径40cm、樹高95cm、樹厚1.5cm	
				柁土量(m ³)	12.78	—	8.73	—	—	—	—	—	—	—	—	21.51	
				挿輪河長(m)	284.68	244.74	—	103.09	—	—	—	—	—	—	—	632.51	1.1本/1m、(狭戸原)0.6本/1m
寺戸大塚	98	方円 I中	疎	挿輪河長(m)	423	269	—	113	—	—	—	—	—	—	695	※部径39cm、樹高75cm、樹厚1.8cm	
				柁土量(m ³)	4.23	3.63	—	1.53	—	—	—	—	—	—	—	9.39	※その他の数は挿輪挿輪
				挿輪河長(m)	149.29	—	108.4	—	—	—	—	—	—	—	—	288.7	(1段目)0.5本/1m、(2段目)1.1本/1m
白水塚	56	方円 I中	疎	挿輪河長(m)	75	—	119	—	—	—	—	—	—	—	194	※部径35cm、樹高91cm、樹厚1.2cm	
				柁土量(m ³)	0.73	—	1.15	—	—	—	—	—	—	—	—	1.88	1段目は遺出挿輪挿輪
				挿輪河長(m)	117	—	55	—	—	—	—	—	—	—	—	172	1本/1m
長尾山	42	方円 I中	疎	挿輪河長(m)	117	—	55	—	—	—	—	—	—	—	172	※部径40cm、樹高60cm、樹厚0.8cm	
				柁土量(m ³)	0.56	—	0.26	—	—	—	—	—	—	—	—	0.82	

別表4 Ⅲ・Ⅳ期における樹立試験数と粘土量(1)

古墳名	規模 (m)	形状	時期	墳輪 配置	曜日	墳丘		外壁		内壁		总计	算出条件			
						1区画	2区画	内周	外周	内周	外周					
大田原	525	方円	IV-2	密	墳輪列長(m)	1389.9	1151.74	656.43	175.69	237.26	2540.22	1945.91	2179.26	12573.49		
					個体数(個)	3336	2764	1575	422	5694	6097	4670	5230	29799	4.4枚/1m	
					粘土量(m ³)	33.36	27.64	15.75	4.22	56.94	60.97	46.7	52.3	297.99	底層径33cm、高85cm、壁厚1.2cm	
豊田御嶽山	425	方円	密小	墳輪列長(m)	1023.34	832.31	472.62	82.15	2600.31	2160.92	1555.61	1773.885	9520.745			
				個体数(個)	2274	1849	1050	183	4430	4925	3657	3942	22170	底層径35cm、高90cm、壁厚1.2cm		
				粘土量(m ³)	25.01	20.34	11.55	2.01	49.39	54.18	38.03	43.36	243.89	2.8枚/1m		
土師 ニサンザイ	300	方円	密	墳輪列長(m)	871.73	712.33	371.09	95.7	1395.36	1507.08	—	—	—	4953.29		
				個体数(個)	2441	1995	1059	268	3907	4220	—	—	—	13879	底層径28cm、高79cm、壁厚1.2cm	
				粘土量(m ³)	23.19	18.95	9.87	2.55	37.12	40.09	—	—	—	131.77	2.8枚/1m	
上石津 ミサンザイ	365	方円	密	墳輪列長(m)	1056.08	835.19	487.16	47.23	1631.35	1804.31	—	—	—	5861.32	2.8枚/1m	
				個体数(個)	2957	2359	1364	132	4568	902	—	—	—	12262	外壁の輪軸配置は伊瀬山古墳と同様	
				粘土量(m ³)	25.43	20.12	11.73	1.14	39.28	7.76	—	—	—	105.48	底層径25cm、高72cm、壁厚1.2cm	
ヒヤツダ	219	方円	密	墳輪列長(m)	576.14	449.25	303.6	65.77	1138.28	—	904.73	982.31	4220.33	2.7枚/1m		
				個体数(個)	1566	1213	820	178	3073	—	2443	2633	1936	底層径26cm、高70cm、壁厚1.2cm		
				粘土量(m ³)	13.07	10.19	6.89	1.5	25.81	—	22.29	100.27	—	—		
ウツナベ	270	方円	密	墳輪列長(m)	704.35	571.86	336.65	82.23	734.99	—	1188.73	1371.7	4990.51	2.2枚/1m (墳丘・内壁)、0.1/1m (外壁)		
				個体数(個)	1550	1258	741	181	74	—	2615	3018	9437	底層径35cm、高81cm、壁厚1.2cm		
				粘土量(m ³)	15.5	12.58	7.41	1.81	0.74	—	26.15	30.18	94.32	幅57cm×7cm×1cm		
太田茶白山	226	方円	密	墳輪列長(m)	640.4	530.1	323.91	95.43	1017.76	1108.53	—	—	—	3716.13		
				個体数(個)	1685	1395	852	251	2678	2917	—	—	—	9770	底層径28cm、高56cm、壁厚1.2cm	
				粘土量(m ³)	11.29	9.35	5.71	1.68	17.94	19.54	—	—	—	65.53		
伊野山	230	方円	密小	墳輪列長(m)	629.2	505.27	272.11	80.07	1005.14	1131.16	—	—	—	3622.96		
				個体数(個)	1656	1330	716	210	2645	2977	—	—	—	9539	底層径28cm、高79cm、壁厚1.2cm	
				粘土量(m ³)	15.73	12.64	6.8	1.96	25.13	28.28	—	—	—	90.54		
神沖山	290	方円	密	墳輪列長(m)	728.41	589.03	375.26	117.56	1095.49	1246.99	—	—	—	4152.74	2.5枚/1m (墳丘・外壁内側)	
				個体数(個)	1821	1473	938	294	2739	623	—	—	—	7880	0.5枚/1m (外壁外側)	
				粘土量(m ³)	15.66	12.67	8.07	2.53	23.56	5.36	—	—	—	67.88	底層径24cm、高72cm、壁厚1.2cm	
コナベ	204	方円	密	墳輪列長(m)	584.15	470.49	273.04	86.66	1091.01	1170.77	—	—	—	3076.12	3枚/1m (墳丘・外壁内側)	
				個体数(個)	1752	1411	819	260	3273	135	—	—	—	7656	1枚/8.7m (墳丘・外壁外側)	
				粘土量(m ³)	12.96	10.44	6.06	1.92	23.33	1.35	—	—	—	56.08	外壁内：底層径24cm、高62cm、壁厚1.2cm 外壁外：底層径40cm、高37cm、壁厚1.2cm	
湯山	350	方円	密	墳輪列長(m)	1158.99	965.73	576.4	111.46	—	—	—	—	—	2812.59	2.7枚/1m	
				個体数(個)	3129	2607	1556	301	—	—	—	—	—	7950	底層径28cm、高62cm、壁厚1.2cm	
				粘土量(m ³)	23.15	19.29	11.51	2.23	—	—	—	—	—	56.18	外壁外は考慮せず	
伊山	282	方円	密	墳輪列長(m)	737.73	601.65	347.93	116.72	—	—	—	—	—	—	1804.03	2.5枚/1m
				個体数(個)	1844	1304	869	291	—	—	—	—	—	—	4500	底層径33cm、高55cm、壁厚1.2cm
				粘土量(m ³)	12.17	9.93	5.74	1.92	—	—	—	—	—	—	29.76	外壁外は考慮せず

別表5 Ⅲ・Ⅳ期における樹立試算数と粘土量(2)

古墳名	規模 (m)	築期	築物 配置	題目	墳丘		外周		内周		計	算出条件
					1段目	2段目	内周	外周	内周	外周		
心合寺山	160	方Ⅲ	密	埴輪列長(m)	353.85	184.94	—	—	—	—	975.84	3.1米/1m
				胴体取(個)	1355	1097	573	—	—	—	—	3025
瀬田	135	方Ⅲ	密	埴輪列長(m)	9.21	7.46	3.9	70.2	—	—	921.03	3米/1m
				胴体取(個)	358.5	299.94	192.39	70.2	—	—	—	2762
行倉塚	99	方Ⅲ	密	埴輪列長(m)	7.1	5.94	3.81	1.39	—	—	18.24	3米/1m
				胴体取(個)	271.76	219.95	140.2	113.23	—	—	—	229
乙女山	130	軌立Ⅲ	密	埴輪列長(m)	8.15	6.60	4.21	340	—	—	16.55	3.2米/1m
				胴体取(個)	6.03	4.88	3.12	2.52	—	—	—	674.43
龜宮	91	方Ⅲ	密か	埴輪列長(m)	296.05	221.459	66.02	90.9	—	—	12.96	3.2米/1m
				胴体取(個)	947	709	211	291	—	—	—	2158
淵山	122	方Ⅲ	密	埴輪列長(m)	241.23	188.28	132.58	25.49	—	—	587.58	3.2米/1m
				胴体取(個)	710	554	390	75	—	—	—	1725
磯吹山	71	軌立Ⅲ	密	埴輪列長(m)	5.18	4.04	2.85	0.55	—	—	12.85	2.4米/1m
				胴体取(個)	285.6	—	154.9	36.52	—	—	—	477.02
月の輪	60	Ⅲ	密	埴輪列長(m)	6.51	—	3.52	0.84	—	—	10.87	2.9米/1m
				胴体取(個)	134.95	105.22	29.06	59.05	—	—	—	328.25
栗山	55	方Ⅲ	密	埴輪列長(m)	391	305	84	171	—	—	95	3.1米/1m
				胴体取(個)	2.58	2.01	0.55	1.13	—	—	—	6.22
三石石塚	45	軌立Ⅲ	密	埴輪列長(m)	185.79	161.11	52.02	21.22	—	—	424.13	3.1米/1m
				胴体取(個)	190	499	161	66	—	—	—	916
佐城田原塚	60	Ⅲ	密	埴輪列長(m)	1.06	2.79	0.9	0.37	—	—	239.42	3.4米/1m
				胴体取(個)	176.22	—	63.25	—	—	—	—	575
寺山崩山	45	方Ⅲ	密	埴輪列長(m)	4.23	—	1.52	—	—	—	5.71	2.4米/1m
				胴体取(個)	93.75	—	39.89	—	—	—	—	133.64
長城田原塚	60	Ⅲ	密	埴輪列長(m)	335	—	142	—	—	—	477	底径18cm、器高46cm、器厚1.2cm
				胴体取(個)	1.84	—	0.78	—	—	—	—	2.68
寺山崩山	45	方Ⅲ	密	埴輪列長(m)	117.6	—	46.38	—	—	—	355.98	1.3米/1m
				胴体取(個)	153	—	60	—	—	—	—	462
寺山崩山	45	方Ⅲ	密	埴輪列長(m)	130.19	—	48.19	17.27	—	—	196.65	2.68米厚層輪列
				胴体取(個)	273	—	101	36	—	—	—	410
				粘土量(m ³)	1.64	—	0.61	0.22	—	—	2.47	底径22cm、器高50cm、器厚1.2cm

別表6 Ⅲ・Ⅳ期における樹立試算数と粘土量(3)

古墳名	規模 (m)	墳形	時期	築物 配置	題目	墳丘			外堤		内堤		総計	算出条件
						1段目	2段目	墳頂部	内側	外側	内側	外側		
榑木塚	30	円	Ⅳ-2	不明	埴輪列長(m)	79.59	—	31.21	—	—	—	—	110.8	等として算出 底厚径25cm、器高52cm、器厚1.2cm
					胴体数(個)	227	—	89	—	—	—	316		
					粘土量(㎡)	1.41	—	0.55	—	—	—	1.96		
住吉宮前52	15	方	Ⅲ	横	埴輪列長(m)	47.41	—	33.27	—	—	—	80.68	0.6本/1m 底厚径20cm、器高50cm、器厚1.2cm	
					胴体数(個)	28	—	20	—	—	—	48		
					粘土量(㎡)	0.17	—	0.12	—	—	—	0.29		
住吉宮町 32-1号	14	方	Ⅳ-3	横	埴輪列長(m)	40.79	—	18	—	—	—	66.79	0.7本/1m 底厚径16cm、器高38cm、器厚1.2cm	
					胴体数(個)	29	—	18	—	—	—	47		
					粘土量(㎡)	0.13	—	0.08	—	—	—	0.21		

別表7 V期における樹立試算数と粘土量

古墳名	規模 (m)	墳形	時期	築物 配置	題目	墳丘			外堤		内堤		総計	算出条件
						1段目	2段目	墳頂部	内側	外側	内側	外側		
岡ミサンザ イ	245	方円	V	密	埴輪列長(m)	668.41	467.05	276.89	55.45	1122.94	1172.36	—	3763.1	2.4本/1m 底厚径38cm、器高65cm、器厚1.5cm
					胴体数(個)	1694	1121	665	133	2695	2814	—	9532	
					粘土量(㎡)	15.72	10.99	6.52	1.3	26.41	27.58	—	88.32	
今城塚	190	方円	Ⅴ-2	密	埴輪列長(m)	509.32	323.17	73.08	56.2	—	825.98	944.88	2732.63	(内堤外側)底厚径40cm、器高130cm、器厚2cm 底厚径53cm、器高90cm、器厚2cm
					胴体数(個)	1185	752	170	131	—	1920	1890	6948	
					粘土量(㎡)	21.33	13.54	3.06	2.36	—	34.56	49.14	123.99	
大日山35号	105	方円	Ⅴ-2	密	埴輪列長(m)	279.82	227.59	137.11	40.4	—	—	—	684.92	2.2本/1m 底厚径22cm、器高60cm、器厚2cm
					胴体数(個)	895	728	439	129	—	—	—	2191	
					粘土量(㎡)	6.44	5.24	3.16	0.93	—	—	—	15.77	
寺口芝塚 D27号	20	軌立円	Ⅴ-1	密	埴輪列長(m)	52.68	—	17.22	9.31	—	—	—	79.21	3.8本/1m 底厚径16cm、器高42cm、器厚1.2cm
					胴体数(個)	200	—	65	35	—	—	—	300	
					粘土量(㎡)	1	—	0.33	0.18	—	—	—	1.51	

第4章 平城宮下層 SD4992 出土土師器の時空間的位置づけ

山本 亮

はじめに

平城宮跡第39次ならびに第43次調査で検出された斜行溝 SD4992 では多量の土師器と埴輪が出土した。ここではそのうち土師器について報告し位置づけについてまとめ、阿道溝から出土した埴輪群の理解の一助としたい。

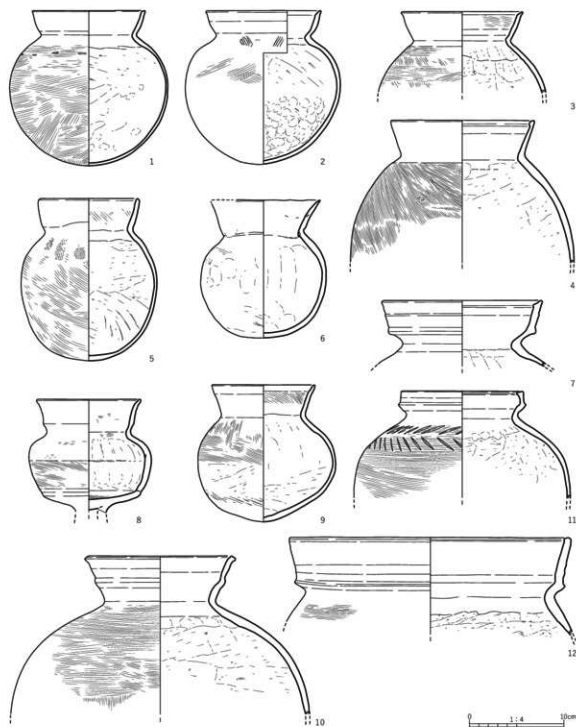
1 土器群の概要 (第66~68図)

土器の注記にはまず出土遺構について古溝と南北古溝、東西溝があるが、これは同じ遺構 SD4992 のうちとくに南北および東西方向に分岐する部分を指して付されたものとみられる。土層については、下層、砂層、特段の記載のないもの3つに分けられる。これらは調査回数や地点ごとの記載のばらつきという側面があるが、土器群の内容として大きく様相に差はないものと捉えられるため併せて報告する。詳しい出土層位については別表8をご覧ください。

出土した器種には甕、壺(二重口緑壺、直口壺)、小型丸底壺、高杯、ミニチュア土器などがある。

布留型甕には中型(1-3)と大型(4)がある。中型のものは、口縁端部が内傾する面をなすが肥厚は顕著でない。1は肩部の外面に横列の列点文をもつ。2は肩部に線刻文をもち、体部下半の内面には一様にユビオサエがみられる。このように体部(以下、本節では特に指定しない限り肩部、胴部、底部をまとめて体部と呼ぶ)下半にはケズリが及ばないためか膨らみが弱く、やや尖底ぎみの形態を取るものが特徴である。4の大型品は口縁部の立ち上がりが強く、直線的に伸びる。やや長胴を呈するものとみられる。肩部に列点文かとみられる窪みがある。5は体部の外面をハケ、内面をケズリで調整する長胴ぎみの甕で、布留型甕を模倣生産したもののか。肩部の外面には数箇所をわたり布目の圧痕がみられるが、形態は一定しないため外型に当てる際に擦されたものとは考えづらい。むしろ内面のケズリをほどこす際に破けないように外から手等を添える際に布を当てたものかと考えられる。6は体部の外面をハケおよびナデ、内面をナデで調整する甕。口縁部が比較的長く外に開いて伸びる。

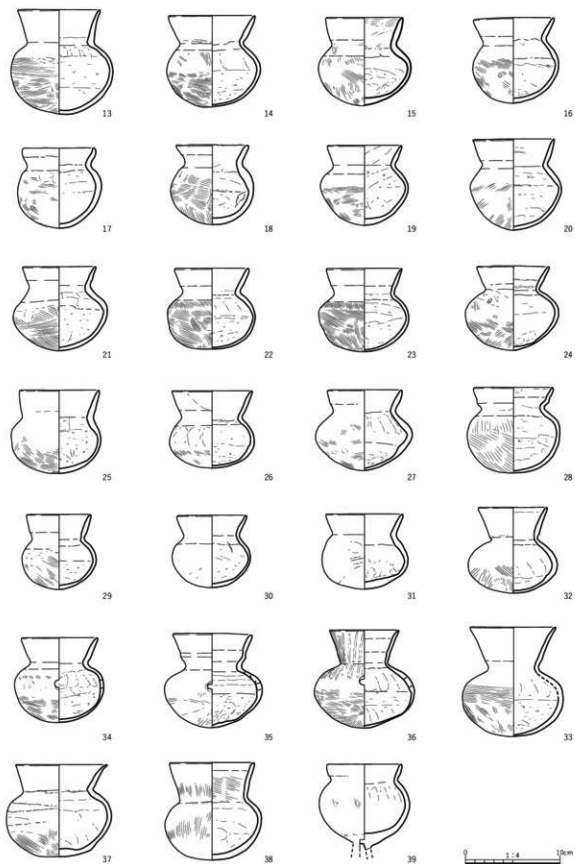
7は二重口緑壺。頸部が短い、肩部の開きからみて頸部が比較的細く締まる形態を取るものと考えられることから壺として報告する。口縁端部が内面に肥厚し、内傾する面をもつもので、布留型甕の口縁端部と共通する特徴をもつものである。こうした二重口緑壺は、奈良盆地内では発志院遺跡や布留遺跡などでみられる。8は脚台付の複合口縁を呈する中型の壺で、底部と胴部の境において高杯の杯底部から口縁部への立ち上げと同様に外面に段を残すもの。体部の外面はハケ、内面は底部をハケ、胴部から肩部をナデで調整する。9は直口壺で、外面は肩部に比較的細かいハケ、胴部にケズリ、底部付近に粗いハケ調整がみられる。内面の調整は肩部から胴部にかけてナデ、底部付近はケズリである。口縁端部の内面に段をもつ。大型の二重口緑壺(10)は体部の外面にハケ、内面にケズリをほどこす布留



第66図 SD4992出土土器(1) - 甕・壺

系のもの。一次口縁部がほぼ頸部途中の段と化している。11は複合口縁の壺で、二次口縁部が短く内傾ぎみに立ち上がる。肩部外面のヨコハケに重ねるようにハケ工具の端部の押捺による羽状文をほどこす。山陰系である。12は複合口縁を呈する大型の甕または鉢。同様の形態をとる大型の甕は平城宮下層SD6030上層の資料にある。山陰系とみてよい。

小型丸底壺は体部の外面にハケ、内面にケズリをほどこし、口縁部から頸部のヨコナデが顕著な布留



第67図 SD4992出土土器(2) - 小型丸底壺

系のもが主体である(14-30)。頸部外面のナデが顕著なものが多い。体部内面のケズリは形態が似通うものでも範囲に差異がみられる。具体的には肩部まで及ぶもののほか、体部下半付近までしか及ばないものも複数ある。体部の内面に加えて外面の調整についても、一定の範囲をケズリで調整するものがみられる(29-30)。31は内外面を基本的にナデおよびオサエで調整するもので、胴部外面にタタキ様の圧痕がみられる。32、33は頸部がすばまる形態のもの。32は内面をナデで調整するが、内面は他のケズリをほどこすものと同様に段が付くことからあらかじめケズリをほどこしたのちにナデで調整したものと捉えてよいだろう。

34～36は胴部に穿孔をもつ罍様のもの。体部外面をハケ、内面の底部から一定範囲をケズリで調整するのを基本とするが、形態には通常の小型丸底壺と共通するもの(34)、複合口縁を呈するもの(35)、頸部がすばまり直口壺様となるもの(36)がある。36は口縁部から肩部の外面にかけて縦方向のミガキをほどこす。

37は体部の外面をハケおよびナデ、内面をナデで調整するもので、口縁部は直線的に外に開き、胴部を開きぎみに摘み出す形態をとる。肩部から胴部最大径付近の外面に粘土の積み上げ痕を残す。

高杯は布留系高杯の系譜を引く無稜の外反高杯(40-46)と有稜高杯(小型47-49、大型50-55)が主体である。無稜外反高杯は概して薄手の作りのものが多い。小型の有稜高杯には脚柱部が中空になるもの(47)と中実になるもの(48-49)とがある。大型の有稜高杯は法量にややバリエーションがあるが、杯底部は比較的大型で、口縁部が外に大きく開く点は共通する。56は粗製の高杯で、杯部と脚柱部との接合部の周囲に杯部から一連で厚く接合粘土が付される特徴をみれば、のちの椀形高杯に連なるものか。57も粗製であり、有稜高杯を指向したものかとみられる。

58～66はミニチュアの土器群。手捏ねにより成形する。58が高杯形、59～64が小壺(甗)形である。65は片口を有する無頸の鉢形、66はやや大ぶりな有頸の鉢形、67は土製の円盤である。

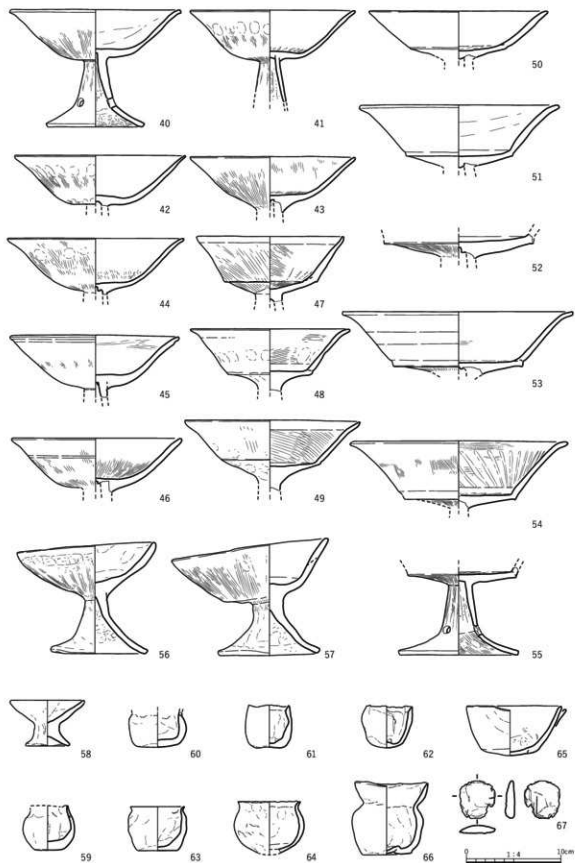
2 土器群の位置づけ

以上の土器器種についてそれぞれの様相を以下にまとめ、時期比定をおこなう。

甗では布留型甗があるが、調整や形態は一定せず、派生形と捉えられる事例を含んでいる。壺には大型の二重口縁壺と中型の直口壺があり、二重口縁壺は布留系と捉えてよいものであるが、中型の壺は脚台付きのものも含めて前期の土器からの系譜が定かたではない。

小型丸底壺は布留系のもが主体であるが、その反面、底部の外面にケズリ、細筋横方向のミガキをほどこし胎土が精良な精製器種に属するものは明瞭にはみられない。むしろ、そうした前期以来の布留式の土器群の系譜からは十分に把握できない製作技法によるものが一定数含まれる。そして布留系のももの、体部内面のケズリの範囲が肩まで及んだり、胴部下半のみとしたりするなどし、形態も安定しない。体部の各所が凹んだような歪な形態をとるか、もしくは体部の最大径付近が張り出す反面肩部と下半の膨らみが弱いものが多いが、これは内面調整による押し出しが十分でなく、体部を膨らませる意識が希薄であるためと考えられる。

高杯では無稜外反高杯と大型有稜高杯が主体となる。これらはともに布留系の製作技術の系譜を引くものと捉えられるが、いっぽうで小型の有稜高杯や粗製のもののように系譜があきらかでないものも一



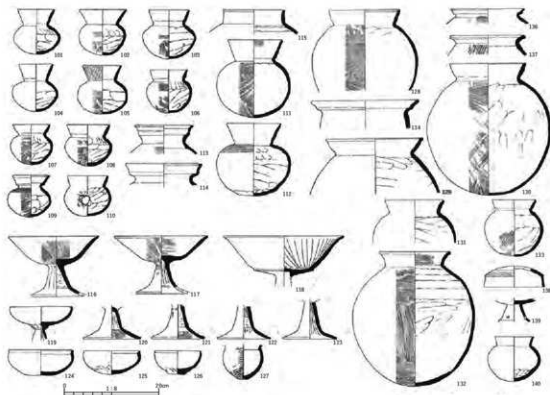
第68図 SD4992出土土器(3) - 高杯・ミニチュア土器

定数合んでいる。大型有稜高杯の杯部は比較的低平なものが多く、中野咲の1類(中野2010)に該当するものと捉えられる。粗製の高杯(56)は定型化以前の椀形高杯(中野の椀形高杯1類)とみることも可能である。

注目されるのがミニチュア土器の存在であり、とくに58の高杯形や59～64の小壺(埴)形については、全体の形態や口縁部の仕上げなどの点が奈良県桜井市馬場山ノ神遺跡の資料に類似するものがある(西崎・高橋1920, 樋口1975)。山ノ神遺跡の資料は磐座祭祀にともなうもので、正しく三輪山の祭祀に関わる遺跡である。一定程度の時期幅をもつものが集積した可能性は排除できないが、同様の資料の定点となる資料が得られたことはおおい。もちろんSD4992についても溝という遺構の性格上、一括性の程度は限定されたものとなるが、こうした祭祀行為がおこなわれた場所であると言えることができる。

外来系の土器については壺や甕に山陰系のものが含まれる程度である¹⁾。

以上のような様相を概観し、最も判別しやすい高杯の位置づけをもとに時期判断をおこなうと、SD4992の年代について既往の編年研究に当てはめて考えれば辻美紀の2段階(辻1999)、中野咲の2群(中野2010)に当たるものと捉えられる²⁾。そのほかの器種についても矛盾はないものとする。寺沢薫の編年では布留4式古相に当たる(寺沢1986)。本資料に須恵器は共伴しないが、中野らの成果を参考にすれば須恵器ではTG232型式期に該当しよう。SD4992下層からはIII群の埴輪が出土しており、埴輪についても年代の定点を得られたことになる。



第69図 平城宮左京三条二坊 SD-881 出土土器

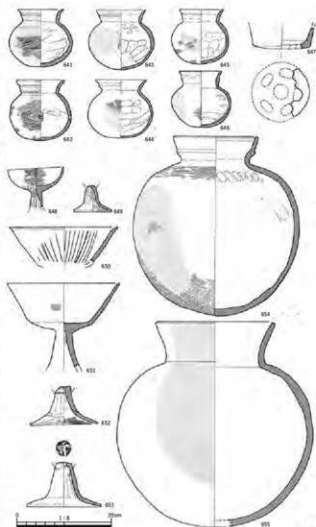
3 佐紀遺跡を中心とした関連資料との関係性にもとづく評価

ここでSD4992が含まれる佐紀遺跡を中心とする周辺出土の資料との関係性に言及し、位置づけについてさらに追究することとしたい。

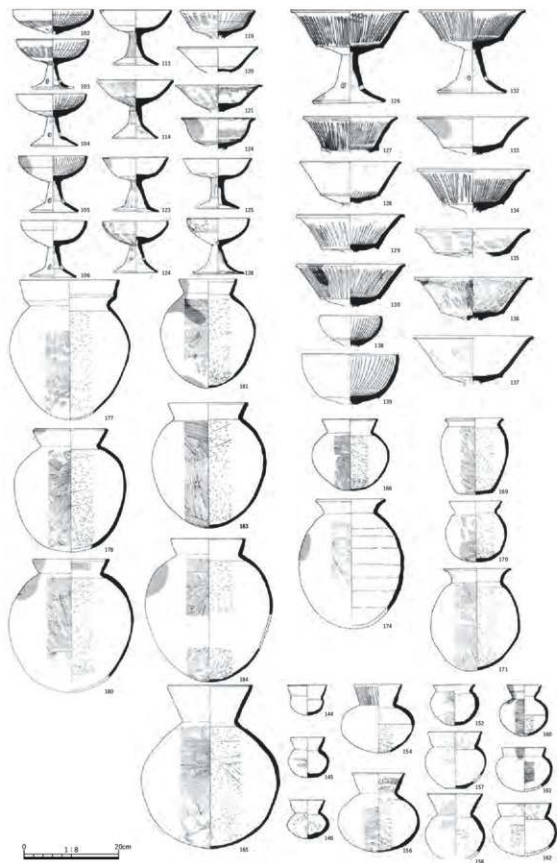
平城京左京三条二坊下層 SD-881 (第69図) は布留4式の標識とされる資料であり〔寺沢1986〕、その新相に位置づけられる〔奈文研1975〕。無稜外反高杯は杯部と脚柱部の開きが大きくなり、器壁も分厚くなる。定型的な椀形高杯が組成するほか、大型有稜高杯は杯部の高さを増し中野の分類では2類となる。また口縁端部を短く外に開く坏類が一定数存在する点も注目される。TK216型式の須恵器を共存するのでSD4992とは多少の時間的なヒアタスがあると考えられるが、少なくとも異なる段階として捉えられるのは間違いない。辻の編年で3段階、中野の編年で3群となる。

平城宮下層 SD6030 上層の資料 (第71図) は中期の土師器の典型資料として取り上げられることの多いものだが〔奈文研1981〕、これまで指摘されてきたように時期幅がある資料である〔浜中・田中

2006、中野2010〕。中野はSD6030上層について4群が主体となるとし、器種を限ってみてみると例えば大型有稜高杯ではバリエーションがありつつも左京三条二坊SD-881の資料よりも杯部の高さが増した中野の3類が主体となる点が特徴である。またSD4992やSD-881では韓式系の器種が目立たないのであるが³⁾、SD6030上層では甌や平底の鉢が顕在である。韓式系の器種が土器組成中に顕在化するのの中野も4群としており、奈良盆地全体の傾向の中で当地でも韓式系の器種の導入がおこなわれたことがわかる。これまでにSD6030上層に近似する資料として平城宮兵部省下層SE13055の資料(第70図)がある〔奈文研2005〕。これは井戸の埋土から出土した一括資料で器種は限られるが、椀形高杯の形態や、大型有稜高杯の口縁部の立ち上がり角度など確かにSD6030上層との共通点が認められる。この中にも甌が組成していて、やはりこの段階から韓式系の器種が定着するという考えの補強になりうるであろう。他の集団とタイミングを同じくして生活様式に韓式系の器種を取り入れたと解釈さ



第70図 平城宮兵部省下層SE13055出土土器

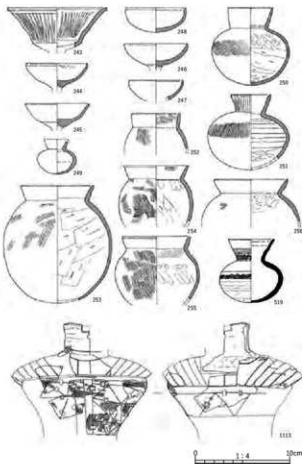


第71図 平城宮朝堂院下層 SD6030 上層出土土器

れるものであり、外来系の土器が少ないことからみても集団の系譜はあくまで奈良盆地在来の集団を母体とするものと考えてよいだろう。

加えてSD4992では山ノ神遺跡すなわち三輪山祭祀と共通するミニチュア土器による祭祀行為がおこなわれていた。埴輪の生産者集団が三輪山祭祀、すなわち王権の祭祀を同じくおこなっていたことは当然ながら埴輪生産者集団と王権との結びつきの強さを感じさせるものである。

なおSD4992が位置する平城宮東院下層では、第120次調査SK9394でやはりSD6030上層、中野の4群に併行すると考えられる土師器、須恵器、埴輪(第72図)が出土している(奈文研2003)。これは何らかの祭祀行為を反映したものと捉えられるが、そのなかに甲冑形の埴輪が含まれていることが注目される⁴⁾。もしこれが祭祀行為にともなうものであるとすれば、SD4992から出土した埴輪についても単純に製作失敗品だけではなく祭祀行為にともなうものが含まれる可能性があってもよいだろう。



第72図 平城宮東院下層SK9394出土土器・埴輪

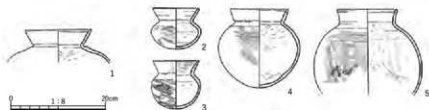
4 SD4992 出土資料の時的意義

前節では佐紀遺跡の他の資料との比較検討をおこなったが、SD4992に先行する資料が乏しく十分でない。次にSD4992が属する布留4式古相について、先行する時期の事象についても取り上げつつ古墳時代中期の中での位置づけについて考えてみることにする。

(1) 中期の開始と布留3式・4式

少なくとも布留2式が古墳時代前期のうちにあることは共通理解としてよいと考える。問題は布留3式の扱いである。布留3式と4式の弁別については小型精製器種の消長が問題とされてきたが、布留式初頭以来の古備系の製作技術にもとづく一群(B群:次山1993, 1群:三好2007)については分布にある程度の地域差がみられることがあきらかとなった(三好2010)。すなわち地域によっては指標となる小型精製器種の存在をそもそも組成から欠く場合もあり、生産地から遠隔となる遺跡では様相差からは布留3式と4式(古相)の弁別が困難となる事例もありうるのである⁵⁾(笹栗2017・2023)。

ただし本来の寺沢薫による理解に立ち返れば、布留4式の指標は布留型甕であれば口縁部g手法(端部内面肥厚)の減少とh手法(素口縁)の増加、長胴化、体部スリナゲの粗雑化が挙げられている(寺沢1986)。寺沢は高杯の組成に大きな変化はないとするが、標識的な資料の組成をみる限り大型有縁高杯



第73図 津堂城山古墳出土土器

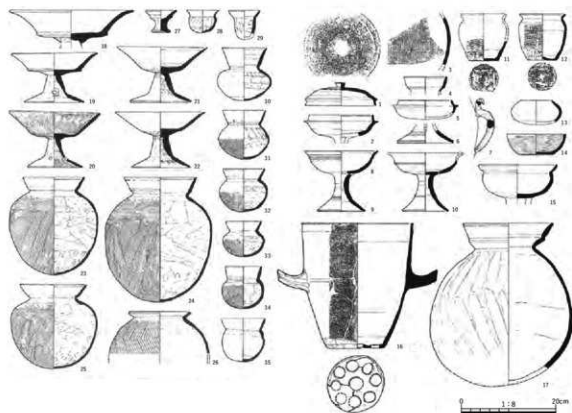
の出現は指標の一つになるであろう。SD4992では大型・小型の有縁高杯が組成上大きな割合を占めている点が特徴である。さらに指標を加えるとすれば、布留型甕や布留系小型丸底壺の内面ケズリが十分に体部内面全体に行きわたらないものが大半となる点であろうか。先にSD4992の報告中で布留型甕であれば体部の形態が安定しないこと、布留系小型丸底壺でも形態が歪になったりするものがあることに触れたが、これは内面調整が十分でないために押し出しによる膨らみが生じず、整美な球剛になしえなかったことに起因するものと考えられる。肩部内面までケズリが及んでいても、その程度は十分でないために器壁が厚いものが多いのである。往々にして肩部の膨らみが足らず、なで肩を呈するものが散見されるようになるのはこのためである。すなわち調整の省略化が形態の不安定性に作用するようになったと捉えられる。これは量比の問題となる恐れもあるが、傾向として示しておく。

古墳編年のうえでの中期の画期となる古墳は津堂城山古墳とされるが(第73図)、近年、津堂城山古墳を布留3式として土器編年上では同時期から古墳時代中期とみる考えがみられるようになってきた〔中野2021など〕。津堂城山古墳の出土土器については埴塚、周濠から出土し、報告書では上ノ井手遺跡SE030下層に併行するもの(布留3~4式)として記載されている(藤井寺市教委2013)。津堂城山古墳から出土した土器を笹栗拓は津堂遺跡1段階(布留3~4式併行)、市村慎太郎は布留式中期IV(布留4式併行)とする(笹栗2018、市村2013)。評価が分かれているようにも見えるが、ただしこれは先にみたように布留3式と4式の弁別の問題が絡んでいるのであって、その指標の違いにより前後するものと捉えてよいと考える。あらためて実測図を見てみると、中型の布留型甕は口縁端部の内面肥厚が顕著ではなくなっている(第73図4)。布留系の小型丸底壺はそもその個体数が少ないので単体では判断できないが、体部内面のケズリがいずれも十分全体には及ばず著しいなで肩となっている(第73図2・3)。大型の甕は口縁端部の肥厚が十分にあるが、口縁の立ち上がりが過剰に強く頸部の屈曲が弱い点は後出的要素である(第73図5)。少なくともこれらの土器をみれば従来の布留4式の範疇で捉えてよく、執市村と同じ立場をとることとしたい。もちろん出土状況からすれば土器はあくまで築造の下限を示すものとして控えめに捉える必要があるが、現状では少なくとも布留3式は古墳時代前期の内に入り、布留4式以降が中期であると捉えたい。

(2) 須恵器生産の開始時期と社会

目下確認されている最も古い須恵器の型式はTG232型式である。これが布留式のどの段階にあたるかは市村慎太郎により整理され、TG232号窯灰原直下出土の布留形甕の位置づけも含め布留4式古相の新しい段階とされている〔市村2013・2015〕。この成果は現状の認識として首肯されるものである。

このほかに陶質土器のセットを含む古相の土器群として山田道SD2570の資料(第74図)がある(奈文研1991)。これはSD4992と同じ布留4式古相に位置づけられてきた資料である。辻の2段階、中野



第74図 山田道SD2750出土土器

の2群として捉えてもよい。土師器では特にSD4992にも含まれる粗製の高杯に類似するものがあることが注目される(第74図20)。また布留形甕も肩部の内面調整が全体を丸くするに及ばず、やや角張って肩部上位は膨らみが弱い。先にみたように奈良盆地で韓式系の器種が定着するのは時期が中野の4群まで遅れると考えてよいが、当該資料のように早くからその存在は知られている。ただし陶質土器を除けば布留式の様式構成が維持されていることに留意したい。中野の5群(辻の4段階)が顕在化する時期、すなわち布留直後様式は、そうした土器の定着によって布留式が解体する

このように布留4式古相はその中で、次第に陶質土器が日本列島内で定着し、須恵器の出現に至る時期として意義付けられる。

(3) 小 結

このように布留4式古相の時期幅の中に津堂城山古墳、須恵器生産の開始が収まり、同じ時期にSD4992も存在していることとなる。土師器では布留4式古相が中期前葉に当たるものと捉えられるが、ただしSD4992から出土した埴輪はⅢ群とはいえず津堂城山古墳の段階までは廻らないものと認識している。高杯のうち大小の有稜高杯が組成の多くの割合を占める点も、出現からある程度の間を置いているものと捉えてよいと考える。市村もTG232型式の時期を布留4式古相の新しい段階とするように、この段階をさらに新古の段階に分けて考えるのであれば古段階に津堂城山古墳が、新段階にTG232型式期ならびにSD4992の資料群が位置づけられるものとみておきたい。

おわりに

以上、関連する諸問題の解決も図りながら、SD4992 出土資料の位置づけについて考察した。三輪山麓の山ノ神遺跡における磐座祭祀と共通するミニチュア土器をもとにやはり王権との結びつきが強い集団が当地で埴輪を製作していたものと考えた。それは布留4式古相の新段階に時期的な一つの定点があり、周囲の遺構からも中期後半の時期にかけて継続していたものと考えられる。

註

- 1) 肩部の内外面にケズリをほどこす裏が1点存在するが、弥生時代中期の裏の混入と考えている。
- 2) 中野の福年対応表(中野 2010; 表1)ならびに各類型消長表(中野 2010; 表2)は本文の記載と齟齬があり混乱がある。複雑な資料操作によるものと思料するが、いずれにしても各群と須恵器型式との重なりを複数時期に渡って認めることには問題がある。例えば大型(有縁)高杯は2類と3類を同じ系統のものとして順を追った型式変化をすと判断してよいが、須恵器の複数型式に渡る長期間の併行を認めている。須恵器の耐久性と希少性を考えれば土師器より長期間の使用を経て廃棄されるものが一定数存在することは十分に想定でき、結果として土師器の存在時期幅が実際より長く見積もられた恐れがある。例えば藤原宮下層 SD3100 は中野の4群に TK73 ~ 216 型式を主体とする須恵器がともなう資料であるが(奈文研 1997)、中には TK208 型式とみてよい須恵器も含まれる。年代論で取り上げられることの多い SD6030 上層の土師器(中野4群・布留直後様式主体)に TK73 型式の須恵器片をともなうことが注目されがらだが、同遺構は時期幅があり、むしろより代謝が早いはずの土師器の変遷観からみても古墳時代中期の集落遺跡では土師器に比して古い段階の須恵器がともなうことが多い傾向を看取すべきであろう。中野の4群はあくまで3群(布留4式新相)の土器群が型式化したものを含む布留直後様式として把握される。本稿では辻美紀の福年案との整合性も勘案し、中野の各群も土師器の型式学的変遷を軸として、共伴する須恵器型式の下限をもって次の段階に変遷するものと捉えたい。すなわち中野2群-辻2段階-TG232 型式、3群-3段階-TK73・216 型式、4群-4段階-TK208 型式、5群-4段階(継続)-TK23・47 型式、6群-5段階-MT15 ~ TK43 型式、という対応関係とする。
- 3) SD4992 の資料を取めたのと同じ調査次数のコンテナには瓶が1点含まれているのだが、残念ながら注記など確実に同遺構から出土したことを示す証拠がなく掲載を見送った。
- 4) SK9394 から出土した埴輪は甲冑形埴輪で三角板革綴短甲をモデルとしたものとみられるが(第72図 1113)、必ずしもその時々で甲冑をはじめとする種々の器物の最新型式が埴輪で表現されるわけではないことは言及しておく必要がある。
- 5) 例えば津堂遺跡や上牧遺跡がある。

引用・参考文献

市村慎太郎 2013 「土器にみる古墳時代前期後半の画期」『館報』19 大阪府立近つ飛鳥博物館

- 市村慎太郎 2015 「布留式の様式からみた須恵器出現期遡上の可能性」『古代文化』第67巻第1号 古代学協会
- 笹栗 拓 2018 「津堂遺跡の集落出現期の土器様相」『古墳出現期土器研究』第5号 古墳出現期土器研究会
- 笹栗 拓 2023 「摂津東部・上牧遺跡における古墳時代の土器編年」『大阪文化財研究』第56号 大阪府文化財センター
- 次山 淳 1993 「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40巻第2号 考古学研究会
- 寺沢 薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 中野 咲 2010 「古墳時代中・後期における奈良盆地の土師器編年とその特質」『考古学論叢』第33冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 中野 咲 2021 「畿内地域の中期土師器編年と外来系土器」『中期古墳研究の現状と課題 V～古墳時代中期の土師器・須恵器をめぐって～発表要旨集・資料集成』中国四国前方後円墳研究会
- 奈良国立文化財研究所 1975 「平城京左京三条二坊」奈良市
- 奈良国立文化財研究所 1981 「平城宮発掘調査報告 X」
- 奈良国立文化財研究所 1991 「山田道第2・3次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』
- 奈良国立文化財研究所 1997 「奈良国立文化財研究所年報」1997 III
- 奈良文化財研究所 2003 「平城宮発掘調査報告 XV」
- 奈良文化財研究所 2005 「平城宮発掘調査報告 XVI」
- 西崎辰之助・高橋健自 1920 「三輪町大字馬場山の神古墳」『奈良縣史蹟勝地調査会報告書』第7回 奈良県
- 浜中邦弘・田中元浩 2006 「宇治市街遺跡（宇治妙楽 55）の古墳時代流路 SD302 について—出土須恵器と年代観の検討を主として—」『第14回京都市埋蔵文化財研究会発表資料集—京都市内最新の研究成果—』京都市埋蔵文化財研究会
- 樋口清之 1975 「神体山信仰の考古学的背景」『大神神社史』大神神社史料編修委員会
- 藤井寺市教育委員会 2013 「津堂城山古墳」
- 三好 玄 2007 「小型丸底土器における製作技術の二系統」『考古学に学ぶ（Ⅲ）』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 三好 玄 2010 「布留式土器様式構造の再検討」『待叢山考古学論叢Ⅱ』大阪大学考古学研究室

挿図出典

- 第66～68図・別表8：筆者作成
- 第69図：奈良国立文化財研究所 1975
- 第70図：奈良文化財研究所 2003
- 第71図：奈良国立文化財研究所 1981
- 第72図：奈良文化財研究所 2005
- 第73図：奈良国立文化財研究所 1991
- 第74図：藤井寺市教育委員会 2013

別表8 SD4992出土土師器観察表

報告番号	器種	地区	注記	口縁/肩部外面調整	口縁/杯部内面調整	体部/肩部外面調整	体部/杯部内面調整	備考
1	罍	6AAG GR34	古溝	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	ケズリ	
2	罍	6AAG CH25	溝	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	上半ケズリ、下半オサエ	胴部黒割
3	罍	6AAG GR34	古溝	ヨコナデ	ハケ後ヨコナデ	ハケ	ケズリ	
4	罍	6AAG GA34	南北古溝砂	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	ケズリ	
5	罍	6AAG GS34	古溝	ヨコナデ	ハケ	ハケ	ケズリ	胴部黒目
6	罍	6AAG DR24	南北古溝黒色土	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ、板ナデ	ナデ	
7	缶	6AAG DR34	古溝砂	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ	山腹系
8	台付甕	6ALS IN43	古溝下	ヨコナデ	ハケ	ナデ、蓋部ハケ	ナデ	
9	直口甕	6ALS IL40	古溝下	ヨコナデ	ハケ後ヨコナデ	ハケ、ケズリ	上半ナデ、下半ケズリ	
10	二重口罍甕	6AAG GS35	古溝	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	ケズリ	
11	複合口罍甕	6AAG FG35	南北溝	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	ケズリ	山腹系
12	大型甕/鉢	6ALS IM41	古溝下	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	ケズリ	
13	小型丸底甕	6AAG GS35	古溝	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ、ケズリ	ケズリ	
14	小型丸底甕	6ALS IN43	古溝下	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	上半ハケ、下半ケズリ	
15	小型丸底甕	6AAG GA34	古溝	ヨコナデ	ハケ後ナデ	ハケ	上半ハケ、下半ケズリ	
16	小型丸底甕	6ALS IM41	古溝下	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	上半ハケ、下半ケズリ	
17	小型丸底甕	6ALS IN43	古溝下	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	ケズリ	
18	小型丸底甕	6AAG GB34	南北古溝砂	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	上半ナデ、下半ケズリ	
19	小型丸底甕	6AAH RJ35	南北古溝砂	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	ケズリ	
20	小型丸底甕	6ALS IM41	古溝下	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	ケズリ	
21	小型丸底甕	6AAG GB34	南北古溝砂	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	上半ナデ、下半ケズリ	
22	小型丸底甕	6AAG GA34	南北古溝砂	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	上半ナデ、下半ケズリ	
23	小型丸底甕	6AAG GA34	南北古溝砂	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	ケズリ	
24	小型丸底甕	6AAG GS34	南北古溝砂	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	ケズリ	
25	小型丸底甕	6ALS IL40	古溝下	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	ケズリ	
26	小型丸底甕	6AAG GR34	古溝砂	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ、オサエ	ケズリ	
27	小型丸底甕	6AAG DA28	南北古溝砂	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	上半ナデ、下半ケズリ	
28	小型丸底甕	6AAH RJ35	南北古溝砂	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	ケズリ	
29	小型丸底甕	6AAG GS34	南北古溝砂	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ、ケズリ	上半ナデ、下半ケズリ	
30	小型丸底甕	6AAG GA34	南北古溝砂	ヨコナデ	ヨコナデ	ケズリ後ナデ	上半ナデ、下半ケズリ	
31	小型丸底甕	6AAG GS34	南北古溝砂	ヨコナデ	ヨコナデ	タタキナデ、ナデ	ナデ	
32	小型丸底甕	6AAG GB34	南北古溝砂	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	ナデ	
33	小型丸底甕	6AAH RJ35	南北古溝砂	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	上半ナデ、下半ケズリ	
34	小型丸底甕	6AAH GB34	南北古溝砂	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	上半ナデ、下半ケズリ	溝
35	小型丸底甕	6AAG GR34	古溝	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	上半ナデ、下半ケズリ	溝
36	小型丸底甕	6AAG GB34	南北古溝砂	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ	ハケ、ミガキ	上半ナデ、下半ケズリ	溝
37	小型丸底甕	6ALS IS43	古溝下	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ、ハケ	ナデ	
38	小型丸底甕	6AAG GS34	南北古溝砂	ハケ後ヨコナデ	ハケ	ハケ	ナデ	
39	台付小甕	6AAG GB34	古溝砂	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	ナデ	
40	甕縁高杯	6AAG GB34	古溝	ハケ	ナデ	ハケ	ケズリ、ハケ、オサエ	
41	甕縁高杯	6AAG GS34	古溝	ハケ、オサエ	ヨコナデ、ミガキ	ハケ後ミガキ	ケズリ	
42	甕縁高杯	6AAG GS34	古溝	ハケ、オサエ	ヨコナデ			
43	甕縁高杯	6AAH RJ35	南北古溝砂	ハケ	ハケ後ヨコナデ			
44	甕縁高杯	6AAG GB34	南北古溝砂	ハケ	ハケ後ヨコナデ			
45	甕縁高杯	6AAG GS34	古溝	ハケ、ヨコナデ	ハケ後ヨコナデ			
46	甕縁高杯	6AAG GS34	古溝	ハケ	ハケ、ヨコナデ			
47	甕縁高杯	6ALS IN43	古溝下	ハケ	ハケ後ナデ			
48	甕縁高杯	6AAG GB34	南北古溝砂	ヨコナデ、ナデ	ハケ後ナデ			
49	甕縁高杯	6AAG GR34	古溝	ハケ後ナデ	ハケ、ヨコナデ			
50	甕縁高杯	6ALS IN43	古溝下	ヨコナデ	ヨコナデ			
51	大型有段高杯	6AAG GB34	南北古溝砂	ヨコナデ	ヨコナデ			
52	大型有段高杯	6AAG GB34	南北古溝砂	ハケ	ナデ			内面黒色
53	大型有段高杯	6AAG GB34	南北古溝砂	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ナデ			
54	大型有段高杯	6AAG GB34	南北古溝砂	ハケ後ヨコナデ	ハケ後板割ミガキ			
55	大型有段高杯	6AAG GS34	古溝	ハケ	板割状ミガキ		ケズリ、ハケ、オサエ	
56	瓶製高杯	6AAG GS34	古溝	ケズリ後ハケ	ナデ、オサエ	ハケ後ナデ	ケズリ	
57	瓶製高杯	6AAG GS35	古溝	ハケ	ヨコナデ	ハケ、ナデ	ケズリ後ナデ	
58	ミニチュア高杯	6ALS IM41	古溝下	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	
59	ミニチュア小甕	6AAG DA28	南北古溝砂		ナデ	ナデ	ナデ	
60	ミニチュア小甕	6AAG GA34	南北古溝砂		ナデ	ナデ	ナデ	
61	ミニチュア小甕	6ALS IL38	古溝下	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	
62	ミニチュア小甕	6ALS IN42	古溝下	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	
63	ミニチュア小甕	6ALS IM41	古溝下	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	
64	ミニチュア小甕	6AAG GA34	南北古溝砂	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	
65	小型鉢	6ALS IN42	古溝下	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ、ケズリ	
66	瓶製鉢	6AAG GB34	南北古溝砂	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	
67	土製円蓋	6AAH	古溝(下層)				ナデ	模造品か

第5章 平城宮下層埴輪窯出土の須恵器

松永悦枝

はじめに

平城宮下層埴輪窯からは、1号窯廃絶後の埋土や5号窯灰原出土の須恵器が報告されてきた（『1993平城概報』、大澤2021）。今回、あらためて関連遺構・層位出土須恵器の再整理をおこない、器形およびその年代的特徴を示しうる須恵器を抽出し、出土遺構別にその概要を報告する。個別の詳細については、観察表（別表9-10）を参照されたい。

1 須恵器の概要

（1）5号窯 SX16280（第75・76図）

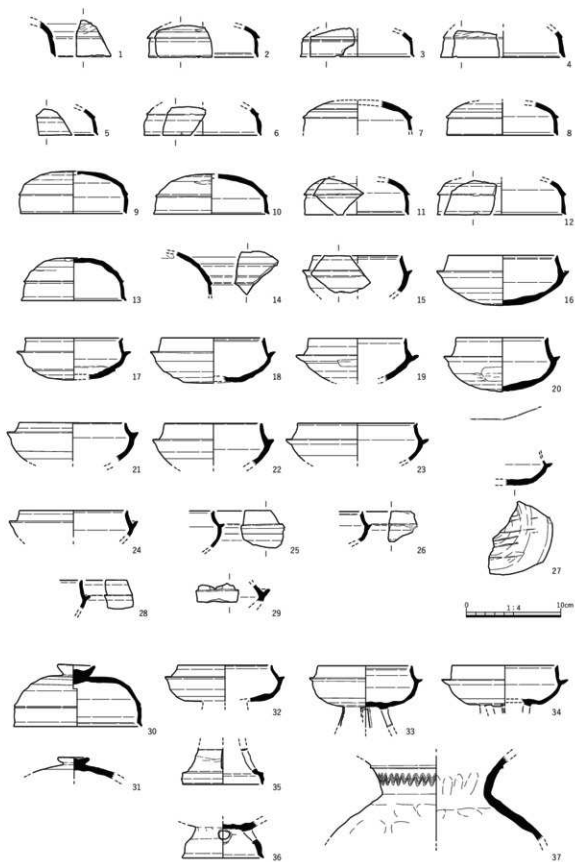
杯蓋14点、杯身14点、高杯4点、高杯蓋2点、甕3点を図示した。出土層位は黒褐土、暗灰砂質土で、埋立土である黒褐土出土資料を中心とする。杯蓋は、天井部と口縁部との境界が鈍く太い稜のもの（1）と、天井部と口縁部との境界が突出して稜をなすもの（2-14）とがあり、後者が主体を占める。1は、口縁端部は内側に傾斜し先細り、外面の回転ヘラケズリ調整は天井部全体にいたる。2-14は天井部は全体に丸みを帯びるものが多く、口縁端部は斜めに面を持つ。10や13のように口縁端部が外方へ屈折するものもある。天井部と口縁部とをわける稜は鈍く、短く突出するものが多いなか、2は鋭く突出する。杯身は底部から全体的に丸みを帯びて受部へいたり、ちちあがりは緩やかに内傾する。底部は丸みを帯びるもの（16-17・20）、平坦なもの（18）がみられる。受部は斜め上方にのび、ちちあがりの端部は内傾し面をもつものが多い。回転ヘラケズリは底部全体の1/2～約1/3の範囲でほどこす。20、27は底部外面に刻線がみられる。

高杯蓋は、天井部中央につまみが付し、中央が凹むもの（30）と扁平なボタン状を呈するもの（31）とがある。高杯は、杯部は全体に丸みを帯び、15～28の杯身よりも受部の突出が長く鋭い。脚部の透孔は、長方形透孔（33-35）と円孔（36）とがあり、とくに34は細長方形透孔を多方向に穿つ形態が復元される。

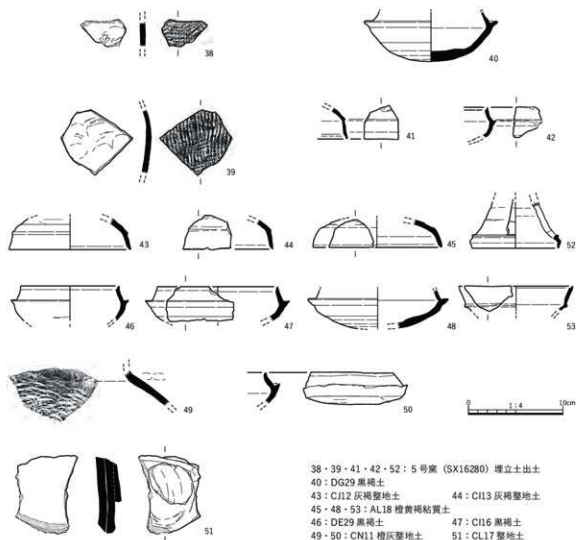
3点の甕のうち、第75図37は胴部上位から口縁部にかけての破片で、突帯をめぐらせて区画した口縁部下段に5～7条の波状文を施文する。2点（38・39）は甕胴部片で、どちらも外面格子タタキ調整で、内面は一部に当て具痕がわずかに残るものの、ナデ調整により全体を整える。

（2）土坑 SK16281（第75図25）

5号窯 SX16280 東北隅に位置する灰色粘土集積土坑で、廃絶後の埋土である黒褐土より出土した。杯身口縁部から体部下位にいたる小片で、ちちあがりは大きく内傾し、端部は内傾面をなして緩やかな段をもつ。体部は丸みを帯びる。外面の回転ヘラケズリ範囲は体部までいたり、ヘラケズリは弱く器面は滑らかである。残存高3.9cm。



第75図 5号室 SX16280埋土出土須恵器



第76図 5号室SX16280埋土出土須恵器ほか

(3) 周辺整地土出土須恵器(第76図)

埴輪室周辺一帯に敷設された整地土などからの出土須恵器。43、44は天井部と口縁部との境界が鈍く太い稜のもので、口縁部は外方へ開く。外面の回転ヘラズリ調整は天井部全体にほどこし、回転は不安定。40～42、46は5号室の蓋杯と同様の特徴をみせる。45は天井部と口縁部との境界が浅くくぼみ、天井部からなだらかに口縁部へといたる。全体が扁平で、口縁端部は丸みを帯びる。47、48、50の杯身はたちあがりの内傾度が増し、全体が扁平。受部は斜め上方へ短くのびる。52は高杯脚部片。小片のため透孔の数は不明であるが、脚部部の突帯直上に逆「T」字状の透孔を穿つ形態が復元される。53は壺口縁部片。外傾しのびる頸部から逆「く」字状に屈曲し、口縁部はさらに外方に開く。口縁端部は内面に凹線がめぐる。脛口縁部とみられる。49、51は甕片。51は大型甕胴部片、壺とみられる底部片、さらに提瓶体部片とみられる破片の3個体が溶着する。大型甕胴部片の器面は荒れ、全体が焼き歪む。杯身(50)とともに、近隣での須恵器焼成を示す資料とも見て取れるが、MT85型式以降に該当し、上述の蓋杯類とは時間的な隔りがある。

2 年代的位置づけと既報告資料との比較

今回整理した須恵器は、その形態的特徴から TK23・47 型式期を主体とする（第 75・76 図）。一部、TK216 型式まで遡及しうる杯蓋（1・43・44）や、多孔透孔とみられる高杯片（34）、内面ナデ消しの甕胴部片（38・39）など、古相の特徴を有する須恵器も散見されるが、その中心は TK23・47 型式のものである。

既報告において、1号窯廃絶後埋土からは TK23～TK10 型式期の杯蓋 3 点、杯身 1 点が、5号窯灰原出土から TK23・47 型式期の杯身 1 点が示されてきた（『1993 平城概報』、大澤 2021）。今回整理した須恵器はいずれも埴輪窯廃絶後の埋立土や整地土出土であることから、平城宮東院地区の埴輪窯は遅くとも TK23・47 型式期に生産終了するという見解を改めて追認することができる。

おわりに—平城宮下層埴輪窯とウワナベ古墳採集須恵器について—

以上、これまで限定的な資料報告であった平城宮下層埴輪窯出土須恵器について整理・報告をおこなった。時期的特徴を示しうる須恵器は、その大部分が 5号窯 SX16280 廃絶後の埋立土からの出土であり、TK23・47 型式期の須恵器が中心であることを指摘した。これは、既報告における年代観とも合致する。

そこで一つ問題となるのが、ウワナベ古墳を特徴づける赤色塗彩の須恵器の存在である。赤褐色の塗彩を施し土師器風に焼き上げられた須恵器は、かねてより、須恵器工人と埴輪工人の共存を示す資料として注目されていたが（植野 1993）、採集須恵器の再整理の結果、大部分の器種において赤色塗彩し焼成されていることを確認している（松永 2020）。ウワナベ古墳造出採集須恵器は、蓋杯、高杯、広口壺、甕、高杯形器台からなり、大部分が小片であるものの、形態的・技法的特徴から TK216 型式に比定できる。赤色塗彩はすべての器種で施されているが、塗彩なしの同形・同文様の須恵器も焼成し、ともに埴丘祭祀で使用していることを確認した。

本報告で整理した大部分の須恵器は、ウワナベ古墳が主な供給先と目される 5号窯からの出土である。須恵器のなかには、ウワナベ古墳と同様の TK216 型式期に比定できる杯蓋片が一部出土するが、塗彩を施すものは確認できなかった。さらには、ウワナベ古墳の須恵器は硬質であるものの全体的に黄灰色から灰白色系の焼き上がりであるいっぽうで、東院地区下層は焼成堅緻で青灰色や灰色系を呈し、焼成温度の点においても異なる。埴輪に比して、灰原からの須恵器の出土自体が少量であることは、埴輪生産を機軸とした生産体制であったため、そもそも須恵器の生産自体が量的に多くなく、製品すべてがウワナベ古墳へ供給されたために灰原や廃棄後の埋土からの出土がみられないと捉えることができるのか、当該期における埴輪生産との関係について、ともに埴丘祭祀という共通した目的のもとで製作された両者の関係については課題が残る。本研究の一環として進めたウワナベ古墳造出採集資料（『平城宮報告 VI』）の須恵器・土師器・土製模造品の再整理成果とともに、改めて別稿にして論じたい。

謝 辞

ウワナベ古墳出土須恵器の資料観察にあたり、宮内庁書陵部の清喜裕二、土屋隆史、田中洵弥の諸氏のご高配を賜りました。記して感謝いたします。

引用・参考文献

大澤正吾 2021 『平城宮東院下層埴輪室跡群の基礎的検討』『古墳文化基礎論集』同論集刊行会

大澤正吾・加藤一郎 2020 『平城宮東院地区における埴輪生産の契機と供給先』『奈良文化財研究所紀要 2020』

植野浩三 1993 『埴輪生産と須恵器工人—奈良県ウツナベ古墳の須恵器を中心に—』『文化財学報』11 奈良大学文学部文化財学系

岸本直文 1994 『東院地区の調査 第243・245-1次』『1993年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』奈良国立文化財研究所

奈良国立文化財研究所 1975 『ウツナベ古墳東外堤』『平城宮発掘調査報告VI』

松永悦枝 2020 『ウツナベ古墳遺出土掘採集の須恵器・土製模造品』『奈良文化財研究所紀要 2020』

挿図出典

第75・76図・別表9・10；筆者作成

別表9 5号室 SX16280ほか出土須恵器観察表(1)

番号	器種	位置 (m)			調査	断面	内径	断面等	色調	胎土	焼成	産地		備考
		中心	径線	高さ								地区名	取り上げ名	
1	杯蓋	-	-	(3.8)	同輪ナデ、 同輪→カクス子 (取附)	同輪ナデ	-	外:灰白色N7/9 内:灰白色N7/9	1cm前後の白色・ 灰白色	○		4A5 DE29	4A5産地 No.26 黒土	TK216 10cmに厚径1点出土。
2	杯蓋	[11.6]	-	(3.4)	同輪ナデ、 同輪→カクス子 (取附)	同輪ナデ	-	外:黄灰色 S8/1 内:黄灰色 S8/1	1cm以下の白色粒 多	○	5号室 SX16280	4A5 DF31 No.49	イヨウ 黒陶土	TK206
3	杯蓋	[13.1]	-	(2.6)	同輪ナデ	同輪ナデ	-	外:黄灰色N4/9 →N6/9 内:灰白色N7/9 外:黄灰色 S8/1 内:灰白色N6/9 →灰白色N7/9 外:黄灰色 S8/1	2cm以下の白色粒	○	5号室 SX16280	4A5 DE32 DE32	産地 No.49 黒陶土	TK208 外縁に焼アープ灰白色の 付着層付着。
4	杯蓋	[13.1]	-	(2.7)	同輪ナデ、ケズ 子か	同輪ナデ	-	外:黄灰色N6/9 →灰白色N7/9 外:黄灰色 S8/1	2cm以下の白色粒	○	5号室 SX16280	4A5 DF31 No.49	イヨウ 黒陶土	TK208
5	杯蓋	-	-	(2.8)	同輪ナデ	同輪ナデ	-	外:黄灰色 S8/1	最大2mmの白色粒	○	5号室 SX16280	4A5 DF31 No.49	イヨウ 黒陶土	TK208
6	杯蓋	[13.7]	-	(2.9)	同輪ナデ	同輪ナデ	-	外:灰白色N7/9 内:灰白色N6/9	1cm以下の白色粒	○	5号室 SX16280	4A5 DF31 No.49	イヨウ 黒陶土	TK208-23 外縁に黒陶時に焼成した 黒色粒付着。
7	杯蓋	-	-	(3.4)	同輪ナデ、 同輪→カクス子 (取附)	同輪ナデ	-	外:灰白色 N7/9、 黄灰色S8/1 (取附)	最大2mmの白色・ 灰白色	○	5号室 SX16280	4A5 DE31 DE31	産地 黒陶土 焼 附粒付土 No.78	TK23-47
8	杯蓋	[11.6]	-	(3.4)	同輪ナデ、 同輪→カクス子 (取附)	同輪ナデ	-	黄灰色S8/1、 S8/1	2cm以下の白色粒	○	5号室 SX16280	4A5 DF31 No.49	イヨウ 黒陶土	TK23-47
9	杯蓋	[10.7]	-	4.0	同輪ナデ、 同輪→カクス子 (取附)	同輪ナデ	-	外:灰白色N5/9 内:灰白色N6/9	1cm前後の白色 粒、1cm以下の灰 白色多	○	5号室 SX16280	4A5 DF31 No.49	イヨウ 黒陶土	TK23-47
10	杯蓋	[12.1]	-	4.3	同輪ナデ、 同輪→カクス子 (取附)	同輪ナデ	-	外:灰白色 N6/9 内:黄灰色 S8/1	最大1cmの白色粒	○	5号室 SX16280	4A5 DF31 No.71	イヨウ黒陶 土	TK23-47 外縁に黒陶土、焼成、 色調付着。
11	杯蓋	[10.9]	-	(3.9)	同輪ナデ、 同輪→カクス子 (取附)	同輪ナデ	-	外:黄灰色S8/1 内:灰白色N5/9	1cm前後の白色粒	○	5号室 SX16280	4A5 DF31 No.49	産地 No.49 焼戻砂土	TK23-47
12	杯蓋	[13.6]	-	(3.6)	同輪ナデ、 同輪→カクス子 (取附)	同輪ナデ	-	外:黄灰色S8/1 内:黄灰色S8/1	最大3mmの白色粒 まじり	○	5号室 SX16280	4A5 DF31 No.49	産地 No.49 焼戻砂土	TK23-47 10cmに厚径2、文字・ 底部分付、大溝痕跡付、 土層層付着。
13	杯蓋	[11.1]	-	4.5	同輪ナデ、 同輪→カクス子 (取附)	同輪ナデ	-	外:黄褐色 S8/1、S8/1 内:黄褐色 S8/1	2cm以下の白色粒	○	5号室 SX16280	4A5 DE31 DE31	産地 黒陶土 焼 附粒付土 No.78	TK23-47 外縁に黒陶時の産地 付着。20cm以下に、粉砂 層、産地付着。
14	杯蓋	-	-	(4.0)	同輪ナデ、 同輪→カクス子 (取附)	同輪ナデ	-	外:黄灰色S8/1 内:灰白色N6/9	2cm以下の白色・ 灰白色	○	5号室 SX16280	4A5 DE31 DE31	産地 黒陶土 焼 附粒付土 No.78	TK23-47
15	杯蓋	[9.4]	-	(4.0)	同輪ナデ、 同輪→カクス子 (取附)	同輪ナデ	-	外:黄褐色 S8/1 内:黄褐色 S8/1	1cm以下の白色・ 灰白色多	○	5号室 SX16280	4A5 DF31 No.49	イヨウ 黒陶土	TK23-47
16	杯蓋	[11.6]	-	5.3	同輪ナデ、 同輪→カクス子 (取附)	同輪ナデ	-	灰色 N6/9	最大4mmの白色粒	○	5号室 SX16280	4A5 DF31 No.49	イヨウ 黒陶土	TK23-47
17	杯蓋	[9.8]	-	(3.4)	同輪ナデ、 同輪→カクス子 (取附)	同輪ナデ	-	外:灰白色N7/9 内:灰白色N6/9	最大1cmの白色粒	○	5号室 SX16280	4A5 DE31 DE31	産地 黒陶土 焼 附粒付土 No.78	TK23-47 10cmに厚径2より 厚径5cmまで。
18	杯蓋	[11.0]	-	4.8	同輪ナデ、 同輪→カクス子 (取附)	同輪ナデ	-	外:灰白色N6/9、 一部黄灰色S8/1 内:黄灰色 S8/1	最大1cmの白色粒 まじり	○	5号室 SX16280	4A5 DE31 DE31	産地 No.49 黒陶土	TK47 外縁に黒陶土、底部分、大溝 付、産地付着、片上。
19	杯蓋	[10.3]	-	(4.7)	同輪ナデ、 同輪→カクス子 (取附)	同輪ナデ	-	外:灰白色N6/9 →灰白色N7/9 内:黄灰色 S8/1	最大1cmの白色粒	○	5号室 SX16280	4A5 DF31 DF31	産地 No.49 焼戻砂土	TK206
20	杯蓋	[9.7]	-	5.8	同輪ナデ、 同輪→カクス子 (取附)	同輪ナデ	-	外:灰白色N6/9 →焼戻色N2/9 内:黄灰色 S8/1	最大3mmの白色粒 多	○	5号室 SX16280	4A5 DF32 No.57	産地 黒陶土	TK47 底面に1本の焼痕あり。

【丸印】(○) 胎土、【方印】(□) 焼成痕跡。

別表10 5号窯 SX16280 ほか出土土須器類観察表(2)

番号	器種	法量 (g)		調査		陶文等	色相	胎土	構成	調査		備考	
		口径	底径	外径	内径					焼成	焼成		
21	杯	[11.2]	-	(4.1)	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ	同胎ナブ	-	(赤)黄白色N6.9 (内)黄白色N5.9	1mm前後の白色影	○	5号窯 SX16280	6A15 DF31 No.49	TK10
22	杯	[10.4]	-	(4.1)	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ	同胎ナブ	-	(赤)黄白色N6.9, 黄白色N5.1 (内)黄白色N6.9	1mm前後の白色影・ 砂影	○	5号窯 SX16280	6A15 DF29 No.49	TK47
23	杯	[12.7]	-	(4.0)	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ (取付口)	同胎ナブ	-	黄白色 No.9	最大4mmの白色影	○	6号窯	6A15 No.49	TK104-23 この器種はより軒高とみ られる小片を主として分類 している
24	杯	[11.4]	-	(3.0)	同胎ナブ	同胎ナブ	-	(赤)黄白色 N7.0 (外)黄白色 N7.0 (内)黄白色 No.9	最大5mmの白色影	○	5号窯 SX16280	6A15 DF30 No.49	TK104-24 胎土の組成はより軒高とみ られる小片を主として分類 している。取付口あり。
25	杯	-	-	(2.9)	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ	同胎ナブ	-	(赤)黄白色N6.9 (内)黄白色N7.9	1mm以下の白色影	○	同窯1号 SX16282	6A15 DG21	TK13-47
26	杯	-	-	(3.7)	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ	同胎ナブ	-	(赤)黄白色N6.9 (内)黄白色ノープ 黄白色N5.0	1mm以下の白色影・ 砂影まばら	○	5号窯 SX16280	6A15 DF22	TK47 注小に文身・底部分、土 層観察時、底平直上。
27	杯	-	-	(2.0)	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ (取付口)	同胎ナブ	-	黄白色 N5.9	最大4mmの白色影多	○	5号窯 SX16280	6A15 DF22	TK47 胎土の組成はより軒高とみ られる小片を主として分類 している。
28	杯	-	-	(3.0)	同胎ナブ	同胎ナブ	-	(赤)黄白色 N7.0 黄白色 N4.9 (内)黄白色ノープ 黄白色 N5.0	1mm以下の白色影 砂影*	○	5号窯 SX16280	6A15 DF31	TK13-47
29	杯	-	-	(1.7)	同胎ナブ	同胎ナブ	-	黄白色 No.9	1mm以下の白色影	○	5号窯 SX16280	6A15 DF31 No.49	TK10
30	高杯蓋	[13.5]	-	4.6	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ	同胎ナブ	-	(赤)黄白色 SF4.1-1黄白色 SF4.2 (内)黄白色SF3.1	最大4mmの白色影多	○	5号窯 SX16280	6A15 DE31	TK23-47 この器種はより軒高とみ られる小片を主として分類 している。
31	高杯蓋	-	-	(2.3)	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ, 同胎ナブ	同胎ナブ, 同胎ナブ	-	(赤)黄白色上SF7.1 (内)黄白色No.9 No.9	最大3mmの白色影多	○	5号窯 SX16280	6A15 DE32	TK10
32	高杯	[8.9]	-	(3.0)	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ	同胎ナブ	-	(赤)黄白色N6.9 (内)黄白色N7.9	2mm以下の白色影	○	5号窯 SX16280	6A15 DE32	TK23-47 取付口。 注小に文身・底部分、土 層観察時。
33	高杯	10.0	-	(6.3)	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ (取付口), 同胎ナ ブ, ナブ	同胎ナブ, ナブ	長方形透孔 (3方向)	黄白色SF6.1	1mm以下の白色影, 黄白色影	○	5号窯 SX16280	6A15 DE32	TK23-47 取付口。 注小に文身・底部分、土 層観察時。
34	高杯	[11.2]	-	(4.0)	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ	同胎ナブ, ナブ	長方形透孔	(赤)黄白色 SF6.9 (内)黄白色 SF6.9	2mm以下の白色影	○	5号窯 SX16280	6A15 DF31	TK23-47 取付口。矢先より観察時多 方向の(縦)長方形透孔。
35	高杯	-	-	[8.4]	(3.9)	同胎ナブ 同胎ナブ	同胎ナブ, 同胎ナブ	円孔透孔 (3方向) SF6.1~5.1	最大2mmの白色影多	○	5号窯 SX16280	6A15 DF31 No.49	TK23 取付口。
36	高杯	-	-	[8.3]	(3.0)	同胎ナブ	同胎ナブ	長方形透孔 (3方向)	(赤)黄白色 No.9 (内)黄白色 SF6.1	○	5号窯 SX16280	6A15 DF31	TK23-47 取付口。 注小に文身・底部分、土 層観察時。
37	大甕	蓋径 11.5	-	18.1	同胎ナブ	同胎ナブ	円筒状に貫通 文(5-18)部 1条	(赤)黄白色SF5.1 黄白色No.9 (内)黄白色No.9 (内)黄白色SF6.1	最大4mmの白色影多	○	6号窯 No.49	6A15 DE29	TK10 取付口・透孔部 の観察が多。
38	大甕	-	-	(2.5)	蓋子ナブキ	ナブ蓋し	-	(赤)黄白色 No.9 (内)黄白色 SF6.1	1mm以下の白色影	○	5号窯 SX16280	6A15 DF21	TK10
39	大甕	-	-	(6.7)	蓋子ナブキ	ナブ蓋し	-	(赤)黄白色SF6.1 (内)黄白色SF6.1	1mm以下の白色影	○	5号窯 DX21	6A15 No.49	TK10
40	杯	変形 [14.1]	-	(5.2)	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ (取付口)	同胎ナブ	-	黄白色 No.9	1mm以下の白色影 まばら	○	6号窯 DX29	6A15 No.27	TK10 取付口。注小に文身・底部分、土 層観察時。
41	杯蓋	-	-	(3.3)	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ (取付口)	同胎ナブ	-	(赤)黄白色 7.376/1 (内)黄白色 N5.9	1mm以下の白色影, 1mm以下の黄白色影	○	5号窯 SX16280	6A15 DF30 No.49	TK23-47
42	杯	-	-	(3.2)	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ (取付口)	同胎ナブ	-	(赤)黄白色 N4.9 黄白色 7.376/1 (内)黄白色 No.9	1mm以下の白色・黄 白色影	○	5号窯 SX16280	6A15 DF30 No.49	TK23-47 この器種はより軒高とみ られる小片を主として分類 している。
43	杯蓋	[12.8]	-	(3.2)	同胎ナブ, 同胎ヘ ナケズリ (取付口)	同胎ナブ	-	(赤)黄白色 N5.9 (内)黄白色 No.9	1mm以下の白色影多	○	6A15 CX12	同窯 蓋物上 No.23 TK16 取付口。	
44	杯蓋	-	-	(3.1)	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ (取付口)	同胎ナブ	-	(赤)黄 白色 N6.9~N5.9 (内)黄白色 N4.9	最大3mmの白色影多	○	6A15 CX13	同窯 蓋物上 No.23 TK16 取付口。	
45	杯蓋	[12.6]	-	(2.9)	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ ヘナケズリ透孔部	同胎ナブ	-	黄白色 SF6.1~5.1	1mm以下の白色影少 量	○	6A15 AL18	同窯 蓋物上 No.22 TK16 取付口。	
46	杯	[18.3]	-	(3.7)	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ (取付口)	同胎ナブ	-	(赤)黄白色SF5.1 (内)黄白色No.9	1mm以下の白色影 多。黄白色影まばら	○	6A15 DE29	同窯 No.22 TK16 取付口。	
47	杯	[12.7]	-	(2.0)	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ	同胎ナブ	-	(赤)黄白色 SF5.1 (内)黄白色N7.9	2mm以下の白色影・ 砂影多	○	6A15 CX16	同窯 No.27 TK16 取付口。	
48	杯	変形 [14.9]	-	(4.1)	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ (取付口)	同胎ナブ, ナブ	-	黄白色 No.9~7.376/1	2mm以下の白色影	○	6A15 AL18	同窯 蓋物上 No.22 TK16 取付口。黄白色影 多。胎土の組成はより軒高と みられる小片を主として分類 している。	
49	大甕	-	-	(3.0)	蓋子ナブキ (内 蓋当て具類)	ナブ蓋し, ユビオヤサ	-	(赤)黄白色 SF7.1 (内)黄白色 SF7.1 (赤)黄白色 SF7.1 (黄)黄白色 N5.9 (黄)黄白色 SF6.1	最大5mm以下の白色 影。砂影多	○	6A15 CN11	同窯 蓋物上 No.23 TK16 取付口。	
50	杯	-	-	(3.3)	同胎ナブ, 同胎ヘナケズリ (取付口)	同胎ナブ	-	(赤)黄白色 N5.9 (内)黄白色 SF7.2	1mm以下の白色影	○	6A15 CL17	同窯 蓋物上 No.27 TK16 取付口。	
51	黄銅器	-	-	(7.6)	ナブキ (内蓋当て 具)	同胎ナブ	-	(赤)黄白色 N5.9 (内)黄白色 SF7.2	1mm以下の白色影	○	5号窯 SX16280	6A15 DF30	TK10
52	高杯	-	-	[9.2]	14.0	同胎ナブ	同胎ナブ	透孔	6号	○	6A15 DF30	同窯 No.49	TK10 取付口。注小に文身・底 部分、土層観察時。
53	甕	-	-	(3.0)	同胎ナブ	同胎ナブ	-	黄白色 SF4.1	1mm以下の白色影	○	6A15 AL18	同窯 蓋物上 No.22 TK16 取付口。	

【凡例】(○)黄銅器、(□)胎土を示す。

第4部 研究の総括と展望

研究を締めくくるにあたり、以下、4年間の本研究成果の要点をまとめ、その意義を総括するとともに、今後の研究にむけて若干の課題と展望を述べる。

(1) 新たな基礎資料の提示

平城宮下層埴輪室は1993～1994(平成5-6)年の発掘調査で存在が明らかとなった。確実な埴輪の野焼き遺構としては最初の事例となった1号室 SX16285、ウワナベ古墳への供給の可能性が濃厚な宮室の2～5号室 SX16283・16284・16286・16280を検出しながらも、なごらく詳細な報告は不在で、その実態については不明点が多かった。本研究では同室にかんする基礎的な整理と情報の開示を作業の中心に据えた〔第2部第2章〕。くわえて平城宮下層埴輪室の周辺では、関連する埴輪が包含層(平城宮造営時の整地上)や下層の古墳時代の遺構から大量に出土する。ここではそれらのなかから東院地区南西隅の下層を流れる斜行溝 SD4992の資料と伴土師器も関連資料としてとりあげた。それら生産地資料の全貌を提示したとまではいえないものの、各遺構・遺物における基礎的・中心的資料について公表することができたと思う。

また消費地資料としては、木取山古墳や市庭古墳、八幡神社境内地の未報告資料、神明野古墳後門部や平塚1号墳北開くびれ部の原位置資料などを遺構図・写真などととも新たに提示することができた〔第2部第3章〕。また奈良文化財研究所以外の資料にかんしては、研究分担者・協力者の尽力により、本研究期間内に奈良県立橿原考古学研究所のヒシャゲ古墳外堤出土埴輪を同所機関紙において公表し〔小栗・東影2022〕、宮内庁所蔵資料としては大和3号墳を本書第3部第1章において取りあげることができた。

このように本研究では、佐紀古墳群東群における埴輪の生産・流通を考えるうえで不可欠の情報を開示できた意義をまづもって強調しておきたい。

(2) 佐紀古墳群東群の埴輪編年

新たな基礎資料の提示を受けて、古墳時代中期の佐紀古墳群東群の埴輪編年や系統の変遷の理解についても若干の進展があった。第2部第1章で詳述した通り〔pp.15-19〕、佐紀古墳群東群の埴輪編年は、王陵級の巨大古墳の棟相を軸にコナベ古墳：Ⅲ期古相、市庭古墳：Ⅲ期新相、ウワナベ古墳：Ⅳ期古相、ヒシャゲ古墳：Ⅳ期新相に編年できる。ヒシャゲ古墳の外堤資料が公表されたことにより、底部高や突帯間隔にみる規格の推移が鮮明となり、図上でも変遷が明瞭に迫れるようになった(第4図)。

ただしⅢ期にかんしては、以前から指摘があるように新古の区分は容易ではない。新相と目される市庭古墳や木取山古墳の埴輪の絶対量が不足している点にも要因があるが、型式差やそもその時間幅が限定的であることも十分見込まれる。ここでは底部高や黒斑の付着範囲の総体的な縮小傾向から細分の可能性を指摘した。

またⅣ期にかんしては、現状、ウワナベ古墳の古相とヒシャゲ古墳の新相とのあいだにヒアタスがあり、すなわち佐紀古墳群東群では古市・百舌鳥古墳群のⅣ期中相に併行する安定的な資料を欠く。中小

古墳に目を転じれば、新たに公表された大和3号墳がその時期に位置づけられることも見込まれる。大和3号墳では、ウワナベ古墳とほぼ同型式の大型品とともに、底部高・突帯間隔が10～10.5 cm、口縁部高も10.4 cmで低口縁ではないものが出土している。ウワナベ古墳にみられない小型品でやや粗雑な埴輪の付加を積極的に評価するならば、こうしたウワナベ古墳周辺の陪塚・小規模古墳への供給を通じてIV期中相段階に細々と埴輪生産が継続していた可能性も見込まれる。

(3) 平城宮下層埴輪窯の生産・供給体制

平城宮下層埴輪窯の生産と供給の実態に迫るべく、埴輪窯およびその周辺の関連遺構、消費地である各古墳から出土した埴輪の型式学的特徴を整理するとともに、製作工具痕跡であるハケメパターンを可能なきがり抽出してその異同を検討し〔第2部第5章〕、あわせて胎土分析を実施した〔第2部第4章〕。

1号窯 SX16285 と呼称されてきた遺構は、厳密には窯ではなく、埴輪を野焼きした際の焼成土坑である。その土坑内や周囲の包含層、斜行溝 SD4992 などから出土した黒斑を有するいわゆるⅢ群埴輪は、SX16285 やその他にも存在したであろう焼成土坑で野焼きされた埴輪の残滓とみて間違いない。円筒埴輪の規格や形象埴輪の特徴、およびハケメターンに一致がみられることから、その供給先はコナベ古墳や平塚1号墳など佐紀古墳群東群のⅢ期古相併行期の古墳であることが判明する。

いっぽう、1号窯 SX16285 内からはⅢ群埴輪に混じってⅣ群埴輪も出土しているが、この点はSX16285 においてⅣ群埴輪が焼成されたことを示すものではない。SX16285 から焼成後のⅢ群埴輪が最後に取り出された後、焼成土坑は窪地状態となっており、そこに出荷に至らなかったⅢ・Ⅳ群の大量の廃棄埴輪が落ち込んだ結果と考えられる。いずれにしても平城宮東院地区の下層からは大量のⅣ群埴輪が出土しており、低口縁、罎付、透かし孔形状（方・三角・半円形）などの特徴から、その生産はウワナベ古墳を主たる供給先とするものであったとみて間違いない。2～5号窯の残存状況は痕跡的ではあったが、膨大な廃棄埴輪の存在は、その他にも窯が存在した可能性も含めて、相当大規模な生産体制の存在を示唆する。同時に1号窯 SX16285 内にⅣ群埴輪が落ち込んでいる事実は、ほぼ同一地点で野焼きから窯焼成へと連続的に移行した状況を如実に物語る。

そうしたⅢ群からⅣ群への移行を考えるうえで、村瀬陵によって示されたコナベ・ウワナベ古墳間のA・B・C規格の推移（村瀬2022）が注目される。ウワナベ古墳では総じて突帯間隔が11.5～12.5 cmに縮小するものの、底部高にはコナベ古墳と同様の17 cm前後を測るものが含まれる。突帯間隔の統合・縮小傾向に対して、底部高の値には保守的な側面が見出せる点は、両古墳にまたがって連続的に生産に従事した工人の存在を示唆する。

これに対して、ハケメパターンは、Ⅲ群で73個体に対して61パターン、Ⅳ群では26個体に対して24パターンを抽出した。両者とも実際の総数はより多くなることが確実であるが、個体数に対して同定率が低いことが結果としてハケメパターンのバリエーションの多さを物語る。ハケメ工具を個人的に所有していたとすると、相当規模の大きな生産組織像が浮かびあがることになる。そのいっぽうで、上述のA・B・C規格にまたがって同一のハケメパターンが確認された事実は、規格の差がそのまま生産グループの差に結びつくわけではないことを示唆する。

また、現状ではⅢ・Ⅳ群間でハケメパターンが一致する事例は確認できていない。上述のような同一地点での生産の連続性、あるいは工具の個人性を前提にするならば、ハケメパターンの一致例がある程

度存在しても不思議ではないが、現状でそれが見出せない背景としては、巨視的には同一地点において生産は連続していたとしても、実際の操業には一定の空白期間が存在したことも見込まれよう。

そうした状況は、胎土分析からも傍証される。平城宮下層埴輪窯のⅢ・Ⅳ群、同時期の周辺古墳の埴輪の胎土は、巨視的には平城山丘陵周辺の共通した地質的特徴を共有しつつも、微視的には細部で元素構成を変化させており、巨大古墳の築造のたびに生産体制が再構築され、それにとまない素材となる粘土も調達されていた様子がかがえるようになってきた。型式学的特徴やハクメパターンの一致状況も加味すると、平城宮下層埴輪窯のⅢ期ではコナベ古墳とその関連古墳、Ⅳ期ではウワナベ古墳とその関連古墳へと埴輪を供給しており、Ⅳ期新相のヒシヤゲ古墳の埴輪は別地点で生産されていたものと判断できる。一部にウワナベ古墳の埴輪と形態的類似性が認められる杉山古墳についても、平城宮下層埴輪窯からの製品供給ではなく、製作者の移動による情報共有にもとづいて古墳の近隣で埴輪を生産していたものと理解できる。

(4) 佐紀古墳群東群を核とする埴輪の展開

製品流通の実態が明瞭になってきたことを受けて、ウワナベ古墳を基点にした「ウワナベ古墳系列」(田中2008)の広がりについても、さらに踏み込んだ評価が可能となる。もともと狭義の「ウワナベ古墳系列」の展開域については、平城宮下層埴輪窯の供給範囲となる。すなわち、ウワナベ古墳とその周囲の陪塚や中小規模墳を中心としつつ、ヤイ2号墳(図版66)や南新コモ川2号墳(図版67)など佐保川北・西岸の半径約2km圏内がそれに相当する。その範囲が広義の佐紀古墳群となろう。以前から指摘されてきたウワナベ古墳の埴輪に類似する法隆寺下層出土埴輪(図版69)については、個別事例的に遠距離供給された可能性も視野に今後、周辺遺跡の調査や胎土分析等を積極的に実施していく必要がある。

これに対して、平城宮下層埴輪窯の供給範囲外に位置する杉山古墳や上人ヶ平古墳群、より遠方の馬見古墳群の川合大塚山古墳(図版68)や久津川古墳群の芭蕉塚古墳の埴輪は、製作者・工人の移動を介した系列展開によるものであり、緩やかながらもウワナベ古墳の埴輪の様式的特徴を共有し、相互に密接な関係があったことを裏づける。さらに低口縁という特徴に限定すれば、古市・百舌鳥古墳群との間にも共鳴関係を見出すことができる。むしろ、ウワナベ古墳の埴輪を特徴づける形態上のデザインは、おおきくは当該期の王権中枢部の埴輪様式に包摂されるものであり、その様式的共通性のなから鰭や透かし孔において復古性を一層強調した姿としてとらえておくのが妥当であろう。

そうしたいわば系列上の横のつながりに対して、佐紀古墳群内での縦のつながりについても、ヒシヤゲ古墳外堤の埴輪の全形が判明したことによって辿れるようになった。すなわち、ヒシヤゲ古墳では、鰭や前期的な透かし孔形状はみられないものの、依然として7条8段の大型品が低口縁のスタイルをとって配列されており、ウワナベ古墳で復古したデザインの継承を辿ることができる。この点は、東影が指摘した「周堤帯の埴輪配置」の系譜的展開[第3部第2章]とも呼応するものであり、王権中枢部における埴輪様式の規範の存在を裏づける。

(5) 埴輪編年と土器編年との併行関係

近年、細分化が進む埴輪編年を古墳編年全体のなかにもどのように位置づけるかが課題となってきているが、本研究ではⅢ群埴輪が大量に廃棄されたSD4992の出土土器の検討により、その土器編年上の位置づけが布留4式古相の新しい段階、須恵器編年ではTG232型式期に位置づけられることがあ

きらかとなった〔第3部第4章〕。従来から埴輪編年のⅢ期については、TK73 型式期よりも先行するTG232 型式期に相当することが先験的に予想されてはきたが、SD4992 で共伴した埴輪と土師器の位置づけにより、コナベ古墳造営時の廃棄埴輪とTG232 型式期が定点をもつことが実資料により確認できたことになる。ウワナベ古墳造出出土の須恵器がTK216 型式期に位置づけられることから、後続するⅣ期古墳はTK73 ～ 216 型式期に併行するとみてよく、埴輪編年と土師器編年の併行関係はこれまで以上に整合的に理解できるようになった。

あわせて、平城宮下層埴輪窯周辺の土器組成は、奈良盆地在来の土器が主体であり、外来系土器はほとんど含まれないことがあきらかとなった。王陵系埴輪の伝播に際して、上番・帰郷型の工人移動を想定する議論との整合化が課題となるが、北関東系土器がまとまって出土した佐紀古墳群北郊の長谷遺跡〔中野 2020〕のように、古墳造営地とはやや離れた場所に上番者の集住地が設置された可能性も視野におく必要があろう〔廣瀬 2023a〕。

なお、5号室 SX16280 の「灰原」、および埴輪窯周辺の包含層（平城宮造営時の整地土）からは、TK23・47 型式期を主体とする須恵器が一定量出土している。埴輪窯操業期の土器とするにはやや新しく、また窯との関連性も明確ではない。むしろ埴輪窯の操業時期については、少量ながら出土しているTK216 型式期の土器が目玉されよう〔第3部第5章〕。TK23・47 型式の須恵器については、おなじく「灰原」や包含層からV群埴輪が一定量出土していることから（図版 22-1）、平城宮下層埴輪窯廃絶以後に築かれた小規模古墳に由来する可能性を指摘しておきたい。

（6）円筒埴輪の段構成からみた階層序列

近年の円筒埴輪の段構成による階層序列をめぐる議論の高まりのなかで、SD4992 出土のⅢ群円筒埴輪において2条3段構成のものが含まれることが確認できた意義はおおきい。従来、「畿内」では2条3段構成の埴輪のみを圍繞する古墳はほとんど認められず、2条突帯の埴輪は「畿内の外部に対する序列を明示する意図」で製作されたとの主張もあった〔鐘方 1999〕。しかしながら、以前から太田茶臼山古墳傘下の総持寺古墳群で2条3段構成の埴輪を用いた集団墓の存在があきらかになっていることにくわえて〔大阪府教委 2005〕、近年では、馬見古墳群内の長楽古墳群（1号墳・一辺12m）でも2条3段構成の配列が確認されている〔榎考研 2023〕。

平城宮下層のⅢ期において生産された2条3段構成の埴輪の供給先は現状では明確ではない。しかしながら、第一次大極殿院地区で検出された方墳 SX7800（一辺9m）はⅣ期に下るものの、全形の判明する朝顔形埴輪から2条3段構成の埴輪の使用が推定できる。総持寺古墳群や長楽古墳群の状況からも、平城宮下層におけるⅢ期段階の2条3段構成の埴輪も陪塚以下の小規模墳への供給が想定できよう。同時期のコナベ古墳の埴輪は大型品を一定量含むつも、主体となるのは4条5段構成であり、コナベ古墳を基点に5・4・3段という階梯式の階層序列の存在が予想される。コナベ古墳に併行する平塚1号墳（帆立貝・70m）や陪塚群の段構成は明確ではないが、それらの階層が3条4段構成の埴輪の供給対象となる可能性があろう。

これまで、「畿内」のとりわけ中期において2条3段構成の埴輪の存在が不明瞭であった背景としては、序列化の起点となる主墳の段構成が4条5段以上であり、それを基点に下位にむかって段構成が減滅するため、結果として2条3段構成の供給先が地上に痕跡を残しづらい最下層の小規模墳となること

に要因を求めることができる。これに対して、地方の円筒埴輪の段構成は各時期を通じて王権中樞部の序列基準よりも1・2段低く設定されており〔廣瀬 2023b〕、その結果、上野の白石稲荷山古墳（前方後円墳・148 m、3条4段）に対する十二天古墳（円墳・22 m、2条3段）のように、陪塚クラスの中規模墳で2条3段構成の埴輪が使用されるに至っている。「畿内の外部に対する序列」は、2条3段構成の埴輪に限定されたものではなく、古墳の形状と規模、円筒埴輪の段構成を加味した総体としての階層序列として機能したものと理解できる。

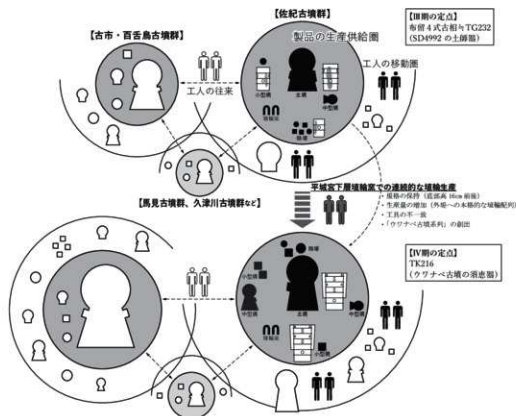
（7）結語—埴輪の生産・供給体制からみた巨大古墳群の造営過程

以上にみてきたような平城宮下層埴輪窯の生産体制、その製品流通の実態は、古墳時代中期の王陵級古墳を抱える巨大古墳群の造営過程、ひいては古墳時代の階層秩序の表象システムを理解するうえできわめて重要である。古墳時代中期の古墳造営は、特定の墓域内に異なる形状・規模の古墳を集約的に配置し、政治的階層序列を明示する点特徴としており、佐紀古墳群に代表される王権中樞部の巨大古墳群は、それが一定期間を擁して累積した姿に他ならない。そうした肥大化した古墳群造営を支えるべく当該期の埴輪生産体制も一層の拡充と安定化を迫られたことは、生産量と使用粘土量の増大からも裏づけられる〔第3部第3章〕。平城宮下層埴輪窯の稼働とその製品供給の実態は、そうした中期の大規模埴輪生産の特質を解明するうえできわめて重要なモデルを提供する（第77図^{1）}）。同一地点において野焼きから窯窯へ移行する点も相俟って、平城宮下層埴輪窯は、中期の拠点・固定的な生産地のイメージの形成を担ってきたといえる。

しかしながら、実際には王権中樞部の巨大古墳群内においても埴輪生産拠点はその場所を転々と移動させている。具体的には、古市古墳群では、土師の里・養田白鳥・野々上といった各埴輪窯が消費地である巨大古墳の造営地の近隣で操業をおこなっていることが知られる。佐紀古墳群では前期の宝来山古墳が菅原東遺跡〔村瀬 2018〕、佐紀石塚山古墳が山陵町遺跡 SD02・101〔奈良県教委 1994〕において関連埴輪の投棄がみられることから、その付近での生産が推定され、中期に至ってコナベ・ウワナベ古墳への供給にむけて平城宮下層埴輪窯が新たに設置される。しかしながら、中期新相のヒシヤク古墳の埴輪が平城宮下層埴輪窯では生産されていないことが象徴するように、平城宮下層埴輪窯と決して恒常的な生産地とはならなかったことが判明する。王権中樞部を構成する中期の巨大古墳群であっても、埴輪生産地は一箇所に限定・維持されるようなものではなく、主たる供給先への運搬距離も念頭において合理的に生産地を移動させていたのが実態といえる。

この点にかんして考慮しておかなければならないのが、市庭古墳や神明野古墳といった佐紀古墳群東群でも谷を隔てた西方の台地上に位置する一群の古墳とその埴輪である。市庭古墳の埴輪に関しては出土量がそう多くはないものの、規格からコナベ古墳よりも後出する可能性があり（Ⅲ期新相）、平城宮下層埴輪窯では確実な市庭古墳の埴輪を見出すことはできていない。神明野古墳についても、今回の再整理によってⅣ期古相のウワナベ古墳併行期に位置づけられることが明確となったが、同古墳からは平城宮下層やウワナベ古墳では確認できない単純口縁（低口縁ではなく、口縁部高が突帯間隔にほぼ等しいもの）が出土している。これらの点を重視するならば、西方の台地上にも別の生産拠点が存在した可能性も浮上する。

このようにみると、平城宮下層埴輪窯が同一地点において野焼きから窯窯に移行し、コナベ古墳



第77図 佐紀古墳群東群を核とする埴輪の展開

からウツナベ古墳へと主たる供給地を連続的に推移させているのも、同一台地上の北方に並列する両古墳への供給に規定されたものであり、III・IV期にまたがった「連続的操業」もつまるどころ両供給古墳の立地に規定された結果として再評価することができる。前述のように、平城宮下層植輪窯とその関連資料中のIII・IV群間で現状、ハケメパターンの一致が確認できない事実も、そうした見かけ上の連続性に反して、実際には両者の間には一定の時間的ヒアタスが存在したことを反映している可能性がある。

以上の議論を突き詰めていくと、中期の巨大古墳群中における埴輪生産体制やその立地を本質的に規定していたのは、その主たる供給先たる個々の巨大古墳の造営であったということになる。主墳である前方後円墳を基点とし、それに有機的に連なる下位の前方後円墳・帆立貝形古墳-陪塚級古墳-小規模墳という階層構成を一つの単位として、生産・供給を一定期間継続することが当該期の埴輪生産体制における基礎的なユニットであったといえる。すなわち平城宮下層植輪窯は、コナベ古墳、ウツナベ古墳の造営に起因する二つのプロジェクトの累積として捉えることができる。前述のように現状、佐紀古墳群では、古市・百舌鳥古墳群のIV期中相に併行する明確な埴輪が見出せず、ウツナベ古墳周辺の陪塚・小規模墳への供給を通じて細々と埴輪生産が継続していたと目される点も、そもそも当該期の佐紀古墳群では新たなプロジェクトの構築を促す巨大古墳の造営がなかったことを物語っている可能性がある。

埴輪編年の緻密化により、巨大古墳の地点ごとの埴輪配列、主墳-陪塚間においても所用埴輪に一定の時間差が見出されるようになってきた現在、古墳時代中期の階層構成型古墳群の構造的把握はますます難解になりつつある。しなしながら、以上に示した本研究での見通しにもとづいて、埴輪の生産・流

通体制をさらに実証的に追究していくことで、立地のみからでは紐解くことが困難な中期の巨大古墳群内の各古墳の有機的関係、およびその構成と階層序列が相当鮮明となることが期待される。本研究がそうした今後の研究の布石となることを願って撰筆する。

(廣瀬)

註

1) 第77図は木村理が作成した。

引用・参考文献

大阪府教育委員会 2005『総持寺遺跡』

小栗明彦・東影 悠 2022「ヒシャゲ古墳の周堤帯と埴輪」『考古学論攷』第45冊 奈良県立橿原考古学研究所 鐘方正樹 1999「2条突帯の円筒埴輪」『埴輪論叢』第1号 埴輪検討会

田中智子 2008「ウワナベ古墳系列の埴輪をめぐる諸問題—上人ヶ平5号墳出土埴輪の検討から—」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会

中野 咲 2020「奈良盆地における弥生時代から古墳時代の地形変化と土地利用」『地域研究に基づく古墳時代の集落構造と社会』第10回考古学研究会関西例会

奈良県教育委員会 1994『平城京右京一条北辺二坊三坪・四坪』

奈良県立橿原考古学研究所 2023『長業古墳群・長業遺跡』

廣瀬 寛 2023a「埴輪生産の進展と王権」『埴輪生産からみた地域社会の展開』六一書房

廣瀬 寛 2023b「古墳秩序の生成と埴輪生産」『何が歴史を動かしたのか』第3巻 雄山閣

村瀬 陸 2018「HJ 第229・443-7次出土埴輪からみた菅原東遺跡と宝来山古墳」『奈良市埋蔵文化財調査年報—平成27(2015)年度』奈良市教育委員会

村瀬 陸 2022「コナベ古墳併行期の埴輪生産とその規格」『埴輪論叢』第11号 埴輪検討会

附表

埴輪の生産・流通体制の総合的検証による

王権中枢部巨大古墳群造営過程の解明

2020～2023年度科学研究費補助金

基盤研究（B）研究成果報告書

発行年月日 2024年8月23日
編集・発行 奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良県奈良市二条町2丁目9番1号
印刷・発行 株式会社 明新社
〒630-8141 奈良県奈良市南京終町3丁目464番地
